博士論文

初期近代ドイツ語圏における旅行文化の成立
—— 1650－1820 年の旅行記を中心に ——

名古屋大学大学院人文学研究科
人文学専攻

大林　侑平

2022 年 2 月

目次

要旨 3

第一部　予備考察 7

　第一章　社会的カテゴリー 11

　　第一節　文化の生物学的基盤 11

　　第二節　文化的学習 18

　　第三節　規範と制度 21

　　第四節　小括 28

　第二章　移動の歴史 30

　　第一節　移動の人間学的規定 30

　　第二節　移民と旅行者 35

　　第三節　移動手段 37

　　第四節　旅行者の規定の困難さ 40

　　第五節　小括 43

　第三章　知識の歴史 45

　　第一節　知識は認知され、学習され、使用される 47

　　第二節　真偽性の基準 51

　　第三節　知識循環 58

　　第四節　小括 63

　第四章　移動する知識 64

　　第一節　「有用な知識」の占有と取引 65

　　第二節　秘密と嘘 74

　　第三節　旅行文学の信憑性 78

　　第四節小括 82

第一部結論 83

第二部　初期近代における旅行文化の成立 85

　第一章　信仰と旅行、驚異の旅行記 90

　　第一節　巡礼からツーリズムへ 91

　　第二節　驚異の形成から神話的風景へ 97

　　第三節　小括 103

　第二章　旅行者の規範の成立と持続 105

第一節　郵便馬車 109
第二節　社交における規範 113
第三節　旅行案内 120
第四節　優雅な旅行という夢想 125
第五節　小括 131
第三章　記憶と神話的風景 134
第一節　イタリアの印象 135
第二節　アメリカの印象 144
第三節　小括 157
第四章　旅行者としての自己提示 161
第一節　証言と神話 163
第二節　コレクション文化のなかの旅行記 169
第三節　メタコレクションとコレクションネットワーク 174
第四節　小括 178
第二部結論 180

凡例 182
文献表 182

要旨

この論文では、初期近代に成立したドイツ語圏の旅行文化が二つの観点から考察される。一つは貴族的な規範に属す旅行者を巡る 18 世紀の一貫した言説、もう一つは旅行記というテクストの 18 世紀を通じ変化した叙述様式である。この二つの観点は旅行者という社会的カテゴリーに対応した規範の諸側面を捉えるものであり、ともに 1700 年ごろにツーリズムの広まりと共に旅行文化が成立したことを意味する。論文は二部構成であり、第一部では旅行文化の歴史叙述のための理論的枠組みを議論し、第二部では、第一部で提示した理論に準拠し、旅行者が現実の社交場面においては貴族的性格の伝統的規範を保ちつつも、この規範に即して旅行記における叙述様式や叙述内容を、先行する旅行記とは異なる新奇なものへ変化させてきた歴史的趨勢を明らかにした。

第一部では社会的カテゴリーの概念を歴史叙述の基礎的な単位として導入することを試み、人や物の移動、それから知識の移動に際して社会的カテゴリーが及ぼす影響に関して論じた。第一章では慣習や規範の歴史変化を文化的ニッチ構築の理論や文化的学習に基づいて理解するアプローチを検討し、ヒトの社会で慣習や規範が成立・変化する生物学的基盤や歴史的プロセスに社会的カテゴリーの概念が果たす役割の重要性について指摘した。

社会的カテゴリーは規範的な力を持ち、社会に属す独自の行為パターンを選好する一定数の集団に対応し、第二部で論じるように旅行者たちが少なくとも旅行記を通じて模倣し合い、同時に独自な自己提示を試みてきた動機に社会的カテゴリーが果たした役割を見出すことができる。第二章では移動現象の歴史において、移動経路の情報依存性と社会的カテゴリーが果たす役割を論じた。移民現象は、移民たちが依拠する情報経路や、職業や出発地域や到達地域などの諸条件に応じた社会的カテゴリーのレベルで多様化した。これと同様に、1700 年以後のドイツ語圏の旅行文化においても、個人的なコミュニケーションや旅行記を通じた情報経路の形成は重要な役割を果たした。旅行者はそれを通じて旅行形態を模倣し、規範的な旅行のあり方が共有されるようになる。旅行者は目的や身分に応じた下位区分が可能であると同時に、旅行者として満たすべき独自の規範が形成される。この点で、この旅行文化は 19 世紀半ば以降のレジャー型旅行とも区別されることを本論文は指摘している。

第三章では知識の概念を歴史叙述の中心に据える知識史の方法論について、認識的

保証に関する現代認識論を参照して検討した。その際この論文では知識の伝達や移動という現象に注目し、その形式を占有形式と取引形式の二つに分類した。前者が実行的な認識的権原に依拠した期待によって知識が移動する規範を意味し、後者は検証を通じた認識的正当化に依拠する期待によって知識が移動する規範を意味する。従って、事実・知識の帰属される人物・その評価者の三つの項の関係を規定する主要な要因としての社会的カテゴリーが知識の移動に及ぼす影響を、占有形式と取引形式の区分を導入して分析することで、知識の移動という歴史現象を叙述することが可能になることを論証した。

第四章では第三章の結論を継ぎ、実際に 18 世紀のテクストに依拠し、有用な知識や記述的知識〔historia〕、秘密や嘘といった旅行文化と密接に関連する認識論的問題に取り組んだ。当時記述的知識の大半は、地理的・時間的制約ゆえに知識の源泉にアクセス困難であり、実際上占有形式に従い、知識の帰属される者と評価者の社会的カテゴリーが知識の移動の条件となっていた。従って記述的知識に関して、その内容の信憑性や確証性に要求される水準は、証拠や証言を提供する人物がどれだけ特権的な経験者であるかに応じて変化し、それ故に嘘や秘密が許容されることすらあった。

旅行記も同様の状況にあり、先行する関連テクストとの比較可能性が十分となるまで虚構との区別は読者公衆の間で十分になされることはなかったと考えられる。それに対し確実な知識を披露する客観的な叙述を旅行記の主要な構成要素とした 1700 年ごろの旅行記は、すでにその頃に特定地域の旅行者が増大し、旅行記や旅行案内の内容は十分検証可能になったことを示唆している。

第二部で分析されるのは、こうした客観的記述から 18 世紀半ば以降に記憶や神話的風景の叙述が個人の経験の中へ導入される旅行記の記述が変化していった過程と、そうした変化の背後にある旅行者が一貫して従ってきた旅行文化の規範である。

第一章では発見旅行の巡礼との模倣関係、さらにはツーリズムの巡礼および発見旅行との模倣関係が論じられる。しかし一方では、巡礼者のあり方や信仰と結びつけて語られる好奇心駆動的な発見旅行が根本的には旅行文化の祖型であるとはいえ、ツーリズムは信仰活動ではなく消費活動の一つであり、貴族社会に共有された慣習や規範に従った作法と知識を旅行者には身につけることが求められていた。旅行記の記述もツーリズムにおいては 18 世紀前半までは客観的記述が専らであり、「一見に値するもの〔Sehenswürdigkeit〕」に関する知識を旅の順序に従って記述して自らの確かな知識、また旅行記の内容が先行する旅行記に重複しないように自らの独自の見解を添えて良き趣味を備えた旅行者として自らを提示していた。

1700 年頃には交通史の観点から郵便馬車の制度や街道の整備によって移動が容易になったために、旅行者に関する政治経済的な言説が増え、その結果良い旅行者と悪い旅行者についての言説が形成され、旅行者という社会的カテゴリーとそれに応じた規範が形成されていった。第二章では、その過程を論じた。その際、旅行手引〔Apodemik〕、旅行案内〔Reiseführer〕、旅行の模様を示す旅行記以外に、作法書やカタログ、旅行禁令に関する当時のテクストを参照した。そこでは政治経済的なイデオロギーを前提に、貴族や富裕市民の子息たちが大半を占める旅行者に対し、言語や趣味、倫理的な洗練が旅行によって堕落することなく、国家に有益な見識を獲得することが求められた。

第三章では、実際に学殖者によるイタリア旅行の旅行記や科学者による中南米旅行の旅行記に依拠し、第一章と第二章で明らかにしたことに基づき、旅行記に記された旅行者としての社交規範や叙述様式がどのように現れていたかを検討した。従来旅行記の通時的研究の多くは、18 世紀半ばでくっきり分類され、修養旅行から市民旅行へ変質したことを前提にしていた。しかし本論文の分析からは、18 世紀を通じて旅行者の間では、貴族社会で要求される所作と、旅行記記述における認識的節約の原理、つまり先行する旅行記に書かれたことは省略して新たな見解を加えることが実践され、旅行記の叙述様式が、客観的記述から次第に内省的に記憶や神話的風景の叙述へ変化したのは、むしろ旅行者としての同一の規範が持続的に 19 世紀初頭の科学者の研究旅行に至っても共有されていたために生じたのだということが明らかになった。故に、貴族的な修養旅行と市民旅行という旅行者という社会的カテゴリーの断裂は必ずしも旅行文化の実際に即さず、貴族的な修養旅行で確立したツーリズムの規範が一世紀の間維持されていたと考えるべきなのである。

さらに第四章では再度旅行記の認識論的な問題に、コレクション文化に関する議論からアプローチを試みた。1700 年頃には貴族の間の経済的・学問的活動であったコレクションは、百科全書的かつ客観的な叙述をもっぱらとする修養旅行の旅行記と共時的にパラレルな文化現象と考えられる。貴族の物品そのものをコレクションしたのはルネサンス的な知的体系に依拠した論証を直観的に実践する目的であり、それと同時に一人の学殖者としての優れた技倆や威信を示すことができた。他方、1800 年頃の市民も蔵書作りに熱心であり、旅行記叢書や地理学叢書、自然学関連の図書が盛んに売れた。こうして彼らが書物を通じて他者の証言や自然物や自然景観の図版を収集したのは教養を確かにするためであった。しかし他者の証言が教養たりうる知識としての地位を得るのは、旅行記や地理学、自然学の知識が旅行者や出版物の増大に伴い十分

に検証されうるほどのデータが収集可能になると同時に、加えて比較的新しい旅行記が記憶や神話的風景を物語るためにレトリックの優れた使用を通じ文芸化されることによってであった。従って 1800 年頃の市民文化としての証言のメタコレクションは、モード雑誌や贅沢品のカタログを収集するのと同様の美的な楽しみを伴っており、蔵書へのアクセスは決まった水準の愛好家に限って開かれるのであり、旅行文化において貴族社会の慣習や規範が維持されていたのと同様に、コレクション文化においても貴族の実践が模倣されていた。ただし市民的なコレクション文化は、カタログや他者の経験の集積をコレクションするメタコレクションに特徴づけられていた点で相違していたと考えられる。

第二部ではこのようにして移動の歴史と知識の歴史の双方の観点から、1700 年頃確立した旅行文化を分析した。実際に 18 世紀の旅行記や旅行に関連するテクストを紐解くことで、巡礼から発見旅行を経てツーリズムの発展に至るまで部分的な模倣と変化が継続し、旅行文化が成立する際に「一見に値するもの」を訪れ、目にしたものについて客観的記述を行うという、旅行文化の基礎的な要素が用意されたこと、そして 18 世紀を通じて旅行文化内部において貴族的な慣習や規範に即した行為や知識が共有・模倣され、また旅行記において認識論的節約の原理が一貫することで叙述様式が変化したことが明らかにされた。

以上、本論文は第一部・第二部を通じて、文化の歴史変化における模倣や規範性についての理論的な考察と、その考察に依拠する歴史分析を実践し、旅行文化が初期近代のドイツ語圏で成立した過程や旅行記の歴史変化の原理を明らかにすることができた。

第一部　予備考察

第一部では初期近代以降に新たに現れたと著者が考える旅行という文化現象の歴史、あるいはその旅行文化に応じた規範形成を可能にした旅行記というテクストの歴史を考察する上で必要と思われる二つの枠組みを整理する。これら二つの文化的産物を歴史的に考察するとは、一方である時代の特定の地域に特徴的とみなされる歴史的文脈を背景に理解されるがゆえに、これらの文化的産物がそれ以前、あるいはそれ以外の地域にも見られる類似した現象とどう異なるのかを明確にすること、他方でそれらが通時的に同一の社会的カテゴリーを担う人々の間で、模倣と新奇性の追求が同一の原理に依拠して繰り返されることで部分的な変化を許容する安定的な慣習となる過程を追うということ、これら二つを同時に行うということである。

当時の旅行案内や旅行記のテクストに基づく具体的で詳細な検討は第二部で行うが、ここではまず初期近代の旅行文化を移動の歴史と知識の歴史の二つの枠組みが重なる場所に位置付けたいと考えている。移動の歴史においては移民など類似した現象と区別される必要があり、また知識の歴史においては旅行記というテクストがもたらす知識が持つ認識論的な性質について、他の記述的知識〔以下 *historia* と表記〕と同様に分析される必要がある。

しかし移動の歴史という枠組みは事実上存在し得ないだろう。というのも移動は人類に普遍的な現象であり、そのために歴史叙述を可能にするための十分な分類が不可能であるように思われるからだ。しかし移動の歴史は移民や旅行といった顕著な性質を持つ現象に限定すれば、その内部での詳細な分類がさらに必要であるとはいえ、叙述が可能であるように思われるし、実際これまでも試みられてきた。つまり移動はたとえ見かけ上力学的なモデルに即して理解されうるように思えても、その現象の因果的な理解に関して歴史的に構築されてきた事柄が介在しないということはあり得ない。

同様のことが知識の歴史の叙述についても言える。人類に普遍的な心理学的メカニズムの究明が知識の本質的な規定を可能とするならば、存在論的な分析に基づき叙述されるべき知識の歴史変化は瑣末な問題として片づけられてしまうかもしれない。しかしこれまでの歴史研究が明らかにしてきたように、個々の知識は様々な歴史的文脈や社会関係に埋め込まれて成立してきたのであり、知識の認知科学的な分析においても、歴史的文脈や社会関係に埋め込まれた知識実践を通じたフィードバックを考慮に入れる必要がある。

確かに移動と知識という現象は、人類の自然史的考察に際して全ての時間、空間を貫くライトモティーフであるように思われるが、この二つの現象の歴史が抽象的なモデルや特定の因子に即して決定論的に解明されることは決してない。それらはもはや文化的現象であることを強調しておきたい。だからといって事例研究に徹したところで、そう

した研究が分析のために用いる諸概念を、個別の差異を明示するためだけに改鋳を延々と続けるわけにもいかない。移動や知識は慣習や制度によって左右される現象であり、その限りで多かれ少なかれ一般化を退けるものではない。社会的カテゴリー〔social category〕の概念は、この相反するように見える立場を調停し、歴史叙述に規範的な概念が必要であることを理解させてくれる。ここで目的としている旅行文化の初期近代のヨーロッパにおける成立を分析する際にも、旅行者という社会的カテゴリーが前提とする規範に注目することが糸口になる。

そして初期近代のヨーロッパで生じる主要な知識の移動の形式における変化の動因でもあり、またその産物でもあるものとして旅行文化を見るとき、旅行記における叙述様式の歴史的変遷は、伝達、提示、記述、検証などの移動のプロセスに直接影響されていることがわかる。第一部はそれを明らかにするための予備考察である。

第一章では社会的カテゴリーの概念を歴史分析にいかに用いるかを論じる。社会的カテゴリーの分析が歴史叙述に有用であると考えるのは、第一に、歴史叙述が何らかの慣習や制度のもとに置かれた人々や動植物、その他の事物、概念や観念を対象とし、それらが社会的にどのように扱われ、社会的に機能したか、またどのような価値秩序を形成したかという問題に応えようとしているからである。社会的カテゴリーは基本的には安定的な慣習や制度に動的な性質を付与し、行為者や非行為者、言葉などの間に非対称的な関係が形成され、特定の集団的な性質や選好が傾向的に現れる歴史変化に重要な役割を果たしていると考えられる。換言すると、歴史叙述はある制度や慣習を所与とする社会に現れた特定の対象について、それに付与されている社会的カテゴリーが、その対象をどのような価値秩序や規範に組み込む作用を持つか、また価値秩序や規範社会を構成する他のアクターによってどのように働きかけられるかを問い、その対象を中心に社会関係の動的な変化を総合的に記述する[1]。

社会的カテゴリーはある事物の事実的な判断を慣習的、制度的に導く単なる記号ではなく、むしろその事実がどのような価値を含むか規定するカノンである。その意味で社会的カテゴリーは偏見ないし臆断〔Vorurteil〕[2]の原因でもありうる。そしてこれが問題

---

[1] 歴史において常に例外は存在し、規範は必ず守られるものではなく、正常と異常がある。しかしそれは規範の存在を否定するものではない。歴史叙述はその意味で、何が正常で何が異常かを区別する集団や個人の認識的過程をメタ的に分析する手続きを明示化する。

[2] ここで臆断という訳語を採用するのは以下の理由からである。まずクリスティアン・トマージウス（Christian Thomasius, 1655-1728）は、児童期に因習として受容した偽なる認識（すなわち「先入見〔Vorurteil〕」）から自己批判と情念の統御、論理的思考によって脱するよう要請した。この人間学的な議論から 18 世紀半ばの啓蒙思想が展開した臆断批判が現れてくる。Rainer Godel によれば、この時主導的な議論を展開したのがゲオルク・フリードリヒ・マイア（Georg Friedrich Meier, 1718-1777）であった。トマージウスの議論を継承したマイアは『人間的認識の限界の考察』*Betrachtungen über die Schrancken der menschlichen Erkenntnis* (1755)で一般化されない誤った認識に依拠する行為がもたらす害悪を論じ、さらに『美文学の基礎付け』*Anfangsgründe aller*

となるのは事物の移動が激しくなる時である。臆断批判が啓蒙の時代の人間学で中核的なテーマとなる時、一方では領域国家における寛容の言説と結びつくが、他方ではそのような言説全体が依拠する事実としての大規模な移民やその必要、そして交易の増大と拡大が存在した。第二章はこれまで歴史的背景に十分焦点を当てた叙述をベースにした研究を蓄積させてきた移民史のフレームを参照する。移民という社会的カテゴリーを移民史の研究がどのように扱ってきたのか、また移民という現象をどう捉えてきたのかを概観し、それと同時に現代的な旅行研究〔tourism studies〕の一般的な旅行者という社会的カテゴリーや旅行という現象の分析を瞥見する。この二つの視点が必要なのは、第一に初期近代以前では旅行の時間幅は現代よりずっと長大で、移民と今ほど明確に区別できるものではなかったように思われるし、現代的な旅行研究が初期近代に成立した旅行文化にある程度適用できると考えられるし、やはり検討すべきだからである。

思想史における文脈主義的立場が解釈に一定の制約を設ける意味で対象の置かれている歴史的文脈の重要性を訴えるとするなら、その時繊細に排除されるべきは解釈者の現代的な関心や通念である。しかし決して超越論的な問題がここにあるわけではない。社会的カテゴリーとして特定の対象や概念を理解する時、配慮しなければならないのは深層の意味、表層の解釈というより、その社会的カテゴリーで名指される対象に随伴している当時の人々の価値や性向である。

第三章では、知識にもまた社会的カテゴリーがついて回ったという歴史的事実であり、従って知識の歴史の構想可能性自体についてである。確かに社会的カテゴリーは、それ自体制度を構成する知識の一つと考えるべきである。しかし知識一般も、置かれた文脈によって様々に価値判断され、それゆえ一つの知識が多様な形態に移り変わり、結果として相違する社会的な機能を担うことになる。知識の歴史の研究者は一般的にこのような知識のあり方を「知識循環〔circulation of knowledge〕」と呼ぶ。あるいは知識が書籍や商品として物質化され、転用され、歪められたりする過程を、知識の「横断的メディア化〔transmediation〕」と Benjamin Schmidt は呼ぶ[3]。いずれにしても、一貫しているのは知識が受容された社会や知的体系のなかでどのように機能するかという点に、換言すれば、社会やメディアの間を移動し続ける知識が、その過程でどのような社会的カテゴ

---

schönen Wissenschaften (1748)では説得術における美感的な効果を論じる際に、「臆断は、我々が真とみなす判断であるが、その判断が真であるという根拠をしっかり探求する前にそう見なす判断である〔Ein Vorurtheil ist ein Urtheil, welches wir für wahr halten, ehe wir die Gründe der Wahrheit desselben gehörig untersucht haben〕」（Meier, Georg Friedrich (1748): ）と規定した。このような議論を前提に、ここでは Vorurteil を臆断と訳すことにした。Vgl. Godel, Rainer (2007): *Vorurteil – Anthropologie – Literatur. Der Vorurteilsdiskurs als Modus der Selbstaufklärung im 18. Jahrhundert*. Tübingen; Max Niemeyer 2007, 3. Kapitel.

[3] Schmidt, Benjamin: Knowledge Products and their Transmediations: Dutch Geography and the Transformation of the World. In: S. Friedrich, A. Brendecke and S. Ehrenpreis (ed.) *Transformations of Knowledge in Dutch Expansion*. Berlin/Boston 2015. S. 121-158.

リーが付与され、またその結果どのような役割を期待されていたのかという点に注目することで、知識の歴史を辿ることを可能にしようと考えられている。一言でいえば、知識の転用の歴史を、その文脈に即して理解すべきだと知識の歴史を論じるものたちは考えている。しかし必ずしもそこで言われている知識の概念は明確に規定されていない。文脈主義はしばしば過度に特定の概念を細分化してしまうためである。従って、それに対して知識の一般的な概念規定の可能性を、知識の正当化〔justification〕と権原付与〔entitlement〕という二つの保証〔warrant〕の手続きの仕方から整理することで提示する。その上で、知識の移動の歴史を記述する上で有用となる、占有形式と取引形式という分類概念を提示する。

こうして第四章では旅行記の認識論的問題に踏み込む。初期近代において実用的な見地から集積された記述的知識〔historia〕は、当時にあって証拠へのアクセスが困難である点、時間的性格を有している点、一般化に失敗することが多い点、以上三つの点で検証が困難であった。これは旅行記の記述内容やそれに関連する地理や歴史の知識も同様である。このような類の知識が著者から読者へ、あるいは実践者や企画者から依頼者や出資者へと、あるいは学者同士の間で移動するためには、*historia* には一定の保証が求められるが、保証がどのようなものであるべきかはインフォーマントが用いるメディアや証言者として提示された語り手、そして受容者それぞれの社会的カテゴリーに影響され、同時に秘密や嘘のリスクも認識されるようになる。知識消費社会が発展する 18 世紀において有用性が求められた *historia* の保証に関して、当時の議論がどのような見解を示していたか素描する。

第一章　社会的カテゴリー

社会的カテゴリー〔social category〕は差し当たってある社会集団によって共有され、使用される価値秩序や権力関係と切り離すことのできない分類概念とする。その限りで社会的カテゴリーは集団的かつパターン的な行為をより容易にするための制度の道具であり、またその制度を通じて再生産され、継承されるものでもある。社会的カテゴリーには例えばジェンダーや感情、職業や身分、国籍や出身地など様々なものが存在する。社会的カテゴリーは人や動物、物品などに交差して適用されることもあり、そうした重なり合いから複雑な価値判断を可能にする文脈が形成される。このことを、特に最近の制度研究やフェミニズム研究などでは、インターセクショナリティ〔intersectionality〕と呼ぶ。このことからわかるように、社会的カテゴリーは社会の中で生きる人間にとって経済活動における意思決定からアイデンティティに至るまで、人々の行為に一定の根拠を与える。ここでの目的は特定の社会的カテゴリーに焦点を絞り、その実際を記述すことではなく、むしろ社会的カテゴリーの概念自体を、学習や制度、知識と関連させて分析することで、文化的学習という特殊な模倣を通じて、人々の規範的な振る舞いが決定される中で特定の社会的カテゴリーが成立することを論じる。

第一節　文化の生物学的基盤

まず社会的カテゴリーを学習との関連から考えたい。特に生物としてヒトが有している文化的学習の能力が社会的カテゴリーの成立には不可欠であることを示したい。多くの脊椎動物は学習能力を有するし、社会性を持つ動物は脊椎動物に限定されない。従って社会的カテゴリーがヒトの集団に存在する、それどころか不可欠と考えるとしても、幾つかの前提となる制約が考えられる。つまり社会の成立に社会的カテゴリーは不可欠ではないかもしれないし、他の動物でも見られる学習とは異なる学習過程がそのためには必要かもしれない。こうしたことはここで究明できないので考慮から外す。社会的カテゴリーは少なくともヒトの社会には不可欠であるように思われるし、ヒトの持つ学習能力がそのためには不可欠であるように思われる。そして社会的カテゴリーがそのような生物学的な基盤を持つことは十分考えられることである。

繰り返すが動物のなかには文化を持つものがいくつもいる。古くはアリストテレス（Aristoteles, B. C. 384 – B. C. 322）が人間を最も優れたポリス的動物であると規定し[4]、ミツバチの群れにも社会を認めていた。現代の生物学でも、ヒト以外の霊長類、鯨やイルカ、鳥類、シロアリなど種々の昆虫など、さまざまな動物に社会性が認められている[5]。社会性のある動物は構造化された集団で生活し、親縁個体や世代をまたがる共生関

[4] アリストテレス『アリストテレス全集：政治学』岩波書店、2018 年、23-24 頁。

[5] 昆虫学では他の動物種の社会性とは異なる社会性の理解を提示しており、社会性は真社会性

係を構築することで社会進化のプロセスにおかれている。そしてこのプロセスで社会脳〔social brain〕ないし社会的知性〔social intelligence〕が発現したと考えられている[6]。こうした仮説を検証するために対象となっている動物種は、集団規模と頻度に応じて社会的学習〔social learning〕を行うと考えられている。社会的学習とはある個体が学習した行為を他の個体が任意の頻度で模倣することであり、個体間や世代間で適応的な情報を伝達・継承させると考えられている。この仮説を支持する研究では、集団規模や社会構造の複雑さが新皮質の大きさには正の相関が認められることが霊長類や有蹄類、コウモリ、鳥類を対象として実証されてきた[7]。これは脊椎動物の進化の過程で社会的学習の能力が獲得されたことを示唆している。また大脳のサイズや集団サイズに応じて新規な行為が一定頻度で考案されることも実証的に主張されてきた[8]。このような社会脳ないし社会的知性の仮説は、さらに文化的知性の議論に発展した。文化的知性を特徴付けるのは学習に際しての選択性である。

社会的学習や文化的学習〔cultural learning〕の能力は文化的形質〔cultural traits〕を一定頻度で集団内に蓄積させ、それを一定頻度で通時的に変化させる。その時間的変化をモデル化して理解する試みが、文化進化科学〔cultural evolution science〕である。既に経済学者の J. Stanley Metcalf[9]や Douglass North[10]や経済史学者 Joel Mokyr[11]、そして後でまた取り上げる Jürgen Renn の知識史の試みが社会科学や歴史学分野へ学習理論や文化進化科学の活用を提案しているように[12]、そのメカニズムやモデルは、通時的変化をする

〔eusociality〕と亜社会性〔subsociality〕、側社会性〔parasociality〕に分類される。例えばシロアリは真社会性を持つが姉妹群のキゴキブリは亜社会性を持つ。以下の総説は有用である。石川由希「シロアリの社会性とそれを支える生理／神経機構」『比較生理生化学』（2016）33 巻 4 号、191-202 頁。DOI: 10.3330/hikakuseiriseika.33.191 また生物学一般における社会性の概念については以下のスタンダードの研究、特に Part I を参照。Wilson, Edward O. (1975): *Sociobiology: The New Synthesis. The Twenty-Fifth Anniversary Edition*. Cambridge, Massachusetts, and London, England/ Harvard University Press 2000.

[6] Dunbar, R. I. M. (2009): The Social Brain Hypothesis and Its Implication for Social Evolution. In: *Annals of Human Biology* (2009) 36: 5, S. 562-572. DOI: 10.1080/03014460902960289

[7] Dunbar, R. I. M./ Shultz, Susanne (2007): Evolution in the Social Brain. In: *Science* (2007) 317: 1344. DOI: 10.1126/science.1145463

[8] Reader, Simon M. / Laland, Kevin N. (2002) Social Intelligence, Innovation, and Enhanced Brain Size in Primates. In: *PNAS* (2002) 99: 7, S. 4436-4441. DOI: 10.1073/pnas.062041299

[9] Vgl. メトカーフ、J・スタンレー『進化的経済学と創造的破壊』八木紀一郎／古山友則訳、日本経済評論社、2011 年（原書 : *Evolutionary Economics and Creative Destruction*. The Graz Schumpeter Society 1988）。

[10] Vgl. ノース、ダグラス『ダグラス・ノース制度言論』瀧澤弘和／中林真幸訳、東洋経済新報社、2016 年（原書 : *Understanding the Process of Economic Change*. Princeton; Princeton University Press 2005）。

[11] Vgl. Mokyr, Joel (2016): *The Culture of Growth*. Princeton University Press 2016.

[12] Vgl. Renn, Jürgen (2020): *The Evolution of Knowledge. Rethinking Science for the Anthropocene.*

文化的構築物である社会的カテゴリーの変化を理解するために参照する必要があるかもしれない[13]。

文化進化科学は生物進化の研究で培われてきた方法を応用することで進められてきた。とはいえ文化進化と生物進化を並行的に扱う理由は、単なるアナロジー以上のものがある。文化をもつ動物種において、文化は特定の機能遺伝子の選択に寄与することで、適応の決定因子〔determinant of fitness〕となると最近では一般に考えられている。このような進化のプロセスを「遺伝子と文化の共進化〔gene-culture coevolution〕」と呼ぶ[14]。共進化の研究がこれまで示唆してきたのは、文化は生息環境の自然的・人為的条件に作用することで、遺伝子という個々のエージェントの遺伝的な性質を規定する因子に再帰的に影響を及ぼすということである。

このような見解を拡張していけば、近年では進化生物学者の Kevin Laland らが主導しているニッチ構築理論〔niche construction theory〕に突き当たることになる。その理論によれば生物の文化は、生物自身が選択に関する環境要因に影響及ぼすか、あるいはその要因の一部となるニッチ構築の特殊例である。Richard Lewotin の 1980 年代の論文以来、長らく「忘れられた」ニッチ構築理論を進化的総合〔evolutionary synthesis〕以後の生物学に再度導入することが試みられてきた[15]。その理論によれば、ニッチ構築によって獲得され、また継承される生態学的遺伝〔ecological inheritance = EI〕は、少なくとも四つの主要な観点から遺伝子を介した遺伝〔genetic inheritance = GI〕と区別される。

一つ目は、EI は GI と異なり直近の親世代の生物個体の再生産能力に左右されることはなく、祖先の引き起こした物理的変化が子孫の選択へ及ぼす局地的な影響が幾世代を跨いで存続するかどうかにかかっている、という点。二つ目は、GI は DNA 配列にコード化された非認知的な情報の継承を意味するのに対し、EI は生物個体が表現する情報を決定し、遺伝子の選択に寄与する環境に内在する幾らかのエージェントの継承を意味する、という点。従ってニッチ構築はある水準では認知過程を含むことになる。さらに三つ目は、GI が親から子へ直系の継承関係に限定されるが、EI は潜在的にはある生物

Princeton & Oxford; Princeton University Press.

[13] ただし社会科学分野において文化進化科学を受容することに懐疑的な議論も少なからず存在する。Driscoll は「橋渡しをする分野〔bridging field〕」さえあれば、文化進化科学は生物学と社会科学を統合する分野として期待できると主張している。Vgl. Driscoll, Catherine (2018): Cultural Evolution and the Social Science: A Case of Unification? In: *Biology and Philosophy* (2018) 33: 7. DOI: 10.1007/s10539-018-9618-2

[14] Whitehead, Hal/ Laland, Kvin N./ Rendell, Luke/ Thorogood, Rose/ Whiten, Andrew (2019): The Reach of Gene–Culture Coevolution in Animals. In: *Nature Communications* (2019) 10: 2405. DOI: 10.1038/s41467-019-10293-y; Boyd, Robert/ Richerson, Peter J. (1985): *Culture and the Evolutionary Process.* Chicago; University of Chicago University Press 1985.

[15] Vgl. Griffiths, Paul E. (2005): Review of 'Niche Construction'. In: *Biology and Philosophy* (2005) 20: S. 11-20. DOI 10.1007/s10539-004-1605-0

個体から他のどんな生物個体へも継承されうる、という点。従って、最後四つ目としてあげられるのは、EI の場合は遺伝子上の関係が存在しない個体同士でも可能であるという点である[16]。彼らは次のように述べる。

> In fact, any organism's selective environment is potentially modifiable by any other organism that happens to be a neighbor or that shares, or that has previous shared, some common physical aspect of a mutual environment or that is capable of exerting an indirect influence by affecting the flow of energy or materials through that environment. All such neighbors are ecologically related but they need not be genetically related. Ecological and genetic ancestors are not necessarily identical. [17]
> 実際どんな生物の選択的環境も、潜在的には、たまたま隣り合わせになり、共通の環境に付属する幾らかの共有された物理的側面を分かち合うか、以前に分かち合っていた他のどんな生物によっても、あるいはその環境を貫くエネルギーや物質の流れに作用することで間接的な影響を及ぼす能力がある生物によっても組み替え可能であるわけだ。そのような隣人たち全ては、生態学的に関係している一方、遺伝子上では関係している必要がない。生態学的な祖先と遺伝子上の祖先は必ずしも同一ではない。

ここで述べられているように、文化は生存や再生産の条件、あるいは環境条件を変化させる要因と考えられ、選択圧を変化させることを通じて、長期的には文化自身の源泉である生物種全体の生物学的基盤を変化させるに至る。この時フィードバックループが生じるのは、一つには生物個体を介してであり、一つには文化的に構築されたものを介してである。物理的であれ文化的であれ、いずれのフィードバックもそれらの現象の原因となった生物種への因果的な影響を持つことで、その環境に存在する様々な生物種の母集団の存在規定に介入する。Laland らが考えるニッチ構築理論と進化の標準的な説明との決定的な相違点は、生物が適応することになる環境の所与性を前者は斥けている点である[18]。このような考えの相違を次の単純な方程式で彼らは表現する。まず標準的な説

---

[16] Odling-Smee, John F./ Laland, Kavin N./ Feldman, Marcus W. (2003): *Niche Construction. The Neglected Process in Evolution*. Princeton; Princeton University Press 2003, S. 12-16.

[17] Ebenda, S. 16.

[18] ただしこのようなニッチ構築理論の見解をレトリカルなものとして、その独自性や妥当性を疑問視する議論も存在する。元は Richard Dawkins の反論に遡りうるが、最近も以下の反論がある。Gupta, Manan et al. (2017): Niche Construction in Evolutionary Theory: The Construction of an Academic Niche? In: *Journal of Genetics* (2017) 96, S. 491-504. いずれの反論にも Laland らは以下の論文で再反論している。Laland, Kevin N./ Sterelny, Kim (2006): Seven Reasons (Not) to Neglect Niche Construction. In: *Evolution* (2006) 60: 9, S. 1751-1762.; Feldman, Marcus W./ Odling-Smee, John/ Laland, Kevin N. (2017): Why Gupta *et al.*'s Critique of Niche Construction Theory Is off Target. In: *Journal of*

明では環境（= E）と生物（=O）の関係は以下の形で表現される。

$$dO/\ dt = f\,(O, E)$$
$$dE\ /\ dt = g\,(E)$$

通時的な生物の状態変化はある生物種の内因的要素と生息環境の関数であるが、ある時点での環境の状態変化は環境の内因的要素のみの関数であると前提されている。環境変化は反射的な現象に過ぎないのである。しかしニッチ構築理論が想定するのは以下の関係である。

$$dO/\ dt = f\,(O, E)$$
$$dE\ /\ dt = g\,(O, E)$$

通時的な環境の状態変化は様々な生物と環境の内因的な要素の双方の関数となり、生物の状態と環境の状態は対称的な関係に置かれる[19]。従ってニッチは以下のように表現される。

$$N\,(t) = h\,(O, E)$$

ニッチ（=N）は生物集団と環境の双方の関数として表現される。この理論は、動物にせよ植物にせよ、多くの生物がその生命維持のための活動を通じて環境に変化を与え、その環境の変化が自らの進化のプロセスに帰るというフィードバックループを形式的に理解することを可能にした。文化はこの時生態学的遺伝の一部であり、また生態学的遺伝を形成する文化的要素は多様な生物種のものを含む。最も基礎的な情報は遺伝子を介し世代間で継承されるが、生物同士の干渉や個体の局所的条件への微調整〔fine-tuning〕の情報も他の進化プロセスを通じて継承され、このプロセスでニッチ構築は文化的ニッチ構築と呼ばれる現象へと変わっていく。ヒトの文化的ニッチに照らしてみれば、シグナルがあちこちに掲示され、耕作地や人の手の入った森林、治水や灌漑工事の行われた河川などの景観変容は、文化的ニッチ構築を通じた生態学的遺伝が現に存在することを直感的に示している。

Genetics (2017) 96: 3, S. 505-508. この論争について詳細に論じることはここでは割愛するが、ニッチ構築理論を含む「拡張された進化的総合」を巡る論争とそこで何が問題になってきたかについては以下のレビュー論文で整然かつ詳細に明らかにされている。Lewens, Tim (2019): The Extended Evolutionary Synthesis: What Is the Debate About, and What Might Success for the Extender Look Like? In: *Biological Journal of the Linnean Society* (2019) 127, S. 707-721.

[19] Odling-Smee, John F./ Laland, Kavin N./ Feldman, Marcus W.: a. a. O. S. 17-18.

この仮説で進化のプロセスは「集団遺伝学的プロセス〔population-genetic processes〕」、「情報獲得を伴う個体発生プロセス〔information-gaining ontogenetic processes/ information-acquiring ontogenetic processes〕」、「文化的プロセス〔cultural processes〕」という三つのプロセスに多重化されると考えられている。以下の図は進化プロセスとニッチ構築、環境の関係を Laland らが図式化したものである。生物個体や生物種（特にここではヒトが想定されている）は右側のフレームで進化プロセスを辿る。それぞれの階層で環境に対しニッチ構築の作用を与え、そのフィードバックループとしての自然選択や学習、文化選択の結果が生物個体や生物種に反響してくる。これらプロセス自体が環境へ働きかけ、その結果として再現可能な因果的な力としてニッチが構築され、さらにニッチ構築によって変化した環境に応じて選択圧や個体学習が変異することで、それぞれのプロセスに影響が及ぶ。

ここで注目したいのは二つ目と三つ目のプロセスである。「情報獲得を伴う個体発生プロセス」とは免疫獲得や学習など個体が生息する局所的な環境により適応的な行為や性質を身に付けるプロセスである。このプロセスは生物個体のレベルでの免疫獲得や学習を想定しており、獲得された情報の一部はニッチ構築を通じて環境に残存するが、それ以外は個体の死と共に消滅する。つまり、「学習された知識がニッチ構築に指針を与えることがあるし、その結果は生態学的遺伝に組み込まれることがあるのだから、後続する世代にとって学習のようなプロセスは依然著しい重要性を持ち得る〔processes such as learning can still be of considerable importance to subsequent generations because learned knowledge can guide niche construction, the consequences of which can be subject to ecological inheritance […].〕」[20]。

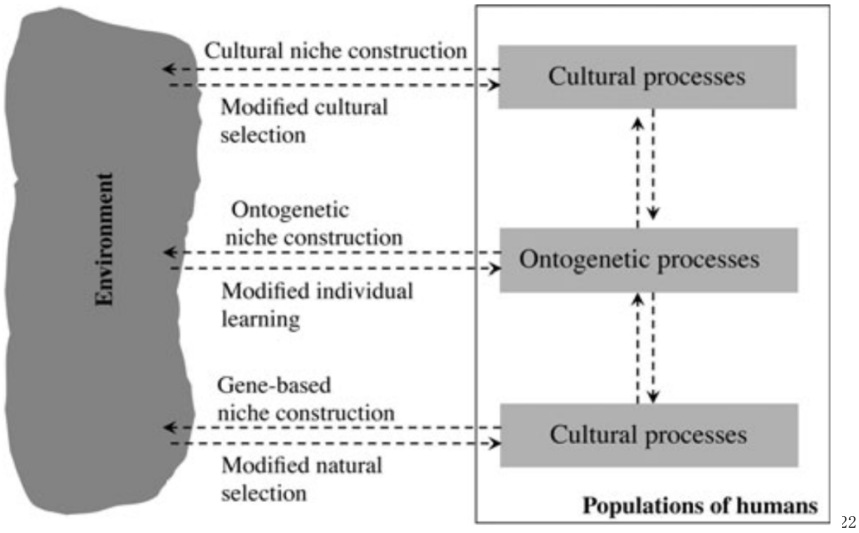
他方「文化的プロセス」は大抵「何を食べるべきか、どこに住むべきか、あるいはどのように危険を避けるべきかを、他のより多くの知識を持つ個体が実践することを実践することで、個体は素早く学習したり見聞きしたりするために、適応的な情報の獲得のためのショートカットのようなもの〔a shortcut to acquiring adaptive information, as individuals rapidly learn, or are shown, what to eat, where to live, or how to avoid danger by doing what other more knowledgeable individuals do〕」と見做される。

この時集団遺伝学的プロセスにおける自発的かつ確率論的な変異とは別に、文化的プロセスから環境に及ぼす影響が、学習内容の世代間の直接的な継承を超えて、遺伝子の選択圧に影響を及ぼす可能性を考慮に入れる必要がある。図 1 が示すのはまさにこのことであり、人間集団における文化的プロセスと個体発生プロセスに対応した三つのレベルのニッチ構築を通じて、個体発生と文化形成が環境との間にフィードバックループを形成する[21]。ニッチ構築の過程で、集団内の性質や振る舞いを傾向づける要因が外在化され、選択されていく。

---

[20] Ebenda, S. 257.

[21] Ebenda, S. 258-261.



[22]

図 1 人間集団における情報獲得とニッチ構築の関係の図式

学習に注目した共進化の理論は、文化の影響はその文化を持つ特定の種の進化に与える影響を理解する枠組みであった。文化的ニッチ構築は共進化のモデルを採用しながら、同時に生物学的ニッチ構築との階層的な相関を設定することで、異種間の文化的干渉や地震・噴火など突発的かつ大規模な環境変化をも考慮に入れ、文化的現象自体をそのような生態学的な条件に組み込むことを試みている。そしてその進化が新たに作り出す歴史的条件が生態学的なレベルで及ぼす影響全般を理論化しようと試みる。

歴史学的研究にもこうした見解を支持する説が提唱されている。近年のディープ・ヒストリーの試みを参照すると、たった数万年規模の人類史に限定された文化的ニッチ構築のプロセスですら、その変化は通常の歴史学研究が想定する時間尺度に比べてはるかに長いスパンと深いレベルでの文化的・自然的変化が絡み合っていることを例示している[23]。したがって近現代の目覚ましい社会や文化の変化をヒトの生物学的基盤に限定して還元することは不可能である。学習や知識生産の効率化を通じて様々な文化的・自然的変化が干渉ないし混淆し合う空間としての文化が構築されたとすれば、文化は単一的な種的特徴とは決して見なすことができない[24]。

---

[22] Laland, Kevin N./ O'Brien, Michael J. (2011): Cultural Niche Construction: An Introduction. In: *Biological Theory* (2011) 6, S. 191-202, hier S. 196.

[23] Vgl. スコット、ジェームズ・C『反穀物の人類史：国家誕生のディープヒストリー』立木勝訳、みすず書房、2019 年。

[24] これはヒトの学習能力に限定されない。例えば家畜化のプロセスはある意味では他の動植物の諸性質のみならず再生産能力や学習能力の手を借りて実現されたものである。つまりヒトが生きる文化的環境は、確かにヒトの認知能力が可能とする世代間の情報伝達や社会的学習なしに考えることができないかもしれないが、ヒトの認知能力に還元されることもあり得ない。文化的ニッチ構築の過程で他の生物の環境への影響は他の生物の意図的な行為の変化に影響を与え

もちろん現在の人類が生きる環境が異種や非生物との交渉を通じて形成され、その環境がヒトの生物学的基盤にフィードバックされてきたことも事実であり、またこの変化の最も強力な生物学的な要因がヒトの場合学習能力であり、第二節で論じる社会的学習や文化的学習によって集団内で再生産される行為パターンやそのパターンに従う選好であることは確かだろう[25]。

第二節　文化的学習

この章の冒頭で見た学習の話に戻ろう。社会的学習の能力のある動物は、特定の適応的な行為を反復することで、自身に適した構築物を形成することがある。このような構築物は、学習された内容とともに集団内や世代間で伝達・継承される。社会的学習や生態学的環境の継承は、個々の生物個体が一から学習や構築を始めるよりも安上がりであり、多くのリスクを回避することもできる。Michael Tomasello や Josef Henrich はヒトの社会的学習の能力は他の動物種のそれと明確に異なるほど洗練されていると考え、文化的学習〔cultural learning〕と呼んでいる。情報が集団ないし社会の内部の反復的伝達によってただ蓄積されていくだけならば、その情報の蓄積量や変更の累積スピードは集団の規模や成員間のコミュニケーションにかなり強く依存し、集団の消滅や伝達の途切れ、廃れ、表現の失敗によってその情報は学習に投じた資源とともに消え去る。だが少なくともヒトの社会では、このような意味で、情報がただ蓄積されるだけではなく、集団内でその都度の必要に応じて情報が変更〔modification〕され、その変更が累積することで新たな情報の資源となっている。このようなプロセスを累積的文化進化〔accumulative cultural evolution〕と呼び、これを可能にするのが文化的学習である[26]。Henrich は以下のように主張している。

> […] *social learning* refers to any time an individual's learning is influenced by others, and it includes many different kinds of psychological processes. *Individual learning* refers to situations in which individuals learn by observing or interesting directly with their environment […]. *Cultural learning* refers to a more sophisticated subclass of social learning abilities in which individuals seek to acquire information from others, often by making

---

る。それゆえ文化は少なくとも、進化的に獲得された生物学的形質の副産物、つまり「拡張された表現型」ではない。ニッチ構築の理論の重要な点はここにあるだろうし、Dawkins の「拡張された表現型」の議論との相違点でもあるだろう。

[25] Boyd, Robert/ Richerson, Peter J./ Henrich, Joseph (2011): The Cultural Niche: Why Social Learning Is Essential for Human Adaptation. In: *PNAS* (2011) 108: 2, 10918-10925.

[26] Tomasello, Michael/ Kruger, Ann Cale/ Ratner, Hilary Horn (1993): Cultural Learning. In: *Behavioral and Brain Science* (1993) 16: 3, S.495-511. DOI: 10.1017/S0140525X0003123X; Tennie, Claudio/ Call, Josep/ Tomasello, Michael (2009): Ratching up the Ratchet: On the Evolution of Cumulative Culture. In: *Philosophical Transactions of The Royal Society B* (2009) 364, S. 2405-2415. DOI: 10.1098/rstb.2009.0052

inference about their preferences, goals, beliefs, or strategies and/or by copying their actions or motor patterns. [27]

社会的学習は常に他者の影響のもとにある個体学習のことをいう。それは多数の様々な種類の心理学的過程を内包している。**個体学習**は、個体が直接自らの置かれた環境を観察したり、それに関心を抱いたりすることで学習する状況のことをいう。［…］**文化的学習**は、社会的学習能力のより洗練された下位区分のことをいう。個体はそれによって他者から、しばしば他者の選好、目標、信念あるいは戦略を推論することで、加えて／または他者の活動パターンないし運動パターンをコピーすることで、情報を得ようとする。〔強調原文〕

Henrich によれば、文化的学習は、表面的な模倣を含む社会的学習とは区別される。文化的学習の能力は、模倣すべき行為者の意図や目的などを推論しながらの模倣を可能にする。その結果としてなぜ自分がその行為を模倣すべきなのか、あるいはなぜそれを学習する必要があるのかを理解していることになる。このような他者の意図や自己の目的に自覚的でありうる模倣や学習においては、同時に、その行為者の示した情報や知識、振る舞いを、その行使者の目的に即して補完したり、発展させたりすることも可能となるだろう。ここから規範性と文化的多様性の二つが可能となる。規範は共通の目的の完成や複製が有利であれば構成されるだろうし、不確定な状況下で選択を増やすことが有利であれば、目的の多元化や異質な行為によって目的の多様化が促されるだろう。このように模倣すべき対象や模倣の動機を合理化する推論能力は文化的学習の能力の前提となる。

しかし Boyd et al. が主張するように、文化的学習の能力についての研究は、単にヒトの認知能力やその進化についての考察だけでなく、文化的ニッチ構築についての生態学的な理論の考察に寄与する。彼らは文化的学習を集団的過程〔population process〕であると指摘している。というのも同じように社会的学習の能力を持つ個体が増えることがなければ、この能力が十分に適応的であると考えることはできないからである[28]。

文化的学習の能力についての記述から推測できるのは、文化的学習を通じて初めて、他者（特に教示者）の視点から教示されている事柄を理解し、価値や意図を知識に付帯させて継承することができるようになった、ということである。加えて文化的学習は、

---

[27] Henrich, Joseph (2016): *The Secret of our Success*. Princeton University Press 2016, S. 12-13.

[28] Ebenda. “First, cultural learning can allow individuals to learn selectively—using environmental cues when they provide clear guidance and learning from others when they do not. Second, cultural learning allows the gradual accumulation of small improvements, and if small improvements are cheaper than big ones, cultural learning can reduce the population’s learning costs. Finally, by comparing “teachers” and learning selectively from those that seem most successful, “pupils” can acquire adaptive information without making any inferences based on environmental cues.”

模倣者だけでなく被模倣者の意識的な振る舞いを要請するように思われる。従って文化的学習は原初的な協力や規範意識を必要としているように見える。少なくともTomasello が説くように、ヒトであれその他の霊長類であれ、彼らに認められる協力行為には「志向性の接続」と呼ぶべき仕組みがある[29]。この仕組みは文化的学習とセットで考えられる必要がある[30]。

コミュニケーションを構成する感情や言語、その他雑多な知識は、この文化的学習を通じて獲得される。これらの要素は言語コミュニケーションの二つの側面を示している。Tomasello によれば言語を使用するという行為には参照内容と参照行為自体の二つの側面が存在する[31]。ヒトのコミュニケーションはこの二つの側面を共に考慮に入れることで理解可能となる。言語が適切に使用されるためには、音声パターンの知覚を一つのシグナルとしながらも、知覚と言語の意味やその他の背景知識、そして音声に対する構造化された反応を理解しておく必要がある。言語の学習することで、学習者は類似した場面で適切に言語を用いることができる。しかしその使用が成功するためには、言語外の諸情報を選択的に抽象化することが必要となる[32]。

より一般的に言えば、ある言語表現が、何らか他者が持つ直示的な知識を意味するとしても、その知識を提示することが実現するのは、その指示内容の伝達を含めた集団的な行為パターンである。「この人が王である」という言語表現は、特定の人物が社会的な特権者であることを伝達する上で特別な機能を担うことはない。しかし特定の人物が社会的な特権者であることを伝達することで特別な機能を担う。そして、この特別な機能、知識を通じた特定の戦略のパターン化は、やはり価値を評価したり意図を解釈したりする能力を前提とし、不完全な情報から、より完全な（時に合目的的な）情報を引き出すことを可能とする文化的学習の能力を欠くことができない。

このようにコミュニケーションは、言語を介した情報の共有や分配を行うための協調行為として捉えられる。予め取り決めが十分になされなくとも、言語を用いればこのような他者との協調行為が可能となり、これを第三節では慣習と呼ぶが、いずれにせよここで強調する必要があるのは、協調行為に際して社会的カテゴリーが作用するということである。協調行為に参加する者たちは、互いの役割分担や社会的身分に応じてどのようなコミュニケーションが図られ、どのような種類の情報が、どの程度共有されたり分配されたりするべきかを判断する。これは一般に、社会的カテゴリーを通じて、司令系統の形成や、役割の割り当て、資源の分配が明示化的に参加者に理解され、この序列に従った役割の割り当てや資源の分配は参加者に受け入れられやすくなる。その結果がた

---

[29] Tomasello, Michael (2014): *A Natural History of Human Thinking*（邦訳：橋彌和秀訳『思考の自然史』勁草書房、2021 年、7-8 頁）.

[30] 同上、第四章。

[31] 同上、89 頁。

[32] Tomasello (1993), a. a. O., S. 498.

とえ客観的に見たときに不公平〔inequity〕や不平等〔inequality〕であるとしても、序列に沿った役割の割り当てや資源の分配は効率的に実施されることが可能となる[33]。加えて、このような協調行為を通じて、社会的カテゴリーは集団的に再生産され、強化され、次第に社会的に人々を固定化するようになる。このような機能を担う社会的カテゴリーのなかには、有能であるとか怠け者であるといった評価から、老人や子供、戦士や商人といった親族関係や職業が含まれる。

社会的カテゴリーは、学習や模倣に割かれる資源や行為者の不平等な分配比率にも現れると考えられる。威信ある社会的カテゴリーの付与された人物の行為を模倣することはとりわけヒトの間で好まれる。Henrich によれば、文化的要素としてヒトの社会には行為や選好、戦略、ノウハウのパターンが現れる。このパターンは、「ヒトの進化の歴史全般に現れ、我々の文化的学習の能力を先鋭化させる別の契機を自然選択のため創り出した〔[…] as it emerged over human evolutionary history, created another opportunity for natural selection to sharpen our cultural learning abilities〕」。この契機を Henrich は「二階の文化的学習〔second-order〕」と呼んでいる[34]。

目前で実践される行為を単に感覚的に繰り返すという意味での模倣行為を超えた、意図や価値判断を含む関係性を選択的に学習する模倣行為として文化的学習を理解する時、文化的学習は一種の協力のようにも思われる。つまり規範を示す人物は、自らを模倣することをときに学習者に求めることが考えられる。それは特に道徳において顕著なことだろう。あるいは社会的カテゴリーが特定の選好を模倣させるとするならば、特定の社会的カテゴリーに対応した典型的な人物、ある意味では模範的な人物は、その行為において他者の模倣を期待することになる。

第三節　規範と制度

ここまでの議論から、私たちは規範性の根源として文化的学習の能力がもたらした価値や意図の解釈、それを通じたより効率的で、時により完全なものを作り出すための模倣を措定することができる。この模倣は単に行為のパターンを集団内に作るだけではない。その行為を規範的なものとみなし、特定の価値や意図を共有していることを互いに理解可能とする。意図を汲み取ることで、同じ目的を共有したより完全なアイデアを生み出すことができるし、社会的に貯蔵されている情報から新奇な情報が創造されることを可能にする。それだけでなく、特定の価値や意図を知覚的知識に結びつけることで、対象を伴う行為に関して共同の行為を可能とする。例えば病人に飲み物を所望された時、ビールを提供することは失敗かもしれないが、水を提供すれば適切であり、また薬効や

---

[33] 以下を参照。オコナー、ケイリン『不平等の進化的起源：性差と差別の進化ゲーム』中西大輔監訳、大月書店、2021 年（原書：*The Origins of Unfairness. Social Categories and Cultural Evolution*. Oxford; Oxford University Press 2019）。

[34] Henrich, a. a. O., S.119.

栄養を含む液剤や粉末を共に提供すれば、より優れているかもしれない。後者はお節介で終わる場合もあるが、提供した人の判断には一定の合理性が認められる。これは規範を参照することで可能なことである[35]。

ここでは規範という概念は Christina Bicchieri の議論に従い、慣習や制度と区別されながら、同時に社会規範と道徳規範に区別したいと考えている。社会規範は特定のルールに従うことに利益を期待することができる上、その利益を得ることを選好するのは、集団内で共有されたルールであることに原因があるのであって、歯磨きや雨降りの時に傘をさすといった合理的選択によって個別に集団の成員が示し得る共通の行為パターンを指すわけではない。他方道徳的規範は懲罰を伴い、規範から逸脱したものを罰することへの選好も集団内で共有されている必要がある[36]。もはや古典的な議論となった David Lewis の慣習論によれば、慣習やシグナリングシステムは、非協力ゲームの協調問題の解決策として捉えることができる[37]。この見解によれば、従う者たちの間で共通の目的、共通の利得が存在する状況が前提とされることで、各自の利益を実現するための合理的戦略に従って行動することが、結果的に協力を実現する、その行為パターンを慣習と見做すのである。Peter Vanderschraaf による形式的な表現に基づけば、慣習は相互期待基準〔mutual expectations criterion = MEC〕に関する共通知識〔common knowledge〕に基づいた行為パターンである。MEC とは以下のように規定される。

> Each agent has a decisive reason to conform to her part of the convention *given that she expects the other agents conform to their parts*.[38]
>
> いずれの行為者も、他の行為者たちが慣習における自らの役割に従うと期待しているならば、自分も慣習における自らの役割に従うための決定的な理由を有していることになる。

---

[35] この論文では本文中で示す Christina Bicchieri の議論以外にも、Cailin O'Conner の議論に同意して、規範と慣習は異なるという立場をとる。確かに慣習と規範が実質的に相違しないケースも想定できるが、慣習と異なり、規範には合理性や評判や懲罰といった要素が付随する。規範は慣習の変化に影響を与えることもあるし、複数均衡が認められる場合には規範は権力などに並んで選択に影響を及ぼす。また、慣習が規範の基礎となりうることは、規範に従う傾向の強い個人／集団と慣習に従う傾向の強い個人／集団の間の解決しない論争の種にもなりうるだろう。この論文では集団の性質や規範の明示性に基づいて、制度と慣習、共同性を区別できると考えるが、それは規範と慣習（あるいは制度や共同性）が区別されるべきであるという見解を前提としている。以下を参照。オコナー、前掲書、37-38 頁。

[36] Vgl. Bicchieri, Christina (2006): *The Grammar of Society. The Nature and Dynamics of Social Norm*. New York; Cambridge University Press 2006, Chapter 1-2.

[37] 以下を参照。ルイス、デイヴィド『コンヴェンション：哲学的研究』瀧澤弘和訳、慶應義塾大学出版会、2021 年。

[38] Vanderschraaf, Peter (1995): Convention as Correlated Equilibrium. In: *Erkenntnis* (1995) 42, S. 65-87, hier S. 69.

このような相互的な模倣を通じてプレイヤーたちが一定のルールに同調し、またそのように同調することが利益をもたらすと期待でき、他のプレイヤーもその利益を期待していると考えることができる時に、慣習は存在する[39]。この時協力に関する合意は存在する必要がない。しかし一部の慣習は、「プレイヤーたちが自らの戦略を何らかの出来事や、その他の断片的な、公式にはゲームを構成していない情報に結びつけている〔players tie their strategies to some event or other piece of information which is not formally part of the game〕」ことで成立する相関均衡として解釈されるべきである[40]。

あるいは言語コミュニケーションはシグナルを用いた一種の非協力ゲームのコーディネーション均衡として、つまりやはり慣習の一つとみなしうると Lewis は考える。確かに意味を持つ言語の成立過程は、シグナリングの進化から説明される可能性はあるだろう[41]。とはいえ言語コミュニケーションは一般的に状況と行為の条件からのみ均衡選択される命令の連続ではない。その意味で言語コミュニケーションがシグナリングと連続的であるとしても、同一だとはいえないだろう。Peter Vanderschraaf が Brian Skyrms らの議論を引き受け、慣習を相関均衡と再定義することが有効に思われるのは、特に定型的な言語コミュニケーションが可能となる場面である。

というのも、定型的な言語コミュニケーションにおいては、発信者と受信者それぞれに見られる外的相関に依拠して均衡選択に至ることがある。例えば上司と部下として、男性と女性として、政治家と有権者など、社会的カテゴリーに応じて、ゲームの結果とは基本的に無関係な事柄に依拠してコミュニケーションを展開することがある。すでに述べたように、社会的カテゴリーは参加者を社会的に固定化することもあるし、不公平な資源分配を受け入れやすくさせることもある。このようなコミュニケーションは、客観的な視点からは合理的選択と言えない選択を迫ることもあるだろうし、プレイヤーの間で際立った利害関係の対立が存在しない場合にすら、社会的カテゴリーに応じたコミュニケーションが実現する限りでは、外部の相関が及ぼす影響は大きくなるだろう。

従って補完的協調ゲームのように、利害関係が一致している状況では、外部の相関に応じた定型的な言語コミュニケーションが規範化して存在していると想定することは容易い[42]。その意味で定型的な言語コミュニケーションは、役割を分担する過程でもある。参加者はこの役割分担の結果望まれる行為を選択的に実施したり模倣したりする。社会的カテゴリーを自覚した参加者は、どの役割を担うかの選択に社会的カテゴリーを

---

[39] ルイス、前掲書、第三章。

[40] Vanderschraaf, a. a. O., S. 74.

[41] Vgl. Skyrms, Brian (2010): *Signals. Evolution, Learning, & Information*. Oxford New York; Oxford University Press 2010.

[42] この辺りの論述は、基本的に補完的協調ゲームと社会的カテゴリーに関するオコナーの論述から多くの示唆を得た。以下を参照。オコナー、前掲書、第二章。

参照し、一定の傾向を事前に自らに与える。こうしてプレイヤー間で事前に共有された社会的カテゴリーを相互的に適用されていることが前提となることで、同調的で定型的な言語コミュニケーションが生じると考えられる。

このような相関均衡が安定的に現れるには、初めから知覚された音声パターンを反復するだけでは不可能で、そのような表面上の模倣に限定されるとすれば言語能力の発達にも支障があるだろう。模倣されるシグナルがどのような場面でどのような利益が期待されて用いられるのか、つまり意図を理解した模倣である必要がある。相互的期待が十分に成立する時、コミュニケーションはシグナルを介して成功する可能性が高まる。そのシグナルが慣習的である度合いが高ければ成功する可能性は高いだろうし、相互期待基準が明確で、シグナルの意味の曖昧さを排除できるとき、さらに成功する可能性は高まるだろう。

この論文で社会的カテゴリーと呼んでいるものは、まさしくこのような知覚的知識から特定の行為の合理性を導出するように学習された規範の一種である。言い換えると社会的カテゴリーとは、複数の知識やシグナルに基づいて特定の規範に従うことが合理的であると判断するために参照される、ジェンダーや親族関係、あるいは職業や身分などの分類タイプのことをいう。そしてこの分類タイプが要請されるのは、規範形成に際してである。社会的カテゴリーも規範も、慣習と同一視されるものではない。むしろ Cailin O'Conner が明らかにしたように、社会的カテゴリーは、均衡選択における参加者の間の対称性を破ることで、特定のタイプに分類される人々がどの戦略を採用するかを規定し、その戦略から期待され実際に獲得される利得に沿って序列化する[43]。それゆえ、社会的カテゴリーは単なる慣習というより、判断適用における規範的な力を持つ規則であり、集団内で人々が補完的に行為を選択するように事前にガイダンスをすることで利得最大化することを可能にするような知識である。

最初に述べたように、社会的カテゴリーはヒトの社会に特有のように思われる。少なくとも文化的学習の能力を持つ動物に限定されるだろう。そして社会的カテゴリーは自然的に成立してくる慣習に基づきながらも、規範な力によって集団内部のタイプ分類に寄与することで、慣習を動的に変化させたり、逆に固定化したりする。この時、他のプレイヤーに対するそのタイプに応じた期待が共有され、その期待に沿った戦略の決定と行為パターンが慣習には含まれている。タイプには様々な評価基準が想定され、かっこいい〔cool〕とか金持ち〔rich〕といった通念から、教員や在留資格者といった公式の制度に応じた資格〔qualification〕まで存在する。社会的カテゴリーをこの時、通念や非公式の資格、公式の資格に応じて区分けすることができるだろう。すなわち単なる小規模の集団で共有された通念である共同的カテゴリー〔communal category〕、非公式の資格や家庭内交渉によって集団内での序列が明確化される慣習的カテゴリー〔conventional

[43] 同上。

category〕、そして公式の制度でも審級や手続きが言語的であれ非言語的であれ明示されて法的実行力を持つ制度的カテゴリー〔institutional category〕である。ただしこれら三つの社会的カテゴリーを指示する語は、相互に転用可能であることも指摘する必要があるだろう。単語は一義的に社会的カテゴリーと結びつくわけではない。例えば親族関係についての社会的カテゴリーは自然的な規範から多様に生じることは容易に考えられるが、しかし国家成立以後に公式の制度において重要な役割を果たしてきたことも明らかである。あるいはジェンダーに関する社会的カテゴリーも、協働する少人数の集団における分業を可能にする役割以上の意味が、多くの社会で歴史を通じて形成され、ジェンダーはしばしば公式の制度を構成する基幹的な社会的カテゴリーとなった。とはいえこの転用は集団の規模や均衡状態に応じて推移し、同一の親族関係の呼称やジェンダーの呼称の間にも、それが与える規範に相違が生じる。

この区別は規範や制度一般を考える時にはそれほど重要ではないかもしれないが、制度変化の歴史を考える時に規範性の強さや概念の転用可能性が問題となる時、つまり言語コミュニケーションを通じた行為パターンの選択や、知識の伝達可能性が問題となる時には重要な要素となる。公式か非公式か、手続きが明示化されているか、規範性の強さ、どのようなタイプに属すかなどが、グラデーションを描き、行為パターンの選択や知識伝達に影響を及ぼす。この論点は、第二部で旅行者や旅行記の間の模倣関係について論じる際に念頭におかれている。

また、続く第二章や第三章の議論でも、社会的カテゴリーに関する以上の議論が念頭に置かれている。移動現象が情報経路に依存すること、あるいはどのような人々がどのような土地に移動することを選択するかについてなどは、以上の議論を踏まえる必要があるだろうし、それは知識の移動についても同様である。いずれにせよ集団的な行為パターンやその戦略の選択に社会的カテゴリーが影響する限りで、制度は均衡ともルールとも同一視されることがないとここでは考える。制度の歴史的変化について注目すべき議論を続けている Avner Greif は、Christopher Kingston とのある共著論文で、制度を単なる取り決めとしてのルールではなく、均衡として現れる自己強化的なルールとみなすべきだと主張している[44]。この意味で制度は慣習に加えて規範を含んでいる。Greif は以下のようにも主張している。

> 制度とは、行動に一定の規則性を与えるさまざまな社会的要因が形成するシステムである。このシステムをなす各要素は、その下で行動を選択する各個人にとっては外生的なもので、また人為的に作り出された非物質的なものであるという意味で、「社会的」な要素である。これらの要素は一体となって、技術的に実現可能なさま

[44] Greif, Avner/ Kingston, Christopher (2011): Institutions: Rules or Equilibria? In: Norman Schofield and Gonzalo Caballero (ed.) *Political Economy of Institutions, Democracy and Voting*. Heidelberg; Springer 2011, S. 13-43. DOI:10.1007/978-3-642-19519-8_2

ざまな行動の中から、個々人が 1 つのものを選びとることを可能にし、動機づけ、指針を与えるものである。[45]

Greif はこのように制度を定義することで、制度を取引の発生する社会的状況に制限する。つまり、「行動に影響を与えることのない成文ルール・憲法の条文・道徳規範や予想は、制度の構成要素ではない」一方で、「市場価格で売買が可能であるという予想は」制度の構成要素である[46]。つまり、公式・非公式関係なく行為のパターンを形成するように作用するならば、理解可能な期待ですら制度の一部であるということだ。

つまり制度において不可欠なのは、外部効果を持つ存在である。外部効果を持つとは「ある人の行動が直接かつ不可避的に他者の行動に影響を与えること」をいう[47]。制度がなんらかの行為を生み出す時には、他者の行動や、規範を理解することを通じて、文化的に学習される必要がある。ある行動の意図や結果を知ることは、実際に生じている一連の行動をただなぞることではなく、その行動を選択することがもたらすアイデンティティや社会的地位、そして利得を理解した上で、実際にその行動を選択するかどうかの決定を可能にする。

Greif の制度理解で興味深いのは、彼が制度の中心に取引を据える点にある。つまり、制度が行為を生み出すのは、彼が社会的単位と呼ぶ個人や企業、公的団体などの社会的単位の間で交わされる取引のためなのである。だから社会化されていない個人を想定することが許されるなら、そのような個人がなす自己完結した行為にパターンが認められても、それは制度とは言わない。この点についていえば、慣習や規範についてすでに述べたことと同様である。制度は何らかの学習や社会化の過程を経て、他者の作り出した人為的要因から誘発される、「商品・社会的態度・感情・意見・情報などの実体が 1 つの社会的単位から別の社会的単位へ移転される際にとられる行動」[48]、ということである。彼は以下のように主張する。

ある者の行動が人為的に作り出された非物質的な外生的要素によって影響を受けるための必要条件は、別の誰かの行動を反映する何か（例えば、金銭、褒賞、あるいは罰則）が彼に移転された、移転される、あるいは移転されると期待されることである。制度化され内面化された予想や規範は取引によって形作られる。これらの予想や規範を形作るのは社会化の過程であり、そこでは自らの世界観・アイデンティティ・規範が構築され、予想（例として教典や創世神話に対する予想）が形成さ

---

[45] グライフ、アブナー『比較歴史制度分析』上、岡崎哲二／神取道宏監訳、ちくま学芸文庫、2021 年、79-80 頁。
[46] 同上、80 頁。
[47] 同上、106 頁。
[48] 同上、107 頁。

れる。同様に、制度化された行動に関する予想は、取引に関するものである。というのも、そうした予想は、ある人が他人の行動に対してどう反応するかに関するものだからである。[49]

彼のこの主張が興味深いのは、規範の生成要因に取引、そして取引の前提となる期待を想定している点である。ここまでの議論では単に文化的学習から規範性が生じる過程を予想していた。だが文化的学習が既に述べたように他者との協力のような行為を可能にするならば、協力は取引の一種であり、社会的カテゴリーは取引を通じて形成され、また同時に取引を可能にするための前提的な学習プロセスを含む外部効果と規定し直すことができる。

ただし重要なのは、取引は物体の譲渡や売買、占有などに関わり、取引の対象や相手についての情報が必ずしも十分でないケースを想定することである。つまり志向性の接続によって同一の獲物を狩るとか、同一の家屋を建築するという営みという場面ですら、事前に打ち合わせ可能だとしても、志向性の接続に関して不透明度の変数が認められるだろう。社会的カテゴリーが作用するのはこの点である。

その限りで、情報の非対称性をめぐる議論[50]は、情報伝播における事前のバイアスだけでなく、情報伝播の効率性に少なからぬ影響を与える。例えば社会的カテゴリーは取引に参加する人々が、見知らぬ者同士であっても、取引が可能になるための一定の信頼を可能にする。それは臆断や錯誤をもたらしうると同時に、取引費用を低減する一面もあるはずだ。しかし逆に非合理的な慣習が固定化されることもある。制度は時に慣習的カテゴリーによるバイアスを超えて公正な取引を実現するよう規制をかけることができる。情報の非対称性を解消するのに要する取引費用を低減させることで、取引を可能に、あるいはより活発かつ円滑にする効果が制度にあると考えることが正当ならば[51]、社会的カテゴリーによって複雑化される文脈の理解は、取引に対する制度を通じた政治的介入の前提となる。

社会的カテゴリーとは結局、社会的単位の間での「商品・社会的態度・感情・意見・情報など」の移転に際し、移転の実現がより期待可能であるために必要な、価値判断や意図を含んだ対象規定であると考えることができる。従って第二章で考察する移動、第三章で考察する知識もまた、社会的カテゴリーの作用する場である。というのも、人が移動する限りでそこでは商品や金、あるいは身体や情報、社会的態度や感情が無数に取引さ、また知識とはのちに規定するように、情報の占有と取引という二つの形からなる

---

[49] 同上、108 頁。

[50] 以下を参照。ノース、ダグラス『ダグラス・ノース制度言論』瀧澤弘和／中林真幸訳、東洋経済新報社、2016 年（原書：*Understanding the Process of Economic Change*. Princeton; Princeton University Press 2005）。

[51] 同上。

移動形態から成立するからである。

第四節　小括

ここまで述べてきたことをまとめると、社会的カテゴリーを以下のように理解できる。

(1) 社会的カテゴリーは文化的学習の能力から成立すると考えられる社会集団の成員をタイプに応じて分類する規則である。この分類規則は規範的な力を持つが、規範的な力の源泉はやはり他者の意図や価値秩序に応じた選択的な学習にある。そしてゲーム的状況から自然的に成立すると考えられる慣習はそれ自体規範的な力を持つとは限らない。しかし成員は文化的学習を通じて、補完的な協調行為に際して戦略を自らの社会的カテゴリーに応じて選択したり模倣したりするとする。規範性はこうして成立し、人々や物体、行為の間にある社会関係のタイプ的認識やアナロジーを社会的カテゴリーは可能にする。

(2) 社会的カテゴリーは集団の性質や付与される通念や資格、機能によって制度的カテゴリー、慣習的カテゴリー、共同的カテゴリーに下位区分されると考えらえる。また概して、制度的カテゴリーは公式に認定され明示化された規則として法的拘束力を持ち、慣習的カテゴリーは非公式ながら交渉を通じて明示化可能な規則として情報や資源の分配における秩序をもたらすだろうし、共同的カテゴリーは通念や流行した観念に基づき非明示的で共感的な規則として情報伝達の経路や資源へのアクセスに大きな影響を及ぼすと考えられる。例えば職業や国籍、あるいは世界遺産や天然記念物は制度的カテゴリー、傍系の親類関係や集団内の暗黙の序列、ランドマークやジャンルは慣習的カテゴリー、リップやヒップ、友人関係などは共同的カテゴリーである。

(3) 社会的単位の間で情報や資源の移動、感情や言葉のやり取りが実施される時、そのような取引一般に制度は影響を及ぼす。制度が取引に参加する者の行為に影響を及ぼす際、それは取引の可能性や効率性を形式面から高める。加えて、制度下における取引に参加する者たちは、相互の社会的カテゴリーを考慮に入れる必要もある。社会的カテゴリーは、取引に付随する種々の規範要請や損失回避に必要なコストを低減させる場合もあれば、取引の可能性や効率性を伝統的だが非合理的な理由に基づいて減じさせる場合もあり、取引が繰り返されるなかで取引に際して期待される行為のパターンや規則は自己強化すると考えられる。

社会的カテゴリーは感情やコミュニケーションを含む広義の取引に際し作用する。念のために最後に一言説明を加えると、社会的カテゴリーは社会構築主義的な意味での相対主義とは異なる。社会的カテゴリーは対象規定における価値や意図の重要性を強調するが、それはそのような規定が、伝統においてであれ合意形成においてであれ、任意の

対象に恣意的な概念を当てはめているということを意味しない。あるいは遡行不可能な超越論的条件でもない。社会的カテゴリーは経験を通じて学習された価値や意図と結びついた知識であって[52]、類似した経験的対象に適用可能と考えられてはいるが、その具体性から文脈に意識的にならざるを得ないし、そうでないと損失が生じる（商取引に失敗する、交易品を持ち逃げされる、悪質な商品をつかまされる、嘘を吹きまれるなど）とか暴力や抑圧の原因となり社会全体を損ねる（差別やヘイトクライム、ジェノサイド、など）。これは知識に密接に関連する。これについては第三章、第四章で検討する。また、この概念は自ずと 18 世紀における臆断批判の議論に引き寄せられることになる。次には移動の歴史において、社会的カテゴリーがどのように有用であるかを検討する。

[52] このような理解は基本的に経験主義的である。感性的な概念や観念の形成、記憶との類似に基づく判断についてはジョン・ロックや彼の影響下にあるヴォルフ学派の通俗哲学者の合理心理学に共通してみられる。他方、イマニュエル・カントは『純粋理性批判』*Kritik der reinen Vernunft* (1781/1787)で当時の合理心理学的な通説を拒絶した。というのもカントによれば、構想力の産物である図式の概念は、経験主義的な概念、記憶、知識の連続的な理解に対応しながら、図式は経験を積み重ねたところで導出され得ないからである。カントがこの時経験と呼んでいるのは、分析的な仕方で概念適用が可能となる諸性質に還元された感性的直観の個別の内容に他ならない。彼は図式にはアプリオリな綜合が必要と考えており、その意味で社会的カテゴリーは超越論的図式に数え入れられることはない。とはいえ、カント的な用語を参照して言い換えれば、社会的カテゴリーは他者を介して可能となるアプリオリな純粋直観を介した模倣によって獲得される。模倣はこの時、一致すべき概念を充足する外的直観（空間に従属する運動や形態）を自発的に生み出すことを言う。再度強調するが、これは単なる感性的な類似ではなく、形式的類似としての図式に基づく。この限りで文化的学習の産物としての社会的カテゴリーは単に経験を通じて個別の例が獲得されるより前に形成される判断力の範である。臆断が未熟な経験的抽象にすぎないとするなら、社会的カテゴリーと臆断は似て非なるものである。

第二章　移動の歴史

まず確認すべきは、移動には少なくないコストがかかることである。加えて馴染みない場所に赴くことになればリスクや不確定性が増大する。総じていえばパスカルの格言にあるように、不幸の原因は家でじっとしていられないことにあるわけである。しかし人は移動し続けている。実際食糧を確保したければ洞窟住居から離れ、暗い森に入っていく必要があるかもしれないし、マンションから出てコンビニに向かう必要があるかもしれない。第一章で検討した内容を踏まえると、ヒトの移動は文化的学習を通じて制度や慣習に組み込まれながら、規範的な移動や逸脱した移動がその都度発生し、社会的カテゴリーの影響下に置かれていると考えられる。

この章で検討するのは、移動〔mobility〕という、人類に普遍的な現象を指す傘概念から初期近代の移民と旅行というカテゴリーを取り出し、どのように差異化できるかという問題である。移民は季節性の労働移民から植民活動に従事するとか政治的・宗教的な危険を避けるために移動先に居着くことになる移民まで様々いた。前者は一定期間移民先で過ごした後、自分達がきた場所に戻っていく。その限りでは旅行者と似た行為パターンをとる。初期近代の旅行の分類には、一定期間職業上の必要から移動と滞在を繰り返したものたちを含めるのが一般的である。両者は初期近代において類似した現象でもあったように思われるが、しかし 1700 年頃に旅行文化が成立する時には、旅行者は商人や労働者の移動とは全く異なる形態の移動を選択的に模倣する。その時にはすでに移民と旅行ははっきり分かれているのである。この詳細は第二部で検討するが、その前提となる議論をここでは行う。

第一節　移動の人間学的規定

人類学や考古学、古生物学の研究が示してきたように、遥か昔からヒトは他の動物に比べはるかに頻繁かつ長く移動する動物として存在してきた。長距離移動を定期的に繰り返す動物は、季節性の渡り鳥や渡り蝶など一部に限定され、珍しい。大規模な環境変化が不可逆的に生じた時には移動を迫られることになるが、季節性の変化であればそれほど強い動機を生み出すことはない。いずれにせよ長距離移動はコストが非常にかかり、リスクも多い。従って移動のルートは社会的学習を通じて集団内で共有されていることがほとんどだろう。季節性の渡りでは、特定のルートを辿った群が生存において優位になることで、次第にそのルートが社会的学習を通じて強化される。

ヒトも原初から移動を頻繁に繰り返したかはわからない。だが今では文化の一部としている。確かにヒトの形態学的特徴は長距離移動への傾向を窺わせるものが幾らか存在する。基本的にヒトだけが行う直立二足歩行・走行は、化石研究および生理学的・解剖学的研究によって、骨盤や大腿骨の形状、筋生理学的な最適化、メカニックなどから長

距離移動に適したエネルギー効率を実現していることが明らかにされてきた[53]。他の四足歩行の脊椎動物も時折二足歩行を行うことはあるが、基本的にエネルギー効率が悪く、ヒトのようにバランスよく長距離を歩くことはできない。効率よい運動の獲得は移動距離を長くするだけでなく、発汗システムの進化とともに暑く乾燥した環境での長時間の走行を可能にした。進化を通じて形成されたヒトのロコモーション能力は経済的歩行〔economical walking〕とも呼ばれる。ただし、この形質が進化的にどのような利点があったかについては依然論争的である[54]。またこうした運動能力だけでなく、移動先の環境に短期的に馴化するために必要と考えられる技術を生み出す能力も有していた。

やはり移動は人間学的規定を惹起するに足る普遍的な現象と考えることができる。これまで提起されてきた種々の人間学的規定には例えば以下のものがある。すなわち ベンジャミン・フランクリン（Benjamin Franklin, 1706-1790）は「道具を作る動物〔tool-making animal〕」とヒトを呼び、同じことが「作るヒト〔homo faber〕」という語で古代に表現されていた。あるいはヨハン・ホイジンガ（Johan Huizinga, 1872-1945）は人類学や歴史学に依拠して「遊ぶヒト（homo ludens）」を詳細に論じ[55]、エルンスト・カッシーラー（Ernst Cassirer, 1874-1945）は自身の認識論に基づく人間学的考察から「シンボルを作る動物〔animal symbolicum〕」[56]を、ハンス・ブルーメンベルク（Hans Blumenberg, 1920-1996）は現象学的人間学の考察から「保留するヒト〔homo cunctator〕」[57]を提案した。何より種名「賢いヒト〔homo sapiens〕」もまた人間学的規定を含んでいる。さらに日本の自然人類学者たちはあるシンポジウムで「移動するヒト〔homo mobiritas〕」という概念を作った[58]。

---

[53] 荻原直道「ヒトはなぜ直立二足歩行を獲得したのか」井原泰雄/梅崎昌裕/米田穣編『人間の本質にせまる科学：自然人類学の挑戦』東京大学出版会、2021 年、142-162 頁。

[54] Niemitz Carsten (2010): The Evolution of the Upright Posture and Gait – A Review and a New Synthesis. In: *Naturwissenschaften* (2010) 97: 3, S. 241-263.

[55] 以下を参照。ヨハン・ホイジンガ『ホモ・ルーデンス』里見元一郎訳、中公文庫、2018 年。

[56] Vgl. Cassirer, Ernst: *An Essay on Man*. New Haven; Yale University Press 1944（邦訳：『人間』宮城音弥訳、岩波文庫、1953 年）.

[57] Blumenberg, Hans (2006): *Beschreibung des Menschen*. Frankfurt am Main; Suhrkamp 2014, S. 270-276.この箇所で Blumenberg はフッサールを手掛かりにした現象学的人間学の考察の中で、本来「自己保存〔Selbsterhaltung〕」に無用の自己認識は、本来的に「異物（他者：das Fremde）の経験〔Fremderfahrung〕」の契機として類的存在としての関心に基づく自己保存に役立つ。そして経験された異物（他者）の理解はさらに「友敵関係の未規定性〔Freund-Feind-Unbestimmtheit〕」を契機とすると論じた。この留保する有り様を彼は「保留するヒト〔homo cunctator〕」と表現した。またこの著作は今世紀に入って手稿から編纂されたものであり、研究はまだ多くないが、比較的コンパクトに現象学的人間学の構想をまとめたものとして以下の文献を参照。Müller, Oliver (2017): Phänomenologische Anthropologie. Hans Blumenbergs Lebensprojekt. In: G. Hartung und M. Herrgen (Hg.) *Interdisziplinäre Anthropologie*. 2017. DOI: 10.1007/978-3-658-14264-3_25

[58] 以下を参照。印東道子編『人類の移動誌』臨川書店、2013 年。

これに対し、移民の歴史を研究してきた Klaus Bade は「移民するヒト〔homo migrants〕」という概念を作った。Bade の規定は最後の「移動するヒト〔homo mobiritas〕」と類似している。しかし後述するように、Bade は移動のなかでも文化的に動機づけられ、かつ移動するだけでなくその地に住むことを含めた一連の過程に注目している。その点で、ヒトが移動を可能にする形質的特徴を多く有していることに注目する「移動するヒト」という規定とは異なる。Bade が「移民するヒト」という概念で示したかったのは、むしろその人間学的規定としての性格から離れ、移動や移民という現象が常にもつ複雑な歴史的性格である。

> Die Geschichte der Wanderungen ist Teil der allgemeinen Geschichte und nur vor ihrem Hintergrund zu verstehen; denn Migration als Sozialprozesse sind Antworten auf mehr oder minder komplexe ökonomische und ökologische, soziale und kulturelle, aber auch religiös-weltanschauliche, ethnische und politische Existenz- und Rahmenbedingungen. Weil Migration in der Geschichte, aber auch in der Gegenwart, nachgerade alle Lebensbereiche durchdringt, braucht Migrationsforschung grundsätzlich inter- und transdisziplinäre Forschungsansätze. Sie reichen je nach Fragegestellung unterschiedlich weit, in fast alle Humanwissenschaften hinein und zum Teil auch darüber hinaus.[59]
> 移動の歴史は一般史の一部であり、それを背景にしてこそ理解可能となる。というのも社会的過程としての移民とは、多かれ少なかれ経済的、生態学的、社会的、文化的、宗教ないし世界観的、民族的、政治的な側面が複合した生存の条件、そして構造の条件への応答であるからだ。歴史上移民は、さらに現代においても、あらゆる生活領域を貫いているため、移民研究は根本的に学際的・分野横断的な研究手法を取ることになる。そのような研究手法は、問題設定に応じて様々に拡張され、ほとんど全ての人間科学の分野に及び、部分的にはそれを超えてしまう。

ここで Bade は、ヒトを全体論的に眺める視点として人間学的規定を提示することで、移動や移民という歴史現象を理解するためには、その複雑な背景ゆえに、多岐にわたる分野の専門知識が不可欠であることを示唆した。この問題提起に、この論文が実に共感的であるかはすでに明らかである。Bade の述べる通り、ヒトが 30-20 万年前にアフリカ大陸からユーラシア大陸へ、そしてやがて南アメリカ大陸の南端に到達し、そのために長大な距離を移動し、その都度環境適応・馴化を繰り返したという歴史上の事実を理解するには、ニッチ構築を通じた生態学的な振る舞いの統制、その都度の移動を動機づける文化的・経済的・環境的要因、また好奇心や恐怖のような心理学的要因を科学的に分析し、それを背景に理解する必要があるかもしれない。

---

[59] Bade, Klaus J. (2002): Historische Migrationsforschung. In: derselbe (Hg.) *Migration in der europäischen Geschichte seit dem späten Mittelalter*. Osnabrück 2002, S. 21-44, hier S. 21-22.

ただし Bade のこの問題提起は、移動を歴史学的に研究する際には、生態学的・人間科学的な視点からヒトの移動を理解するだけでなく、歴史学的な視点から移動の形態に見出される文化的なパターンを理解する必要があるということも同時に示唆している。このような見解は、近年の独自の分野として確立したと認識されるようになった社会学的・地理学的な移民研究〔migration studies〕においても同様の見解が見られる[60]。

この時同一の移動現象に関して二つのアプローチの可能性がある。つまり実際の人口動態や生態学的条件を考古学的資料から洗い出し、移動現象をモデル化することと、文字史料を手掛かりにどういった要因が出発地と目的地を決定したのか、あるいは移動中にどのような出来事があり得たのかを推論することである。しかし時代を遡れば後者の史料はほとんど残っていないか、そもそも作成されていない。従って古い時代の移動現象がモデル化される際には本来考察されるべき歴史的・文化的側面を捨象した上で、残された居住空間の遺構や集団的に残された遺骸の年代測定を手掛かりに、移動のルートを浮かび上がらせているに過ぎない。このような分析に際してはゲーム理論や疫学研究から応用された、いくつかのモデルが用いられることもある。しかし狩猟や戦争、交渉のための伝令や外交官の派遣、共有のための儀礼的贈与や朝貢、あるいは労働移民や遊牧、境界を跨いで取引を可能にする遠隔地交易の個別の文脈、家族移民、旅行などの移動現象の歴史的文脈を理解することなしには、そのようなモデルの妥当性を確かめる術もないだろう。

Bade 自身が論じた 18 世紀のドイツ語圏で経済的・政治的なバランス、特に農地や商業圏、労働需要の変動によって表面化した季節性の移民現象においても[61]、移民者一人ひとりに個別の歴史的背景があるとはいえ、歴史的現象として特定の地域の間を季節性の労働移民として移動した人々がいたという事実が認識される時、そこには社会的カテゴリーのようなタイプ的認識に相関した行為パターンが見出される。

従って個別の文脈は、移動者に適用され得る社会的カテゴリーと、彼らの実際のパターン化された移動の間に対応関係があると仮定された上で分類される。そして移動形態の諸側面に見られるパターンに対し、移動者の社会的カテゴリーがどのような影響を及ぼしたかが解釈される必要がある。それと同時に、具体的な歴史現象としての移動や移動者が、独自の社会的・文化的背景からどのように生起したかが、史料に依拠して理解される必要があるし、このアプローチは今日の移民研究においても、歴史上・地理上の複雑な条件の下に生起する移民現象を説明する上で主要な要素となっている。移民という社会的カテゴリーは時に過度に包括的であり、出発国や到着国の関係、宗派や政治立場、職業、あるいはマクロな経済変動や食糧危機といった説明項が、個別の移民現象を

---

[60] King, Russell (2012): Geography and Migration Studies: Retrospect and Prospect. In: *Population, Space and Place* (2012) 18, S. 134-153. DOI: 10.1002/psp.685

[61] Bade, Klaus J. (2002): Wanderungstraditionen und Wanderungssysteme am Ende der Frühen Neuzeit. In: *Historical Social Research* (Supplement) 30, S. 235-265.

際立たせる。Heinz Schilling は、初期近代のヨーロッパにおいてカトリックの国々からプロテスタントの都市、もしくは複数の宗派が共存する都市への移民についての研究の導入で以下のように指摘している。

> Die europäischen Gesellschaften könnten daher durchaus auf jahrhundertealte Erfahrungen zurückgreifen, wenn es darum geht, die Zuwanderungs- und Integrationsprobleme der Gegenwart sachgerecht zu handhaben. Das gilt trotz der unbestreitbaren Tatsache, daß es sich heute überwiegend um interkontinentale Wanderungsströme handelt und auch die quantitative Dimension und die Formen der Migration ganz anders sind als in Alteuropa. Technokratische Instrumentarien für eine möglichst reibungslose Steuerung der Zuwanderungsströme lassen sich durch eine solche historische Analyse allerdings kaum gewinnen, wohl aber ein Gespür für die Bedeutung von Migration und Integration Fremder für die historisch-politische Kultur Europas und damit auch eine Prävention gegen Ängste, die unbegründet sind.[62]
> ヨーロッパの諸社会はそれゆえ、現代の移民と統合の問題を適切に取り扱わなければならないような場合には、何百年も昔から続く経験に遡ることも大いにありうることだろう。このことは、今日圧倒的に大陸間の移動の流れが主要となり、移民の量的な次元も諸形式も中近世のヨーロッパとは全く別であるという、議論の余地のない事実を前にしても妥当である。そうとはいえ、移民の流入を何らか可能な限り支障なく制御するための専門官僚的な制御装置が、そのような歴史分析によって得られることはまずないが、ただやはり、外国人の移民と統合の持つ、ヨーロッパの歴史・政治文化にとっての重要性に関する直感と同時に、根拠のない不安に対する一種の予防は得られる。

Schilling はここで移民現象に関して歴史を貫く同じ問題にヨーロッパは直面し続けたと述べるが、ただし移民は量的次元においても形態においても変化しているのだがと、留保している。ヨーロッパの移民には、それを誘発する原因や時代に即して一定のパターンがあるのは事実で、歴史家はそれを明らかにする。ただ、そのパターンは未来の予測や移民現象をそれによって制御する道具を与えるわけではない。単に絶えずヨーロッパに現れていた移民現象への理解を深める助けにはなる、というわけである。これが歴史学的な知識がなしうることであり、その制限は、歴史叙述はこれまでも指摘されてきた通り、史料の選定や批判、その解釈に際し選択的な抜粋に依存するためでもある。

だからこそ、パターンは文化史的・社会史的に多様に現れる移民に説明を与える一方で、移民が歴史学の対象である所以は、それが一般的な説明のフレームに一致するから

---

[62] Schilling, Heinz (2002): Die frühneuzeitliche Konfessionsmigration. In: Klaus J. Bade (Hg.) *Migration in der europäischen Geschichte seit dem späten Mittelalter*. Osnabrück 2002, S. 67-89, hier S. 67.

ではなく、むしろそのフレームで把握しきれない個別具体的な内容や背景が存在するからである。すでに第一章で見たように、諸々の社会的カテゴリーによって、宗教や経済、政治の情勢に即した細かい分類が可能であるとするならば、移民前や移民後に移民自身が遭遇することになる出来事にその社会的カテゴリーがどのような影響を与えたのかについても、十分理解される必要がある。つまり、個別の移民現象に参加した移動者たちの社会的カテゴリーは、その移民現象にどのような影響を及ぼしたのかという問題設定があり得る。この問題は、実の所この論文が対象とする旅行者に関しても、同様に立てることができる。

移民が公式な手続きを経るか、あるいは非公式な越境によってなされるか、とか、特定の集団に適用される制度的カテゴリーがある地域から追いやられることもあるし、特定の職業の人々がその使命を果たすために別の地域に赴くこともある。ただ、移民現象においては特定の社会的カテゴリーが伝統的に固定化してきた行為パターンに沿って、効率的であれ非合理的であれ生起することがある。その結果、すぐ後に参照する Bade の議論にあるように、移民はその移動のプロセスや定住、あるいは往還のプロセスで少なからぬ問題を抱えることになる。

第二節　移民と旅行者

移民は移動現象であるとはいえ、ある時点で移民が始まり、ある時点で移民が終わるわけではない。移民は物理的な移動現象に完結した営みではない。初期近代において、旅行もまた同様であり、ある時点で旅行が始まり、ある時点で旅行が終わるわけでない。確かに旅行現象は、出発地から目的地への移動、そして帰還という過程、もしくは旅行地における経験にのみ限定されることが可能ではある。しかし旅行者もまた、旅行者としての規範を身につける長い準備期間が存在し、旅行地から去って帰還したのちも、旅行記を著すことで旅行の費用を負担したパトロンたちに報いたり、卓越した旅行者として自己提示をしたり、後続する旅行者に規範を示したりすることに齷齪する必要があった。このプロセスは旅行文化の成立に不可欠なプロセスであり、移民と旅行が多くの点で類似ていたとしても、その類似性の内から差異化の芽が出てきたのである。

移民はヒトがどのような生産形態であれ土地に根付いた生活世界を構築するようになって初めて成立する概念である。この点もやはり旅行と同様である。定住や入植が一般的な活動となり、領土の境界が形成された後の世界における新たな移動形態として移民も旅行も捉える必要があり、その限りでそれらは文化的現象である。とはいえ移民は旅行と異なり、移動先で再定住するにせよ季節性の移動を繰り返すにせよ、あるいはいずれは帰国することを決めていようとも、旅行に比べずっと長い一連の移動現象であり、さまざまな人生の局面に応じた諸段階を含む現象である。この点について Bade は以下のように主張している。

Als sozial- und kulturhistorisches Phänomen und Problem verstanden, ist Migration ein ganzheitlicher Entwicklungs- und Erfahrungszusammenhang. Er läßt sich z. B. nicht etwa im Sinne von Wanderungsstatistik oder Reisegeschichte auf die punktuellen Ereignisse von Abwanderung (Abmeldung/ Abreise) bzw. Zuwanderung (Ankunft/ Anmeldung) und auf die dazwischen liegende räumliche Bewegung bzw. Reisezeit reduzieren. Auch ›Einwanderung‹ wird in sozial- und kulturhistorischer Perspektive, im Gegensatz z. B. zu rechtshistorischen Beschreibungen, nicht als ein punktuelles Ereignis bzw. als Rechtsakt, nämlich als Erwerb der Staatsangehörigkeit einschließlich des Absolvierens der dazu nötigen Vorleistungen im Einwanderungsland, verstanden, sondern als ein mittel- oder langfristiger sozial- und kulturhistorischer Prozeß.[63]

社会史的、文化史的現象として、またそのような問題として理解される限りで、移民とは進展や経験の一つの総体的な連関である。そのような連関は、例えば移動統計や旅行史の分野で用いられる意味で、転出や到達という点的現象やその間に存在する空間的な移動や旅行時間に還元されうるものではない。さらに「来住」は社会史や文化史の視点から見ると、例えば法制史の叙述とは対照的に、一つの点的現象として、あるいは法的行為として、すなわち来住国においてそれに不可欠な養成プログラムの修了を含む市民権の取得行為として理解されるのではなく、中長期的な社会史的、文化史的な一つのプロセスとして理解される。

Bade はこうして移民という現象の複雑性が、法的行為としての一時点に完結した出来事というよりも、その前後にある文化的、社会的な文脈に由来すると指摘している。彼によれば移民にはいくつかの段階〔Phase〕がある。移民先で教育を受けたり、職業についたり、馴染んだりする必要がある。また結婚や別離などの出来事もあるだろう。制度的カテゴリーはどんな時にも関与してくる。それは慣れない土地ではいっそう庇護や刑罰が深刻な問題であるからだ。言語や文化、慣習が異なる世界に飛び込むが、その時移民はそこで明文化されていない文化的・社会的な決まり事をも習得しなければならない[64]。それゆえに移民は第一に制度的カテゴリーのもとで出発と到着時に特定の規範に従うことを求められる。就労教育プログラムなどもそうである。多くの社会的局面では慣習的カテゴリーに即して差別的な扱いを受けるかもしれない。加えて住居周辺の環境では、小規模の葛藤なども想定できるが、それゆえに共同的カテゴリーが新たに形成される過程が生じるかもしれない。

古代から遠隔地に赴くことで利益をあげていた商人やギルドや市場を渡りあるいた職工たち、巡礼や 15 世紀以降世界各地に散らばる宣教師たちは、初期近代のきざはし

---

[63] Bade, Klaus J. (2002): Historische Migrationsforschung. In: derselbe (Hg.) *Migration in der europäischen Geschichte seit dem späten Mittelalter*. Osnabrück 2002. S.21-44, hier S. 25.

[64] Ebenda, S. 25-26.

にあって同様の現象に直面していたかもしれない。少なくとも第二部で検討する旅行記にもこのような現象は見出すことができる。しかし初期近代において、移民と旅行者では、規範的言説によって構成される社会的カテゴリーによって、模倣すべき行為パターンがはっきり区別されるようになる。

加えて初期近代のツーリズムでは、旅行先の土地で様々な事物を見聞きすることが一つの楽しみになるとはいえ、彼らが従うべきは旅行者としての規範であり、旅行先の土地に住む人々の間にある慣習に従う必要は基本的にはない。それが危険をもたらしたり、特別な利益をもたらしたりするわけでもなければ、彼らは卓越した旅行者として社交の場面や旅行記で自己提示することを念頭において、出発前に徹底的に身につけた規範に従うまでである。第二部第二章で見るように、1700 年前後のヨーロッパ各地を回る旅行、グランドツアーは貴族や富裕な市民の令嬢の修養プログラムとして規範化されていたが、そこで学習が目指されているのはヨーロッパ各地に点在している貴族社会の均質だがその分洗練が求められる文化に溶け込むためのマナーや、鑑識眼を示す豊富な古典の知識である。

旅行先の土地の言語、文化や慣習、制度を無視してしまうことは現代のレジャー旅行においても同様である。旅行研究〔tourism studies〕ではそういった旅行者の振る舞いがホストとの間でどのような問題を引き起こしているか散々論じられてきた[65]。グランドツアーの旅行者もやはりその土地に根付く文化を多く無視しただろうが、言葉も通じない場合も多く、旅行先の庶民的な文化と交わらないようにしていた。彼らにとってホストはその土地の貴族や富裕市民であり、そこで受容されるための独自の文化や慣習を共有していた。

初期近代に現れる旅行者は、旅行のプロセスに多様な楽しみが存在することを期待する。交易のための旅行と異なるのもその点である。交易旅行は旅の前後のプロセスも、その過程も、報酬を左右する。教育や娯楽、休養を目的とした旅行において、旅行のプロセスが前後の文脈に左右されることはさほどない。確かに旅行を構想し、計画し、出発し、書簡を書き、土産や報告を手に帰還し、社交や出版に勤しむという要素は、旅行文化全般を見るときには欠かせない。しかし第二部でも見るように、旅行案内などの書物を参照に旅行計画をし、また旅行の経験を語る時には、旅行の経験の多様さは減少させられるとさえ考えられる。

第三節　移動手段

移動手段の歴史的な変化は、ヒトの移動が文化的なものであることを示す一つの要素である。ヒトの移動能力は、その身体的特徴に還元できるものではなく、家畜や車輪、舟など、様々な技術や道具の開発を考慮に入れる必要もある。特に、この論文が主題と

---

[65] Vgl. MacCannell, Dean (1999): *The Tourist*. University of California Press 1999.; Tajim Jamal/ Mike Robinson (ed.) *The SAGE Handbook of Tourism Studie*s. London 2009, Part III.

する初期近代のヨーロッパでは移動手段が大きく変化した。水上交通の手段についていえば、磁石や河川を含む地図、また開拓された航路を示す海図の共有や出版は移動をより確実なものにし、蒸気機関の発明が生み出した汽船は移動を高速化した。もちろん海運が危険に満ちたものであったことには変わりない。また、蒸気機関が陸運を変えるは19 世紀も半ばまで待つ必要がある。

それでも第二部第一章で確認するように、17 世紀までに郵便馬車の制度がヨーロッパ各地に広がり距離は伸びて本数も増えた。さらに 17 世紀後半から 18 世紀にかけてヨーロッパの街道や運送関連の業者は格段に改善された。Roman Studer は以下のように指摘する。

> This extension of the main roads network greatly increased the overall transport capacities, as well as geographical coverage, reliability, and regularity. Now, these networks increasingly served the whole spectrum of trade and offered novel opportunities for trade over longer distances. Accordingly the eighteenth century also witnessed a gradual shift toward the professionalization of the transport sector, in which firms offering year-round and regular transport of goods and people were replacing the rural part-time carriers that offered their services seasonally, in times of low workload. [66]
>
> 主要な街道ネットワークの拡張は、地理上の到達範囲、信頼性、定常性と同様に輸送能力全体をも著しく増大させた。今や、これらのネットワークは、あらゆる分野の交易にとって役立ったし、遠隔地との交易の新たな機会を提供した。したがって、18 世紀という時代も、輸送部門の専門職化への漸進的な移行を示しており、その過程で、通年かつ定期的な商品や人の輸送を提供する企業が、農作業の負担が少ない季節に限ってサービスを提供する町外れのパートタイムの人足にとって変わった。

Studer の研究が焦点を当てるのは、物資の流通に関してである。とはいえ物資の流通は、街道や街道沿いの環境を改善させるインセンティブとなる。商人も旅行者も利用する郵便馬車や、その他の人足サービスや宿などが変化する。第二部第一章で主張するように、旅行者というカテゴリーは馬車旅行がより容易になってこそ成立した。こうした物理的・地理的なインフラストラクチャーは、移動者の身体的・心理的な負担を減らしたに違いない。

移民においても、その頻度という点では移動時間や手段の改善は大きな意味を持つだろう。そのような手段の改善は、初期近代のヨーロッパに見られた公式的なものに限定されることはない。移民であれ旅行であれ、その移動を可能にする情報網は極めて重要である。特に同じ経路を辿ることは、目的が明確な移動に関しては重要になってくる。

---

[66] Studer, Roman (2015): *The Great Divergence Reconsidered. Europe, India, and the Rise to Global Economic Power*. Cambridge; Cambridge University Press 2017, S. 48.

より確実に目的を遂行するために、その移動は制度や慣習によって築かれたルートや手段を繰り返すことになる。Bade は 17 世紀半ば以降拡大し続けた農村からの季節性の余剰労働力がドイツ西部や北海沿岸から、産業革命および北海交易をリードしていたオランダへ向かったという現象を分析し、職業移民が単なる家族的な紐帯以上のもので形成されたルートを利用していることを明らかにし、以下のように指摘している。

> Bei Arbeitswanderung und Wanderhandel über mittlere und weite Distanz konnten sich Migrationskreisläufe zu strukturstabilen und langlebigen ‚Wanderungssystemen' mit fest eingeschliffenen und oft intergenerativ fortlebenden Wanderungstraditionen verdichten. Von entscheidender Bedeutung waren dabei Migrationsnetzwerke in Ausgangsräumen, Zielgebieten und zwischen beiden Räumen. In diesen Netzwerken war der Raum weniger eine geographische als kommunikative, d. h. soziale Dimension, die den Wanderungen Richtung und ihren Traditionen Dauer gab. [67]
> 中長距離に及ぶ労働移動や移動商売に際しては、移動が循環的に繰り返されることで、しっかりと慣習化し、融和的な形で存続していく移動の伝統を持った、構造安定的で長く持続する「移動システム」を構築することができたのである。決定的な意味を持つのは、その際、出発圏域の、目標圏域の、そして双方の空間の間に存在する移民ネットワークであった。このネットワークにおいて、圏域は地理学的次元というよりコミュニケーション的次元であり、すなわち移動を方向づけ、伝統を持続させる社会的な次元である。

Bade のこの説明は交易にせよ、移民にせよ、旅行にせよ、共通する移動現象が共通して持っている重要な側面を的確に表現している。交易であれ、移民であれ、旅行であれ中長距離移動を実現するためには、中継地点を含めた多くの情報を手に入れる必要があり、一度そのような情報ネットワークが形成されると、その情報に従った移動手段や移動経路は繰り返し利用され、増強されることになるだろう。これは初期近代の旅行においても同様であった。Stefanie Ohnesorg は以下のように指摘する。

> Während es im 16. und 17. Jahrhundert noch notwendig und allgemein üblich war, anhand privater Routenaufzeichnungen zu reisen, und das vorhandene Kartenmaterial sehr ungenau war, begann man in Deutschland zu Beginn des 18. Jahrhunderts damit, exaktere Karten herzustellen – die allerdings immer noch nicht auf Vermessungen basierten –, um das Reisen zu erleichtern. Auch der allmähliche Ausbau des Postkutschendienstes zur allgemeinen Personenbeförderung, dessen noch relativ bescheidene Anfänge in der ersten Hälfte des 17.

---

[67] Bade, Klaus J. (2002): Wanderungstraditionen und Wanderungssysteme am Ende der Frühen Neuzeit. In: *Historical Social Research* (Supplement) 30, S. 235-265, hier S. 241.

Jahrhunderts anzusiedeln sind, auf ein System, das innerhalb des deutschen Reiches um die Mitte des 18. Jahrhunderts alle größeren Orte einschloß und regelmäßig bediente, muß als große Erleichterung des Reisens angesehen werden. [68]

16、17 世紀には私秘的なルートマップを手に旅することは、依然当たり前で広く一般的であったし、入手できる地図資料が非常に不正確であったのだが、他方で 18 世紀初頭にドイツでは、旅行を容易にするために正確な地図が生産され始めた。とはいえ、まだまだそれは測量に基づくものではなかった。さらに 17 世紀前半に比較的目立つことなく定着し、徐々に整備されていった一般的な人員輸送のための郵便馬車事業は、ドイツ帝国の内部で 18 世紀半ばごろには大規模な領域をどこもカバーし、定期的なサービスを提供したこのシステムに基づき、旅行は大いに容易になったと当然考えられる。

Ohnesorg が指摘するように、この時代には不正確な情報が多かった。従ってそれに頼り切ることはできなかっただろう。しかし旅行者同士、あるいは旅行の中継地や目的地でのコミュニティでの会話や、先に旅行に出たものたちの証言からより多くの新しく正確な情報を手に入れることもできただろう。いずれにせよ情報網の構築は、移民であれ旅行であれ、あるいは交易であれ不可欠である。従って、その情報の真偽、つまりネットワークの質が問題にもなる。Bade の研究はそこに注目したものであり、またこの後の旅行者や旅行記の研究もそこに注目することとなる。

第四節　旅行者の規定の困難さ

旅行者という概念をこれまで大雑把に用いてきたが、ここで一旦簡単な規定を振り返っておきたい。現代の、特にドイツの旅行文化に焦点を当てた旅行研究の教科書を著した Albrecht Steinecke は、旅行者の有り様はあまりに多様で一意的に理解することは困難であると断りながらも[69]、以下のような規定を提案している。

Touristen sind Ortsfremde: Der Tourismus ist jeweils mit einem Wechsel vom Wohnort zum Zielort verbunden (und mit der Rückkehr zum Wohnort); dabei wird üblicherweise das Überschreiten der Gemeindegrenze als Ortswechsel verstanden.

旅行者は土地の余所者である。ツーリズム旅行はその都度住居地から目的地への転換に結びつけられている（そして住居地への帰還に結び付けられている）。その際、自治体の境界を越えることが場所の転換として想定されているのが通例である。

---

[68] Ohnesorg, Stefanie (1996): *Mit Kompaß, Kutsche und Kamel*. Köln; Röhring Universitätsverlag 1996, S. 92.

[69] Steinecke, Albrecht (2011): *Tourismus*. Braunschweig; westermann 2011, S. 12.

Touristen sind temporäre Bewohner: Der Aufenthalt am Zielort ist zeitlich begrenzt; nach einer vorübergehenden Anwesenheit im Zielort kehrt der Reisende in seinen Wohnort zurück. Als zeitliche Obergrenze des Aufenthaltes gelten üblicherweise zwölf Monate; die Mindestdauer ist hingegen umstritten (auch Ausflüge ohne Übernachtung werden häufig als Tagestourismus bezeichnet).
旅行者は一時的な生活者である。つまり目的地での滞在は時間的に制限されている。目的地に仮初に身を置いた後、旅行者は自らの住居地へ帰っていく。滞在の時間的上限としてありうるのは十二ヶ月が通例である。それに対し最小時間は議論の余地がある（宿泊なしでハイキングをする場合もしばしば日帰り旅行とされる）。

Touristen sind Konsumenten: Mit dem Aufenthalt am Zielort ist keine dauerhafte berufliche Tätigkeit in einer Arbeitsstätte verbunden (auch Geschäftsreisende, die sich zu Verkaufs- oder Kontaktgesprächen am Zielort aufhalten, treten dort vorrangig als Konsumenten auf).[70]
旅行者は消費者である。目的地での滞在に、なんらか労働現場での継続的な仕事の業務活動が伴うことはない（目的地における商談や連絡業務のために滞在する商用旅行者もまた、目的地では概ね消費者の活動が中心となる）。

Steinecke がここで提示しているのは、旅行者の経済学的な行動に照らした理解である。旅行者はこの限りで生産的な経済活動に従事するあらゆる移動と区分される。従って、その動機も消費活動の特殊な形態に過ぎないとも言える。Steinecke は再度動機に照らして、旅行という行為の分類を試みる。つまり「人類学的定常としての旅行〔Reisen als anthropologische Konstante〕」「顕示的消費としての旅行〔Reisen als demonstrative Konsum〕」「祝祭としての旅行〔Reisen als Fest〕」「巡礼としての旅行〔Reisen als Pilgerfahrt〕」「遊びとしての旅行〔Reisen als Spiel〕」「フロー体験としての旅行〔Reisen als Flow-Erlebnis〕」[71]。Steinecke はこの分類をあくまで理論的なものとして、アンケート調査を用いた実証的研究では現代の旅行者の 63.6%が旅行中に娯楽を求めていると指摘した。この調査が示すのは、すでに彼が旅行者をあらゆる生産者と区別するように行なった規定を支持しているように思われる。

結局現代の旅行は余暇であり、仕事から解放された時間をどう使うか、消費の技術が問題となる。古典的な研究で Alain Corbin は、レジャーの産業の歴史は 19 世紀半ばに始まると述べている。そこで Veblen の顕示的消費[72]の概念を批判しつつ彼が指摘するの

---

[70] Ebenda, S. 12.

[71] Ebenda, S. 47-48.

[72] Veblen, Thornstein B. (1899): *The Theory of the Leisure Class*. Oxford University Press. また Veblen への批判として以下も参照。Berry, Christopher J. (1994): *The Idea of Luxury. A Conceptual and Historical Investigation.* Cambridge; Cambridge University Press 1994.

は、レジャーとは自分の時間を取り戻す要求の現れであるということである[73]。その要求はコルバンの見解では明らかに、時間の有効活動、つまり時間を何か別の目的を遂行するための変数として設定しようとするあらゆる社会的要請から解放された個人のイメージと結びついている。何者でもなくなって初めて自分との関係を取り戻すというわけである。

現代のレジャー型旅行者にとってパスポートを有していることは、制度上の身分保証を携帯していること以上の意味は基本的にはない。観光ビザで特定の国を訪れるという行為は、自らが出入国者の管理において観光客という制度的カテゴリーに割り振られていること、それゆえ種々の行動制限が付与されていることを理解すべきとはいえ、レジャー旅行に赴く消費者としてそのようなことはさして重要ではない。

他者の慣習も瞬間的なわざとらしさの表出でしかない。自分を規定しうるのは、辛うじて消費活動を遂行するのに必要なだけの人間関係であり、ゲストとホストという関係だけである。それは小売店やレストランでの仮初の共同的カテゴリーに過ぎない。高級レストランで優れたサービスを受けようと思ったら自身をエレガントに見せるだろうし、地元の飾らない居酒屋で過ごしたいと思ったらカジュアルな格好をする。挙句どこに行くにも砕けた英語で十分だとさえ思っているかもしれない。

この様なレジャー型の旅行を、今度は 18 世紀の旅行者たちに照らしてみよう。ヨハン・ハインリヒ・ツェードラー（Johann Heinrich Zedler, 1706-1751）は 18 世紀半ばにドイツ語圏で標準的といえる百科事典を編纂した。その事典の「旅行〔Reisen〕」の項目には、「旅行とは異郷の国々を見て回ること〔Daß man fremde Länder besiehet〕」であり「世界についてよく知ること〔die Welt kennen lerne〕」を目的としているが、職業身分によって特殊な目的があると説明され、それに照らした旅行の分類がなされている。列挙すると、「神学者〔Theologus〕」、「法学者〔Rechts-Gelehrter〕」、「医療者〔Medicus〕」、「哲学者と文献学者〔Philosophus und Philologus〕」、「軍人〔Kriegs-Mann〕」、「商人〔Kauffmann〕」である。[74]

このように比較するとはっきりするのは、初期近代の旅行は慣習的カテゴリーに応じて、その行為が変化したということである。そして、その中でも共通する明確な目的としての、諸国での経験を積むことがある。あるいは「旅人〔Reisender〕」の項目を見ると、この時代の移動に関する免状という制度的カテゴリーの補償がいかに重要かを思い知る。

> Arme reisende oder wandernde Personen, welche ihrer Armuth halber oft in denen gemeinen Wirths-Häusern nicht unterkommen können oder geduldet werden wollen, sollen, wenn sie

---

[73] コルバン、アラン『レジャーの誕生』渡辺響子訳、藤原書店、2000 年（原書：L'Avèment des Loisirs (1850-1960). Paris – Rome 1995）、17 頁以下。

[74] Zedler, Johann Heinrich (1731-54): *Universal-Lexikon*, Bd. S31. Halle und Leipzig 1731-54, S. 366-367.

anders eines guten frommen Wandels und das redliche Zeugniß vorweisen (worunter aber keine müßige starcke Land-Bettler zu verstehen sind) eingenommen und beherberget werden. [...][75]

金のない旅行者、あるいは徒歩旅行者は、金がないためにしばしば安宿にも宿泊できないか、あるいはなんとか泊めてほしいと懇願するしかないのだが、彼らが善良で敬虔な素行を持ち、有効な免状を提示すれば（しかし怠惰で厚かましい田舎乞食はそれに含まれない）受け入れられ、保護されることになっている。［…］

この記事から窺い知ることができるのは、貧しさゆえに怪しく見られたとしても、慣習や制度が旅行者を守ることがあるということである。この時制度的カテゴリーを示す有効な免状の他に、道徳的規範に従う人物であることを示す必要がある。社会的カテゴリーがここで機能している。

逆に裕福に見えたところで免状が出なければ旅行はまずできなかった。第二部でも触れるが、旅行者に対する辛辣な見方と重商主義の思想によってブラウンシュヴァイク選帝侯領を中心に旅行禁止令が提案され、また施行されたことが 17 世紀後半以降たびたびあった[76]。もちろんその間にも官吏養成のための旅行は行われていた。しかしそのような特例的な旅行者を除いて、多くの点で移動が制限されたことが初期近代にはしばしばあった。さらにツェードラーも述べる通り、職業身分による特殊性、それと同時に旅行一般に通ずるチップスや有益な情報の学習は、旅行者として選択的に学習すべき知識として規範化されることになる。

以上で明らかになったのは、Steinecke が提示した単なる消費者としての旅行者は 19 世紀半ば以降のレジャー型旅行者であり、彼らは娯楽や消費で余暇の時間を全て埋めようとしており、そのために様々なレクリエーションや食事、移動方法に工夫を凝らす。したがってそれを理論的な区分で捉えようとしても掴みどころがないのである。他方初期近代の旅行者は旅行者として要求される振る舞い方が、もちろん必ずしも守られるとは思えないが、一定程度存在している。この差が 1700 年前後から 19 世紀初頭までの旅行者を、それ以前の旅行ともその後の旅行とも区別する。この慣習的カテゴリーとしての旅行者の起源を、第二部では、貴族的な修養旅行の作法に求めることになる。

第五節　小括

移動現象は人類学的に定常的な現象であり、それ自体歴史的に分析することは難しく思われた。しかし第二章では、移民や、それに対する旅行者や交易者と比較する中で、

---

[75] Ebenda, S. 385.

[76] Conrads, Norbert (1982): Politische und staatsrechtliche Probleme der Kavalierstour. In: Antoni Mązak und Hans Jürgen Teuteberg (Hg.) *Reiseberichte als Quellen europäischer Kulturgeschichte. Aufgaben und Möglichkeiten der historischen Reiseforschung*. Wolfenbüttel 1982, S.45-64, hier 51f.

幾らかの差異が理解され、その結果社会的カテゴリーとしてそれらを理解することで、移動現象には歴史的・文化的な個別の文脈を考慮に入れて理解する必要があることを、移動現象の人間学的規定に対置する形で提示した。

初期近代においてそれほど差異がないように思われた移民と旅行者は、1700 年頃までに旅行者に関する規範的言説が構成され、さらに旅行者同士の間で旅行記を通じた模倣関係が形成されることで、次第に差異化していく。移民にせよ旅行者にせよ、初期近代においては、移動現象の始まりと終わりに限定されない複雑なプロセスに向き合う必要があった。

旅行者は移動の前後に控えるものは、旅以前と旅以後である。確かに第二部で見るように旅行者の規範を身につけるには幼少期からの長い教育が不可欠である。その意味で現代の旅行者のありようを初期近代に引き伸ばすことには注意が必要である。この章の第四節でも強調したが現代的なレジャー型の旅行は、おそらくそれ以前の旅行とは違う（ただし留保しておきたいのは、その間に何ら系譜的関係がないのかという問題である）。ただし、私たちは次第に 1800 年前後では旅行の準備がより短いスパンでなされ、時に衝動的な旅立ちがありうることを見ることになる。いずれにせよ、旅行者が規範を身につける過程は、旅行の多彩さに直接貢献するわけではない。むしろ旅行中の振る舞いを統制するものである。

また旅行者の慣習的カテゴリーは、一定の身分の作法を身につけていることを意味する。それゆえ、第二部で詳細に検討するが、旅行者は、そのような存在として自己提示するのであり、また旅行を通じて各地で社交に励み、そして各地から書簡や日記を熱心に送り、最後には旅行記にまとめる。言うなれば「自己への配慮」の一形態でもある。そのような旅行者が可能となるのは、プロセスの多様化と均質化が同時に可能となる初期近代以後のヨーロッパ、少なくともドイツ語圏が置かれていたメディア状況と、発展しつつあった知識消費社会と関係がある。

第三章　知識の歴史

第一章・第二章の議論を通じ、制度や移動が、人類学的に見て普遍的であり、またヒトの生物学的なレベルから文化的・社会的なレベルに至るまで、その生存形式を規定する主要な要素であることがわかった。ここでさらに検討する知識は、制度や移動に不可欠な認識的道具でもあり、また制度や移動なしに使用することも収集することもできない認識的所産でもある。ヒトは知識を生産し、管理し、消費する。この過程でヒトは物質的メディアを運び、また知識の源泉となる客体の許へ赴き、また売買を通じてコレクションを形成する。

Bruno Latour はかつて初期近代においては、科学の対象となる同一の事物に対して科学者が取り囲む非対称的な関係を構築するのではなく、一人の認識主体が学問の対象となる事物を多数集積するという非対称的な関係を構築していたのだと論じた[77]。彼の見解は歴史分析と必ずしも一致するわけではないだろうが、初期近代の学問的営みが、学問的対象となる事物に対してこのような関係を構築していたと考えることは、あながち間違いではない。

少なくともそのような学問探究が可能になる過程に、多くのエージェントが関与し、その間に利害関係が存在した。この 30 年ほどの科学史研究は、科学者の協力者たちや物資、もしくはインフォーマントなどに注目し、それらが共に科学的知識を生み出すプロセスに注目している[78]。同一の傾向は、思想史に区分される種々の分野にも見られる。

遡れば 17 世紀のピエール・ベール（Pierre Bayle, 1647-1706）の『歴史批評事典』*Dictionnaire historique et critique* (1696)や 18 世紀中葉、ヨハン・ヤーコプ・ブルッカー（Johann Jakob Brucker, 1696-1770）の『哲学の批判的歴史叙述』*Historia critica philosophiae* (1742-68)、ヴィルヘルム・ゴットリープ・テンネマン（Wilhelm Gottlieb Tennemann, 1761-1819）に代表される哲学史の試みはすでに解釈学的思想史の源泉をなしていた[79]。精神史〔Geistesgeschichte〕とか Arthur O. Lovejoy が創設した「観念史〔history of ideas〕」、あるいは政治史との関係から Quentin Skinner の「文脈主義〔contextualism〕」、

---

[77] 以下を参考。ラトゥール、ブリュノ『科学が作られているとき――人類学的考察』川崎勝／高田紀代志訳、産業図書、1999 年（原書：*Science in Action: How to Follow Scientists and Engineers Through Society*. USA; Harvard University Press 1987.）

[78] 優れた例として N. Jardine, J. A. Secord and E. C. Spary (ed.) *Cultures of Natural History*. Cambridge; Cambridge University Press 1996.; Raj, Kapil (2006): *Relocating Modern Science. Circulation and the Construction of Knowledge in South Asia and Europe, 1650-1900*. Ranikhet; Palgrave 2007.; Cook, Harold J. (2007): *Matters of Exchange. Commerce, Medicine, and Science in the Dutch Golden Age*. London; Yale University Press 2007.

[79] Vgl. Schneider, Ulrich Johannes (1990): *Die Vergangenheit des Geistes. Eine Archäologie der Philosophiegeschichte*. Frankfurt am Main; Suhrkamp 1990.

それと同調する Reinhart Koselleck の「概念史〔Begriffsgeschichte〕」などが思想史を絶えず再構築してきた[80]。これらの遺産は主に正典的な思想書の系譜や論争の網の目の再構成を目的とし、作者に関してであれテクストに関してであれ、内在主義的な歴史叙述であった。

これに対し科学史や科学的知見を参照しつつ、歴史的に構築されてきた知識に関する認識論的・存在論な議論を、歴史的認識論は展開してきた[81]。さらに踏み込み、文化史や美術史、メディア史という物質文化への関心を強めて英米圏を中心に発展してきたインテレクチュアル・ヒストリー〔intellectual history〕[82]や、社会史・経済史が解明してきた社会構造や経済ネットワークの有り様に関心を強め、ドイツ語圏やオランダ、北欧諸国を中心に広がりを見せ始めた知識史〔Wissensgeschichte〕は、知識や思想の形成にどのような外在的要因があったかを丹念に論じている。これら内在主義的、外在主義的歴史叙述は批判的かつ相補的な関係を持っている。この相補的な関係を可能にするためには、知識の概念について内在主義と外在主義の議論における種々の前提を今一度整理する必要があるだろう。その結果、種々の解釈の導出要因のどれが、特定の歴史現象の解釈を均衡点にもたらすかは、テクストの相互参照性や解釈者の性質に応じて変化する。これを決定する最終的な審級はおそらく存在しない。

従ってこうした互いに重なり合い、批判的な関係を持つ一連の取り組みを知識の歴史とひとまず呼んで、それらを参照しながら、知識が歴史的対象となるとはどういうことかを簡単に検討したい。知識はやはり人類に普遍的な現象である。しかし知識の歴史が存在するならば、それはこれまで見てきたように知識に適用される社会的カテゴリーを理解する必要がある。知識の歴史の叙述には多かれ少なかれ相違する点を持つ方法論がいくつもあるが、近年この歴史叙述を担う人々の間である程度共通に認識されたと考えられる「知識は旅をする〔knowledge travels〕」[83]というテーゼに、ここでは注目したい。このテーゼの背景には「知識循環〔circulation of knowledge〕」という、制度、移動、知識という三項の関係を結ぶ概念である。

しかしそこでどのような移動が起こっているのか、知識であれ人であれ、商取引であれ、ある社会的単位から別の社会的単位に何かが移動する際には、取引が生じる。だがそれは契約など制度に影響され、また制度に依拠する必要がある。とはいえ、実行的な権原委譲は時にそうした制度の外で生じ、不確定性を高めることになる。このような知

---

[80] Vgl. Müller, Jan-Werner (2014): On Conceptual History. In: D. M. McMahon and S. Moyn (ed.) *Rethinking. Modern European Intellectual History*. Oxford; Oxford University Press 2014, S. 74-93.

[81] Vgl. Rheinberger, Hans-Jörg (2007): *Historische Epistemologie. Zur Einführung*. Hamburg; Junius 2007.

[82] この分野を長く主導してきた Anthony Grafton や Ann Blair の著作はどれも優れた例である。また他にも、Schmidt, Benjamin (2015): *Inventing Exoticism. Geography, Globalism, and Europe's Early Modern World*. Philadelphia; University of Pennsylvania Press 2015. などがある。

[83] Renn, Jürgen/ Hyman, Malcolm D. (2012): The Globalization of Knowledge in History: An Introduction. In: Jürgen Renn (ed.) *The Globalization of Knowledge*. Berlin 2012, S. 15-44, hier S. 21.

識の権原委譲が規範的なあり方に照らして正常とか異常と判断されることはあるだろうが、いずれにしても私たちは知識の移動がそこに生じることを理解する。全くの誤った知識を。偽りを重ねることで伝達することに成功することもあるし、全く正しい知識がどう検証しても説明しても伝達されないことがある。こうした知識の移動一般について、検証を通じて可能となった合理的判断に基づく取引形式の知識の移動と、実行的に知識が移動する占有形式がある。この二つの形式は所有権をめぐる議論のアナロジーであるが、移動するものが私有財産であれ知識であれ、同様の議論が意味を持つと考えられる。この章では知識の歴史記述において、二つの移動形式を理解すること、そしてそれが社会的カテゴリーとどう関係するのかを論じる。

第一節　知識は認知され、学習され、使用される

知識の歴史を記述する際にも、第一章で制度の歴史を分析する際に参照されたような進化生物学の知見が枠組みの一つを与えてくれると Jürgen Renn は考えている。彼は自身の最新の大部の研究で、その前半を知識の内在主義的な理解と外在主義的な理解を調停させる議論に宛てている。そのために援用される根拠の一つに、進化生物学や神経科学が提供する幾らかの知見がある。すなわち、ニッチ構築理論と文化進化、そして学習である。この論文でも第一章で制度の歴史を考える上でこれらの知見はすでに参照したが、Renn はこれを知識の歴史において不可欠な知見と見做した。例えば彼は以下のように述べている。

> In particular, human societies transform their environments by means of their material culture, which forms a “niche” and decisively shapes their historical evolution. Furthermore, human societies do not vary randomly but in ways that are governed by societal structures regulating the behavior of individual and collective actors. […] The niche that humans have constructed in the course of history do not just affect what biologists call fitness landscapes […] but provide crucial regulatory effects. […] The constructed niche may thus function as an extended regulatory system. […] Human practices change the environment in ways that are characteristic of an ensemble of actors, such as a society and its regulatory structures, including its social organization and knowledge. The resulting transformation is shaped by both the regulatory structures and the nature of the material objects and means involved. The transformation also affects both the actors and their material environment. [84]
>
> とりわけ人間社会はそれを取り巻く環境を、その物質文化によって変形する。物質文化はいわば「ニッチ」を形成し、人間社会の歴史的な発展を形作る上で決定的である。さらに、人間社会が多様化するのはランダムにではなく、個々のアクターや

[84] Renn, Jürgen (2020): *The Evolution of Knowledge. Rethinking Science for the Anthropocene.* Princeton & Oxford; Princeton University Press, S. 328.

集団的なアクターの振る舞いを統制する社会的な構造によって統御された方法による。[…] ヒトが歴史の辿ってきた道のりで構築してきたニッチはただ生物学者が適応度地形と呼ぶものに影響を及ぼすだけでなく、決定的な調整作用を提供する。[…] 構築されたニッチはそうして拡張された調整システムとして機能する。ヒトの様々な実践は環境を変化させるが、それは例えば社会や、社会組織や知識を含める統制的構造のようなアクターの集合体に特徴的な方法によってなされる。結果として現れる変形は、統制的構造と物質として存在する物体や関連する手段の自然的性質によって形作られる。この変形もまた、アクターやそれらを取り巻く物質環境の双方に影響を及ぼす。

このような見解には、すでに明らかではあるが、基本的に賛同できる。とはいえこうした生物学が与えてくれる歴史理解のモデルには、すでに述べてきたように、具体的に歴史を充実させている出来事や物体が必要である。これらのモデルが提供してくれるのは、種々の概念の発生論的モデルに基づく理解の可能性であり、より明確にいえば制度や知識が接地されるべき人間の生態的・心的状態についての外在主義的説明である。Renn 自身も、史料の緻密な読解作業が結局は基本的かつ不可欠あることを強調している。史料が語る知識生産の過程は、知識形成の過程について語られた事柄か、あるいは形成された知識の内容であって、そのような記述以外の多くの情報から歴史家が再構成する必要があるが、その一つに生物学に依拠する発生論的モデルがある。

日常知識とか科学的知識、専門知識とか、あるいは趣味〔taste/ Geschmack〕のような感覚に根ざした合理化を要しない知識など、様々に区分され得るカテゴリーの歴史的生成の過程を検討する必要があるということである。こうしたカテゴリー自体の検討は知識史では主要な課題である。

しかしながら、ヒトがその生命と社会を維持することを可能にするため、知識とは常に「十分に信頼可能な情報源〔sufficiently reliable informants〕」として機能することが期待されてきた[85]。ただし、ヒトの進化生物学的な形質、認知科学的な傾向は、ヒトがそのような意味での知識を必要とするが故に、逆説的ではあるが、知識とは「十分に信頼可能な情報源」であるべきだという制約を除去するようにヒトを動機付けてきたかもしれない。このような見解は Renn も外部環境の表象や学習に関連して改めて主張している[86]。

知識は信念の特定のあり様というより、特定の行為を可能にする信念形成を可能にするある種の情報の形態と考えられる。つまり知識とはここでは過去時点の外部環境の表

---

[85] Michael Hannon が人類学的なアプローチを考慮に入れつつ、現代認識論の議論から抽出したこのような知識概念の理解は暫定的であるが有用である。Hannon, Michael: The Universal Core of Knowledge. In: *Synthese* (2015) 192, 769-786.

[86] Renn, a. a. O.. S. 326f.

象と未来時点の特定の行為が、価値や意図に沿って相関させられるための、学習過程によって生じるものである、と言い換えることができるだろう。だからこそ知識は「叙実的〔factive〕」な心的状態であると正当にも Timothy Williamson は考える。彼はさらに以下のように主張する。

> While belief aims at knowledge, various mental processes aim at more specific factive mental states. Perception aims at perceiving that something is so, memory aims at remembering that something is so. Since knowing is the most general factive state, all such processes aim at kinds of knowledge. If a creature could not engage in such processes without some capacity for success, we may conjecture that nothing could have a mind without having a capacity for knowledge.[87]
>
> 信念は知識を志向する一方で、様々な心的な処理過程がより特殊な叙実的な心的状態を志向する。知覚は任意の対象がしかじかの状態であることを知覚しようとするし、記憶は任意の対象がしかじかの状態であることを思い出そうとする。知っているという状態は、最も一般的な叙実的状態であるのだから、そのような処理過程全てが一種の知識を志向する。十分うまくやる能力がないために、このような処理過程に関与しない生物がいるとしても、知識のための何らかの能力なしで心を持つことのできる生物など存在しないと我々は推測できるかもしれない。

この限りで知識とは叙実的な心的状態であるという主張は、認識論的には規範的な主張と理解される。信念や記憶、あるいは知識とされているものが、知覚より導出される外的世界の情報から現れ、そしてそのような心的状態が外的世界に関連しているという理解は、確かに一種の心理的・無意識的な推論として認められるだろうし[88]、結果的に知識やそれに類するものが外的世界に関連しているべきである、つまり事実を告げるものであると考える傾向や要求につながるだろう。

従って叙実性の概念と客観性の概念は、少なくとも現代の日常的な言語使用場面を想定すれば、それほど変わりがない概念と言っていいかもしれない。ただし、客観性はあ

---

[87] Williamson, Timothy (2000): *Knowledge and Its Limits*. Oxford; Oxford University Press 2009, S. 48.

[88] ヘルマン・ヘルムホルツ（Hermann L. F. von Helmholtz, 1821-1894）はかつて無意識的推論という概念をこの意味で提示した。„Die psychischen Thätigkeiten, durch welche wir zu dem Urtheile kommen, dass ein bestimmtes Object von bestimmter Beschaffenheit an einem bestimmten Orte ausser uns vorhanden sei, sind im Allgemeinen nicht bewusste Thätigkeiten, sondern unbewusste. […] Indessen mag es erlaubt sein, die psychischen Acte der gewöhnlichen Wahrnehmung als unbewusste Schlüsse zu bezeichnen […].“ 我々がそれを通じて、何らか特定の対象が特定の状態で、我々の外部の特定の場所に現実存在しているという判断に至る心理的活動は、一般的に意識的活動ではなく無意識的である。そうして、通常の知覚という心理的活動を無意識的推論と呼ぶことも許されよう。Helmholtz, Hermann (1867): *Handbuch der Physiologischen Optik*. Leipzig 1867, S. 430.

る条件を満たす限りで、何かを「知っている」という言明に認められるだろうが、叙実性は何かを「知っている」という言明に要求される前提であると考えるべきだろう。

客観的知識とはかつては単純に「事物から獲得された知識」[89]であったが、もはや単に対象に関わる知識に認められる性質ではなく、科学者などの社会的カテゴリーに照らし、自らが正当な知識の保有者・伝達者であると自認する限りで満たすべき種々の水準に依拠した行為を通じて作り出される知識の性質だからである[90]。客観性は、真正な対象の選定、認識するための道具の選定、対象との関係や態度の統制、メディア上での正確な再現、さらに適切な理論体系の参照などに依拠して判断される。そして、科学者のような人物は特に、知識が知識足りうるものと主張するためには、自ら客観性を持った知識をどのように生み出せるかという手続き的知識、あるいは一般化された手続き的知識としてのメソッドを形成しなければならない。

他方、それほど厳密な基準で、ある情報源から獲得された信念が真であるか、普段意識されないこともある。むしろその時には情報源に対する信頼が高いか、あるいは低いかによって情報を取捨選択することができるからである。例えば信頼ある情報源が伝えた情報は、伝えられた人にとって有益であるだろうという、情報源の性質や意図を汲んだ上で、その情報が真であると判断しても構わないわけである。逆に党派性の強い集団内部で共有される知識は叙実的であっても客観的でない場合が往々にしてある[91]。つまり情報源の社会的カテゴリーがここで問題となる。

確かに Allan Hazlet は、「知っている〔know〕」などの動詞が叙実的でないケースをあげて、知識に叙実性を認める議論に異論を唱える。つまり、文脈によって情報源が信頼できない場合でも、「知っている」やそれに類する叙実的動詞を用いることはできるし、あるいは逆に叙実性を無条件に認めることは知識の真理条件を消去することになると正当にも主張している[92]。とは言え、知識言明が叙実的であるべきであるという規範は否定されない。それだけで知識と認める条件が十分でないと考えるとしても「科学者が」とか「職人が」とか、あるいは「詐欺師が」といった情報源に関する社会的カテゴリーに応じて、人が知識として評価するために満たされるべき知識の基準は異なると考えるべきであり、叙実的な心的状態とは、つまり知識とは一様ではないということは再度検討されるべきである。それゆえ、叙実的な心的状態と客観的な知識を有しているという状態は、一様ならざる叙実的な心的状態の間に何らかの閾値を設定して区別すべきだろ

---

[89] Cook, Harold J. (2007): *Matters of Changes. Commerce, Medicine, and Science in the Dutch Golden Age*. London; Yale University Press, S. 17.

[90] Daston, Lorraine/ Galison, Peter (2007): *Objectivity*. New York; Zone Books 2015. Chapter Seven.

[91] 秘密や嘘、あるいは陰謀論を想定。

[92] Hazlett, Allan (2012): Factive Presupposition and the Truth Condition on Knowledge. In: *Acta Analytica* (2012) 27, S. 461-478. DOI 10.1007/s12136-012-0163-3 ; Hazlett, Allan (2010): The Myth of Factive Vervs. In: *Philosophy and Phenomenological Research* (2010) 80:3, S. 497-522.

う。そしてこの設定されるべき閾値は、社会的カテゴリーによって変化する、知識が満たすべき評価水準の相違に対応することになる。

第二節　真偽性の基準

第三節では、知識循環の概念を検討することになる。知識循環の概念は、様々な領域を行き来することで知識が形態を変えていく歴史的過程を意味する。この概念が示唆するのは、知識はその都度の形態や、領域間の移動の促進や阻害の要因となる社会的カテゴリーを考慮に入れることで歴史的に分析される必要があるということである。これは一種の文脈主義である。だがどのような文脈主義だろうか。ここでは、これまでの思想史や科学史、認識論の研究で存在してきた少なくとも四つの文脈主義、現代認識論を経由し、知識が移動する際に見られる占有形式と取引形式の二つの概念について論じる。

文脈主義には少なくとも四つの種類がある。一つ目は、解釈学とか実証主義的歴史学が提起してきたもので、ある言葉や作品の内実は本来作品が属していた時代に生きた人々や作者の内面に応じて理解されるべきであると考える。二つ目は、Skinner や Koselleck が批判的歴史叙述に対抗して提起し、ある理論が持ち得る批判的含意はその理論が本来属していた文脈を超えて有効であるとは限らないと考える。さらに Galison が科学史の立場から提起した三つ目の文脈主義では、パラダイムの概念や言語学的なアナロジーから理論や概念が、特定のパラダイムや学問実践の系統を超えて有効であることはないと考え、理論や概念の局所性を強調する。四つ目は、どのような文脈で、何かを「知っている」という言明が真であると言えるのか、すなわち知識帰属が可能であるのかを認識論的・意味論的に検討する認識的文脈主義である。それぞれの立場を大雑把にまとめると以下のようになる。

(hermeneutics) ある解釈 I の妥当性は I が帰属される作者の属した世界に依拠する。
(critical) ある理論 I の批判的含意の解釈は I が本来属す時代的文脈に依拠する。[93]
(locality) ある理論や概念の有効性や真偽は、特定の体系やパラダイムに依拠する。[94]
(epistemic) 「知っている」の意味や知識帰属の可能性はその都度の文脈に依拠する。[95]

これらの文脈主義は同じように認識や解釈の帰属が真であるための正当化条件を、文脈

---

[93] Gordon, Peter E. (2014): Contextualism and the Criticism in the History of Ideas. In: D. M. McMahon and S. Moyn (ed.) *Rethinking. Modern European Intellectual History*. Oxford; Oxford University Press 2014, S. 32-55.

[94] Galison, Peter (2003): Materielle Kultur, Theoretische Kultur und Delokalisierung. In: H. Schramm, L. Schwarte, J. Lazardzig (Hg.) *Kunstkammer -Laboratoium – Bühne*. Berlin/ New York 2003, S. 501-520.

[95] Hannon, M. (2013). The Practical Origins of Epistemic Contextualism. In: *Erkenntnis* (2013) 78; 4, 899-919.

に応じて構築する必要があると考えている。その上であえて解釈学と認識的文脈主義にここでは話を限定したい。それが知識循環に関連するからである。だからここで問題となるのは、ある解釈や知識を主張する人物が、自身の主張が真であると主張することが正当であるかどうかを判断する基準が必要になる。そのために三つの立場がありうることを考えなければならない。

その三つの立場とは、(a)　当該の知識の真偽を問題視する立場。(b)　帰属される人や理論が知りうる立〔stand of knowing〕にあるかどうかを問題視する立場。(c)　帰属する人や理論が正当な判断をできる立場にあるかどうかを問題視する立場。とは言えここでは以上の三つ全ての立場を考慮に入れなければ知識帰属が真であるか判断できないと考えているわけではない。一つ目と二つ目が重要な立場と、二つ目と三つ目が重要な立場があるとだけ先に指摘しておこう。

この点についてより明確に理解するため、現在流布している知識の定式を一旦参照しよう。それは「正当化された真なる信念〔justified true belief: JTB〕」は、以下の真理条件〔The Truth Condition: TC〕、信念条件〔The Belief Condition: BC〕、正当化条件〔The Justification Condition: JC〕の三つからなる。

(TC) p は真である〔p is true〕。
(BC) S は p なる信念を有する〔S believes that p〕。
(JC) S は p なる信念を抱く限りで正当である〔S is justified in believing that p〕。
∴ S は p と知っている〔S knows that p〕。[96]

まず(TC)については、これまでも指摘されてきた通りもはや認識論というより形而上学の問題ではないか、という疑問が浮上するだろう。しかし第一節で議論してきたように、真の基準が、学習された知識が有効で、かつその都度の成功に左右されるならば、それは存在論的であると同時に価値論的な議論である。従って、(TC)から(BC)を直接導くことはできないし、(TC)は(BC)から独立して理解されうるものでもない。叙実性の規範は *S* が *p* を事実として認識していることを自覚する時、反射的に「ありうること」として仮定され得る事実を拘束するだろう。というのも、「*S* は『*S* は *p* と知っている』と知っている」ことを内在主義的な知識の規定は要求するように思われるからだ[97]。これは KK

[96] Ichikawa, Jonathan Jenkins (2017): The Analysis of Knowledge. In: *Stanford Encyclopedia of Philosophy*. https://plato.stanford.edu/entries/knowledge-analysis/

[97] 叙実性の原則 K*p*→*p* を、「知識は真理を含意する」、つまり「『知っている』という言明は事実を含意する」と解釈する時、(a)「*S* は *p* と知っている」は KK 公理に従って、「*S* は『*S* は *p* と知っている』と知っている」が成立すると仮定できる。すると逆に(b)「*S* は『*S* は *p* と知っている』と知っている」から「*S* は *p* と知っている」が論理的に帰結することとなる。この時、(a)の証拠が覆って~*p* であると明らかになり、ゆえに(a)は正当ではなくなっても、叙実性の規範に則れば真である為(b)は維持される。*S* がのちに~*p* と知ったところで、(b’)「*S* は『*S* は *p* と知っている』

公理とか内省公理と呼ばれる[98]。しかし学習を軸に形式化された知識の形態と、その都度の認知が互いに作用するために、そこに価値判断や意図を含む規範や制度、自分が属す集団や身分、身体状態といった種々の因子を考慮に入れなければ知識が客観性を獲得できないとすれば、既存の規範的な知識は、認識対象の規定可能性に拘束効果を持ち、時に有害な結果を生むだろう。

「知っているとは叙実的な心的状態である」という主張[99]は正当であり、知識それ自体はその内容に関する検証に左右されることがないという洞察は認識論的現実主義/実在論〔realism〕の立場である[100]。この立場を、認識的権原付与〔epistemic entitlement〕[101]を重視する外在主義と見なすことにする。そしてこの立場は、知るということを権利問題〔quid juris〕と捉え、ある人物がある事柄を知りうるかどうかの保証は、その人物の能力〔ability〕や保有している情報源〔informant〕ではなく、ある叙実的な心的状態にあるかどうか、つまり実行的に権原を有しているかどうかに見出されると考える。従ってこの時、「知っている」とは成功したパフォーマンスの規範的条件を備えている事実が知識の保証〔warrant〕と捉えられる[102]。

とは言え知識の保証としての証拠〔evidence〕の価値が失効するではないのは明らかである。この立場でも認識的権原という保証は必要である。ただ、証拠は「叙実的な心的状態」の真偽に関係ないというだけである。逆に、証拠の検証が必要と判断される時、(JC)はどのような基準を持つべきかという問題は残り続ける。(TC)と(BC)の関係をどう

かつ~p と知っている」は真である。この時 p が通例のように曖昧さを含む場合、二階述語論理の存在量化を回避するため~p に制約を加えて q に置き換え、(c) $K(p \& q) \rightarrow Kp$ としていい抜けが可能となるだろう（例えばレイシストが「大抵のアジア人は肉体に劣る」と考える一方で大谷翔平が優れていることを、自らの偏見を改めることなく認めることは可能である）。KK 公理はこの意味で心理的傾向としてありうるが、正当な推論と認めていいのかは保留する。これは第一節の注 91 で述べた秘密や嘘の問題でもあり、また阻却可能性についての問題でもあるが、ここでは十分に論じることができない。ここで論じたいのは、どのような知識であっても、歴史の中で生き残りながら今日の世界を形成する上で機能し続ける可能性があるということである。阻却されるべき知識の基準は必ずしもその場合問題にはならない。

[98] 認識論理では様相作用素として K を導入し、S にとって ϕ が既知の情報である時には $K_S\phi$ と表記される。この時 $K_S\phi \rightarrow K_SK_S\phi$ （「S は ϕ と知っている」ならば「S は『S は ϕ と知っている』と知っている」）と考えることが内在主義的には要求される。それは正当化要件として求められる場合があるが、これは外在主義によって散々批判されてきた。Bird and Pittigrew の見解が正しければ、KK が正しいかどうかは内在主義と外在主義の決定的な問題となる。以下を参照。Bird, Alexander/ Pettigrew, Richard (2021): Internalism, Externalism, and the KK Principle. In: *Erkenntnis* (2021) 86, S. 1713-1732. DOI: 10.1007/s10670-019-00178-3

[99] Vgl. Williamson, a. a. O.

[100] Carter, J. Adam (2016): *Metaepistemology and Relativism*. UK; Palgrave Macmillan 2016. S. 28.

[101] この区分については以下を参照した。Gerken, Mikkel (2011): Warrant and Action. In: *Synthese* (2011) 178, S. 529-547. DOI: 10.1007/s11229-009-9655-0

[102] Vgl. Greco, John (2010): *Achieving Knowledge. A Virtue-Theoretic Account of Epistemic Normativity*. Cambridge; Cambridge University Press 2010.

捉えるかが、(JC)の問題であるからだ。この立場を、認識的正当化〔epistemic justification〕[103]を重視する内在主義と見なすことにする。この立場は知るということを事実問題〔quid facti〕と捉え、ある人物がある事柄を知りうるかどうかの保証は、その人物の能力や保有している情報源を評価するための規範であり、実行的に権限を有していることは保証とは考えられない。この二つの立場については次章で歴史的な視点から再度検討する。

ここでは先に、証拠とはどのようなものであるべきか少し検討する。そのために確率論的な定式を二つ引こう[104]。

> If learning that *E* is true justifies you in *rejecting* (i.e., disbelieving) the proposition *P*, and you were not justified in rejecting *P* before you gained this information, then *E* must evidence *against P*.
>
> If learning that *E* is true justifies you in *accepting* (i.e., believing) the proposition *P,* and you were not justified in accepting *P* before you gained this information, then *E* must be evidence *for P*.[105]
>
> *E*［証拠：大林］は真であると学習することが、あなたが命題 *P* を**否認する**（信じない）ことを正当化し、そしてこの情報を取得する前にはあなたが命題 *P* を否定することが正当化されない場合には、*E* は *P* を**反証する**証拠であると確言される。
>
> *E* は真であると学習することが、あなたが命題 *P* を**是認する**（信じる）ことを正当化し、そしてこの情報を取得する前にはあなたが命題 *P* を是認することが正当化されない場合には、*E* は *P* を**支持する**証拠であると確言される。

ここで Sober は *E* が命題 *P* の証拠であると捉えるため、あるいは証拠でないと判定するための条件を提示した。命題 *P* と *E* の関係が未決定の状況において、E は真であるという信念が取得されることで *P* を否認すべきか是認すべきかが左右されるならば、*E* は *P* を検証する上で証拠としての資格を持つと判定される[106]。従って Sober の定式が想定しているのは、*E* は真であるという信念が存在することで、別の信念の是非が左右されるケースである。このケースでは、*E* と *P* なる命題が意味する事象の客観的な因果関係を暗黙に想定しながらも、実際のところは学習された事実から仮説が真である確率を推

---

[103] Gerken はここで reasoning の能力を限定的に論じているが、reasoning 自体には心理的な能力以外の要素が多く関与することは前節でも述べた通りであり、その範囲で意味を拡張した。

[104] ただしこれは一つの一般的な考え方に過ぎず、証拠とは何かは、どのような現象ないしデータを扱うか、分析を加えるかによって異なる。また参照した文献において暫定的に提示されたものである。しかし込み入った議論はここでは不要である。

[105] Sober, Elliot (2008): *Evidence and Evolution. The Logic Behind the Science*. Cambridge; Cambridge University Press 2008, S. 5.

[106] Sober はさらにベイズ推定の詳細な議論に進むが、ここでは割愛する。

定している。支配的な時間軸は、信念が更新される時間軸であり、事象それ自体が従う時系列に沿った因果関係の推定とは関係がない。これに対し Reiss が簡潔にまとめたグレンジャー因果性は、客観的な時系列に従って継起する事象間の因果関係の推定を可能にするモデルである。

> X_t is a *prima facie* cause of Y_{t+1} if and only if $Prob(Y_{t+1}| X_t) > Prob(Y_{t+1})$, where X_t and Y_{t+1} are time ordered variables (and X_t obtains before Y_{t+1}).
> A variable Z is said to screen off X from Y if and only if Prob(Y | X) > Prob(Y) but Prob(Y| X, Z) = Prob(Y|Z).
> A variable X_t is a genuine cause of a later variable Y_{t+1} if and only if X_t is a prima facie cause of Y_{t+1} and there exists no earlier variable Z_{t-1} that screen off X_t from Y_{t+1}.[107]
> X_t が Y_{t+1} の暫定的な原因であるのは、X_t と Y_{t+1} が時系列に沿った変数である（また Y_{t+1} 以前に X_t が存在している）時に $Prob(Y_{t+1}| X_t) > Prob(Y_{t+1})$ [108]である場合かつ、その場合に限る。
> 任意の変数 Z が Y から X をスクリーンオフすると言われうるのは、Prob(Y | X) > Prob(Y) だが Prob(Y| X, Z) = Prob(Y|Z)の場合、かつその場合に限る。
> 任意の変数 X_t は後続する任意の変数 Y_{t+1} の真の原因であるのは、X_t が Y_{t+1} の暫定

---

[107] Reiss, Julian (2015): *Causation, Evidence, and Inference*. New York and London; Routledge 2015, S. 7-8. なお Reiss は「確率論的説明」意外にも「介入主義的説明」などを挙げている。「介入主義的説明」における因果推定に関する哲学的考察は以下も参照。Woodward, James (2003): *Making Things Happen. A Theory of Causal Explanation*. Oxford; Oxford University Press 2003. 念のために強調すると私はこの論文で、因果関係を証拠とそれが支持する（反証する）現象との間に帰する必要を考えてはいない。本文中でも主張しているように、知識の保証は「真の」因果関係という対象間の構造だけに依拠しておらず、また知識帰属という場面でそれを考慮に入れる必要もないと考えている。その理由はすでに述べてきた通り、基本的に「*S* knows that *p*」が真であるかを *p* の真偽が左右するとは考えないからである。というのも *p* が真であることは「S knows that p」を含意しない（そうでなければ「*p* □→ *S* knows that *p*」というパラドクスに帰着する。これについては以下を参照。Kvanvig, Jonathan L. (2006): *The Knowability Paradox*. Oxford; Oxford University Press 2006）。ただし正当化の過程には証拠から予測される事象に関してのコミットメントが要請される。つまり予測の結果 *q* が *p* に含意されているべきという規範に従うべきなので、検証を通じた確率論的推定を提示する必要があるだろう。

[108] 条件付き確率で、意味を開くと「時点 *t* に X が生じる時、時点 *t +1* に Y が生じる確率が、時点 *t +1* に Y が生じる確率より大きい」。つまり X を前提とした時には Y が続く確率が高まると考えると、X が Y の原因である可能性が推定される（しかし単なる相関関係に過ぎないかも知れず、時系列にそって継起する二つの事象に因果関係があるか（予測に有益であるか）を判断するためのグレンジャー因果検定という手法がある。Reiss はこの点について Hans Reichenbach の議論やベイジアンの手法全般にコメントしているがここでは特に扱わない。この点については、さらに以下を参照。大塚淳「哲学者のためのベイジアンネットワーク入門（特集 因果的説明とベイジアンネットワーク）」『哲学論叢』（2008）35、106-117 頁。

的な原因であり、かつ X_t を Y_{t+1} からスクリーンオフするいかなる先行原因 Z_{t-1} も存在しない場合、かつその場合に限る。

この定式化で Reiss は変数 X, Y, Z に事象の時系列的な継起関係の確率が変動するとすれば、あるいはしないとすれば、そのことから因果関係や独立関係の判定ができることを示している。Sober の定式は *E* と *P* の間にある認識論的正当化の可能性を示唆している一方で、Reiss の定式はより一般化されており、事象と別の事象の間に仮定されている因果関係や相関関係を確率論的に推定する方法を示している。この定式では確かに客観的な時系列が前提となるが、このモデルが提示する因果関係は見かけ状のものもあり、本当に因果関係があるのか、単なる相関関係とみなされるのかは統計学的に判断される。そしていずれの統計モデルも確かに仮説を支持するか反証する証拠の選定に役立てることができる。真に証拠であるものは予測に対して真の原因であるとみなされうるが、これは他の原因候補とともにスクリーニングされることがなかった、暫定的で最も有力な原因候補をそう呼んでいるのであり、客観的に確実な因果関係を明らかにするものではない。

仮に「知っていることは叙実的な心的状態」であるという外在主義的な定式が十分であるならば、それは Sober が提示するベイズ主義的な因果性ではなく、Reiss が提示する客観的な時系列に従う因果性に依拠し、ある事象 *E* はある知識状態 *K* を確率 *P* で引き起こすと想定した上で、*K* が別の事象 *E'*から確率 *P'*で引き起こされる別の知識状態 *K'*を含意するならば、*K* と *K'*は確率論的に推移可能であり、また *E* と *E'*の必然的であれ確率論的であれ因果関係を前提とする必要がある。とはいえ *E* と *E'*の間の因果関係と、*E* と *K*、*E'*と *K'*の因果関係とは独立関係であると考えるのが自然であるのだから、*K* と *K'*の間の因果関係と *E* と *E'*の間の因果関係もまた独立関係にあるだろう。従って、叙実性の前提は証拠による検証を通じたベイズ推論とは相入れない。少なくとも、それらは知識について別々のアプローチである。

つまり証拠は、これら二つの立場のうち、認識的正当化に関係する。認識的正当化とはその意味で証拠を積み重ね、証拠でないものを排除し、知識ないし仮説を予測される結果と予測との誤差に応じて多少の修正をしながら事実に近似させていくプロセスを含んでいる。ここで肝心なのは、この近似化のプロセスに、証拠自体の社会的カテゴリーや期待される結果の社会的カテゴリーが促進要因や阻害要因として加えられるということである。

これには複数の原因が考えられる。例えば未発見のテクストはないか、テクストは正確に校訂されているか、観測用の器具が正確に対象を観測するか、器具の選定や器具の使用についての適正な能力を有するか、知識を主張するものは証拠を隠したり捏造したりしていないか、という信頼性の問題、また、証拠を集めるためには労力や時間、資金といったコストが不可欠であること、また公衆や専門家の関心を引くことなどの様々な

実際上の問題を差し当たって考えることができる。一言で言えば、これらの信頼性の尺度、投資の決定の過程、また公衆や専門家の評価には社会的カテゴリーが関与する。

他方こうした過程を必要としない認識的権原付与においては、その権原を有しているかどうかが社会的カテゴリーによって判断される。つまり特定の事柄について知りたいとか、問題を解決したいと思った時に、誰に尋ねるべきか、何に当たるべきかを考える際に、科学者や科学者が書いた本なのか、弁護士なのか、あるいは占い師や親なのか、友人なのかはその判断に影響を与える。あるいは逆に、判断する人自身の社会的カテゴリーによっても左右される。

すると、認識的権原付与を重視する外在主義的立場と認識的正当化を重視する内在主義的立場は、知識を帰属されるべき人の人格〔persona〕に関して保証を要求する点では一致している。つまり、知識帰属の是非をめぐって、上述した（b）の立場からの検討において、正当化と権原付与はともに問題になる。例えば科学者という人格を認められた者が、正当化できない知識を主張し続ければ、意図の所在に関わりなく、そのことで科学者としてその知識を保有する権原を失う危険がある、という状況を仮定することができる。それは科学者という社会的カテゴリーの喪失に、また時にペテンという社会的カテゴリーの付与に至る。このような保証を可能とする人格に基本的に要求されるのは、その知識が「閾値設定機能（threshold-making function）」を持つということである。

> In normal cases of epistemic assessment, the use of ‘knowledge’ and its cognates frequently fills the communicative function of marking the threshold of warrant that S must possess with regard to p in order to be epistemically rational in acting on (the belief that) p.[109]
> 認識的アセスメントの範例的なケースでは、「知識」やそれに類するものの使用は、p に即した行為（p という信念）において認識的に合理的であると言えるために S が p に関して保有していなければならない保証の閾値を設定するコミュニケーション的な機能を高頻度で担っている。

認識的アセスメントとは Mikkel Gerken によれば、知識帰属に関する議論のなかで提案された見解であり、「任意の妥当な行為に重要な関連を有する任意の命題に対して任意の主体が取る認識的立場に関するアセスメント〔an assessment of a subject’s epistemic position vis-à-vis a proposition that is relevant for a pertinent action〕」のことをいう。つまり、ある行為の合理的な根拠、あるいは合理的な目的とみなしうる知識を行為者でもある人物に認めることができるかを判断するための基準を設けるということだ。この基準がいかなるものになり得るかは依然議論の余地がある。少なくとも（a）p の証拠たる理由の検証と、それとは別に（b）p と S の関係に見られる合理性から、水準を設定するため

[109] Gerken, Mikkel (2015): The Roles of Knowledge Ascriptions in Epistemic Assessment. In: *European Journal of Philosophy* (2013) 23: 1, S. 141-161. DOI: 10.1111/ejop.12026, hier S. 153.

に（c）複数人が相互にチェックするという構造が見えてくる。

こうして知識の移動における取引形式は、占有形式をとる知識の移動に関してメタ的な保証をもたらす正当化としてアセスメントの形成に貢献する知識の移動の形式と見なすことができる。しかしこの時、メタ的な保証は占有形式をとる知識の移動を踏まえたものである以上、評価されるべき当該の知識の正当性については依然確かめられないままである。すでに述べたように、現代の認識論を踏まえれば証拠の列挙がたとえ真なる原因を見出すことができないとしても、ベイズ主義的な確率モデルに従って、知識としての水準を満たすかを判定することができると考えることができる。しかし認識的アセスメントを構成する主要な基準として、18 世紀に遡れば、占有形式をとる知識の移動に際して、知識の提供者と受容者に適用される社会的カテゴリーや文体から判断される真実らしさが用いられる。この点については、第一部第四章および第二部第四章でも論じられる。

第三節　知識循環

知識という概念で包括される様々な観念や学説、政治的見解は、歴史的・社会的な構成過程ないし生成過程に注目することで、形而上学的な問題をも含めて無数の議論を呼んできた。一世紀以上続く学統である精神史〔Geistesgeschichte〕や科学史〔history of science/ Wissenschaftsgeschichte〕、観念の歴史〔history of ideas〕、知識社会学〔sociology of knowledge〕、その後継的な流れである知識社会史〔social history of knowledge〕、インテレクチュアル・ヒストリー〔intellectual history〕と隣接しながら、それらの知見を批判的に継承することを自負する知識史〔history of knowledge/ Geschichte des Wissens od. Wissensgeschichte〕は、新たな方法論として議論が活発であり[110]、この方法論に関しては実践的議論を行うジャーナル『KNOW』も 2017 年に発刊され、知識循環の概念については 2018 年にその名を冠した論集が Johan Östling らによって編まれた。その序文では 1980 年代以降のカルチュラル・スタディーズに代表される人類学的・社会学的なアプローチを取り込んだ知識記述の後裔として知識史を位置付けている。従って先行するのは Michel Foucault や Pierre Bourdieu、Clifford Geertz、あるいは日常的な事柄にまで視線を向けるミクロな歴史の記述者たちである Michel de Certeau、Roger Chartier、Robert Danton、Carlo Ginzburg、Natalie Zemon Davis である[111]。あるいは 2005 年にスイス連邦工科大学〔Swiss Federal Istitute of Technology/ Eidgnössische Technische Hochshule Zürich〕

---

[110] これらの分野の研究史、相互関係や国際的な広がり、ジャーナルや大学における講座・カリキュラム、研究所の創設経緯などについては Marchand, Suzanne (2019)を参照のこと。

[111] Östling, Johan/ Heidenblad, David Larsson/ Sandmo, Ehrling/ Hammar, Anna Nilsson/ Nordberg, Kari H.: The History of Knowledge and the Circulation of Knowledge. An Introduction. In: Johan Östling et al. (Hg.) *Circulation of Knowledge. Explorations in the History of Knowledge.* Sweden 2018, S.9-36, hier S. 10-11.

とチューリヒ大学の共同出資のベンチャーとして立ち上げられた「知識の歴史センター〔Zenrtrum Geschichte des Wissens〕」を中心とした多数の事例に基づく実証研究が、知識循環という概念を支える礎となっている。

そもそも知識史という方法論は、この研究センターを主導する Philipp Sarasin が最初に提起した。彼は 2011 年のマニフェスト的な論文「知識史とは何か」で、知識の歴史を研究するためには、知識の形態〔form〕、信念体系〔belief system〕、美的表現〔aesthetic expression〕の三つの側面に焦点を当てる必要があると主張した。また彼は以下のように主張し、知識史というプログラムが持つ包括的な性格を強調した。

> [...] vielmehr muss Wissen trotz seiner intrinsischen Verbindung mit zumeist akademisch bzw. universitär verfasster Wissenschaft als ein Gegenstand konzipiert werden, der keinen klaren, das heißt entweder logisch-systematisch definierbaren oder aber sozial distinkten Ausgangspunkt hat, dem keine definierten Grenzen zukommen und auch kein eindeutig bestimmter institutioneller oder gesellschaftlicher Ort. Wissen entwickelt, verändert und ›realisiert‹ sich immer wieder neu durch die Zirkulation zwischen verschiedenen gesellschaftlichen Sphären, bis es sich darin möglicherweise ›verbraucht‹ und wieder verschwindet. [112]
>
> むしろ知識は、アカデミーで、あるいは大学において起草された科学と本来的に結びついているにも拘らず、ある一つの対象として構想されねばならないのだが、とはいえその対象は、明瞭な、すなわち論理・体系的に定義可能で、社会的な特徴を備えた観点を持っていないし、明確にされた境界が認められず、一義的に規定された、制度的なしい社会的な地位も有していない。知識は様々な社会領域の間を循環することで、そこで「消費」されたり再び姿を消したりすることもあるだろうが、そうなるまで、繰り返し発展し、変化し、「実現していく」。

Sarasin はさらにこうした知識一般に関与するこの試みに、大きく分けて四つの分析のアプローチが存在するとも主張する。すなわち、知識の秩序〔the order of knowledge〕、知識のメディア性〔the mediality of knowledge〕、知識のアクター〔the actor of knowledge〕、知識の系譜学〔the genealogy of knowledge〕の四つについての分析的アプローチである。Sarasin は以上のような提起をしながらも、しかし決して知識史はまだ、あるいはこれからも、一枚岩の試みではないと結論づけている。

Sarasin はこうして従来の科学史的アプローチを批判するのだが、しかし、彼の提案する知識の社会的文化的側面に注目した区分と似たことは、すでに科学史の側でも Jardine and Spary が 1996 年の優れた論文で提案していた。

---

[112] Sarasin, Phillip (2011): Was ist Wissensgeschichte? In: *International Archiv für Sozialgeschichte der deutschen Literatur* (2011) 36: 1, S.159-172, hier S. 166. DOI: https://doi.org/10.1515/iasl.2011.010

Material practices are ways of making, handling and transforming things; in the case of natural history they include the gathering, transport and preparation of specimens, the making and distribution of books and illustrations, the performance of experiments. Social practices cover the whole range of associations, recruitments, delegations and negotiations; particular, in natural history, they include the skills of inspiring trust in other natural historians and assessing their trustworthiness, the conventions and strategies relating sponsors and patrons to naturalists and naturalists to informants and assistants, the regulations and routines of behavior in the institutions of natural history – courts, academies, universities, gardens, museums. laboratories. […][113]

物質的実践とは、物体を作成したり、交換したり変形したりする方法であり、自然史のケースでは、物質的実践は標本を集め、移送し、保存処理を行うこと、書籍や図版を作成したり頒布したりすること、実験を遂行したりすることを含む。社会的実践は、関係構築、雇用、委嘱、交渉を含む。一部ではあるが、自然史のケースでは、他の自然史研究者や彼らの信頼性に関する合意への信用を喚起するスキルや、スポンサーやパトロンと自然史研究者との関係、あるは自然史研究者とインフォーマントやアシスタントとの関係を構築する会話や戦略、自然史の研究機関――宮廷、アカデミー、大学、庭園、ミュージアム、ラボ――における所作の統制やルーティンが含まれる。［…］

あまり長くなるので引用はここまでにするが、彼は他に「文学的実践」「身体的実践」「再生産的実践」の三つをさらに挙げて、科学的知識がどのようにして生成され、伝えられていくかについて論じている。これら五つの実践に注目すべきという主張は、現在もはや当たり前になっており、私自身も賛成するところであるし、また、この主張が知識史の主張を部分的に先取りしているところで、それは両方のアプローチが両立する可能性を意味しているに過ぎない。以下ではさらに、知識と関連するいくつかの研究を取り上げるが、たとえそれが一見対立的なものに見えようとも、それは表面的なものに過ぎない。

Sarasin に続いて、Simone Lässig は、正当にも「知識史は社会の代わりに知識を強調するのではなく、むしろ社会の中にある知識、文化の中にある知識を分析し、理解しようと探究する〔The history of knowledge does not emphasize knowledge instead of society but rather seeks to analyze and comprehend knowledge *in* society and knowledge *in* culture〕」[114]と

---

[113] Jardine, Nicholas/ Spary, Emma (1996): The Natures of Cultural History. In: N. Jardine, J. A. Secord and E. C. Spary (ed.) a. a. O., hier S. 8-9.

[114] Lässig, Simone (2016): The History of Knowledge and the Expansion of the Historical Research Agenda. In: *Bulletin of the GHI Washington* (Fall 2016) 59, S. 29-58, hier S.58.

主張する。この論文もまた、知識もまた社会的カテゴリーの適用される対象であり、取引の過程に置かれている知識を分析し、理解する必要を訴えている。Lässig はさらに以下のように主張する。

> The history of knowledge, to offer a provisional definition, is a form of social and cultural history that takes "knowledge" as a phenomenon that touches on almost every sphere of human life, and it uses knowledge as a lens to take a new look at familiar historical developments and sources.[115]
> 知識史とは、仮設的な定義を提供するとすれば、「知識」を人間の生のほとんど全ての領域に接する一つの現象と捉える、社会史・文化史の一形態である。そして知識史は知識を、近似している様々な歴史的展開や様々な歴史史料に新たな視点を取るいわばレンズとして用いる。

Lässig によれば、知識は史料を読むものが史料を分析する際の不可欠かつ取り替え可能な道具である。この時知識は歴史の文脈に沿って分析されるものではない。逆に何らかの知識がどのように歴史を脈絡づけていくかを追跡する必要がある。従って Sarasin や Lässig が提唱する知識史において知識とは多元的な概念であり、雑多な日常的な知識から、特定の職工集団で共有されていた知識、そして理論物理学の知識に至るまでを指し得る。

科学史の大家 Lorraine Daston も、近年の知識史の試みに、若干の既視感を感じているような書き振りであるが、以下のように研究の意義を認めた。

> The study of scientific practices, combined with the enlarged geography and chronology of recent research, has unsettled the most taken-for-granted certainties about both old subjects […] and new […]. Following the trail of practices has intertwined science with its ambient cultural context in tangled ways. There is no way of unweaving this web, of excising science cleanly from other ways of knowing and doing. [116]
> 科学的実践の研究は、近年の研究で拡張された地理学と年代記と併せることで、古典的な主題と新たな主題に関する、当然のものと見做されてきた大抵の確実性を揺るがしてきた。諸実践の痕跡を追跡することは、科学を周辺環境の文化的文脈と、縺れさせるようにして撚り合わせる。この網を解く方法、つまり科学をすっぱりと、他の知る方法、行う方法から切り離す方法はない。

---

[115] Ebenda, S. 44.

[116] Daston, Lorraine (2017): The History of Science and the History of Knowledge. In: *KNOW. A Journal on the Formation of Knowledge* (2017) 1: 1, S. 131-154.

ただし彼女は科学知識という一定の水準を持つことが期待される知識概念に比べて、知識概念一般は、歴史分析の道具にするには、曖昧に過ぎると批判した。ただしそれはある意味で、より明瞭な道具となる概念を作り上げるようにという要請であるかもしれない。

もっとも知識史の背景を詳細に検討した Suzanne Marchand からすれば、Daston に代表される科学史研究は、その課題を、何が科学知識と呼ばれる資格があるかに限定されている。あくまで科学的知識は独自の地位を持っているということである[117]。Marchand はそうして、英米やオランダを中心に発展してきたインテレクチュアル・ヒストリーに対し、主にドイツ語圏を中心に発展してきた知識史が、知識と実践の関係を主題としていることを指摘する。彼女によれば、その限りでやはり、知識史は「知識の制度や月並みな心性〔mediocre minds〕に焦点を当てる」文化史やカルチュラル・スタディーズにみられるフーコー主義に近い[118]。結果的に見れば、知識の歴史は科学史やメディア史からインテレクチュアル・ヒストリーや文化史の観点を併せ持つ最も包括的な方法論として模索されており、そこでは知識の概念は、特定の種類の知識に限定されることなく、知識とみなされたもの全てを知識の歴史の対象として扱うことになる。しかしそれだけに、知識史において知識の概念は形式的に捉えられる必要がある。そうしなければ、文化史、インテレクチュアル・ヒストリー、科学史の間で行ったり来たりして、知識の歴史を考察することから「知識とは何か」という問いを抜き去ることになる。そうなれば、何についての歴史を叙述しているかが不明瞭となってしまうだろう。やはり Daston が指摘するように、知識史はそのために何を対象としないのかを明らかにする必要があるだろう。この論点は知識史の側も認めており、Östling もいまだ知識史には明確に定義されたリサーチ・プログラムがないと理解している[119]。

しかし彼らの見解に反して、知識史を根底で独特な方法として規定するアプローチは、Sarasin が最初の論文で、知識とは内容、形式、担い手の面から見て全く一枚岩に理解されるものではないが故に、個々の知識の生成、発展、消滅は、様々な社会の領域を行き来する認知過程の連結関係こそが注目されねばならないと主張している点に求めるべきである。この点については既に Martin Mulsow も気づいていたようで、「正当化された真なる信念〔justified true belief = JTB〕」のような内在主義的な知識概念を放棄して、外在主義的な知識概念を導入する必要があるかもしれないと仄めかしていた[120]。結局こ

---

[117] Marchand, Suzanne (2019): How Much Knowledge is Worth Knowing: An American Intellectual Historian's Thoughts on the 'Geschichte des Wissens'. In: *Berichte zur Wissenschaftsgeschichte* (2019) 42: 2-3, S. 126-149, hier S.130. DOI:10.1002/bewi.201900005.

[118] Ebenda, S. 133.

[119] Östling (2020): Circulation, Arenas, and the Quest for Public Knowledge: Historiographical Currents and Analytical Framework. In: *History and Theory* (2020) 59: 4, S. 111-126, hier S.115.

[120] Mulsow, Martin (2019): History of Knowledge. In: Marek Tamm and Peter Burke (ed.) *Debating New Approaches to History*. London; Bloomsbury Academic 2019, S. 159-172/ 179-181.

の章の第一節で扱った Renn のアプローチは、こうした問題への応答でもある。さらに私自身が第二節で提案した議論も同様である。主張したいのは、知識が移動するものならば、それは占有形式なのか取引形式なのかによって、知識が受容されたり阻却されたりする一連のプロセスに複雑な過程が生じるということである。つまり認識論は扱わないが、歴史学が扱うプロセスがそこにある。

第四節　小括

第三章では知識の概念をめぐって形式的な議論を重ねてきた。第一章で制度の概念について、第二章で移動の概念について検討し、それぞれの歴史性の理解を可能にするアプローチについて検討してきた。この背景には、そもそも近年の知識の歴史の方法論をめぐる議論で「知識循環」という概念が提案されたことに端を発する。知識なるものが、どのように歴史的過程を通じて移動していくのか、その過程でどのように変化するのかという点について考察するため、まず Renn が提案した生物学的なアプローチを検討した。Renn は知識とは外界の真なる表象であるべきだと考える。これは基本的に「叙実的な心的状態」という外在主義的な知識概念の規定と重なる。

外在主義的な叙実性の前提はしかし、現実に証拠を収集し、理論を検証するという一連の知識の産出の過程を理解するには、一面的に思われる。つまり、知識には保証があるが、外在主義は権原付与と正当化の二つの形がありうるからだ。証拠とは信念更新に影響を与える近傍の対象をいうが、それは時系列的な関係を意味するだけであって因果関係である必要がない。ある人がそう思ったのは、この要因があったからだというのを、厳密な因果関係で捉えることは困難である。従って権限付与と正当化は、求められる根拠の種類と水準が異なると理解できる。つまり、知識が指示する現実 p と知識が帰属されるものの関係に依拠した正当化と、知識が帰属されるものと知識を帰属するものの関係に依拠した権限付与の議論に分かれる。この両者の立場は、知識が帰属されるものに関しては重なりを見せており、その人物については検証可能である限りで、権原付与が掘り崩される余地がある。従ってそのような知識の理解を、閾値に関する認識的アセスメントという概念でまとめた。

また、権原付与を通じた知識の移動形式を占有形式、正当化を通じた知識の移動形式を取引形式と規定し、前者と後者では社会的カテゴリーが適用される知識の要素が相違し、またその結果どのような移動が生じるかが変化することを指摘した。このように知識が移動する際の形式の相違を強調することは、近年の知識の歴史の方法論を検討し、知識の歴史を記述する上で求められるものであるとの結論を得た。

第四章　移動する知識

知識は移動するというテーゼは魅力的である。しかし知識が自律的に移動するわけではない。知識の移動は社会的な関係性に規定され、知識は認知プロセスを含む社会ネットワークに局所化され、別のネットワークに絡まり撹乱され、より複雑な移動を強いられることになる。ありふれた話であるが、例えばカール・セーガンの小説をもとにしたSF 映画『コンタクト』では、主人公の女性天文学者エリーは上司の男性天文学者ドラムリンに妨害工作をされ、地球外知的生命体の探究という研究プロジェクトをバカにされたり予算をとめられたりする。あるいはその果てに宗教との対立が思わぬテロ事件に発展し、また政府の調査委員に詰問された挙句、実際に彼女がこと座のベガで経験したことを証言すると、迷妄した科学者とラベリングされてしまう。これはあくまで虚構だ。しかし科学史から材をとって詳細に論じる必要は今更ないだろう。新奇な知識が受容されるためにはその知識に関するアセスメントが形成される必要があるし、アセスメントの形成が可能である必要があり、そのようなプロセスではさまざまな社会的カテゴリーが重要な役割を果たしている。以上が第三章で確認したことである。

ここでは単に知識の伝達だけでなく、知識の移動について議論する。つまり、情報やそれを保管したり提示したりするメディア、そして物証（つまり総じてインフォーマント）の移動を通じて知識が成立するということを論証したい。知識はこの時物質メディアに外在化されており、知識は特定の人物から別の特定の人物への限定的な伝達に止まらず、その伝播に多くの不確定要素が介在し、その間に知識が新たに成立するのである。知識の移動で問題となるのは、知識が外在化された物質メディア自体の占有や取引である。インフォーマントが移動する時に生じうるリスクとして、捏造されたと暴露された証拠や証言、特定の知識を評価する能力に欠けた受容者を想定する時、インフォーマントに認識的権原付与がなされるべき状況にあってもその知識は移動しないかもしれない。この時第三章で提案した分類に従えば、インフォーマントからすれば、取引形式での移動に際しては虚偽や秘密、捏造がリスクとなり、占有形式での移動に際しては受容者におけるアセスメント形成の可能性の欠如がリスクとなる。逆に真なる知識であってもインフォーマントが不適切な社会的カテゴリーを適用されている場合、受容者のアセスメント形成の可能性が阻害され、移動は失敗する。

インフォーマントの移動に関してはいくつかの階層に分けられる。例えば認知プロセスによる移動、メディア横断的な加工を通じた移動、そして人々の間の採集活動、贈与、商取引や出版活動を通じた移動である。いずれの移動の場面でも社会的カテゴリーが問題となる。そこで作用する社会的カテゴリーは、他方でインフォーマントの移動の形式を左右する。ある時にはインフォーマントの立場や保有を認めるための権原付与は単に実行的なものに過ぎず、提供者と非提供者の間には実行的な権原の委譲しか認められな

い。証言や証拠について疑う余地はここにはない。別の時にはインフォーマントの立場や保有を認めるための権原が委譲される際に、インフォーマントが真正であることを保証する一種の契約関係が結ばれる必要がある。この契約はその知識から合理的に導出される利得や損害の予測についての保証を含んでおり、その予測が正確であると十分に受容者が検証できる時に限って知識の移動は正当に遂行され、逆にこの検証が十分にできない時には不正として取引は反故となるか差し止めとなる。

この時、知識の「時間化〔Verzeitlichung〕」[121]が問題となる。つまり経験的知識は、時間推移によって、有効であったものが無効になったり検証できたものができなくなったりする。インフォーマントの有効性や知識に依拠する予測可能性は時間的に限定されている場合がある。旅行文化が直面した問題、そして旅行記がもたらした知識というのは、まさにこのような時間的知識である。ここでは旅行記に関してしばしば議論される、そのテクストの信憑性について幾らか議論するため、時間化の問題を「有用な知識」という社会的カテゴリー、そして秘密や嘘という知識の裏側を第一節、第二節では検討する。そして第三節では、旅行記の記述は果たして対象を記述するためのものなのか、そしてその記述に信憑性が認められるにはどのような前提が必要かを議論する。この時予め真正性とは異なることを強調しておきたい。真正性はレトリックに関連しており、この点については第二部でも再度扱う。

第一節　「有用な知識」の占有と取引

商人や船乗り、職工、そして医師や護衛、軍隊は、初期近代以降の旅行文化の成立に深く関与すると同時に、知識の移動を長い歴史のなかで担ってきた主要なアクターである。彼らの移動はインフォーマントの移動を引き起こし、また彼らが移動するために不可欠な情報の収集も誘発される。Heinz Durchhardt は三十年戦争終結前後の時代に、この動向が強まったと考えている。彼がそのように考える根拠は、17 世紀半ばも過ぎれば多数のジャーナルが発行され書籍市が活況を呈し、ヨーロッパという一つの圏域を思い浮かばせるタイトルを冠した書籍は、およそ半世紀のうちに 550 に上ったという事実である[122]。

---

[121] Seifert, Arno (1983): „VERZEITLICHUNG“. Zur Kritik einer neueren Frühneuzeitkategorie. In: *Zeitschrift für Historische Forschung* (1983) 10: 4, S. 447-477. この論文で Seifert は Lepenis の時間化の帰結として「自然史の終焉」が 1800 年ごろに起こったという主張に対する異論を述べている。Lepenis の議論については以下の二つの文献を参照。Lepenis, Wolf: *Das Ende der Naturgeschichte. Wandel kultureller Selbstverständlichkeiten in den Wissenschaften des 18. und 19. Jahrhunderts*. München Wien; Hanser 1976.; Lefévre, Wolfgang (2018): »Das Ende der Naturgeschichte« neu verhandelt. Das Spektrum historischer Naturkonzeption in der Goethezeit. In: F. Bomski und J. Stolzenberg (Hg.) *Genealogien der Natur und des Geistes. Diskurse, Kontexte und Transformationen um 1800*. Göttingen; Wallstein 2018, S. 25-41.

[122] Durchhardt, Heinz (2015): *1648. Das Jahr der Schagzeilen. Europa zwischen Krise und Aufbruch*. Wien

初期近代には、ヨーロッパ外の情報であれ、ヨーロッパ内の情報であれ、それらは皆書籍となって主にオランダ商人が拡大した大陸内部の交易ルートを伝って循環することが可能になった。例を挙げれば、ヴェストファリア体制に少し先立って刊行が始まった、『ヨーロッパ劇場』*Theatrum Europarum* は 1635 年の第一巻初版から 1738 年の第二十一巻まで数名の著者によって書き継がれ、出版され続けた同時代史のジャーナルであり、扱われている時代は三十年戦争の開戦した 1618 年から 1718 年の 100 年である。このジャーナルにはヨーロッパ各地やその植民地の地理条件や天体現象も含めた気象、それから歴史的な出来事が俯瞰的かつ網羅的に記録され、図版も多く掲載されて臨場感ある演出がなされている[123]。

1700 年ごろ、地理学的な知識や各地域の最新の政治的動向、歴史は有用な知識の筆頭であった。そうした知識は若いうちに学ぶべき必須の教養でもあり、特に貴族や商人の息子たちは家庭教師の手解きのもとで、そうした知識を『ヨーロッパ劇場』のようなジャーナルを精読することで吸収することになる。このことを伝えてくれるのは、模範的な書簡の手引や宮廷恋愛小説を著し有名だった法学者アウグスト・ボーゼ（August Bohse, 1661-1740）が著した『貴族や市民の子息のための誠の家庭教師』*Der getreue Hoffmeister adelicher und bürgerlicher Jugend* (1706)である。

> Sodann/ wenn er ein wenig in die Höhe wächset/ muß ihm die Historie/ sonderlich von Carorlo Magno biß auff unsere Zeiten/ wie auch die Genealogien der vornehmsten Häuser in Europa, und sonderlich in Teutschland beygebracht; dann die Situationen der Länder/ Städte/ Vestungen/ Flüsse/ See-Häfen/ vermittelst darzu beqvemer Land-Charten/ bekañt gemacht warden/ da denn der Nutzen davon solchen jungen Leuten nicht besser in die Augen fällt/ als wenn ein Informator diese seine Untergebenen die wöchentlichen Zeitungen mit gutter Auffmercksamkeit lesen läst; den Ort/ woher sie geschrieben als Vernedig/ Wien/ Mantua/ Pariß/ Rom/ und so fort/ ihnen gleich in denen auff dem Tisch liegenden Charten zeiget: Die Flüsse/ […] ; auch die Fürsten und Generals-Personen/ so darinnen benennen werden[…].[124]
>
> 彼［子供］が少しばかり歳を重ねて成長したならば、そこで彼に説き明かされねばならないのは、歴史である。特にカール大帝から我々の生きる時代まで。同様にヨーロッパの、特にドイツにおける名家の系譜学も必要である。それから国々、都市、

Köln Weimar; Böhlau 2015, S. 18.

[123] Vgl. Schramn, Helmar (2003): Kunstkammer – Laboratrium – Bühne im „Theatrum Europaem“. Zum Wandel des performativen Raums im 17. Jahrhundert. In: H. Schramm, L. Schwarte, J. Lazardzig (Hg.) *Kunstkammer -Laboratoium – Bühne*. Berlin/ New York 2003.

[124] Bohse, August (1706): *Der getreue Hoffmeister adelicher und bürgerlicher Jugend*. Leipzig 1706, S. 21-22.

城塞、河川や港湾の位置関係を、わかりやすい陸地図を用いて熟知させられねばならない。というのも、教導者がこの自分が手解きを授ける者に、週刊誌を丹念に読ませる時ほど、そうした若者たちに、それらの知識の有益さが一目瞭然となることはないからである。例えばヴェネツィア、ウィーン、マントヴァ、パリ、ローマなど、その週刊誌が書かれた場所を彼らに、机に広げた地図で示してあげる。数々の河川［…］さらには諸侯や司令官たちの名前が週刊誌には以下のように挙げられている［…］。

この本は貴族や市民の子息が、宮廷や市民の社交の場で相応しい会話や所作〔conduite〕を実践できるように知らねばならないことを、家庭教師がいかに教導〔Information〕するかを説いたものである。実際に会ったり、会話のなかで現れたりする貴族や名士の名前、地名などを理解しないのは問題だというわけである。神学者・教育者として当時の典型的な学殖者としての人生を送ったヨハン・ゲオルク・ハーガー（Johann Georg Hager, 1709-1777）も『詳説地理学』*Ausführliche Geographie* (1746-1747)の第一部の序文の冒頭で以下のように述べている。

GOTT hat mich vor einigen Jahren in den Schulstand beruffen. Diesem Beruffe ein Genügen zu leisten, sahe ich mich verbunden, meiner anvertrauten Jugend, außer dem Unterrichte in andern Wißenschaften, auch eine Anleitung zur Geographie zu geben, weil es eine weltbekannte Wahrheit ist, daß ein junger Mensch ohne hinlängliche Erkänntniß dieser Wißenschaft auch nicht einmal seine Schulbücher alle verstehen kan. In den Geschichten fehlet ihm das eine Auge und in Gesellschaft die Zunge. Ein unerfahrner in der Geographie muß in Gesellschaft schweigen, wenn er seine Unwißenheit nicht schändlich verrathen will. Soll er die Zeitungen einmal lesen, so thut er es mit Furcht und Zittern, weil er gar leicht gefraget werden könnte; wo Paris, Madrit und London liege, welches er doch nicht weiß. Kurz: Die Erlernung der Geographie ist höchst nützlich. [125]
数年前神は私を教師という立場に召命した。この職を全うするために託された私の若者には、他の学科の授業以外に、地理学に関する手解きを与えることを自らに課した。というのも、若者というものは学科の十分な知識を持っていなければ、自分の教科書を全て理解することさえできないということは、世間一般に知られた真実であるからだ。歴史においては片方の眼が、社交においては舌が若者には欠けている。地理学に触れてない者は社交の場で、自分の無知で恥晒ししたくないと思えば、沈黙を余儀なくされる。そういう若者は一度新聞を読ませようものなら、そのために彼は恐怖と戦慄に襲われることだろう。パリ、マドリッド、ロンドンはどこにあ

[125] Hager, Johann Georg (1746-1747): *Ausführliche Geographie*. Chemnitz 1746, Vorrede.

りますかと彼が知らないことを全く気軽に質問されることだって十分ありうることだからだ。要は、地理学の学習は極めて有用だということである。

この些か戯画的に描き出された地理学に暗い青年の話は、確かに地理学の重要性を訴えるための作り話に過ぎないと考えることもできる。とはいえボーゼの記述と照らしてみれば、少なくとも地理の知識が教養あるものには欠かすことのできない知識であったことは確かだろう。もちろん彼の本を読めば、そこに書かれていることが通り一遍の辞書的な説明に限られていることはわかる。だが、辞書的な説明以上の知識を日常的に求められることはあまりなかっただろうし、その程度の知識でも持っていなければ恥をかくことになったのである

この時ボーゼであれハーガーであれ、教材に週刊誌を選定しているのは興味い事実である。というのも、地名や都市の位置など滅多に変わることのない知識がある一方で、ジャーナルで報じられる新たな情報が国や都市、町には生起し続けており、そのような知識を折々確認し、頭に入れておく必要があるからだ。当時世界的に知られていた地理学者ヨハン・ヒューブナー（Johann Hübner, 1688-1731）の名を冠して、ヒューブナーの息子によって編集出版されていた『ヒューブナーの四大陸網羅地誌』*Johann Hübners Vollständige Geographie aller vier Welttheile* (1733)に目をつけたゴットリープ・フリードリヒ・クレーベル（Gottlieb Friedrich Krebel, 1729-1793）は 1761 年に改訂版を出版した。ライプツィヒやドレスデンで活動したザクセン選帝侯領の上級収入役であったクレーベルによって、この本は改訂されすぎてもはや同じ本とはいえ無くなっていた。確かに古くなった情報を新しくすることが必要だったが、ヒューブナーの名で出版された地誌は信頼があって広く読まれていたため、内容がかなり相違してもなお同じタイトルを冠したと考えられる。

ヨハン・クリストフ・ガッテラー（Johann Christoph Gatterer, 1727-1799）の『地理学大綱』*Abriß der Geographie* (1775)も、基本的には辞書的な説明と、その先の読書案内からなっている。この本に関して興味深いのは、*historia* のような時間的知識を出版物して世に出すことの難しさに、すでに直面しているという点である。彼は「備考〔Vorerinnerung〕」で以下のように述べている。

> Da fast die Hälfte dieses Buchs […] bereits im Sommer des J. 1775 gedruckt war; so sind, nach der Weise geographischer und statistischer Sätze, inzwischen (bis in den April 1778) verschiedne damalige Wahrheiten in das Reich der jezigen Unwahrheiten hinüber gefallen. Diese sollen hier wieder in Wahrheiten umgeschaffen werden.[126]

この本のおよそ半分はすでに 1775 年の夏に印刷されていたため、地理学や統計学

[126] Gatterer, Johann Christoph (1775): *Abriß der Geographie*. Göttingen 1775. Vorerinnerung. S. I.

に関する文章の性質上、この間（1778 年 4 月に至るまでに）様々な当時の真実が今では不真実の領分に属するようになってしまった。こうしたものについては真実へ再度作り直されるべきである。

これに続いて、何ページにもわたる情報の訂正、時に誤植の訂正が羅列されている。真なる知識自体が変化してしまうために、彼は過去のデータを常に精査している。ガッテラーはこのようにして捌ける前在庫の自著にエラータを先んじて挿入しておくことを余儀なくされたとはいえ、それによって大枠を変更させることなく学問的大綱を示し、また刷り直しをすることなく済ませることができたようだ。

歴史における事実の認定には、幾らかの推定や判断の過程が介在している。歴史は書字資料や考古学的遺物を手掛かりに記述される。ヨハン・ゲオルク・モイゼル（Johann Georg Meusel, 1743-1820）が編纂した雑誌『歴史研究者』*Der Geschichtforscher* (1775-1779) から明らかなように、歴史自体が様々な証拠の検証や鑑定に基づいて記述されるものであるからだ。国や地域、あるいは教会や芸術に関して個別に記述される歴史学は同時期に成立した地理学や統計のような学問分野だけでなく、より伝統的な年代記〔Chronologie〕、系譜学〔Genealogie〕、貨幣学〔Numismatik〕、紋章学〔Heraldik〕、古代や言語に関する知識などが補助学問であると考えられていた。こうした学問は、伝承されてきたり、遺物として発見されたりした文書や物品を正しく扱うための技術でもある。モイゼルは自身の雑誌で「未知の歴史的な物品を調査すること、争点や曖昧な点を考察し解明すること、歴史的に重大な諸問題を解決すること、歴史書にある少なからぬ謬見を修正すること、古くから言われる真相を新たな、より優れた証拠によって確証すること、歴史上の蓋然性を確実性へ引き上げること［…］〔Forschung nach unbekanntem historischen Gut, Untersuchungen und Aufklärungen streitiger und dunkler Puncte, Auflösungen historisch-kritischer Probleme, Berichtigungen mancher Versehen in Geschichtsbüchern, Bestätigungen alter Wahrheiten durch neue oder tüchtigere Beweise, Erhebung historischer Wahrscheinlichkeiten zur Gewißheit […]〕」[127]が試みられると語る。このような資料に関与する作業それ自体は、ルネサンスの時代以来徐々に形成され[128]、法的な主張の論拠となる証拠に対する鋭い吟味は実証主義をその後裔とした。このような証拠の検討を重ねて厳密な歴史理解が求められるようになるのは、歴史は啓蒙的に、信じられてきた従来の臆断を破壊するためでもある。

Also sey uns genug, von der alten Geschichte solche Quellen zu haben, die uns

---

[127] Meusel, Johann Georg (1775): *Der Geschichtforscher*, Erster Theil. Halle 1775, S. 4.

[128] 以下を参照。グラフトン、アンソニー『テクストの擁護者たち：近代ヨーロッパにおける人文学の誕生』ヒロ・ヒライ監訳・解題、福西亮輔訳、勁草書房、2015 年（原書：*Defender of the Text: The Tradition of Scholarship in Age of Science, 1450-1800*. Harvard University Press 1991）。

Betrachtungen erweckten können, nicht zwar immer, daß diese oder jene Geschichten, von denen wir nie etwas gehört haben, geschehen sind, sondern nur Quellen, die uns entweder mit dem höchsten Grade der Wahrscheinlichkeit, darunter ich die sogenannt sittliche Gewißheit verstehe, begreiflich machen, daß die Geschichten, welche wir schon vor uns haben, wahr seyn können, oder mit vollkommner Gewißheit uns überzeugen, daß sie falsch sind.[129]

つまり、古代の歴史についての資料は、我々が聞いたこともないようなあの歴史、この歴史というのが現実に起こっていたという考えにめざめさせる資料が常に入手できるわけでないにしても、極めて高い蓋然性、つまり私が慣習的確実性と理解しているものをもって、すでに我々の目の前にある歴史は真でありうると我々に把握させるか、あるいは完全な確実性で、この歴史は偽であると確信させてくれる資料が入手できるだけでも十分であるとしようではないか。

こう論じてモイゼルは、少なくとも誤った歴史を阻却する極めて高い蓋然性と、可能であるとして容認するための、慣習からくる正確性への要求水準を提案する。少なくともそうすればあからさまな誤りを排除し、より確実な理解へ接近するだろうから。ここで重要なのは、積極的歴史像は、慣習的に考えてありうると感じられるに過ぎず、必然的に存在していたと確定されない点である。これは歴史が有用であるべきかどうかの問題に通ずる。彼はこの箇所では消極的歴史像の確実性で十分とし、それを踏み出た生き生きとした想像や自然法則に依拠して資料の欠陥を埋め合わせて叙述することを拒絶する。それゆえ続く箇所で自然史の内部に歴史を位置付けようとするトマス＝ジャン・ピション（Thomas-Jean Pichon, 1731-1812）の「歴史の自然学〔physique de l'histoire〕」の構想が歴史の有用性を主張したのに対し、モイゼルは歴史の正確性が有用性に優越すると反論した。

他方、同時代のイギリスで同様に知識の有用性が盛んに訴えられた時、そこでも臆断の破壊が要請された。臆断は、それが古くから伝えられた知識であるとしても、もはや無効な知識である。そして有効な知識こそが信頼あるという学問上のモットーを超えて、商業や工業における応用可能で、効率化や貿易黒字に貢献する発明が必要だという認識が広まった。有用性という社会的カテゴリーは単に個人の学問的認識や家政の改善以上に、国家規模の経済において実利益を生み出すことを意味するようになる。それが近代人の古代人に対する優越を証明するとダニエル・デフォー〔Daniel Defoe, 1660-1731〕は考えた。政治経済に関する考察を多数残した小説家デフォーも、1690 年ごろにスペイン、ポルトガルにて、銀行実務や徴兵制、女子大学などについて思索を深め、それらのアイデアを収めた『幾つかのプロジェクトについての覚書』*An essay upon several projects*

[129] Meusel, Johann Georg (1775): *Der Geschichtforscher*, Erster Theil. Halle 1775, S.39.

(1697)というエッセイを残している。彼は導入の冒頭で「プロジェクトを立てる時代（The Projecting Age）」と現代を呼んだ。

> Necessity, which is allow'd to be the Mother of Invention, has so violently agitated the Wits of men at this time, that it seems not at all improper, by way of distinction, to call it, The Projecting Age. […] yet, without being partial to the present, it is, I think, no Injury to say, the past Ages have never come up to the degree of Projecting and Inventing, as it refers to Matters of Negoce, and Methods of Civil Polity, which we see this Age arriv'd to.[130]
> 発明の母とも言われる必要は、この頃猛烈に男たちの機知を煽り立てたので、「プロジェクトを立てる時代」と呼ばれる区分を設けたところで、全く不適当というわけでもないように思われる。[…] とはいえ、現代を贔屓目で見ることなどなしに、一点の曇りもなくこう述べることができると思うが、交易の情勢や市民政治の方法に関する限りでは、過去の時代いずれも、この時代が到達したプロジェクトや発明の水準に匹敵していたことなど一度もなかった。

このように有用な知識を強く要請する社会的風潮はデフォーより 100 年遡る頃にすでに一般的であった。Stephen Gaukroger によれば、「実用的な知識と知識のもたらす実利への関心は、16 世紀のイングランドに際立って特徴的なことであった〔The concern with practical knowledge and practical benefits of knowledge was especially marked in sixteenth-century England〕」[131]。有用な知識を代表するのは東方との交易を通じてヨーロッパに新たにもたらされた火薬、活版印刷、羅針盤である。特に磁石や地理学的知識といった航海技術に関連するもの、あるいは新たな薬種など交易先で発見される新たな動植物は、その発見者が必ずしも学殖者ではなく実際に働いていた商人の従者や船乗りであったりもした[132]。ロバート・ノーマン（Robert Norman, - ）は「自然伏角〔natural inclination〕」の発見とその計測、航海術におけるその意義に関して報告した小冊子『新たな引力』*The Newe Attrctive* (1581)を著したことでのみ名が残っている。彼は伏角の最初の発見者ではないとされるが、船舶の運航において実用的なこの著作が極めて大きな影響力を持ったことは確かなようだ。

この風潮のなかでフランシス・ベーコン（Francis Bacon, 1561-1626）は主要な幾つかの著作で繰り返し経験の重要性を訴え、イドラを排除し実験共同体による知識の創造と

---

[130] Defoe, Daniel (1679): *Essays upon Several Projects: or, Effectual Ways for Advancing the Interest of the Nation*. London 1702, S. 1.

[131] Gaukroger, Stephen (2001): *Francis Bacon and the Transformation of Early-Modern Philosophy*. Cambridge; Cambridge University Press 2001, S. 14-15.

[132] Cook, Harold J. (2007): *Matters of Exchanges. Commerce, Medicine, and Science in the Dutch Golden Age*. S. 176-177.

自然の事実を収集することを主張し、さらに「要請リスト〔desiderata〕」を作成し期待される発明を奨励した。また知られたことだが、ベーコンは自然哲学の方法論を改造しただけでなく、観察や実験に従事する哲学者の心的・身体的な規範を提示した。研究に従事する際に冷静に身体や心情を自己制御する能力は、彼にとって自然哲学者の規範であった[133]。こうして彼は自然哲学を根底から改造した。そしてこの改造の中心には「有用な知識〔useful knowledge〕」を据えていた[134]。

しかし収集される多数の証言や証拠といった経験的な知識が相反する内容を有する時、どのように吟味すべきか、つまり知識帰属が真であるための保証が必要になる。そのような知識は、経験的であるが故に時間的であり、また適用可能性も限定的にならざるを得ない。有用な知識は、それが約束する結果が生じなかった時嘘とみなされるだろう。事実当時の事典に「企画者〔projector〕」を誹る記事があるのは普通のことである。マラカイ・ポッスルスウェイト〔Malachy Postlethwayt, 1707-1767〕の『交易通商大全』*The Universal Dictionary of Trade and Commerce* (1757)には、「企画者（Projector）」の見出し語には、「パブリックデザインを考案し、図案を作り、形作る人〔one who contrives, schemes, or forms any public design〕」との規定があり、彼らは金銭という生きる上で欠かせないものを求めていることを指摘している[135]。また彼はデフォーの見解、「この種のプロジェクトは、疑いなく、公衆一般において有益であり、交易や貧者の雇用、王国の公開株式の取引と増資を改善する傾向を有する〔Projects of this nature have been doubtless in general of public advantage, as they have tended to the improvement of TRADE, AND EMPLOYMENT OF THE POOR, and the CIRCULATION AND INCREASE OF THE PUBLIC STOCK OF THE KINFDOM〕」をそのまま転載している[136]。しかしドイツ語圏ではポッ

---

[133] Gaukroger, Stephen (2001), a. a. O., S. 52.

[134] Ebenda, S.14-15.; Keller, Vera (2015): *Knowledge and the Public Interest, 1557-1725*. Cambridge; Cambridge University Press 2017, Introduction/ Chapter 5.

[135] Postlethwayt, Malachy (1757): Projector. In: *The Universal Dictionary of Trade and Commerce*, Vol. 2. London 1757.

[136] Ebenda. この事典は概ねジャック・サヴァリー（Jacques Savary, 1622-1690）の『商業大全』*Dictionnaire universel de commerce* (1723)に基づいていると言われるが、サヴァリーの事典に「企画者〔projeteur〕」の項目はない。念のため仏仏辞典を引くと、projeteur の語は遅くとも 1774 年には使用例があることがはっきりする（https://www.cnrtl.fr/definition/projet）。ここで問題となるのは、サヴァリーの事典のカール・ギュンター・ルドヴィッチ（Carl Günther Ludovici, 1707-1778）によるドイツ語訳である『商人のための一般宝典、あるいは商業工業大全』に「企画者〔Projectenmacher〕」の見出し語があるという事実である。従って、ポッスルスウェイトによる事典出版より早くに出版されたこの翻訳が、「企画者」の項目に関して先行していたことは確かである。このことから多くのヨーロッパ言語へ翻訳されたサヴァリーの事典は、その翻訳の過程で少なからぬ改編・補訂が加えられ、様々なヴァリエーションが存在し、また互いに影響を与えていた可能性もあり、ポッスルスウェイトはそのようなヴァリエーションを参照していた可能性が高い。

スルスウェイトの書いたような、肯定的な記述は抜け落ち、否定的に理解されていたようである。というのは、ジャック・サヴァリー（Jacques Savary, 1622-1690）の辞典のドイツ版である『商人のための一般宝典、あるいは商業工業大全』*Allgemeine Schatz-Kammer der Kauffmannschafft: oder vollständiges Lexicon aller Handlungen und Gewerbe* (1741-1743) に掲載されている Projectenmacher の項目には悪評が散々書かれているからである。

> Projectenmacher, heissen insgemein diejenigen, welche den Leuten dieses oder jenes Project, davon sie sich vor den Erfinder ausgeben, entdecken, und sie zu deren Ausführung unter scheinbaren Vorstellungen eines daraus zu erwartenden grossen Gewinstes anermuntern. Einem solchen muß man nicht so gleich Gehör geben, weil sie insgemein Betrüger sind, vielweniger Geldsummen seinen hochherausgestrichenen Vorschlag damit auszuführen, geben denn das und nichts anders ist es öffters, was solche Leute intendiren. Solche Projectenmacher wagen sich öffters an hohe Häupter, und hat ein Minister hier bey alle Behutsamkeit anzuwenden, daß er erforsche, ob sein Landesherr mit einem ehrlichen Manne oder einem Betrüger zu thun habe […][137]
> 企画者とは、総じて人々に、自らがその発明者だと称する、あれやこれやの企画を披露して、そこから期待されるはずの巨大な利益という見かけだけのイメージのもとで、企画の実行のために人々を焚き付ける。そのような企画者に聞く耳を持つ必要はない。というのも、そういう奴らは総じて詐欺師だからである。あるいは、その人物が散々自画自賛している提案を実行するための大金を与える必要もない。というのも往々にして、それこそが、他ならぬ彼らの思惑に他ならないからだ。そのような企画者たちが敢えて高位の領主に接近することはよくあることだ。そこで大臣は思慮という思慮を重ね、自らの領主が誠実な男と関わっているのか、あるいは詐欺師と関わっているのかを見極めねばならない。

ドイツ語圏ではどうやら私利私欲のために嘘の企画をぶち上げる人のことを「企画者」と呼んでいたようだ。企画者が提供した知識が失敗した時には、その知識はもとより、その保証が嘘だったと考えねばならないことが、ここでの根本的な問題である。原因の検証は常に必要だが、権原付与が誤りであるのか、正当化が誤りなのか、それとも単に証拠が証拠たり得ない仮初の現象に過ぎなかったのかを判断することは、証拠が時間の経過や管理状態が悪くて変質してしまったり、証言者がわずかであったりすることが一般的であったこの時代にあって、困難である。この時社会的カテゴリーは企画者と企画

---

[137] Savary, Jacques (1741-1743): *Allgemeine Schatz-Kammer der Kauffmannschafft: oder vollständiges Lexicon aller Handlungen und Gewerbe.* Leipzig 1741-1743, S. 1176. 実の所この記事は、著者ルドヴィッチが、ツェードラーの百科事典の共同執筆者の一人として書いた記事を転載したものである。従って初出は 1732 年ということになる。

者に投資する者の間での、取引に関する意思決定に重要な影響を及ぼしたと考えられる。

仮に自然学に関する真なる知識であったところで、その証拠を提出することは、この時代は困難であっただろう。技術的な水準からして、この時代に事実を観察された時点のまま保存し、収集することは困難であった。隙間なくはまる蓋のついた陶製のポットやプレパラートの作成技術によって改善は見られたが、自然史の標本や剥製を遠方から新鮮なまま運ぶことは難しかったであろうし[138]、図版もどのように描けば「自然に忠実」[139]であるかは規範的、美学的に判断されたとはいえ、それ自体哲学的な問題を避けることはできない。

有用な知識という社会的カテゴリーが特定の集団内で力を増す時、仮に「事例記録〔historia〕」という実例に依拠した経験的で記述的な知識にも、それが知識として正当ならば、応用を通じた効用が期待される。Vera Keller によれば、「ベーコンはしばしば経験的客観性のパイオニアとして賛辞を送られたり誹られたりするが、他方で彼のウィッシュ・リストは経験的なものでもなかったし、客観的なものでもなかった。それは現実を記述したものではないが、現実に欠けているものを記述したのである〔While Bacon is often either celebrated or defamed as a pioneer of empirical objectivity, his wish lists were neither empirical nor objective. They did not describe reality, but the lack thereof.〕」[140]。従って *historia* は時に自然学的に根拠づけられ、過去の出来事の記述であることを超えて、プロジェクトの立脚点となる知識に変化させられるのである。

第二節　秘密と嘘

そこで自然の事物が持つ論理とはどのようなものかが問題となる。つまり、自然にもデカルト的な立地点がありうるのかどうかが問題となる。だがそれ以前に自然界に何が存在しているのかを規定する概念が、新たな自然物の発見が連続しているなかで十分に用意されてはいなかった。自身ラムス主義やレイモンド・ルルス（Ramon Lluli, 1232-1315）の影響下で論理学的な普遍知や普遍言語を構想し、また鉱山開発や衛生学、言語研究を本来の目的としたシベリア探索などの様々な学問上のプロジェクトを打ち立ててきたゴットフリート・ヴィルヘルム・ライプニッツ（Gottfried Wilhelm Leibniz, 1646-1716）は、彼が目指す普遍知を妨げる *historia* の曖昧さを解決したいと思っていた。彼を悩ませていたのは、*historia* に属する知識を構成する種別（species）の概念は、実際には極めて多様な容貌をしているが、自然の個物からどのようにすれば種別の概念を適切に作り出すことができるのか、という問題である。彼は自然研究、倫理学、医学、政治学、神学によって用いられるその概念が、数学者や論理学者とは異なって規定されていることに気づいた。彼は「医療論理学〔Logique Medicinale〕」を構想することさえしたが、結

---

138 Cook, a. a. O., S.268f.

139 Vgl. Daston, Lorraine/ Galison, Peter, a. a. O.

140 Keller, a. a. O., S. 129.

局のところ医学分野から生じた「症例報告〔historia〕」には怪しげな知識が多く混ざっていると指摘しただけであった[141]。Ralph Häfner は以下のようにライプニッツの見解をまとめた。

> Vielmehr komme dieser Logik, so Leibniz, bei der Auffindung der Heilmittel die als Erfahrungsschatz verfügbare Geschichte der Medizin zu Hilfe, weil sie die faktischen und empirisch gesammelten Kenntnisse über den Heilungsvorgang tradiere. Empirie und Charlatanerie, so schloß er diesen Gedanken ab, liegen hierbei aber nur allzu nahe bei einander. [142]
>
> ライプニッツ曰く、むしろこの論理学には、治療法を発見する過程で、見聞の蓄積として利用可能な医学の症例報告が役立つが、それというのも、症例報告は、事実に即して経験を通じて収集された治療過程に関する知識を伝えてくれるからである。とは言えこの時、経験科学とペテンは非常に近い関係にあると彼はこの考察を締めた。

ライプニッツは種別の曖昧な規定が、自然研究から医学や政治学に至るまでの記述的知識を不完全なものにし、この不完全さは自然界の構造と知識のための論理構造が一致しないという形而上学的な次元で理解される必要があるとはいえ、その隙間に山師のでっち上げが入り込むことがあると考えていたようだ。自然研究や医学、政治学においては特に有用性が求められる分野であり、その実践は同時に検証でもあった。だが種別の概念が明晰に規定されない限り、原因と結果の推定は全く用をなさない。

イマニュエル・カントが『純粋理性批判』*Kritik der reinen Vernunft* (1781/87)で、「医師〔Arzt〕」「判事〔Richter〕」「政治家〔Staatskundiger〕」のように優れた判断力を持っていることで初めて一般的規則を現実に適切に適用できるような分野においては、実例〔Beispiel〕は判断力を鋭くし、有用であると述べている。つまりカントからすれば *historia* のような知識は、「判断力の歩行器〔Gängelwagen der Urteilskraft〕」である。とはいえ、カントが強調するのは、生まれつき判断力が鈍いもの、つまり愚鈍であるものには、実例は有用ではないということである[143]。結局、知識の保証を証拠に求める時、使用者の自身の検証を可能にする生得的な能力も問われることになる。無論、ある人物がある知識を有していると主張する権原は実行的に付与されうるため、その人物の判断は正しいのか、それとも誤っているかどうかが、やはり根本的な問題として検証される必

---

[141] Häfner, Ralph (1995): *Johann Gottfried Herders Kulturentstehungslehre. Studien zu den Quellen und zur Methode seines Geschichtsdenkens*. Hamburg; Felix Meiner 1995, S. 30-31.

[142] Ebenda.

[143] Kant, Immanuel (1781/87): *Kritik der reinen Vernunft*. Frankfurt am Main; Suhrkamp 1974, S. 185 (B173, 174/A134, 135).

要がある。

つまり問題は二つで、出来事を明瞭に記述する概念や因果関係の推定方法に欠けている知識や、正当かもしれないが使用者の稚拙さによって保証を失う知識である。言い換えると曖昧な理解しかなかったり全く新奇な状況で観察・記述したりする人間や、単純に愚かである人間をペテンと分けるのは何かがここで問われているのである。この時問題を難しくしているのは、*historia* の知識は、知識の種類や受容者の状況次第では、検証するための証拠にアクセスできないということである。そして、そうした検証できない *historia* の代表が旅行記や博物誌であった。

では当時の旅行記や博物誌の叙述について、虚構と事実は本当に区分されるのだろうか。証拠の検討ができないとすれば、むしろ可能的証拠にアクセスが可能かどうか、そして叙実性の前提を許容できるかどうか、という問題になる。するとここでは著者自身がインフォーマントから受け取る、受け取り方が正しいかではなく、少なくとも受け取ったものを正確に伝えるつもりがあるか、つまり著者は秘密や嘘を作り出さない態度であるかを参照する必要がある。その上で、仮に虚構であろうが事実だろうが、特定の「世界」における様相は一貫して理解されるべきなので、語られている「世界」における正確さだけが問われることになる。

ではこれはカントが嫌悪したような、瞞着としてのレトリックだけが問題なのだろうか。そうではなく、ここで主張したいのは、嘘と秘密が生じうる場面においては、知識のやり取りに際しては、双方の社会的カテゴリーが中心的な役割を果たすということである。ツェードラーの百科事典には嘘〔Betrug〕という概念の定義[144]以外に、「他人を騙す嘘つき〔Betrüger, welcher einen andern betrügt〕」という項目がある。

> Insonderheit aber wird dieses Wort unter den Zoll- und Accis-Einnehmen in folgenden Verstand gebraucht; Dieser oder jener Kaufmann ist ein Betrüger von Profeßion, an statt zu sagen, er läßt Tag für Tag Waaren heimlich ein und ansschleppen; oder auch, nehmet euch vor ihm in Acht, es ist ein Betrüger, um dadurch zu verstehen zu geben, daß er nichts sparet, um entweder seine Waaren bey den Einnahmen gar nicht anzugeben, oder doch nicht die schuldigen Gebühren zu bezahlen. [145]

しかし特にこの言葉［嘘つき］は関税収入係の間では、以下のような意味で使われ

---

[144] Zedler, Johann Heinrich (1731-54): *Universal-Lexikon*, Bd. S3. Halle und Leipzig 1731-54, S. 1032. „Gleichwie die Lateiner zwei Wörter, dolum und frandem, haben, welche aber durch den Gebrauch verwechselt werden: also finden wir bey den Teutschen gleichfalls Betrug und List. ... Man kann gar füglich diejenigen falschen Vorstellungen, wodurch der andre Schaden empfängt, Betrug; die andern aber, welche zu einem guten Endzwecke vorgenommen werden, List nennen. Doch ist nicht zu leugnen, daß Betrug überhaupt alle falsche Vorstellungen anzeiget."

[145] Ebenda.

ている。あれやこれやの商人はプロの嘘つきみたいなものだ。奴らは自分が毎日商品を秘密裏に搬入させたり搬出させたりしているとは言わずにいるんだから。あるいは、そいつは嘘つきだから気をつけろよというような意味で。それは、自分の商品のことを納税時に何も通知しないためなら、あるいは、負うべき税金を支払わないためなら何も惜しまないということを仄めかしているのである。

ここで例に挙げられているのは、関税をとられないように商品を一部隠して市に向かう商人のことである。関税を取る官吏はこの時、個々の商人に警戒しておかなければならない。また、官吏に対しては商人も注意を払う。そのような互いの社会的カテゴリーを前提に駆け引きが起きているのである。*historia* の証拠を検証する術がない時には、このような駆け引きが同じように起きていると考えられる。

カントがバンジャマン・コンスタンへ再反論した「嘘論文」について、詳細は割愛するものの[146]、そこでカントが主張しているのは、主観的な真実〔Wahrheit〕ないし「信実〔Wahrhaftigkeit〕」に関しては、それを要請された時には応えなければならないという原理こそが、嘘の禁止の根幹にあるということである。

カントが嘘やレトリックに関して批判しているのは政治的な便宜のための嘘、あるいは便宜としての嘘や黙秘を用いた秘密である。信実を明らかにするよう要請された場合、それに答えないことは結果的に嘘を禁止するという法則に反する。カントは、社会は契約から成り立つと考えるので、自らの便益のために求められた信実に代わって嘘や秘密で返すことが蔓延すれば、いずれ契約関係自体が消失し、掘り崩されてしまうのである。だからカントは道徳的に遵守されるべき義務を、政治的な意図に左右される権利に対して優先させた。

とはいえ逆に嘘や秘密によってこそ構造的な権力が生じる社会を想定することができるだろう。つまり、*historia* は、それがそもそも検証不可能なものである時には自ずと秘密を作り出してしまうので、真実を語るためにさえある種の嘘が必要になってしまうだろう。Aleidda Assmann und Jann Assmann の以下の見解は、この節の議論を締め括るのに打って付けである。つまり、彼らによれば「知識というもの、並びにその社会的分配の境界は、単なる無知状態との間ではなく、手元に控えて置かれた知識、つまり秘密との間にある。秘密こそが結合すると同時に排除する原理として社会に構造をもたらす〔Die Art des Wissens sowohl wie seine gesellschaftliche Verteilung sind begrenzt nicht gegenüber dem bloßen Nichtwissen, sondern gegenüber dem vorenthaltenen Wissen, dem Geheimnis, das im Sinne eines zugleich verbindenden und ausgrenzenden Prinzips Struktur in die

---

[146] 嘘論文については以下の論文が概観するのに有用である。小谷英生「政治に対する道徳の優位――いわゆる『嘘論文』におけるカントのコンスタン批判について――」『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編』第 67 巻、2018 年、77-86 頁。

Gesellschaft bringt〕」[147]。

第三節　旅行文学の信憑性

旅行記の構造主義的な分析をレビューした Michael Harbsmeier は、旅行記は「想像された我ら〔imaginäres Wir〕」の自己提示として読むことができると主張する。彼の分析から明らかになるのは、ヨーロッパから非ヨーロッパ世界を見たときに、「書字文化の『私たち』〔schriftliche „wir"〕」と「口頭口述文化〔mündlich-orale Kultur〕」、「定住民〔Seßhafte〕」と「遊牧民〔Nomaden〕」、つまり文明と野蛮の対構造が前提とされているということであった[148]。そして旅行記を無批判で出鱈目な史料として片づけてしまうのではなく、このような西洋文明を特徴付ける巨大な構造が作者の「告白」として、つまり意図しない自己提示として見出されるテクストとして捉え直すべきであると彼は考える[149]。詳細な旅行記の分析はこうした構造以上に、心性史〔Mentalitätsgeschichte〕に手掛かりを与えるというわけである。彼によれば、ヨーロッパ外の世界とヨーロッパの対立の中で書かれた旅行記を通じてなされる「『告白』はそれゆえ、自発的な文化的自己提示と、文字を持つというマイノリティーとしての意識的な文化的自己理解の一つの表象を形作ることを可能にする〔„Bekenntnisse" machen es daher möglich, uns eine Vorstellung der freiwilligen kulturellen Selbstdarstellung und des bewußten kulturellen Selbstverständnisses schreibkundiger Minderheiten zu bilden〕」[150]。結果的に Harbsmeier は、「旅行記は［…］他者の文化を自己の文化へ翻訳したものと理解され得ず、多数の他のジャンル、メディアに由来する社会構造的によって変奏されたイメージや断片を旅行記

---

147 Assmann, Aleida/ Assmann, Jan (1997): Zur Einführung. In: dieselb. (Hg.) *Geheimnis und Öffentlichkeit.* München; Wilhelm Fink 1997, S. 7-16, hier S. 8.

148 この対立自体興味深いものであるには違いない。移動者に対する偏見が、農耕牧畜文化を継承してきた一つの文化圏であるヨーロッパに根強く存在してきたならば、旅行文化が成立したこと自体やはり興味深い転換である。とはいえ旅行は定住を前提としているし、第二部で見るように、定住を前提としたところで旅行者に対する風当たりは 18 世紀に入ってもなお強かったのも事実である。とはいえそこで旅行が謗られるのは、それが無意味な散財であるという見解に基づいてである。このことは、消費文化の中で旅行は移動の例外的な形態となったこと、そして旅行者は移動者から分岐した独自の社会的カテゴリーとして確立する必要があったことを示唆する。旅行はその限りで顕示的消費や娯楽の一種であり、その作法が適切である限り旅行者は怪しげな移動者ではなく、ヨーロッパの一部の文化圏に所属する正統な人物であると示すことができたはずである。

149 Harbsmeier, Michael (1982): Reisebeschreibungen als mentalitätsgeschichtliche Quellen: Überlegungen zu einer hisrtorisch-anthropologischen Untersuchung frühneuzeitlicher deutscher Reisebeschreibungen. In: Antoni Mązak und Hans Jürgen Teuteberg (Hg.) *Reiseberichte als Quellen europäischer Kulturgeschichte. Aufgaben und Möglichkeiten der historischen Reiseforschung.* Wolfenbüttel 1982, S. 1-32, hier S. 1-12.

150 Ebenda, S. 11.

というジャンル、メディアへ転化したものとみなされる〔Reisebeschreibungen können in dieser Perspektive nämlich nicht so sehr als Übersetzungen fremder Kulturen in die eigene aufgefaßt werden, sondern als Übertragungen der Fragmente und Bilder soziokultureller Variationen aus der Vielzahl der anderen Medien und Gattungen in das Medium und die Gattung der Reisebeschreibungen.〕」[151]と結論した。

このような見解は確かに理解できるものである。しかし、物語論に基づく歴史叙述の相対主義に関する議論と同様に、そのようなレトリック分析に収斂してしまう読解の手続きは本当のところ真理という超越を絶対的かつ不可知的として片付け、実証や論証に対する要請を放棄してしまうことすらある。その原因は構造主義や物語論自体に内在しているものではないだろう。むしろそうした見解から心性史やイデオロギーの問題に飛躍し、書かれたもの、作者、作者が想定している読者や作者の地位や属性といった歴史的な性質自体は、時代的な心性に溶けて消えてしまう。実証主義や解釈学からしたらこれは倒錯だろう。Peter Brenner が指摘するように、「旅行記は必ずしも世界の経験を自己の経験の形式として提示する必要はない〔Der Reisebericht muß nicht immer ›Welterfahrung‹ als seine Form der ›Selbsterfahrung‹ vorstellen〕」[152]。

この時、知識の移動に二つの形式、占有形式と取引形式があることを強調したい。例えば現代に生きる人々が、16 世紀に書かれたハンス・シュターデン（Hans Staden, 1525-1576）のブラジル旅行記『真実の物語』*Warhaftige Historia* (1557)を読んだ時、その酸鼻極まる内容や滑稽な話ぶりには虚構が多く混ざっていると感じられるだろう。しかしそのような虚構を検証する術は、当時の、そして当然現代のヨーロッパの読者にはない。むしろシュターデンは事実ブラジルへ渡っている。実際にブラジルに滞在したという事実に照らせば、著者がそこで認識した事柄を物語る時、彼がそれを真実と断る以上、彼がその知識を有することに関して実行的な権原が生じている。彼は自分が語るブラジルの印象について知り得ないことはなかったはずである。加えて多くの図版も効果的だろう。しかし我々がシュターデンの記述をもとに何かを実践しようとする時失敗するだろう。例えば彼が記している距離と方角に沿って旅行して再現できるかどうは怪しい。彼の他にほとんどブラジル旅行記がない時点では、読者は「作者は事実を語っている」という点が問題になることはあっても、「作者が語っていることは事実である」が問題にされることは本来的に可能ではない。逆説的ではあるが、そのような状況にあって、真実の話と書かれていたところで、一従者の常識はずれの冒険譚を本当に歴史上、地理上の現実と考えるほど当時の読者は素朴だったとは思えない。あるいは著者自身もそうであってほしいと望んでいたかは疑わしいだろう。

ここで差し当たって旅行文学〔Reiselitreratur〕という言葉を用いるのは、旅路を舞台

---

[151] Ebenda, S. 16.

[152] Brenner, Peter (1990): *Reisebericht in der deutschen Literatur. Ein Forschungsüberblick als Vorstudie zu einer Gattungsgeschichte*. Tübingen; Max Niemeyer 1990, S.34.

とした明白な虚構、虚構として書かれたか、虚構を織り交ぜた旅行記、嘘を信じ込ませるためだけのレトリックに満ちた旅行記、事実の報告を目的とした旅行記、穏健な美文の規範に沿った旅行記など様々な旅行を扱ったテクストを包括するためである。そこで問題となるのは、物語や叙実的な記述は、いずれも何らかの知識を伝達するものであり、読者はそれを二つの形式で受け取る。著者はテクストを制作し、公開し、それが読者に入手可能で、能力的、社会・文化的、宗教的に可読可能であった時、無条件に、実行的に知識の移動を保証する占有形式が一つ。他方、その知識が真実であることを要請し、検証する限りで、読者もまた自らの理解が著者の意図を汲んでいるかの検証にかけられるし、書かれていることをねじ曲げないよう要請される取引形式がもう一つである。

虚構において著者は絶対的な権威である。著者が信用ならない作者であろうと解釈を決定する存在ではなくなろうとも、またクトゥルフのように共同的な神話の形成にあろうとも、彼らが物語る世界に直接かつ最初にアクセスしているのは個人の／集団の作者である。制作に直接関与していない聞き手にとって、その世界を知る通路は個人の／集団の作者によって与えられるのである。そのような世界があることを読者は物語に触れるまでは知らないし、手元の知識から推論することもできない。これはコロンブスの新大陸とプラトンのアトランティスとの決定的な違いである。とはいえこのことは、コロンブスが現実を正しく伝えている、あるいは伝えうることを意味はしない。もちろん伝えようとはするだろう。この点については第二部第一章第二節で再度取り上げる。

著者の意図がどうであれ、彼らが自らの経験や考察を事実として物語る時、読者がその世界にアクセス可能であれば慎重にならざるを得ない。読者は検証することができる。しかし読者がその知識の源泉にアクセスできないと考える限りでは、著者は大胆になることも可能である。旅行文化が社会に浸透すればするほど、そして共通の目的地が旅行されればされるほど、著者と読者の間で交わされる知識のやりとりは、占有形式から取引形式へと変化せざるを得ない。旅行案内や手引は、まさに旅行文化の浸透とともに成立する書籍の形態であるが、その情報の正確さは単なる旅行記よりも強く要請される。

この点はすでにツェードラーの事典でも「旅行記〔Reisebeschreibung〕」の項目で、以下の様に指摘されていたことである。

> Man hat die wahren von denen, so fingirte Reise in sich fassen, wohl zu unterscheiden. Die ersteren, deren an der Zahl gewiß nicht wenige im Drucke zum Vorschein gekommen, haben ihren gantz guten Nutzen, wenn sie von einem, der Wahrheit liebet und Wissenschafften besitzet, abgefasset worden sind, in allen Arten der Geschichte. Es find aber dergleichen wenige vorhanden und die schlechten haben dagegen viele Fabeln in die Historie gebracht. Man darff sie also nicht ehe zur Ergäntzung der Historie gebrauchen, als biß man sie auf eben dem Probir-Stein, darauf man andere historische Bücher zu probieren hat, als gut und

glaubwürdig befunden. [153]

真の旅行記と、捏造された旅行を綴ったものとは十分に区別されねばならない。前者、つまり真の旅行記は、数としては少なからず出版されてきたが、それが真実を愛し学のあるものによって書かれた場合には、どのような種類の物語であれ有益である。しかしそのようなものはわずかしか存在せず、逆に悪質なものが多数の作り話を事実の叙述に持ち込んでいる。当該の事実の叙述を別の諸々の歴史書を検証するのに用いたのと同じ試金石に乗せ、優れておりかつ信用すべきとわかるまでは、そうしたものを歴史に加えてはならない。

ここでツェードラーは、旅行記は事実を告げるべきという規範を前提にする。つまり、叙実性を認めようというわけである。従って彼はその出版物が人々によく読まれているものか、という点、そして他の旅行記を検証し、その検証によって真偽を判定できると明らかになっている方法と同じ方法で内容の真偽を判定することができるかどうか、という二点が重要である。しかし証拠へアクセスできない以上、これまで真実と認められた旅行記との比較を通じた整合性の検討や、読者がどの程度信用することができるかといった基準に従って、著者に対する知識帰属の保証として、著者が当該の事実を証言する立場にあり、実行的な権原を持つことを承認するのである。

1800 年に迫る頃には旅行者も増大し、それに応じてスタンダードな旅行記も多数出版されていた。しかしそれら無数の旅行記を細かく比較検討することは普通困難であるので、旧来の旅行記を網羅的に検証して信頼ある旅行案内を作成したヨハン・ヤーコプ・フォルクマン（Johann Jacob Volkmann, 1732-1803）の旅行記シリーズや、あるいは読み物としての性質を捨て、より簡潔で斜め読みでも必要な知識を手に入れることができるような、カール・ベーデッカー（Karl Baedecker, 1801-1859）のガイドブックシリーズは出版されるや人気を博した。これら使用するための旅行記や旅行案内は、比較対象の増大や趣味の洗練といった一定の認識的アセスメントに照らし作成され、旅行者の増大によって情報の流通性も高まっていたことから十分に検証もされるようになる。特にベーデッカーのガイドブックシリーズは現代に至るまで改訂を続けながら出版が続き、ガイドブックは、初期近代の旅行文化には不可欠だった案内人や護衛、その他の従者、そして彼らに支払うべき高額の費用から旅行者を解放することになる。つまりマスツーリズムが始まる頃には、情報流通や交通インフラの整備によって、「一人きりの時間のため」の、しかしより均質的でありふれた娯楽体験をもたらすレジャー旅行へと移行することが可能な社会的条件が整っていたのである[154]。

他方、そのような旅行記が現れることで、規範的な書簡のような美文で著される旅行

---

[153] Zedler, Johann Heinrich (1731-54): *Universal-Lexikon*, Bd. S31. Halle und Leipzig 1731-54, S.362

[154] Peel, Victoria/ Sørensen, Anders (2016): *Exploring the Use and Impact of Travel Guidebooks*. Bristol Buffalo Toronto; Channel View 2016, S. 37-38.

記は、独自の地位を持つことになる。そこには実用的な、つまり興醒めする細かな情報を記述する必要はもはやない。詩的な文章を書き、あるいは神話的な風景描写を取り入れ、著者として、自らの旅行の経験を美的に提示する。そこに実用性はない。単にその著者たちの、しかし彼らだけが語りうる経験や趣味の領域、あるいは著者の人生における旅行経験の意義を明らかにするような、追憶の記録である。そのような旅行記を読む目的は、もはや文章自体を、そして追体験を楽しむことであるからだ。

第四節小括

第四章では第三章で提起した枠組みを用いて、初期近代における「有用な知識」の思想史的問題、そして「有用な知識」のうち *historia* に依拠する知識の裏側に存在する嘘や秘密の認識論的問題を扱った。またこうした議論を踏まえて、旅行記の記述、特にその真偽と有用性に関する理論的問題を論じた。こうした認識論的問題は、さらに第二部で詳細に論じる認識的節約の原理と対応している。それゆえ第二部では、旅行記の叙述様式が変化していく過程を説明する上で、旅行者がどのように自己提示するのか、どのような旅行記を表すか、ということを前提に、後続する旅行者が、先行する模範的旅行者から選択的に模倣する上で、その選択に影響を与える社会的カテゴリーと、叙述内容の取捨選択に影響を与える認識的節約の原理が問題となる。

第一部結論

第一章から第三章にかけて、制度、移動、知識という人類普遍的な現象に関して、それらの歴史を記述するとはどのような概念的な理解が必要かを論じてきた。また第四章ではそれを通じて提起した概念的な道具を用いて思想史、そして旅行記というテクストにアプローチした。

第一章で論じたように、社会的カテゴリーは文化的学習の能力によって獲得される。文化的学習とは、意図を伴う選択的模倣のことであり、そこに制度や規範を備えた社会集団が形成されるための生物学的な基盤があると考えられた。そして文化的形質や生態学的遺伝といった文化進化やニッチ構築理論で提唱されている、社会集団内で継承される人工的な遺伝物のうちに慣習も含まれる。慣習は協調問題を解決する均衡選択によって成立する行為パターンである。この行為パターンに従うことについて、集団の成員が特定の選好を持つこと、あるいは懲罰などを伴い強制することへの選好を持つことなどが認められる時、協調ゲームにおける役割と選好の割り当てに対応するタイプに、社会的カテゴリーは対応している。

従って社会的カテゴリーは、公式にであれ非公式にであれ、共有された価値判断や意図を含んで、対象を認識するよりも前に、つまり事前に特定の判断や選択に至るように人々を方向付ける知識である。換言すると、協調問題を解決しようとする集団を構成する成員はそれぞれ、自己規定の道具として社会的カテゴリーを用いることになる。

第二章で論じたように、移動という現象には種々の社会カテゴリーの影響下にある。移動の人間学的規定からも示唆されるのは、移動においても協調問題が解決される必要があるということである。このことは、歴史上移民や旅行者といった独自の社会的カテゴリーに対応した人々によってなされた、独自性のある移動現象が成立してきた過程において、移動者が情報経路に依存して移動の経路や手段を決定していたという歴史的事実に照らせば、どのような先行する移動者を模倣するかの選択に極めて大きな重要性があると考えられた。その限りで、初期近代まで移民と旅行者はそれほど異なる移動形態を有していたわけではないが、その時代にこそ、規範が分立することで旅行者という独自の社会的カテゴリーが成立したと考えられる。この過程については、第二部で当時の種々のテクストに依拠して論証していくことになる。

第三章では知識の歴史を記述する方法を検討した。知識史においても制度史と同じように進化生物学や学習理論を取り込む必要があるという見解を端緒に、認識論における外在主義を批判しながら、内在主義を一種のメタ的な検証を可能にする態度として、認識的合意に至るための閾値を設定する必要があると考えられた。そのような閾値は知識それ自体、あるいは知識を構成する諸要素に適用される社会的カテゴリーによって変化するだろうと考えられる。つまり、こうした知識の保証が問題となる際には、知識が移動する場面が前提とされるが、その移動の形式は社会的カテゴリーに左右されると考え

られる。その形式には、占有形式と取引形式という二つがありうると指摘した。占有形式では知識の提供者と知識を提供される人という、知識を保証する二つの要素に適用される社会的カテゴリーが問題となる。他方取引形式では知識の依拠する証拠と知識の提供者に適用される社会的カテゴリーが問題となる。

このことは第四章で見た有用な知識の概念について論じた際にはっきりした。つまり、有用な知識は、*historia* を単なる過去の記述以上の知識となることを要求する。その限りで、時間性に取り憑かれた *historia* を元に起案されるプロジェクトは、特にドイツにおいて嘘の温床とみなされるようになる。証拠を共有することが難しく、検証が困難な時代にあって、もはや彼らに詐欺師という身分、つまり社会的カテゴリーを適用することが無難である一方で、そもそも自然物に関する知識の総体を提示する自然史や、自然物の実用的知識もまた *historia* であり、ライプニッツを悩ませる問題でもあった。

historia は時空間的にも、知識の種類にも制約された、極めてローカルな知識であり、それを一般化する外挿法は初期近代には存在しなかった。従って、歴史学は有用な知識であったとはいえ、それは他の自然学的な知識が持つ有用性とは異なるものでもあった。しかし歴史学においても、限られた資料から十分認めうる歴史的事実の評価尺度として「慣習的確実性」が提案されるように、*historia* を適切に扱うための方法論については徐々に議論が深まっていった。そしてこれは旅行記を種々比較検討することで、より確実な旅行案内を作成する試みが現れたことと時を同じくしていた。

第二部　初期近代における旅行文化の成立

原初の人類はアフリカ北部から長大な時間をかけて地表の隅々に広がっていった。長距離の移動が個人ないし集団で遂行されることは人類史上珍しいことではない。長距離移動のためのインフラストラクチャーに投資したり、ルートを探索したりすることも当然あった。古代にもペルシャやマケドニアは効率的な街道整備によって地中海を囲む巨大帝国を統治し、陸のシルクロードを通じた人やその他の生き物、物品、軍隊、そして疫病の行き来を可能にすることで、ユーラシア全体を巻き込む巨大な軍事的・政治的な舞台、そして統合的な市場経済が既に紀元前に実現していた[155]。

その後もローマ帝国が建設され、中央アジアからヨーロッパへの大規模な民族移動があり、十字軍がイェルサレムを繰り返し目指し、13-14 世紀にはモンゴル帝国がユーラシア世界をヨーロッパの岬を残して制圧し、明の宦官であった鄭和（1371-1434）は巧みな航海術で東アフリカに到達し、東南アジアの商人たちはアジアから東太平洋の島々に至る長距離交易を開拓し[156]、オスマン朝はウィーンに陥落寸前まで攻め込んだ。15 世紀にはヨーロッパはアメリカ大陸に到達し、また喜望峰を経由したアジアへの航路を開拓し、本格的に国際的な市場統合と植民活動へ乗り出し、やがて 18 世紀には植民地戦争が頻発するようになる。

かたや 17 から 18 世紀のドイツ語圏は、しばしば移動が停滞することすらあった。すでに第一部で見たように、継承戦争や三十年戦争を経て、シュレージエンを巡る戦争、七年戦争が相次ぎ、緊張が高まると移動は制限され、各地の大学に滞在するための学生用の免状を持っていようとも旅行が禁止される地域も 1700 年ごろにはあった。しかし一方で街道の整備、郵便馬車の制度的な定着と拡大は進み、田畑をも荒廃させた戦地を除けば、少しずつ移動状況は改善されていった。第二部第二章の冒頭でも確認するように、旅行文化の成立に先立って、移動を要請する政治経済における大規模な変動があったことが想定される。

また、旅行文化が生まれたという表現が意味するのは、旅行者という独自の社会的カテゴリーが生まれたということである。第一部第一章で検討したように、社会的カテゴリーとは特定の社会で形成された役割や規範に応じて構成されるタイプのことを言う。

---

155 以下を参照。フランコパン、ピーター『シルクロード全史』上・下巻、須川綾子訳、河出書房新社、2020 年（原書：*The Silk Roads. A New History of the World*. Oxford University Press, 2015）。

156 以下を参照。リード、アンソニー『世界史のなかの東南アジア：歴史を変える交差路』上・下巻、太田淳／長田紀之監訳、青山和佳／今村真央／蓮田隆志訳、名古屋大学出版会、2021 年（原書：*A History of Southeast Asia. Critical Crossroads*. Chichester; Wiley Blackwell, 2015）。

従って社会的カテゴリーは特定の役割への同化や規範への選択的な順応によって獲得されたり継承されたりする。これを可能にするのが文化的学習であり、文化的学習とは単なる表面的かつ機会的な模倣ではなく、意図の理解を含む選択的な模倣のことである。ある人物が男性として振る舞うか女性として振る舞うかは、タイプを構成する特定の指標に相関して構成されるだけでなく、ジェンダーという社会的カテゴリーの枠組みを適用する意図や、そのような社会的カテゴリが含み持つ戦略や規範に従う選好を共有している必要がある。旅行者も同様であり、各地を移動するものたちの一部に特定のタイプを構成する指標が認められる場合、移動者に関する慣習を構成する成因の一部に旅行者としての社会的カテゴリーが、規範に沿って割り当てられる。大抵の場合、旅行者は旅行者としての規範に従うことを選好する必要がある。

そして旅行者としての規範は名声を得たり共感を読んだ旅行記の作者が提示する旅行の方法が模倣されたり、教育など旅行の外部に目的が設定されたりすることで形成される。ツアーに出発する旅行者が実践する旅行の方法は、先行する旅行者の旅行記や要求される作法や学殖を身につけるための教育を通じて、一種の模倣によってある程度規定される。この時代に貴族の若い息子たちが長期旅行へ出るためには親であれ政府であれ、パトロンが欠かせない。従って旅行者としての規範を守ることに一定の合理性がある。従って旅行者という社会的カテゴリーの成立は、彼らが実際にどのような旅行を選好していたか、あるいは実践していたかという問題をそれほど考慮に入れる必要がない。

第二章で見るように、旅行者は単に好きな場所をふらふら周り、遊び呆けていればいいわけではない。旅行者は道徳的であるべきで、各地で社交を通じて習得した作法に自らを慣らし、また「一見に値するもの」を訪ねて知識と趣味を試す必要があると多くの著作家が述べていた。旅行者に求められた規範の一つに、先行する旅行者の記述に新たな見解を加える必要があると考えられていたため（そうでなければ旅行記を読めば済む程度の知識しか得られなかったことを意味するだろう）、旅行者は一方で宮廷での作法を踏み出ることなく振る舞い、他方で先行する旅行者と差異化することが求められる。第三章では、そうして旅行記の記述は多様化していく過程を分析する。新たな旅行者たちはトポスを踏まえた詩的な情景描写や文彩を巧みに用い、読者に対し優れた旅行者として自己提示した。先行する旅行記は、旅行地の選定、経路や手段、あるいは旅行のプランに必要な情報や知識を提供するだけでなく、旅行者として独自の自己提示のための足場となる。模倣すべき旅行、つまり賞賛に値する旅行とは何かを理解した新たな旅行者のなかには、さらに独自の旅行を提示するのである。

17 世紀を通じて、すでに現れていたグレートブリテン島からドーヴァー海峡を渡る一群のグランドツアーの実践者たちは先行するイタリア旅行者たちを模倣した。第一部第二章で論じたように、移動の情報依存性は旅行者たちの経路や目的地を制約した。しかし旅行者たちは先行する旅行者たちの模倣で旅行を終えたわけではない。第一部第一章で見たように、模倣と新奇なアイデアの提示はともに文化的学習の能力から現れる。

時代とともに模倣の反復はより洗練された規範的旅行者像を作り出し、他方で旅行経路や経路の先々で見るべきものが多様化した。イギリスのグランドツアー文化を研究している Rosemary Sweet によれば、自らの旅行者としての美点や卓越性を強調するため、良き趣味〔taste〕や学識〔scholarship〕、鑑識眼〔connoisseurship〕を並べ立て[157]、そこで記述される対象の選択は流行によって古代やルネサンス、ロマネスクと移り変わった[158]。またローマからナポリへと目的地が南進したのは 18 世紀に至ってであり、新たな旅行地としてのナポリの危険は多少誇張混じりに表現され、その美しさはオウィディウスやウェルギリウスのようなローマの古典を引用して表現された[159]。ドイツの旅行者も 18 世紀半ば以降にはナポリ、さらにシチリアへと旅行地を広げた。

ツーリズム型の旅行がこのように発展していった結果現れる理念は、ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ（Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832）がカロリーネ・ヘルダー（Caroline Herder, 1750-1809）に 1788 年 9 月に言ったとされる「やはり旅をするのは到着するためではない、旅をするためである〔Man reist ja nicht anzukommen, sondern um zu reisen〕」[160]という言葉で表現されている。旅行に有用性のような外部の目的は不要であり、実際に成し遂げられた旅行自体が、旅行の目的を後から提示すると言い換えることもできる。旅行はその意味で自律的な主体というイメージのもとで自己提示や自己形成するための「生の技術〔Lebenskunst〕」に組み入れられるだろう。しかし旅行が終着地点を失う代わりに手に入れたものは、冒険、故郷への帰還、あるいは終わりない夢想という神話的モチーフである。1800 年ごろに書かれた旅行手引が旅行者を渡り鳥に準える時、旅行は実際上の必要から離れ、計画を失い、偶然に満ちた詩的・美的な楽しみを通じた自己形成に制約される。だがそれは旅行文化の始まりではなく、ある規範をもった旅行文化が成熟し、遅くとも 19 世紀前半に退潮していく手前でのことである。

というのも第二章で見るように、ただ旅をするだけの旅行者ほど笑い物になるものはない。ゲーテと同じ時代の啓蒙的な旅行案内作家たちは、ゲーテのこの言葉を笑い飛ばすに違いない。旅行者は確かに独自の慣習的カテゴリーとして、「旅行する」という現象に輪郭をつけるのだが、しかし旅行はこの時代、莫大な時間と費用を投入し、また危険も冒すことを考えると、誰も無益に終わらせるべきではないと思える。そのため旅行者はあたかも他の目的に奉仕するために旅行すべきだ、と主張される。だが彼らの主張とは裏腹に、旅行者の規範というのは国家に利益をもたらしたり人格を涵養したりする

---

[157] Sweet, Rosemary (2012): *Cities and the Grand Tour. The British in Italy, c. 1690-1820*. Cambridge; Cambridge University Press 2015, S. 28-29.

[158] Ebenda.

[159] Ebenda, S. 164-167.

[160] Herder, Johann Gottfried: *Herders Reise nach Italienien.* Heinrich Dünßer (Hg.). Gießen 1859, S. 72. カロリーネが 4 月にイタリアへ発ってヴェローナに滞在する夫ヨハン・ゴットフリートに宛てた 1788 年 9 月 12 日の書簡の中に、ゲーテの発言として記載されている。

という目的的行為ではなく、むしろ作法に求められるべきである。

第二部で論述するのは初期近代から 19 世紀初頭にかけての多くの面での連続性である。初期近代以降の旅行者が行う旅行とは一貫して、経験豊かな貴族的消費者としての自己提示ないし生の技術であった。一つには、第一部で述べたように、移動者として見知らぬ土地で身分を示さなければならない、という意味でそうである。つまり現代ではパスポートやその他の身分証が必要であり、また当時も免状があったからといって必ずしも宿に泊めてもらえることがなかったという現実をツェードラーの事典は伝えている。だが、より重要なのは特定の社会や読者公衆に対して、自分の身分を認めさせること、あるいは自分の趣味や見解、豊かな経験を提示し、読者を追体験させる、つまり自分の経験が価値ある真正なものであると認めさせることが求められる。

旅行文化は第一部で示唆したように、19 世紀半ば以降、レジャー型の旅行が現れて変化したように思われる。決定的かつ最も大きな変化は、レジャー型の旅行者は社会から解放されることを望む擬似的な経験を望むのに対し、18 世紀を通じてみられるツーリズム型の旅行者は旅の目的を達成するためにも、むしろ積極的に社交し、自己提示するよう努める必要があった。その上彼らは旅から帰れば、それまでにやりとりした書簡や書き留めたものを元に記憶を構成し、自らの旅の記録を仕上げたのである。

第二部で検証したいのは以下の点である。

一つ目は、18 世紀の間に書かれた幾つかの旅行手引や旅行制限に関するプロパガンダ文書、作法書や旅行記を手がかりに、1700 年ごろに形成された宮廷文化に倣った旅行者の規範が 1800 年を過ぎてなお維持されていたことを立証する。そのために取り上げる旅行者には、初期啓蒙の学殖者や作家、自然科学者が含まれる。彼らは旅行の成果をもとに旅行記を著し、旅行者として自己提示する。

二つ目は巡礼や発見旅行といったツーリズムに先行する旅行形態とツーリズムの関係について、そしてツーリズムを実践した旅行者の残した旅行記との関係についてである。少なくとも 18 世紀後半に入る頃には、旅行は一種の流行となった。その結果多数出版された旅行案内や旅行手引、旅行記は、相互参照的に内容が検討され、包括的かつ決定的な旅行案内や旅行記も出版されるようになる。そのため旅行記において客観的な叙述様式で観察したものを提示したり旅行に役立つ情報を掲載したりすることは優先すべきことではなくなる。この状況を前提に、作家たちは自己提示の方法として新たな叙述様式を生み出す。場所に根ざした記憶や神話的風景を旅行記に描き出し、先行する旅行記に書かれていることを省略し、変わって旅行記に新奇な要素を取り込んだ。こうした叙述様式の変動に、1800 年前後の自然科学者の旅行者たちも従っていたと考えられる。

三つ目は、一つ目と二つ目の旅行文化に焦点を絞った論点から派生したコレクション文化に関する論点である。旅行文化に先行して 16 世紀頃から活発になり始めた交易や移動の産物としてヨーロッパにもたらされた *historia* や、その知識の証拠となった収集

物のコレクションもまた、1700 年頃までパトロンの力を借りながら学殖者たちによって営まれた貴族文化であった。そうして増大した知識や物品は、さらに読者公衆に書籍を通じて開かれ、自然史や地理学、民族誌といった諸学問に関する事典や叢書が多く出版された。これは旅行記叢書と並行した現象であり、カタログ的な著作、あるいは商品カタログを収録しているようなモード雑誌と同様に消費されていた。このような知識消費社会の形態の発展を背景に、18 世紀を通じて叙述様式が変化した旅行記は重要な文芸ジャンルとして確立する。文芸ジャンルとしての旅行記はいわば諸外国の知識や旅行者の優れた見識に結びついた記憶のコレクションであった。普及する事典や叢書は、それゆえ一種のメタコレクションであり、そうしたメタコレクションを通じて市民的な読者公衆は、自らの教養を示すことを実践していた。

第一章　信仰と旅行、驚異の旅行記

1700 年頃までにツーリズム型の旅行が広がりを見せ、結果として旅行文化が成立したと仮定する際に予め考慮に入れる必要があるのが、巡礼と発見旅行である。第一章で検討されるのは、巡礼は確かに発見旅行やツーリズムの祖型であるだろうということ、そしてツーリズムは発見旅行の産物でもあるということ、そしてツーリズムに至って自己提示はますます旅行の中心に置かれるようになるということ、そして自己提示が中心化するに従って、旅行記も内容が変わるということである。

巡礼以来、集団内で共有される「一見に値する」土地や事物を遠路はるばる観賞しに行く行為が、様々な階層の人々を貫き、少なくともキリスト教徒の間で 12 世紀以来盛んになり、17 世紀までに商業化する。しかし商業化は現代に至ってなお「巡礼としての旅行」が残存することを可能にした。それによって規範も変化しただろうが、巡礼という行為自体が歴史の中で消滅したわけではない。

これに対しルネサンスの発見旅行は、一つの文化的範型としては消滅し、ツーリズムや科学的な調査旅行に部分的な要素が残されただけであると言っていいだろう。その消滅の理由としては、巡礼の担い手は広範な階層の人々に渡ったが、発見旅行をしていたような人々はその後のツーリズム型の旅行文化の担い手と重なり、移行してしまったという事情が考えられる。あるいはそもそも、発見旅行とその後の旅行文化の間には境界らしい境界はなかったと考えることもできるかもしれない。少なくとも 1700 年頃、ツーリズムを実践していたのは貴族文化に属す人々に限定されていたのだから。とはいえここで加えて指摘しておきたいのは、発見旅行が物証を通じであれ証言を通じてであれ自然のなかの「驚異」を蒐集するのは、特定の権威的な知識体系を補完することを目的にしたものであるのに対し、旅行文化は国家的な利害や法学や歴史学に関連した知識を経験的に補完すること、そして啓蒙的な市民文化やエコノミー的啓蒙の言説などに関連して規範化されている。つまり発見旅行と旅行文化では、要求される知識が持つ典拠や由来が異なるのである。

修養旅行〔Cavalier〕に出るものたちは信仰を確かめたり、何かを発見する栄誉に与ったりすることを目的としていたわけではない。もちろんそのような好奇心に満ちた旅行者も 1700 年ごろいたのも確かである。実際第二章で詳細に論じる『外国旅行についての注記』*Anmerckungen Uber das Reisen In Frembde Länder* (1722)というプロパガンダ冊子で、官房学者のパウル・ヤーコプ・マーペルガー（Paul Jacob Marperger, 1656-1730）が、「好奇心のために〔Zur Curiosität〕」、「奇跡の徴や目を見張るような偶然、特異な出来事、賞賛すべきあるいは忘れずにおくべき人物たち、あるいは同様のものを見ること〔Wunder-Zeichen merkwürdige Zufälle, sonderbahre Begebenheiten, Ruhm oder gedenckenswürdige Personenen und dergleichen zu sehen〕」を目的とした旅行を、旅行の分

類項目の一つに加えている[161]。これは発見旅行が巡礼の後裔であることを示し、また、同時に 1700 年前後でも好奇心のために旅行するものはいたということである。だがそれは旅行文化の規範をなす要素ではもはやないし、そうした欲求を満たす旅行を果たすためにも、是非とも宮廷文化の作法を覚える必要があった。

ここで明らかにされるのは、一つに、巡礼から発見旅行、そしてツーリズムの間で連続的なのは旅行現象の図式的な類似性もそうだが、何よりツーリズムは巡礼のように、自己提示を問題とし、発見旅行のように、先行する参照すべきテクストと経験から累積的に旅行のイメージを形成したということである。巡礼のあり方、発見旅行のあり方は様々なレベルでツーリズムに模倣され、またツーリズムは新たな旅行者の自己提示の方法を生み出した。加えて示唆されるのは、第四章で詳しく論じることになる、教養ある読者公衆が好奇心に満ちて参加したコレクション文化が、巡礼からツーリズムに至る様々なタイプの旅行が持っていた諸要素に倣っていたよう思われることである。

第一節　巡礼からツーリズムへ

12 世紀ごろ、ヨーロッパの人々が長距離の移動を行うための主要な要因の一つは巡礼であった。イェルサレムを目指して中東地域に到達する巡礼者の集団は、巡礼の途上にある彼らをもてなし、宿場を提供するための様々な制度の整備を促した。カロリング朝の時代には各地に点在する教会やおよそ 650 の修道院がこの任を負い、収入の四分の一をこうした「社会扶助〔Sozialfürsorge〕」に宛てた。同じようにローマへの巡礼者のためのインフラストラクチャーの整備は 8 世紀から 9 世紀にかけて行われた[162]。後期中世にはイェルサレム、ローマ、サンティアゴ・デ・コンポステーラの他に、多くの「二次的聖地〔Sekundär Heiligtümer〕」が加わり、ますます巡礼の旅は馴染み深いものとなる。巡礼の目的地はその後も増え続け、瞬く間に華やぎあっという間に重要性を失うということが繰り返された。17 世紀末には道標が各地に用意されてルートが整備される。その中で巡礼は、徐々に民衆信仰の色合いを強めていく[163]。つまり、巡礼は「世俗的〔weltlich〕」な発展を遂げていき、「正統な宗教ツーリズム〔Sakraltourismus〕の形成」に至る[164]。

従って巡礼が初期近代の旅行文化の一つの祖型になっていることは否定しようもない。この後検討するようにグランド・ツアーもこの系譜に位置付けられる。一度成立し

---

[161] Marperger, Paul Jacob (1722): *Anmerckungen Uber das Reisen In Frembde Länder.* Dreßden und Leipzig 1722, S. 7.

[162] Brenner, Peter (1990): *Der Reisebericht in der deutschen Literatur. Ein Forschungsüberblick als Vorstudie zu einer Gattungsgeschichte*. Tübingen; Max Niemeyer 1990, S. 42-43.

[163] Plötz, Robert (1991): Wallfahrten. In: Hermann Bausinger, Klaus Beyrer, Gottfried Korff (Hg.) *Reisekultur: Von der Pilgerfahrt zum modernen Tourismus*. München; C. H. Beck 1991, S. 31-38, hier S. 31-33.

[164] Brenner, a. a. O., S. 43.

たイタリアを目指すツーリズムの鋳型は遅くとも 17 世紀後半に普及し、その後 19 世紀半ばを過ぎる頃には大衆化していく。ツーリズム型の旅行者は先行する旅行者によってもたらされた情報を手がかりに、見て回る必要がある場所を選定し、赴き、目的の対象を目の前にして感激を表明する。どのような旅行が自分にとって価値があるか、あるいは他者に提示するに値するかを考慮に入れて、模倣すべき旅行者の旅行記から後続の旅行者は多くの利益を引き出すことができる。これは現代のツーリズムでも同様である。旅行研究の研究者 Dean MacCannell は現代のツーリズムについての分析のなかで、観光客の有り様を以下のように描いた。

> Modern international sightseeing possesses its own moral structure, a collective sense that certain sights must be seen. […] If one goes to Europe, one "must see" Paris; if one goes to Paris, one "must see" Notre Dame, the Eiffel Tower, the Louvre; if one goes to the Louvre, one "must see" the Vernus de Milo and, of course, the Mona Lisa. There are quite literally millions of tourists who have spent their savings to make the pilgrimage to see these sights. […] The ritual attitude of the tourist originates in the act of travel itself and culminates when he arrives in the presence of the sight.[165]
>
> 現代の国際的な観光旅行にはそれ独自のモラルの構造、つまり特定の名所は是が非でも見られるべきであるという共通意識がある。［…］ヨーロッパに行くなら、パリは「是が非でも見るべき」であり、パリに行くならノートルダム大聖堂やエッフェル塔、ルーブルは「是が非でも見るべき」であり、ルーブルに行くならミロのヴィーナス、そしてもちろんモナリザは「是が非でも見るべき」である、という具合に。これら名所を見る巡礼を敢行するため貯金を費やしたことのある観光客は全く文字通り何百万もいる。［…］観光客の儀礼的な態度は旅行という行為自体に由来し、観光客がその名所に到着し、目の前にした時に頂点に達する。

MacCannell によれば現代の観光客には、かつての巡礼者に見られたような儀礼的な態度が認められる。言ってみれば「是が非でも見るべき」ものはアウラを放っているのだろう。観光地が聖地となり、名所が聖なる物となるという現象は、無論観光客という社会的カテゴリーに対応した規範、つまり誰もが訪れるべき無二の名所名物という評判が、その地を訪れるべしというルールに従うことを、資金を投じて旅行するものたちが好んで選択することに起源があると考えられる。どの旅行者も旅行から得られる利得を最大化したいし、ともすれば名所を無視した場合に考えられる揶揄を恐れるだろう。MacCannell の現代ツーリズムの描写は示唆的であり、巡礼の目的地が新たに現れては消えた 17 世紀の様相と重なる。従って巡礼はツーリズムの祖型であると考えても問題

---

[165] MacCannell, Dean (1976): *The Tourist*. California University of California Press 1999, S. 42-43.

がないように思われる。

巡礼は信仰に基づき、神の奇跡の証人となるために、またそうして救済の時に向けて自己規定するための行為である。巡礼は巡礼者としての身なりや振る舞いを模倣し、点在する聖地を巡る時間に得られた内的体験を語ることで自らの信仰の確かさを示すことができる。ジョン・バニヤン（ドイツ語表記：Johann Bunyan, 16??-1688）の『天路歴程』*The Pilgrim's Process* (1678) は 1685 年にチューリヒ啓蒙を担っていたダーフィト・ゲスナー（David Geßner, 1647-1729）の出版社[166]から最初のドイツ語訳が出版されて以来、版元が変わることもあったが 18 世紀を通じて継続的に版を重ねていった。『天路歴程』は当初ドイツ語版では『浄福なる永遠を求める信徒の旅』*Eines Christen Reise nach der seligen Ewigkeit* と結末を示唆するタイトルに変わり、幾らかの挿絵が添えられた。遅くとも 1765 年の版までには物語の理解を助ける導入が冒頭に加えられており、「敬虔な生とは善の道を歩み続けることである〔das leben der Frommen heißt ein wandel auf guten wegen〕」[167]と教えがある。そして巡礼者の義務は悪の世界を立ち去り旅に出て、天を求め〔strebet himmel an〕、自ら思い描く目的を常に直視し続けることであった[168]。巡礼者に求められるこのような宗教道徳的な義務は、世俗的な旅行であるツーリズムに宗教的なニュアンスが消された上で、部分的に継承される。

それでも巡礼者のイメージは、自らの求める価値を外の世界に発見しようとする西洋の知識人にとって転用可能な自己提示の範型であった。イタリア・ルネサンスの博物学の歴史を研究する Paula Findlen によれば、発見旅行に出る博物学者たちは、自らを巡礼者と考え、その衣服を真似て自然の世界やヨーロッパ外の世界へ足を踏み入れることさえした[169]。当時の博物学者たちは大学を支配していたスコラ的な議論からも、文献学的な研究からも距離を取り、書斎やミュージアムから「自然の懐」に赴く旅行に出るようになったというわけである[170]。17 世紀に至るまで、博物学者は、遠方や近傍の自然に「驚異」を見出すことで、自らを神の創造の現場の証人であろうとした。彼らの研究は

---

[166] ダーフィト・ゲスナーはチューリヒの名家ゲスナー家の一員で、詩人ザーロモン・ゲスナーの親類である。彼の設立した出版社からは数多くの著名な作家や神学者の「信徒文学〔Erbauungsliteratur〕」が多く出版された。Bürger, Thomas (1997): *Aufklärung in Zürich. Die Verlagsbuchhandlung Orell, Gessner, Füssli & Com. in der zweiten Hälfte des 18. Jahrhunderts*. Frankfurt am Main; Buchhändler-Vereinigung 1997, S. 54-58.

[167] Banian (1685): *Eines Christen Reise nach der seligen Ewigkeit.* Zürich 1765, Einleitung zum Verstand dieses Lehrgedichts.

[168] Ebenda.

[169] フィンドレン、ポーラ『自然の占有：ミュージアム、蒐集、そして初期近代イタリアの科学文化』伊藤博明／石井朗訳、ありな書房、2005 年（原書：*Possessing Nature: Museums, Collecting, and Scientific Culture in Early Modern Italy*. Berkely – Los Angeles – London: University of California Press 1994）、229 頁。

[170] 同上、222 頁。

自らの好奇心を満たすとか、学問を通じた人類の向上への義務感だけでなく、信仰もまた基礎としていたというわけである。このようなルネサンスの有徳文化人の自己提示は、17 世紀にイギリスを中心に自然学者の間で流行する自然神学〔Physiko-Theologie〕にも現れている。

だが発見旅行の旅行者は何を目的に「巡礼」したのだろうか。より正確にいえば、彼らにとって自然の事物を目撃しに行くことは何を意味したのか。Findlen の研究が多量の資料と綿密な分析から明らかにした多くのことのうち、鍵となるのは「私がここで論じた蒐集家たちは誰も、自分たちの世界の境界を解消させることはなかった」という総括である。つまり、当時のイタリアの博物学者たちは、知識に不可欠な経験を蒐集するという「自分たちの活動を、アリストテレスやその後継者たちの仕事を実現／拡充させるものであると理解していた。彼らにとって、経験は、典拠＝権威と競合するものではなく、むしろそれを補完し高めるものであった」[171]。従って彼らは自分たちが見出した新たな世界に関する知識を、古代の人々の揺るぎない権威ある書物が提示した普遍的な知識の体系に組み込み、完成させようと考えていたわけである。ミュージアムの設計は、従って、彼らが思い描く世界の構造を反映していた。

他方 17 世紀に流行したグランドツアーでは、書物から獲得した知識や家庭教師に叩き込まれた作法を自ら実際の世界で経験し、確かなものとすることを一つの目的としていた。この背後にある実用主義的で経験主義的な教育思想は、ドイツ語圏でも宮廷文化の一環として「家父長書〔Hausvaterliteratur〕」に現れ、次いで 18 世紀後半にはジョン・ロックに依拠するヨハン・ベルンハルト・バゼドウ（Johann Bernhard Basedow, 1724-1790）のような教育思想家や民衆啓蒙家たちによって主張された。しかし第二章で見るように、民衆啓蒙の一部、エコノミー的啓蒙の文脈では、旅行は必ずしも推奨されなかった。端的に言えば、旅行は外国かぶれになって親の目の届かないところで放蕩するきっかけを与え、国家の財を損失するだけであるとプロパガンダされた。しかし同時に教育思想家の多くは実際に富裕な家に家庭教師として過ごし、旅の伴侶〔Zögling〕として旅行する経験もあり、博愛主義の世界市民たるには旅行が必要と考える者もいた[172]。特にバゼドウは旅行記の教育的意義を認めていた[173]。

このような旅行の教育的効果に期待を寄せる人々、あるいは規範的な旅行から逸脱する道徳的堕落を非難する 18 世紀の旅行をめぐる議論は、巡礼とツーリズムをますます強く重ね合わせる事になる。確かにツーリズムの旅行記が詳細な記述で伝えようとしていたのは「一見に値するもの〔Sehenswürdigkeiten〕」なのである。1700 年頃にはすでに

---

[171] 同上、16 頁。

[172] Richter, Albert: Einleitung. In: derselbe. (Hg.) *J. G. Schummel, Fritzens Reise nach Dessau und F. E. von Rochow, Authentische Nachricht*. Leipzig 1891, S. 3-14, hier S. 4.

[173] Nebgen, Christoph (2014): *Konfessionelle Differenzerfahrungen. Reiseberichte vom Rhein (1648-1815)*. München; Oldensbourg Wissenschaaftsverlag 2014, S. 134.

相当数の旅行記や旅行案内が各俗語で出版されていた。ヨーロッパ各地を、特にイタリアを周る旅行者の大半が学を身につけているのでそうした旅行記に当たり、旅の助けにすることができた。

代表的な旅行記の一つが、ジョゼフ・アディソン（Joseph Addison, 1672-1719）の『イタリア管見』*Remarks on Several Parts of Italy, &c. in the Years 1701, 1702, 1703* (1705)である。著名な新聞『スペクテイター』の編集者であり記者であった詩人・政治家のアディソンは 1699 年にグランドツアーを実践し、パリに滞在したのち南フランスを経由してアルプスを避けてローマに到達した。また、ドイツ語で書かれた最も理想的なグランドツアーの旅行記としてヨハン・ゲオルク・カイスラー（Johann Georg Keyßler, 1693-1743）の旅行記『最新旅行』*Neueste Reisen* (1740-42)がある。カイスラーはハレ大学でスタンダードな官僚教育を受け、クリスティアン・トーマジウスを中心とした初期啓蒙運動に触れながら法学を修め、1727 年に旅の伴侶や従者を連れて旅立ち、1729 年から諸国を遍歴した[174]。

グランドツアーに出た旅行者たちは「一見に値する〔sehenswürdig〕」事物とか「一目に値する〔merkwürdig〕」事物に関する情報を、旅行記を通じて累積的に共有することに成功していた。とはいえそのような知識は、旅行記というジャンル内部で自律的に累積されるのではなく、基本的にはローマ法、年代記〔Chronologie〕、貨幣学〔Numismatik〕、文書館学〔Archivkunde〕などの歴史学の補助学問や地誌〔Geographie〕を通じて学習されるべきものであった。旅行に出るものは学習した *hisroia* を自らの経験でより確かなものとするのである。つまり、1700 年頃のグランドツアーは、17 世紀半ばまでの発見旅行が聖書とアリストテレスの自然学を規範とし、ヨーロッパ外の世界や自然の世界を目指したのに対し、法学や文献学を基軸とした古代世界を理解するための歴史学やその補助学問を規範としてヨーロッパを見て周った。

確かに旅行に必要な多くの情報は更新を迫られるものの、彼らが対象とする遺跡や美術品に関する知識は過去に関する事柄であるから、考古学的・資料的発見が進まない限り、それほど頻繁には変化しないはずであった。18 世紀半ばにイタリア旅行するドイツ語圏の人々は、こうした確定的な知識を大抵事前に一読するか、あるいは旅路に携帯した。死後も版を重ね続けたこの旅行記は、当時としては最新の情報が載っており、行く先々に点在している「一見に値するもの」を網羅的に挙げている。

彼らの模範的な旅行記においては、グランドツアーの旅程に沿って、各地で立ち寄っておくべき場所を案内し、そこで何が見られるかを、自分が見聞きした情報や事前に目を通したか、あるいは執筆時に参考にした文献、あるいは古典の引用を駆使し、自然物、景観、著名な学殖者のコレクション、造形美術、そして記念碑やその碑文が詳細に報告される。

---

[174] Siebers, Winfried (2009): *Johann Georg Keyßler und die Reisebeschreibung der Frühaufklärung*. Würzburg; Königshausen & Neumann 2009, S. 21-27.

アディソンの旅行記では以下のように、「何が存在するのか」、「どのような歴史の元にそこに存在するのか」、事物を記述するという意味での「客観的」記述を上述したような種々の知識を駆使して書き連ねていく。彼は以下のように助言とも取れる言葉を記している。

> There are in Rome Two Setts of Antiquities, the Christian and the Heathen. The former, tho' of a fresher Date, are so embroil'd with Fable and Legend, that one receives but little Satisfaction from searching into them. The other give a great deal of Pleasure to such as have met with them before in ancient Authors, for a Man who is in Rome can scarce see an Object that does not call to Mind a Piece of a Latin Poet or Historian.[175]
> ローマには二組の古代遺物がある。つまりキリスト教的な古代遺物と異教的な古代遺物である。前者は年代的により新しいものであるにもかかわらず、御伽噺や伝説に満ち満ちているので、そうしたものを探求したところでわずかな満足しか得られない。他方は、あらかじめ古代の著述家たちの作品でそうした遺物と出会ったことのあるものにとって、実に多くの喜びを与えてくれる。ローマにあれば、ラテン詩人やローマの歴史家の作品を呼び起こさないような遺物を見ることなどまずできないからである。

ここでアディソンが述べていることは、後続する旅行者であるカイスラーがローマおよびローマに集約されている遺物やそれに関連して提示したローマ古典や碑文の引用でいっぱいになった歴史的な叙述を考慮に入れると事実であると思われてくる。例えばカイスラーの旅行記の第一巻所収の五十二番目の書簡は「ローマにおける極めて優れた広場、橋、門、私邸、そして他の一見に値する世俗の建造物の報告〔Relation von den vornehmsten Plätzen, Brücken, Thoren, Privatpallästen und andern sehenswürdigen weltlichen Gebäuden in Rom〕」と副題が付され、「一見に値するもの」が他の地域に比べ圧倒的に多く列挙されている[176]。

また彼らの旅行記の書き方は、発見旅行の旅行記の書き方に類似して、客観的で有用な記述を行うよう心がけている。しかしそれは信用できる記述であることを意味するだけでなく、知っているという事実を示す手段でもある。

そして「一見に値する」とか「一目に値する」といった形容詞は、観察者の憧れや観賞物に感動する心持ちを伝えるのではなく、読者に重要事項なので是非覚えておくよう

---

[175] Addison, Joseph (1718): *Remarks on Several Parts of Italy, etc. In the Years 1701, 1702, 1703*. 2nd ed. London 1718, S. 231-232.

[176] Keyßler, Johann Georg (1740): *Neueste Reisen durch Deutschland, Böhmen, Ungern, die Schweiz, Italien und Lothringen, worinnen der Zustand und das Merkwürdigste dieser Länder beschrieben* […], Bd. 1. Hannover 1751, S. 661.

に、あるいはこれから旅行するものには是非回っておくように推奨する意味もあった。だからこそ、カイスラーのこの旅行記は三巻構成であるが、第三巻に全巻を通した索引がつき、「一見に値する」ものや地域、重要な人物の情報に簡単にアクセスできるようになっている。また各ページには余白を多く取り、見出し語が付されていることからも、それらの旅行案内が頭から通読されるべき読み物というより、実際に計画を立てるために繰り返し参照したり、旅行に携帯して実物を見た時にすぐに参照したりできるよう工夫されている。

「一見に値するもの」を見ておくことは、見る以上の価値があり、それらを描写することは、描写された以上の内容がある。そのような記述は旅行者の知識や鑑識眼を示す身振りでもあり、客観的記述の積み重ねから著者の旅行者としての卓越性を読み取れることのできる読者が想定され、そのような読者は実際に旅行した際に模倣したり、新たな視点を見出そうとしたりした[177]。このことこそが、旅行文化が成立していることを証言している。

第二節　驚異の形成から神話的風景へ

前節で述べたように、発見旅行においても旅行の祖型は巡礼であった。このことが意味するのは、少なからぬ費用や労力、時間をかけて何かを自分の目で確かめに行く行為のなかには、その行為を支える強力な動機と、それを目の前にした時の感嘆があると、ルネサンスの博物学者が理解していたということである。そして彼らは前者を時に好奇心と呼び、時に信仰と呼び、後者を基本的に「驚異／不思議〔wonder/ meraviglia〕」とか「驚異／驚嘆〔marvel meraviglia〕」[178]と呼んだ。発見旅行の旅行記の多くは後期中世から初期近代に書かれ、インド、アフリカ、アメリカ大陸、中東地域で見聞した驚異を報告している。これらの土地には楽園や宝物庫といったメタファー的な表現が適用されることもあった[179]。

発見旅行がこの時期に増大した主な理由について、Gita Dharampal-Frick が主張する通りオランダ東インド会社のような植民地経営を担う交易会社の活動やイエズス会の宣教活動によってコンタクトが増えたこと、経済活動に有益な資源や新たな薬種を求め、地理学、地質学、植物学などの諸学問のより詳細な知識が要求されたことなどが挙げられる[180]。また 17 世紀も過ぎる頃には、交易に不可欠な文化や言語への理解もますます求められるようになる[181]。

---

[177] Sweet, a. a. O., S. 28-29.

[178] フィンドレン、前掲書、47 頁。

[179] Dharampal-Frick, Gita (1994): *Indien im Spiegel. Deutscher Quellen der frühen Neuzeit (1500-1750)*. Tübingen; Max Niemeyer 1994, Kapitel II.

[180] Ebenda, Kapitel III.; Vgl. Cook, a. a. O., Chapter 4.

[181] Vgl. Raj, Kapil (2006): *Relocating Modern Science. Circulation and the Construction of Knowledge*

ただし報告される知識の源泉へのアクセスは基本的に困難であるので、第一部第四章で述べたように、検証される可能性は低く、著者や、翻訳者、ともすれば――どんな出版物であれ同じ運命を辿ることはあるが――出版社の編集の手が扇情的な物語を作り上げることが可能であった。ツェードラーが警告したように、その他の旅行記や地誌、地理学書と付き合わせて検証することが求められた。そうでもなければ嘘を信じて終わる可能性もある。しかし逆に、政府が許可を出すとか、メディアや交通の情勢が変化するとか、旅行者が増大するなどして知識の源泉にアクセスすることが容易になると、その様な旅行記は書かれにくくなるし、信憑性を失い読まれなくもなる。

とはいえ発見旅行の原型であるジョン・マンデヴィル（? - 1372）の旅行記『東方旅行記』*The Travels of Sir John Mandeville* が突きつけるのは、一種の逆説である。Wolfgang Griep によれば、マンデヴィルの旅行記はインド旅行を記したものであるにもかかわらず、クリストファー・コロンブス（Christopher Columbus, 1451-1506）がこのテクストを熟知し、たびたび書簡で自らの西インド諸島やアメリカ大陸発見の経験を報告する際、弁護を目的に書物に依拠したという。「真正なものと受容され、そのために新世界の経験を引き起こした虚構の旅行、すなわちマンデヴィルの本は、いかに創作と真実の間の境界が揺らぐことがあり得るかを示す格好の実例である〔Eine fiktive Reise, die als authentisch rezipiert wurde und dadurch neue Welterfahrungen provozierte: Mandevilles Buch ist ein gutes Beispiel dafür, wie sehr die Grenzen zwischen Dichtung und Wahrheit zu verschwimmen vermögen〕」[182]。

マンデヴィル以後も 17 世紀中頃まで海を渡った経験をもとに創作されたエキゾチックな物語は産み出され続けた。旅行記は大いに流行品であった[183]。そのように旅行記が多く出版され、すでに読まれているとすると、発見旅行を果たした者が、パトロンや公衆に報告する前に彼がしなければならないのは、そうした文献と自己の記憶の擦り合わせである。というのも与えられた資金をもとに実際に旅に出たことを証言し、同時にそれが空想でないとパトロンや公衆に理解されねばならないからである。事実に忠実な報告であっても突飛に感じられてしまった場合、パトロンがそれを信じるとは限らない。また、インド旅行記を対象に初期近代のインドの表象を包括的に検討した Gita Dharampal-Frick は、この時代に出版された旅行記は手稿などの段階から編集者の手が多く入っている場合がよくあるとして、以下のように指摘する。

---

in South Asia and Europe, 1650-1900. Ranikhet; Palgrave 2007（邦訳：水谷智／水井万里子／大澤広晃訳『近代科学のリロケーション』名古屋大学出版会、2016 年）；新居洋子『イエズス会士と普遍の帝国：在華宣教師による文明の翻訳』名古屋大学出版会、2017 年。

[182] Griep, Wolfgang (1991): Lügen haben lange Beine. In: Hermann Bausinger, Klaus Beyrer, Gottfried Korff (Hg.) *Reisekultur: Von der Pilgerfahrt zum modernen Tourismus*. München; C. H. Beck 1991, S.131-137, hier S. 133.

[183] Dharampal-Frick, a. a. O., S. 56.

Unter solchen Voraussetzungen stelle das veröffentlichte Endprodukt in der Regel ein komplexes Amalgam dar, in dem sich konkrete Beobachtungen aus erster Hand über eine Vielzahl exotischer Themen und Gegenstände mit stereotyp wiederholten Beschreibungselementen und mit einem hochgradig ›intertexuellen‹ kaleidoskopischen Überblick über die bedeutendsten europäischen Reiseberichte der Epoche überlagerten und zu einem heterogenen ›Diskurs‹ verbanden. Alles in allem waren diese populären Reisebeschreibungen gerade in ihrer internen ›Vielstimmigkeit‹ während des gesamten 17. und 18. Jahrhunderts eine der einflußreichsten Hauptquellen, aus denen die breitere deutsche Öffentlichkeit ihr ›Wissen‹ über Indien schöpfte.[184]

そのような前提のもと、公刊された最終的な制作物は原則的に複雑なアマルガムである。そのアマルガムのなかで、多数の異国の主題や対象について直接なされた観察は、ステレオタイプとして繰り返し現れる叙述の要素や、この時代のヨーロッパの最重要の旅行記についての、高度に「間テクスト的」で、かつカレイドスコープ的な概観と重ね合わせられて、異種混淆的な「言説」として結合させられる。要するに、これら大衆的な旅行記は、まさにそこに内在する「多声性」ゆえに 17、18 世紀の間中最も影響力のある主要な資料の一つであった。そしてその資料からドイツの幅広い公共圏がインドに関する「知識」を作り出すのである。

Dharampal-Frick がここで述べている、特定の地域に関する雑多な情報からその地域についての知識やステレオタイプを公共圏が形成してきたというテーゼは、彼が初期近代のインド旅行記の研究から引き出したとはいえ、発見旅行の旅行記全般に多かれ少なかれ通ずる。発見旅行の旅行記にはいくつかの定型的な弁明文が掲載され、旅路で出会った事柄が客観的に物語られている。こうして信憑性を増すよう著者は心がけている。コロンブスが自身の発見を報告した際に、マンデヴィルを参照して信用を得ようと試みたならば、そこにはこのような理由があったと考えられる。

シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン＝ゴットロフ公フリードリヒ 3 世（Friedrich III. von Schleswig-Holstein-Gottorf, 1597-1659）によってモスクワおよびペルシャへ派遣されたアダム・オレアリウス（Adam Olearius, 1599-1671）は、著名な学殖者であり言語への造詣も深く、何より旅行記の収集家でもあった。彼はその時の経験を報告した旅行記『待望された最新の東方旅行の叙述』*Offt begehrte Beschreibung Der Newen Orientalischen Rejse* (1647)の序文で異教の国々を旅したこと、それを報告することについて以下のように申し開きをしている。

[184] Ebenda, S. 63.

Dann wann ich betrachte den Anfang / Mittel und Ende unser nach den Orientalischen Ländern gehabten Reise / und die daher entstandene gute Gelegenheit / von derselben etwas denckwürdiges zu schreiben / woraus ein Liebhaber der Wissenschafften von so frembden / und unserm Vaterlande Teutscher Nation bißher ziemblich unbekanten Dingen Nachricht unnd Nutzen schöpffen möchten / habe ichs […] mir abnsonderlich gnadig anbefohlen / das jenige / was etwa denckwürdig / so wol in Geographicis als Historicis derer Oerter vorfallen mochte / zu observiren, und darvon / nach unser mit göttlicher Hülffe abgelegten Reise / relation zu thun.[185]

そうして私は自らの東方諸国への旅の始まり、途中、そして終わりを顧み、そして実に異質な、我々の祖国ドイツの民衆にはこれまで全く知られていなかった事物について、学知の愛好者たちが情報や利得を手に入れたいと思うような事柄について何か重要なことを記述するための、旅から得られたまたとない機会を顧みた時に、私は［…］自分に実に恭しくも、当地の地理や歴史において生じたであろう重要な事柄を観察し、そしてそれについて、神の加護に導かれた旅の後に報告をすることを命じたのである。

オレアリウスは旅行者として、数少ない経験を有している特権者として、観察や考察した事実について語る権利がある。しかもその特権的立場に自分が置かれた経緯を、危険に満ちた旅を無事に終えたのは神の加護によると言い添えることで、神の配剤に根拠づけている。その上で彼は自分が有用な知識をもたらしうること、あるいは純粋な好奇心からペルシアへ向かったという動機の公的性格と私的な無害さを強調するのである。Peter Brenner は正しくも指摘するが、彼らが遠隔地へ旅行に出たことについて、有用性とか純粋な好奇心のような言葉で弁明するのは、一種のレトリックである[186]。彼の旅行には明らかに政治的な背景がある。

ただし Brenner がオレアリウスについて、バロックの世界観から抜け出ていない、とか、異文化に直面したところで自らの文化を相対化することはできていないと評価するのは、些か慎重さに欠くように思われる。オレアリウスがバロック文化を代表する学殖者であることは間違いないが、彼が自然を「バロック的なエンブレムの意味で、神の真理の写しと理解する〔im Sinne der barocken Emblematik, als Abbildung göttlicher Wahrheit begriffen〕」[187]のは、ルネサンスの有徳文化人同様にそうなのか、あるいはそれもまたレトリックに過ぎないのかはすぐに判断のつくものではない。旅行記の冒頭でオレアリウスは以下のように述べるが、そこで彼は第一に自分が旅した世界もまた神の創造した世

---

[185] Olearius, Adam (1647): *Offt begehrte Beschreibung Der Newen Orientalischen Rejse*. Schleswig 1647, Vorrede.

[186] Brenner, a. a. O., S. 126-127.

[187] Ebenda, S. 126-127.

界であるという点を強調している。

> Daß unser GOTT ein grosser Gott ist / erlernen wir unter andern auß dem Buche der Natur / der vernünfftigen Heyden Bibel. Dann wenn man die zwey grossen Blätter / als Himmel und Erden / anschawet / erscheinet des Schöpffers Mayestät und Herrlicheit nicht alleine auß den Wunder Liechtern des Firmaments / so stets in ihrer ordentlichen Bewegung und Wirckung gehen / sondern auch auß den mancherley Gütern und Gaben / so GOtt über den gantzen Kreiß der Erden reichlich außgestrewet. [...] So wil Gott auch / das solche Wunderwercke nicht im Verborgen bleiben/ sondern von den Menschen betrachtet / und Er dadurch erkandt und gelobet werde.[188]
> 我々の神は偉大な一つの神であることを我々はとりわけ自然という書物、そして理性に満ちた異教の聖典から学んだ。そして二冊の大部の書物を天と大地とみなせば、創造主の荘厳さと栄光は、絶えずその秩序だった運動と作用を行う天空の光という奇跡からばかりでなく、神が地上の全圏域に十分撒いたとりどりの財や賜物からも現れる。［…］そうしてさらに神はかような奇跡の作品を、秘密にとどめておくのではなく、人間によって観察されることを望まれ、そして神はそれを通じて認識され賛美されるのである。

このように、確かに彼はこの世界を神の言葉を具体化したものに過ぎないと述べている。その限りでアレゴリー的な思考から抜け出ていないとは言えるかもしれない。また、この時オレアリウスが神の創造を、直観的に認識可能な自然を聖書に込められた理性的な神のロゴスと対置し、しかしそれを切り離すことのできない同一のものであると主張するならば、その保証とは結果的に神の創造と創世の歴史である。

とはいえオレアリスの記述自体は基本的に日誌の形式であり、客観的な文体で簡潔に記述されている。日付と出来事、誰と会ったとかどの村へ行ったか、そこまでの道のりや手段、あるいは村の成員の様子、身体や衣服などの外見や、婚礼などの慣習、それから驚異の事物に関する事実的な記述の列挙である。例えば彼は腐敗しない死体や偶然に発見された貝の化石について以下のような記述を残している。

> Gesatzt aber das der Cörper vnverweßlich wehre / so wird es doch nach des Camerarij meinung / welcher in seinen horis Succisivis saget / daß der Perser Leichen nicht verfaulen / sondern nur verdrögen sollen/ [...] kein Wunder seyn. [//...] Die Einwohner fabulirten viel vnd vngläubliche Dinge von diesen beyden Heiligen / welche entweder einer Zauberey / oder fette Lügen / so beyde unter den Persern gar gemeint / ehnlich schienen. [//...] Umb des

[188] Olearius, a. a. O., S. 1.

Tiribabben Begräbnis seynd im selben Berge viel Höhlen und Camern gehawen / in welchen die Pilgram sich lagern und opffern. Es waren etliche so hoch von der Erden / daß man ohne Leiter nicht wol hinauff kommen kunte. Unser drey halffen einer dem andern nicht ohne Gefahr in eine an einer steihlen Klippen hinauff. Jn derselben waren 4. geraume Cammern / Bettstellen und Krippen / alles in den Fels gehawen. Wir befunden / vnd zwar mit Verwunderung wie das dieser harte Fels am Gewolbe kleine Muschel-schalen in sich hatte / ja der Fels war an etlichen Orten als wenn Er von Muschel-schalen vnd Sand zusammen geschmoltzen. [...][189]

しかし死体は腐敗しないままであると言われているが、自身の horis Succisivis[190]でペルシャ人の死体は腐敗せず、ただ乾燥するだけと言われていると述べたカメラリウスの見解に従えば、このことは驚くべきではない。［…］住人たちは、これら二人の聖人［Tiribabba という名の聖人と Praeceptor という名の聖人］にまつわるたくさんの信じがたい事柄に関して御伽噺を作ったが、それらの事柄は、ペルシャ人の間で全く信じられている魔法か、あるいは大嘘のようなものに思われる。［…］Tiribabba の墓地の周りは山の中であり、穴や部屋がたくさん削り出されている。その中で巡礼者が身を休めたり、献身したりする。いくつかは地上から実に高いところにあり、そのため梯子なしでそこまで登っていくことはできない。我々三人は互いに助け合いながら鋭い崖を登ったが危険なしとはいかなかった。そこには四つの広々とした部屋、ベッドと馬草桶があったが、全て岩から削り出してあった。我々は気付き、しかも驚きを感じたのは、この硬い岩がアーチ部分に小さな貝殻を埋め込んでいること、それどころかその岩が所々貝殻と砂を溶け合わせたかのようになっていた。

オレアリウスは訪れたとある村での慣習や宗教、そして自然物についての発見を、ヨアヒム・カメラリウス（Joachim Camerarius, 1500-1574）のような先行する学者の言葉を手がかりに理解し、また真に驚くべきものとそうでないものを区別している。あるいは発見旅行の旅行記に欠かせない危険に満ちたアネクドートが語られる箇所には以下のような記述がある。

Die Indianer an sich selbst seynd von Natur Leutselige / freundliche Leute / und ist mit ihnen in Freundschaft wol umbzugehen / wo man sie aber in den Harnisch saget / und Blutrustig machet / werden sie also erdrand / daß jhr Zorn mit nichts mehr als mit Blut kan geleschet werden / wie wirs nicht alleine von andern vernommen / sondern mit unsern Exempel und

189 Ebenda, S. 288.

190 どの著作の内容を指しているかは不明。

Schaden erfahren haben.[191]

インド人自身といえば、生まれつき社交的で友好的な人々で、彼らとは親睦を深めて交際すことができる。しかし彼らはハルニッシュ[192]で言及され、血に飢えているとされている。つまり彼らは陶酔し、自らの激情が血によって以外には解消されないことがあるということだが、それは他の人々から聞いただけではなく、自身の事例と傷によってもそのことを我々は身をもって知った。

確かにこの記述は臆断に過ぎないかもしれない。しかしこの記述は彼が蒐集していた先行する旅行記に依拠しているとはいえ、アレゴリー的ではない。彼がそのあと提示する危険に満ちたエピソードが仮にオレアリウスの臆断を確信させるために選択されたアネクドートであるとしても、それは彼が間違った知識、つまり臆断に依拠して、それに沿って自分の経験を理解しようとしていたからである。彼がルネサンスの有徳文化人と同じように自らの世界の限界を解消できなかったとしても、それは単に彼が依拠する知識が誤っていたことを意味する。Dharampal-Frick の指摘の通り、旅行記が提示するイメージは一人で作られるものではないのである。

第三節　小括

旅行記が与える客観的な記述と観賞にも個人的な意図や価値が反映され、そのような意図や価値も模倣されることで旅行者たる存在としての規範が一つ形成されていく。この時、巡礼は聖書、発見旅行は聖書やアリストテレス、そしてグランドツアーはラテン詩人や歴史に関する諸学問の言葉や知識を借り、表現を借りる。言い換えれば観点を借りる。先行するテクストを読み、旅行に出たいと思う時点で、旅行者は先行する旅行者や古典テクストから知識を独占形式で受容する。そこではどのインフォーマントを模倣すべきかについての判断が受容を動機づけている。それは実際に旅先で名所や自然景観を目の当たりにする上で必要な知識であると同時に、旅行記を著して読者に自らの旅行について語る際に、自らの物語が信頼に足るものであると示すために不可欠な知識である。旅行記を通じ旅行先のイメージは、古代の歴史書や聖書のような権威的書物と、旅行者自身の経験、先行する旅行記の読者としての経験、さらに公衆に対する自己提示が混在することになる。

それゆえ、後続する旅行者が先行する旅行記や古典テクストから選択的に受容する知識は規範的な性質を有している。続く第二章で見るように、旅行の道のりで旅行者としてそれぞれの社会で自己提示する必要がある旅行者にとって当然知っておくべき知識が存在する。しかしそこで習得される古典の知識や自然学の知識は、それ自体旅行に特

---

[191] Olearius, a. a. O., S. 382.

[192] ヴィルヘルム・ハルニッシュ（Wilhelm Harnisch）という当時の旅行者の旅行記を指しているが、具体的にどの書籍かは不明。

化した知識ではない場合も多い。従って、実際に旅に出た旅行者たちは「一見に値するもの」についての先行する旅行者たちの記述や図版で描かれた情景を検証し、その上で新たな記述を目指すことができる。こうして旅行記は読書の後、実際に旅行に赴くことで、知識の移動は取引形式に転換し得る。検証を通じ、先行する旅行記の知識が正当であるか不十分であるか、誤謬であるかの判別を実践することは、彼らの鑑識眼を一層信頼あるものとして提示することができる。そしてそのように提示することが、旅行者が従うべき規範でもあった。

第二章　旅行者の規範の成立と持続

17 世紀にフランシス・ベーコン（Francis Bacon. 1561-1626）やジョン・ロック（John Locke, 1632-1704）は旅行の効用と害悪を共に説いた。例えばベーコンは「旅について」*On Travel* というエッセイで、「若年の旅行は教育の糧であり、壮年のそれは経験の肥やしである〔Travel in the younger Sort is a part of education; in the elder a part of experience〕」と述べた[193]。グランドツアーが実際に流行したのはその証左である。しかしベーコンもそのエッセイでも指摘しているように、その旅を有用なものにするためには、事前に旅先の言語や多くの知識を身に備えておく必要がある。彼は旅に若者を送り出す際の忠告を以下ように記す。

> If you will have a young man to put his travel into a little room, and in short time to gather much, this you must do; first, as was said, he must have some entrance into the language before he growth. Then he must have such a servant, or tutor, as knoweth the country, as was likewise said. Let him carry with him also some card or book describing the country where he travelleth, which will be a good key to his inquiry. Let him keep also a diary. Let him not stay long in one city or town; more or less as the place deserveth, but not long: […][194]
> あなた方が青年に長旅をさせる余裕がなく、短い時間で多くを得させたいならば、あなた方は以下のことをする必要がある。最初に、よく言われるように、彼は大人になる前に語学に幾らか入門している必要がある。それからこれもよく言われるが、国に通暁する召使いや家庭教師が必要である。また自分が旅行する国について書かれた地図や本をいくらか携帯させなさい。自分が抱いた疑問の手がかりになるだろう。さらに日記を継続させなさい。一つの都市や町にあまり長く滞在させてはならない。多かれ少なかれ、その場所がそうするに値するぐらいの間はいいが、長くなってはならない。

ベーコンは少なくともブリテン島から大陸へ、なかでもパリとローマを目指していく青年たちの姿を見た上でこのような言葉を残しているという点にはある程度注意を払ってもいいだろう。ベーコンは経験を重視する。青年たちが書物や写から得た知識を確かなものとすることに賛成するのは当然である。しかし同時に、旅行は親の目が届かない場所で青年たちがコーヒーハウスなどに入り浸り、くだらない時間に大金を費やして破滅する危険と背中合わせであった。ベーコンの「旅について」というエッセイは短いな

---

[193] Francis Bacon (-): On travel. In: *The Works of Lord Bacon. Philosophical Works*. Vol. I. London 1854. S. 275.

[194] Ebenda.

がらもその後の旅行規範を決定づける要素が多く含まれている。そこから、ベーコンがこのエッセイを書いた 17 世紀初頭のイングランドにはすでにツーリズムに出る典型的な旅行者のイメージが形成されつつあったことを窺い知ることができる。

ドイツ諸邦でも 17 世紀を通じてグランドツアーに出るものたちがいた。フランスやイギリスで出版された旅行案内を片手にヨーロッパ各地を遍歴した。その目的は知られるところであるが、貴族として求められる教養を経験によって補完し、確実なものとすることだった。そして 1700 年ごろまでには、旅行は身分ある家の父親が家庭教師とともに配慮を尽くして成功させる必要のある教育的なプログラムの一環として確立していた。尤も、後述するように、旅費があまりに嵩む上、多くの旅行者が旅行者としての規範を十分に身につけないため、理想的な修養旅行〔Cavalier〕の形が達成されるのは一部である[195]。とはいえ実りない旅行は反面教師でもある。旅行が成功するために何が必要なのかについての考察は多数書かれた。

そうした考察に共通しているのは、旅行には長期に渡る準備が不可欠であるということである。旅行は、青年期までになされた貴族の家の家長たるに優れた人物を理想とした教育の集大成的な行事とみなされていたのである。従って「旅行手引〔Apodemik〕」のような旅行の正しい方法を説く書物は、家長たる父親が息子たちに、次代の家長となる息子にその務めを果足すことができるよう教育するメソッドについて論じた「家父書〔Hausväterliteratur〕」に類する書物と考えられていた。事実、旅行者自身ではなく、旅行者を送り出す父親や、時に旅の伴侶となる家庭教師に向けて書かれた旅行手引も存在した。旅行案内や旅行手引、それに類する書物は、Uli Kutter によれば 17 世紀から 19 世紀初頭までの間に 300 タイトル出版され、特に 1600 年から 1620 年、1680 年から 1720 年、1790 年から 1810 年の三つの期間に重点的に出版された[196]。

多くの旅行手引は、旅行の効用として若者の修養が、旅行の害悪として若者の堕落があると考えていた。だがそれだけでなく時に、旅行は国家の利益をもたらすが、時に国家の堕落につながるという主張もなされた。というのも旅行者の多くは後に官吏として国家に支えることになるか貴族として統治に関与することになる若者たちであったからである。旅行の教育的な有用性には同意できるとしても、政治経済や文化や道徳にどのような影響が及ぼされるのか、官房学的な著作を残していた一部の著述家たちは不安に感じていた。

第四節でも詳しく論じるが、ここで先に参照しておきたいのはペーター・アンブロシ

---

[195] Vgl. Siebers, Winfried (1991): Ungleiche Lehrfahrten – Kavaliere und Gelehrte. In: Hermann Bausinger, Klaus Beyrer, Gottfried Korff (Hg.) *Reisekultur: Von der Pilgerfahrt zum modernen Tourismus*. München; C. H. Beck 1991, S. 47-57.

[196] Kutter, Uli: Der Reisende ist dem Philosophen, was der Arzt dem Apotheker Über Apodemiken und Reisehandbücher. In: Hermann Bausinger, Klaus Beyrer, Gottfried Korff (Hg.) *Reisekultur: Von der Pilgerfahrt zum modernen Tourismus*. München; C. H. Beck 1991, S. 38-47, hier S. 39.

ウス・レーマン（Peter Ambrosius Lehmann, 1663-1729）である。彼はすでに 1699 年から 1704 年にかけて発行された時事報道をもっぱらとする年刊雑誌『ヨーロッパにおける最新事情についての事実報道』*Historische Remarques der neuesten Sachen in Europa* (1699-1704)で著名であったが、それに加え『優雅なヨーロッパ旅行』*Die vornehmsten europäischen Reisen* (1703)という旅行手引を著している。彼は自身の旅行案内の序文で以下のように旅の有用性を主張し、旅が政治にもたらす効用について論じた。

> Die Betrachtung der Sitten und Gewohnheiten fremder Völcker giebt uns Gelegenheit an die Hand, nachzumachen, was sie Gutes an sich haben, und die Erkänntniß ihrer Fehler lehret uns, daß wir die unsrigen gleichfalls erkennen, und vor selbigen uns hüten können. […] Und ein junger Mensch wird hinter dem Ofen nicht lernen, dem Vater-Lande erspießliche Dinste zu leisten, wenn er nicht zuvor fremder Königreiche Staats-Maximen, deren Vortheile und Fehler, und wie sie die letzteren zu remediren suchen, erkannt hat.[197]
> 外国の民族の慣習や習慣の考察は、我々に、彼らが身につけている美点を真似するための機会を与えてくれる。そして彼らの欠点の認識が我々に教えてくれるのは、自分たちの欠点を同様に認識することである、そしてそのようなものから自分たちを守ることができる。［…］若い人間というのは、外国の王国の法令を、その長所も短所も、そしてどうやって短所を直そうとするかをあらかじめ認識していない場合には、家に引きこもっていても祖国に実りある奉仕を果たすためには何も学ばないだろう。

とはいえ確かに旅は諸外国へ赴くことで学問や芸術を新たに学んでくる可能性もあるが、他方で外国の悪習に人を染めることもあり、結果として祖国にそうした悪徳をもたらす危険もあると言われるとレーマンは述べる。彼によれば、旅行者がもたらすのは「フランス人の軽率さ、イタリア人の放縦さと姦淫、スペイン人の狡猾な待ち伏せそして間抜けな慣習、耐え難い身振り、過剰な爵位、滑稽な儀式、奇妙な衣装、感情的な言語、そしてドイツ的なものと父親としての徳の完全な喪失〔der Franzosen Leichtsinnigkeit, der Italiäner Ueppigkeit und Unzucht, der Spanier hinterlistige Nachstellungen u. närische Sitten, unerträgliche Gebärden, überflüßige Titul, lächerliche Ceremonien, seltsame Kleidungen, eine affectirte Sprache, und den gänzlichen Verlust der Deutschen und väterlichen Tugenden〕」に至る。これを防ぐため、彼は旅行者が旅行者として守るべき規範があると訴える。

この本から70年経って、フィリップ・ヴィルヘルム・ゲルケン（Philipp Wilhelm Gercken, 1722-1791）は自身の旅行案内『シュヴァーベン、バイエルン、隣接するスイス、フランス、ライン地方などの 1779 年から 1782 年の旅行』*Reisen durch Schwaben, Baiern, die*

---

[197] Lehmann, Peter Ambrosius (1703): *Die vornehmsten europäischen Reisen*. Hamburg 1736, Vorrede.

angränzende Schweiz, Franken, die rheinische Provinzen &c. in den Jahren 1779-1782 (1783)で以下のように旅行を評価する。

> Die mehresten jungen Leute reisen, um nur gereiset zu haben. Wenn sie die Thorheiten und Laster anderer Nationen, die sie auf Kosten ihrer Gesundheit und ihres Beutels angenommen, und machen sich durch ihre unreife Erzählungen bey vernünftigen Leuten lächerlich. Alle diese Leute, wenn sie zumahl nach Paris reisen, bringen gewöhnlich nur einen siechen Körper, mit einem zwar wohl frisirten, sonst aber völlig leeren Kopf zurück.[198]
> ますます多くの若者たちが旅行をする。ただ旅行をするためだけに。彼らは他の国々の愚昧や悪徳を、自らの健康と財布を代償にしてまでその身に付けるので、理知的な人々のもとでは、彼らは自分たちの未熟な物語によって笑い草にされている。こうした人々は皆、自分がとりわけパリへ旅行した時には、確かに見栄えいい髪型をしながら全く空っぽの頭を備えた衰弱した身体で帰ってくるのが通例である。
>
> Ganz anders ist es beschaffen, wenn ein Mann von gesetzten Jahren mit hinreichenden Kenntnissen und einem soliden Forschungsgeiste seine Reisen anstellet. Bey dem wird der Nutzen und Endzweck niemahls verfehlt werden, und er wird die wesentlichsten Vortheile davon ziehen, die zuweilen das ganze Glück seines Lebens machen, und auch auf sein Vaterland a. öfters nützliche Folgen verbreiten.[199]
> 分別盛りの年齢の男が十分な知識と強固な探求精神を持って自らの旅行を実行した場合は全く事情が別である。そのような男の場合は、有益さと最終目的を決して逸することはないだろう。そして彼は、時には自らの人生の幸運を作り出し、さらに自らの祖国などにもしばしば有用な効果をもたらすような、極めて本質的な利益をそこから引き出すだろう。

ゲルケンとレーマンは共通して、旅行を正しく行わない旅行者、つまり単なる娯楽のために旅するものは、常に国や文化、道徳を損ねる要因を外国から持ち込むと考えている。そして彼らは旅行の害悪は旅行者を自滅させたり笑い物にしたりするだけでなく、社会に広がる悪徳となるとみなしている。このような見解は本章第三節で扱うような旅行文化への法的な制約につながる発想だと言える。他方旅行の美点もまた、個人の教育というレベルを超えて国や文化、道徳に貢献することにある。

この章では主に、このような相反する旅行への評価が 1700 年ごろに下され、18 世紀

---

[198] Gercken, Philipp Wilhelm (1783): *Reisen durch Schwaben, Baiern, angränzende Schweiz, Franken, und die Rheinische Provinzen a. in den Jahren 1779-1782* (...). Theil. 1. Stendal 1783.Vorbericht, S. III-IV.

[199] Ebenda, Vorbericht, S. V.

を通じて続いていた理由を考察する。そのために、旅行に下された二重の評価がもたらした旅行の規範や技法、つまり旅行の肯定的な側面だけを実現するためになされた助言を記した文献にあたってみたい。ここで主に扱うのは、1700 年前後から 1800 年前後にかけて出版された旅行手引である。そこには旅行者として従うべき規範が旅行に有用な情報とともに記されている。整備されつつあった郵便馬車の経路や時刻表や、どこに行けば何がみられるかといった情報は移動のあり方に制約を加えるが、それと同時に旅行者としての振る舞いにも制約を加える。そのような所作の規範は、基本的に貴族文化に属するものであり、ヨーロッパ各所に点在する貴族社会に参入して巧みに社交することが旅行の重要な要素でもあり、またプライヴェートな空間へ招かれるための道具でもあったために、特に求められたのである。

第一節　郵便馬車

ヨーロッパの内外での移動を最も強く動機づけてきたのは、その頻度や規模からしても交易だろう。ただし中世後期には輸送システムやそれに伴う契約制度はある程度確立し、地位を確立した大商人たちは自ら移動したり運搬したりすることはなく、エージェントを雇って贅沢品や穀物の輸出入や中継貿易で利益を上げていた。商人がそのような大規模な交易のネットワークを形成し始めると、彼らは利益を追求して経営に力を入れる一方、移動の様に時間と労力のかかる仕事は多くの人々に担われることになるので、交易の機会自体は増大し、戦争が起きない限り往来者は増える一方であったと考えられる。

15 世紀末から徐々にヨーロッパ各地で郵便馬車の整備が始まった。Thomas Brune によれば、少なくとも三十年戦争より前にはメッセの開かれる時期などに商品運送に用いられた街道を「荷車〔Stellwagen〕」が走っていたという。この点について、さらに補助的に考慮に入れる必要があるのが、15 世紀以降のニュルンベルク商人や東西交易路の台頭と、それに伴う近代的な大規模化した交易の形態だろう。ここで少し時間を巻き戻そう。

12 世紀までにある程度の規模が確立された内陸貿易や北海・バルト海交易は、都市構築のための都市法の整備や、都市建築によって新出する新たな形態の市場がドイツ諸邦に現れる直接的な原因となっていた。Philippe Dollinger の古典的な研究によれば、15 世紀のハンザにとって最も脅威であったのはオランダ商人と南ドイツ商人であった。特にニュルンベク商人は 14 世紀に数々の関税特権を手に入れることでネーデルラントとの交易の足場を固めていたが、さらにその世紀の末にはリューベックに商館を構えて本格的にハンザ圏に進出した。特にビルクハイマー商事会社はスウェーデン、フランクフルト・アム・マイン、プラハ、イタリアの間の金融取引を引き受けることに成功し、クレス商事会社も際立った営業手腕を見せたようだ。ニュルンベルク商人はこうしてハンザ圏で取引されていた「毛皮や琥珀、保存加工された魚」を南部に輸出し、北部に「香

辛料、金属産品、奢侈品に加え、ケルンやフランドルの産品」を供給した[200]。

ニュルンベルク商人の進出がライプツィヒなど別の都市の発展にもつながったこともしばしば指摘されている。というのは 14 世紀の後半までに、ニュルンベルク商人はハンザ都市へイタリアの贅沢な商品を運輸する際に、そしてハンザ都市の商人が北海・バルト海交易で入手した蜜蝋や魚を運輸する際に、ライプツィヒを経由したからである。彼らはそうして、ブレンナー峠を越えてボルツァーノまで南進し、さらにほかのイタリアの大規模なメッセに訪れることで大きな利益をあげていた[201]。基幹的な金属加工や毛織物の手工業も発展し、ニュルンベルクは 16 世紀までに西欧と東欧を結ぶヨーロッパの商業ルートの主要な都市となった。このことを端的に証明するのは、以下の図 2 である。Thomas Brune によれば 16 世紀に製作された木彫りの案内図であり、ニュルンベルク〔Nürmberg〕と結ばれた主要な都市と、その間の都市が整然と示されているが、そこにはアウグスブルク〔Augspürg〕やウルム〔Ulm〕、ミュンヒェン〔München〕といった比較的近い都市から、シュトラスブール〔Straspürg〕、フランクフルト〔Franckfordt〕やライプツィヒ〔Leyptzigth〕、プラハ〔Prag〕といったヨーロッパ内の陸上交易を担う主要都市が並んでいる。

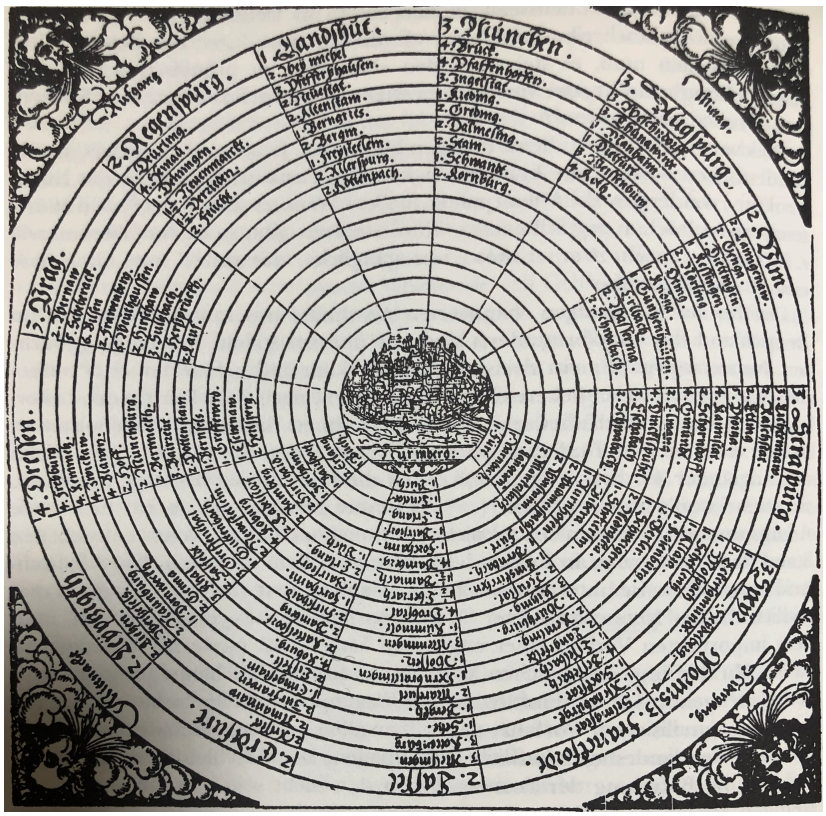


図 2[202]

---

[200] ドランジュ、フィリップ『ハンザ』高橋理監訳、奥村優子他訳、みすず書房、2016 年（原書：*La Hanse*. Aubier 1964）、208 頁以下。

[201] Marperger, Paul Jacob (1710): *Beschreibung der Messen.* Leipzig 1710, S.163.

[202] Brune, Thomas (1991): Von Nützlichkeit und Pünktlichkeit der Ordinari-Post. In: Hermann Bausinger,

Aloys Schulte によればこうした南北を結ぶ交易の発展は、ネーデルラントとチロル、イタリアを結ぶアルプス越えの道を開くことになったが、さらにその道を用いて、特にハプスブルク家の各地の宮廷と宮廷が伝令を走らせるようになり、結果的にリレー馭者の養成につながり、定期便としての郵便馬車がいよいよ 15 世紀末に整備される様になったということである[203]。長距離移動のためのインフラストラクチャーは確かに商人によって開かれ、そして次いで宮廷のために郵便馬車が整備され、再度また商人によって盛んに利用された。商人たちも各地の交易状況に関する情報を獲得するため、日報や週報、書簡のやり取りを盛んに行っていた。

郵便馬車の整備が進むにつれ、今度はドイツ語圏で最初に出版され旅行案内とも言われるイェルク・ガイル（Jörg Gail, zwischen 1520-1528 - 1584）の『旅行冊子』*Raißbüchlin* (1563)やダニエル・ヴィンツェンベルガー（Daniel Wintzenberger ）の『新旅行冊子』*Ein Naw Reyse Büchlein von der Stad Dreßden aus durch gantz Deutschland* (1577)などが現われた。こうした冊子の延長線上に、初期の官房学者であったマーペルガーが著した『メッセの描写』*Beschreibung der Messen* (1710)は位置付けられる。この本は、すでに世界的に知られた商業都市となっていたフランクフルト・アム・マインとライプツィヒに特に注目しながらも、当時の一般的なメッセ〔Messen〕や年の市〔Jahr-Märkten〕を古代ローマ以来の伝統的な都市的な市場形態の伝統にあるものと理解し、都市法や市場法の制定からドイツ語圏で都市がメッセや年の市が成立する過程を報告している。さらにこの書物の後半部分には、主要な商業都市と、そこから赴くことのできるメッセの簡単な説明、そして街道や郵便馬車の予定がリストアップされている。

1700 年前後に形成された旅行文化でも常々郵便馬車用いられているが、旅行者が不便なく利用できるほど郵便馬車や街道が整備された背景には、今度は商人の移動が増大したことがある。そして「中継〔relais〕」によって連絡された郵便馬車の制度が各地に行き届かない限り、どんな旅行もより厳しく危険に満ち、また頻度も増えなかったに違いない。実際当時の敬虔主義の聖職者であったクリスティアン・スクリヴァー（Christian Scriver, 1629-1693）は馬車旅行について以下の様に述べていたようだ。

> Es ist doch eine zumahl nöthige und nützliche Erfindung und Ordnung mit den Posten [...] / wie es denn auch die Reisenden zu Danck annehmen / daß sie oft in kurtzer Zeit einen weiten Weg / durch dieses Mittel zurücklegen können.[204]

Klaus Beyrer, Gottfried Korff (Hg.) *Reisekultur: Von der Pilgerfahrt zum modernen Tourismus*. München; C. H. Beck 1991, S.123-130, hier S. 128.

[203] Schulte, Aloys (1900): *Geschichte des mittelalterlichen Handels und Verkehrs zwischen Westdeutschland und Italien mit Ausschluß von Venedig*. Leipzig 1900, Vierundvierzigstes Kapitel.

[204] Scriver, Christian (1663-69): *Gottholds Zufällige Andachten*. Leipzig 1686, S. 703. Zit. nach Brune, Thomas (1991): Von Nützlichkeit und Pünktlichkeit der Ordinari-Post. In: Hermann Bausinger, Klaus

郵便馬車は特に必要かつ有用な発明であり制度である［…］旅行者もまたしばしばこの手段によってわずかな時間のうちに遠路を進むことができると考え感謝している。

あるいは 18 世紀後半にも、歴史家エルンス・ルートヴィヒ・ポッセルト（Ernst Ludwig Posselt, 1763-1804）は、自身の発行する雑誌『啓蒙のための学術雑誌』*Wissenschaftliches Magazin für Aufklärung* (1785-1785)の 1785 年の第一号に掲載した記事「特にドイツにおける郵便制度と、その歴史、権利、欠点について」*Ueber das Postwesen, besonders in Teutschland, dessen Geschichte, Rechte und Mängel* で以下の様に述べる。

Das Postwesen gehört unstreitig zu der kleinen Zahl von Erfindungen, auf denen die ganze Kultur unserer heutigen, so sehr verfeinerten Staaten wie auf einer Grundsäule ruht. Ohne Postwesen wäre unsere Weltkunde voll Gebrechen, alles kaufmännische und litterarische Kommerz beinahe unmöglich, und die Kreise der Freundschaft, dieses beste Glück der Menschheit, auf den engen Bezirk unserer körperlichen Gegenwart eingeschränkt. [205]
郵便制度は、我々の今日の、非常に洗練された国家の文化全体が大黒柱のように頼りにしている数少ない発明の一つであることは議論の余地がない。郵便制度なしでは、我々が手にしている世界の知識は全く欠陥だらけであろうし、商人や書籍の全商業活動はほとんど不可能であろう。そして友情の輪、この人間の最良の幸福は、自ら身をもって現れることのできる地域に限定されただろう。

このように郵便制度や郵便馬車は、政治経済上の必要に基づく制度や道具に留まらなかった。それらは学殖者たちの交流や修養旅行のために利用されていく。ツェードラーは「素早く旅行したいと思うものは、郵便馬車に乗る〔Wer geschwinde reisen will, nimmt die Post〕」と記している[206]。こうして少なからぬ金銭的な対価を支払い、多少の不快に耐える覚悟さえすれば、旅行に行くことは容易になった。ここで多少の不快とは、確かに馬車旅行の危険性のことも念頭に置いているが、むしろ様々な身分の人と相乗りすることによって生じる不快を指す[207]。しかしそれ以上に危険なのは、口軽くなることであ

Beyrer, Gottfried Korff (Hg.) *Reisekultur: Von der Pilgerfahrt zum modernen Tourismus*. München; C. H. Beck 1991, S.123-130.

[205] Posselt, Ernst Ludwig (1785): *Wissenschaftliches Magazin für Aufklärung*, Erster Bandes erstes Heft. Kehl 1785, S. 298.

[206] Zedler, Johann Heinrich (1731-54): *Universal-Lexikon*, Bd. 28. Leipzig und Halle 1741, S. 1786.

[207] Richter, Dieter (1991): Die Angst des Reisenden, die Gefahren der Reise. In: Hermann Bausinger, Klaus Beyrer, Gottfried Korff (Hg.) *Reisekultur: Von der Pilgerfahrt zum modernen Tourismus*. München; C. H. Beck 1991, S.100-108, hier S. 103-106.; Brune, Thomas (1991): Von Nützlichkeit und Pünktlichkeit der Ordinari-Post. In: Hermann Bausinger, Klaus Beyrer, Gottfried Korff (Hg.) *Reisekultur:*

る。郵便馬車で見知らぬ人と乗り合わせた時、軽口を叩いていると気付かぬうちに他人を侮辱していることがあるからである[208]。

この時暗に示されるのは、旅行者には宮廷でも通用するような規範を身につけるべきであり、また身につけている結果として不快を感じることもあるということである。旅行において、移動と移動をつなぐ社交の場面や名所観光の場面は固より、移動の最中にあっても旅行者には求められる規範があった。

第二節　社交における規範

バロック期の哲学、化学、数学で優れた功績を残したエーレンフリート・ヴァルター・フォン・チルンハウス（Ehrenfried Walther von Tschirnhaus, 1651-1708）は修養旅行〔Cavalier〕へ発つ若者に同伴する教師に向けて三十のコメントを残した。それを甥の教育者ヴォルフ・ベルンハルト・フォン・チルンハウス（Wolff Bernhard von Tschirnhaus, ?）が編集したものが『アカデミーと旅のさなかにある誠実な家庭教師』*Getreuer Hofmeister auf Academien und Reisen* (1727)である。そこで第一に憂慮されるのは、異国に赴いた若者の間に見られる容易に無神論〔Frey-Geister〕を受けいれる性向であった。彼自身、当時諸国を遍歴するなかで無神論やスピノザ主義と多く触れてきた経験を持っていた[209]。それだからこそ彼は念を押して、そのことに注意するようにと主張するのだろう。従って彼が第一に家庭教師に求めるのは、旅立つ前に神学的・宗教的な教育を徹底することであった[210]。

また、チルンハウスが次いで強調するスキルは会話術であった。彼が会話術に関してさらに注意を促すのは、会話の相手を選定することと、言語を不自由なく用いる能力を身につけるよう努めることであった。前者に関してチルンハウスは以下の様に述べている。

> Zu dieser Bienseance zu gelangen, hat man sonderlich auf Reisen die schönste Gelegenheit, auf welchen man mehr conversiren als studieren oder Exercitia treiben muß. Denn ich setze zum Voraus: Daß einer zum Reisen genugsam praepariret ist, seine Studia, Sprachen und Exercitia auf Schulen und Universitäten, albereits zulänglich getrieben, und biß zur Politur absolviret habe, und also den grösten Theil der Zeit, zu nützlichen und anständigen Conversationen, anwenden können. Um also von Reisen zu profitiren, muß ein Cavalier

---

Von der Pilgerfahrt zum modernen Tourismus. München; C. H. Beck 1991, S.123-130, hier S. 130.

[208] Bohse, a. a. O., S. 377.

[209] Vgl. Mulsow, Martin (2018): *Radikale Frühaufklärung in Deutschland 1680-1720*, Bd. 1. Göttingen; Wallstein 2018.

[210] Tschirnhaus, Ehrenfried Walther (1727): *Getreuer Hofmeister auf Academien und Reisen*. Hannover 1727, S. 1-2.

seine Zeit nicht in Aubergen und Caffé-Häusen, unter seinen Lands-Leuten, mit Schmaufereyen und Ausübung allerhand sündlicher Lüste zubringen, weil er dißfalls nicht erst auf Reisen gehen dürffen, sondern sein Conto besser zu Hause finden können; [211]
このような礼儀作法に至るための極めて優れた機会がとりわけ旅行中にはある。旅行中に人々は勉学や訓練に励むよりもたくさん会話をしなければならない。というのも、私は、そうした人が旅に十分に備えていること、自らの学識、言語、学校や大学での訓練は、すでに十分なされていること、そして礼儀作法を修得していること、そして時間の大部分を有益で絶えることのない会話に用いることができることを前提条件としている。つまり旅から利益を得るためには、修養旅行に出るものは自分の時間を宿泊所やコーヒーハウスで、自分と同じ国の人間に紛れて、おべっかの応酬や罪深い快楽に耽ることに費やしてはいけない。なぜなら彼はこの時、決して旅に出てはならなかったのであり、自宅にいた方が金勘定に良いのは明らかであるからだ。

もちろんダンスや剣術、馬術など他にも重要な要素はある[212]。だがそういうものは社交を構成する楽しみであったり身を守ったりするためのものに過ぎない。あるいは別の旅行手引が述べるように、剣術などは危険な遊びかもしれない[213]。チルンハウスはここで、旅先で共に時間を過ごす人間を考えるべきであり、単に楽しみに耽るだけなら旅行に行くべきでなかったと述べる。「遊びは非常に害も多い〔Das Spielen ist auch sehr schädlich〕」[214]、時間も金も食うからである。彼は語学に対する厳しい要請もしており、学者なので当然ではあるが、ラテン語の重要性を訴える。

Bey denen Sprachen sind drey Sachen wohl zu observiren. Denn theils Sprachen sind nur nöthig, daß man sie perfect verstehen, als die Lateinische, maßen einem Cavalier selten vorkommt, solche zu reden oder zu schreiben […]. Wiewohl man auch die lateinische Sprache zu reden leicht acquiriren kan, als auf denen Universitäten in Holland, da man wegen Vielheit verschiedener Nationen, um einander wohl zu verstehen, allezeit lateinisch reden muß.[215]
その言語においては三つの事柄に注目すべきだろう。というのもラテン語以外は、

---

[211] Ebenda, S. 86-87.
[212] Ebenda, S. 106-108.
[213] Caprara, Albrecht (1691): *Raisender Chiron, oder: Unterricht vor einen Hofmeister/ der einen jungen Herrn auf Raisen begleiten soll*. Auß dem Italiänischen in das Teutschen übersetzet. Augspurg 1691, S. 75.
[214] Ebenda, S. 31.
[215] Tschirnhaus, a. a. O., S.108-109.

その言語を完璧に理解することができればそれで十分だからである。修養旅行者がその言語を話したり書いたりすることは滅多にないだろうから。［…］オランダの大学においてほど、ラテン語で話す術などもいかに容易に獲得できることか。というのは、オランダの大学は様々な国民からなる多様性ゆえ、相互によく理解するためにはどんな時でもラテン語で話さざるを得ないのである。

このようにチルンハウスはライデン大学で過ごした学生時代を振り返り、社交の場において俗語ではなくラテン語を用いることさえできれば、国に関係なく社交できると述懐している。俗語は修養旅行者にとって二次的な価値しかなかった。彼らは自らが会話に参加する必要があり、またプライヴェートな社交の場に入ることのできる人間は限られている以上、俗語が入り混じると会話に支障が出る可能性は高まる。通訳を雇うという選択は少なくとも規範的ではないため、ラテン語が規範的な言語として選択された。

とはいえ、チルンハウスはラテン語が優先すべき言語であることを強調しながらも、俗語に習熟しておくことを怠らないようにも助言している。というのも、オランダ語や英語に通ずることで旅先でより多くの情報を手に入れ、見識を広げることが可能になるからである。国際交易の舞台である当時のオランダに、当然ながら覇権を握っていたイギリス商人が多く進出していたことを窺わせる以下の一文では、俗語の訓練を勧めている。

In der Fremde hat man auch Gelegenheit die Holländische und Englische Sprache sich bekannt zu machen, dergestalt, daß man sie wohl verstehen lerne, welche gantz leicht, durch Lesung derer Zeitungen, so man allda täglich hat, durch den Umgang und Lesung guter Bücher erhalten werden kan. [216]

異国の地ではオランダ語や英語に触れる機会もあり、その結果それらの言語を優れて理解できるようになるが、それらの言語は至る所で日常的に手に入れることのできる新聞を読むとか、また社交や優れた書物の読書を通じて簡単に維持することができる。

移動中は常に新聞などの手段で旅先の情報に触れておくべきだが、そうすることで、新聞に用いられているオランダ語や英語の学習ともなるとチルンハウスは述べている。もちろんフランス語の重要性が失われたわけではない。フランス語、あるいはイタリア語を重視するのは、作法書の作者であるアウグスト・ボーゼである。ボーゼもまた英語は重視したが、それと並んで、当然だが、フランス語とイタリア語を挙げている[217]。

この点で商人旅行のメソッドは決定的に異なる。マーペルガーの『誠実で卓越した交

[216] Ebenda, S.109.

[217] Bohse, a. a. O., S. 373.

易従事者』*Getreuer und Geschickter Handels-Diener* (1715)には、現場で交易に従事するもの、例えば帳簿係〔Buchhalter〕などが、近傍もしくは遠方に旅に出なければならなくなった時に、彼らは何を準備し、何を心がけておくべきかが記述されている。マーペルガーによれば、遠方に赴くことになり、自分が生活している場所とは異なる言語がそこで用いられている場合、「自分がその言語をよく知っているかどうか、あるいは自分がその言語を全然知らなくとも、いずれにせよ双方の言語を知る通訳者や、その他の人物を通じて、その地の住人と交易することができるかどうか〔ob er solche wohl wisse/ oder wie er allenfalls/ wann er keine Känntniß davon hätte/ dannoch nützlich/ mit denen Einwohnern/ entweder durch Dollmetscher/ oder solche Factors, welche beyder Sprachen kündig seyn/ handeln möge〕」[218]について熟考せよとある。商人は仕事であり、交易という明確な目的がある。しかも様々な言語の環境へ赴き、フランス語やラテン語を共通言語としているような人々とは違う階層の人々と混み入った交渉をしなければならない。事前に準備しておくことができるとは限らない。

図 3 ボーゼ『万能書簡集』より

ボーゼは模範的な書簡の手引や宮廷恋愛小説を著し有名だった。書簡の手引きを著すのはルネサンス以来の人文主義の伝統であり[219]、ボーゼがその伝統に属していると意識していたことを物語る。彼は『万能書簡集、あるいは丁寧な手引き』*Der allzeitfertige Brieffsteller/ Oder Ausführliche Anleitung* (1690)の標題紙の前に左の図版（図 3）を掲げている。この図版について Annete C. Anton は「大きな人物を年長の、小さな人物を年少の男と解釈することができるだろう。この場合年長者はより多くの知識を持っており、そこから年少者を教導する正当性が導かれ得る〔Man könnte die größere Figur auch als älteren, die kleinere als jüngeren Mann deuten. In diesem Fall hat der Ältere mehr Wissen und kann daraus das Recht ableiten, den Jüngeren zu unterweisen〕」と指摘している[220]。

まさにボーゼは子供に対する大人のように、自らの権威のもとで書簡の書き方を説いた。というのも、ボーゼは自ら宮廷で成功しており、宮廷に出入りする読者を信用させることができたか

---

[218] Marperger, Paul Jacob: *Getreuer und Geschickter Handels-Dienste*. Nürnberg u.a. 1715, S. 246.

[219] Botley, Paul (2021): Letters. In: A. Blair et al. (ed.) *Information. A Historical Companion*. Princeton and Oxford; Princeton University Press 2021, S. 563-566, hier S. 564.

[220] Anton, Annette C. (1995): *Authentizität als Fiktion. Briefkultur im 18. und 19. Jahrhundert*. Stuttgart und Weimar; Metzler 1995, S. 3.

らである。このような占有形式の知識伝達は、やはり『貴族や市民の子息のための誠の家庭教師』*Der getreue Hoffmeister adelicher und bürgerlicher Jugend* (1706)で説かれる作法についても同じである。ボーゼはここで実例を交えて経験則を伝えるが、論証をするわけではない。その必要はないからである。彼のこの本は第十章を旅の手引に割いている。そこで彼は若者が旅行に行くことは有益であるという見解を示している。

> Wann ein junger Mensch Mittel hat/ daß er ein paar Jahr fremde Provintzen und Königreiche besehen/ und in denenselben mancherley stattliche und qvalificirte Leute sprechen kan/ nachdem er seine Zeit ein drey Jahr auff Universitäten wohl zugebracht/ derselbe thut nicht übel/ ein tausend Thaler/ oder/ nachdem sein Stand und Vermögen ist/ noch eines so viel daran zu wenden/ seine Sitten und Verstand ie mehr und mehr durch die Conversation mit so vielen geschickten ausländeischen Gelehrten/ Krieges-Officirern/ Hof-Leuten/ auch Künstlern zu poliren und vollkommener zu machen.[221]
> 若者は、大学で三年ほど時間を費やした後、数年の間異郷や外国を見て周り、そしてそこでたくさんの宮廷仕いや身分ある人々と会話することができる方策を手にした場合には、自らの作法と知性を、卓越した外国の学殖者や将校たち、宮中の人々や芸術家たちとの会話を通じて、一層一層磨きをかけ、より完全なものにすることに、一千ターラーほど、あるいは自分の地位と資産に応じてさらに幾分多く注ぎ込ことは悪いことではない。

ここで注意しなければならないのは、会話を通じて旅行者は自らの習得してきた知識を実際に用いることができるかを試されているということである。彼によれば会話を通じて知性を備えているとか、恭順〔Ehrerbietung〕の美徳を示すことで、その社会に溶け込み、また貴婦人と親しくなることができるかが問題となるからだ[222]。

会話の重要性は貴族や学殖者の文化において格別だった。同じくメノント〔Menantes〕を自称し宮廷で活躍していたガラントのクリスティアン・フリードリヒ・フノルト（Christian Friedrich Hunold, 1680-1721）が著した『上品で幸せな会話と人生の方法』*Die Manier Höflich und wohl zu Reden und Leben* (1730)では、広く一般的な社会においても、また親密な間柄の社交であっても、それを成立させるのはあらゆる種類の会話であると述べられている。彼によれば、「話すこととは人間に特別に与えられた〔die Rede ist dem Menschen besonders gegeben worden〕」ものであり、「それは心情の通訳者であり鏡であり、また心奥からの伝令であり、内奥が現れでるための扉である〔Sie ist der Dollmetscher und Spiegel des Gemüths, der Bote des Hertzens, die Thür, durch welche das innerste heraus gehet〕」。そして「金属は試金石で識別されうるが、ゆえに人間もその会話によって識別

---

[221] Bohse, a. a. O., S. 370.

[222] Ebenda, S. 383.

されうる〔Metallen auf den Probierstein können erkennet werden, also auch der Mensch durch seine Rede〕」[223]。フノルトはさらに以下のように見解を述べる。

> Wie aber die Rede an Vortreflichkeit den Menschen weit über die Thiere erhebet: so machet die geschickte Rede einen Menschen vor andern Preiß-würdig. Denn die Rede hat kein ander Handwerck als die Beredsamkeit, welche nun darinnen ihr Meisterstück ablegen, solche machen sich zum Meister der Hertzen, indem sie selbige durch diese bezaubernde Kunst zu ihrem Verlangen bringen, und herrschen über das Gemüth [...] bewegen, und ihm alle Neigungen nach Gefallen durch so anmuthige Quellen können einflässen. [224]
> しかし会話が人間を動物に対しはるかに偉大な存在としているように、巧みな会話によって、ある人間は他の者よりも称賛に値する者となる。というのも会話は雄弁という職人技に他ならず、会話において傑出した効果を生み出す人々は、心の名手となり、この魔法のような技によって雄弁さを発揮することで、心を支配し［…］動かし、このように快い泉の中を通り抜ける喜びを是非とも味わいたいという気持ちを心に流し込むのである。

フノルトはこうして会話の技術には心情を操る魔法のような力がある、一種の雄弁と主張する。その限りでフノルトのこの会話術は、第一部第四章で見たカントに代表されるレトリック嫌いと対をなしている。18 世紀半ば以降には、書簡など言葉遣いの点で自然らしさが求められる一方、レトリックとは美的な仮象や文彩で塗り固めた説得術に過ぎないという見解が広がる。しかしフノルトからすれば、雄弁を用いることができるというその点で、すでに雄弁する人物の心は偽りなく偉大であると考えられているわけである。

もちろんフノルトは「おべっか」については嫌悪している。おべっかはおべっかを向けられた人物に恥をかかせる行為でもあり、彼自身おべっかを使われるくらいなら侮辱された方が良いとさえ述べる。とはいえ宮廷であれ、宮廷に出入りする学殖者であれ、おべっかを用いるのは日常的な風景だっただろう。第一章でも見たように学殖者がパトロンにおべっかを使うのは当然であった。

フノルトの議論を踏まえた上で、旅行文化における社交や会話の重要な役割を考慮すると、ここでも旅行者の自己提示に関する規範が存在することがわかる。つまり貴族文化の一部として旅行文化が発達する際に、旅行の主要な目的は教養の獲得にあると説かれ、世界ないし世間について見聞し、政治経済の事柄、自然や歴史上の事物について知識を獲得することが推奨されたとはいえ、そのような知識もまた後に統治に関与するこ

---

[223] Menantes [Christian Friedrich Hunold] (1730): *Die Manier Höflich und wohl zu Reden und Leben*. Hamburg 1730, S. 1-2.
[224] Ebenda, S. 3.

ととなる貴族や官吏の世界における規範的知識を身につけることが求められていたに過ぎず、これと並んで旅の背骨をなす社交の場面で適切に自己提示するための規範は、彼らが旅で身につけるべき知識の一つであり、またそのような規範に従ってこそ、自らの旅を快適かつ有用にすることができた。

社交における規範の重要性が際立つ場面の一つとして、私蔵されたコレクションの閲覧という私的空間へ参入を実現する状況を想定することができる。適切な礼儀作法や会話術がなければ、閲覧を希望するコレクションにアクセスすることはできなかったからである。コレクションは 18 世紀の間、私設されたものがほとんどであり、ミュージアムや庭園は私的空間であった。より正確に表現すれば、そこは私的な交流を実現するためのクローズドな社交の場であり、限定的な公共圏であった。そこに何らかの伝手を頼りに招いてもらい、芳名録に名を残すことは、ルネサンスからカイスラー[225]の時代まで一貫して続いていた名誉な出来事であった。このことは次の引用からも窺い知ることができる。

> Wer eine Raritäten-Kammer besehen will/ thut wohl/ wenn er sich zuvor bey andern davon informiret/ nach dessen/ der die Sachen zeiget Nahmen und Profession sich erkundiget/ und etwa die gelehrten Leute des Ohrts vorher besuchet/ von denselben fraget was wohl die raresten oder merkwürdigsten Stücke auff der selben Galerie oder Kammer seyen. Es ist auch sehr nützlich/ wenn mann eine gute Schreibtaffel bey sich hat/ in deme es einem an solchen Orten niemahl verboten/ ja virlmehr eine Ehre ist/ wenn er auffschreibet. Endlich ist gut nachzufragen/ ob etwa ein gedruckter Catalogus verhanden ist/ damit man dessen gute Zeit vor dem Besehen sich bediene/ und den Innhalt sich bekant mache.[226]
>
> 宝物庫を閲覧したいと思うものは、それらの事物を見せてくれる人の名前と職業を尋ね、例えば、誰か当地の学者を事前に訪れ、その学者に、当該のギャラリーないし収蔵庫にある最も貴重で最も珍しいものは何かを尋ねることをして、事前に他の誰かの許でそれについての情報を仕入れたならば首尾よく行く。非常に有益でもあるのは、訪れる者が上等な筆記板を持参することである。そのような場面で禁じられることもないし、それどころか訪れたものがメモを取ることは些か名誉なことである。最後に、こう尋ねるのが良い。何か出版されたカタログはありませんか。そうすれば閲覧する前の時間を有効に使うことができるし、内容を知ることができる。

---

[225] Kemp, Wolfgang (2018): Die öffentlichen Erfahrungsräume des Reisenden: die Welt (Montaigne), die Dingwelt und die Welt der Höfe (Keyßler). In: Achatz von Müller et al. (Hg.) *Keyßlers Welt. Europa auf Grand Tour*. Göttingen; Wallstein 2018, S. 59-82, hier S.64-71.

[226] Sturm, Leonhard Christoph (1704): *Die Geöffnete Raritäten- und Naturalien-Kamme.* Hamburg 1704, S. 6.

ここに引いたのは、どのようにすれば宝物庫の閲覧が可能になるかについて、著名な指物師、建築家であったレオンハルト・クリストフ・シュトゥルム（Leonhard Christoph Sturm, 1669-1719）が『開かれた宝物庫』*Die Geöffnete Raritäten- und Naturalien-Kammer* (1704)で明かした簡単な説明である。ここに賛辞や相手に取り入る所作が差し挟まれていることを見落としてはならならない。コレクションを閲覧する際にも、会話の規範、コレクションへの伝手を与えようという気にさせる身振りというものがあった。シュトゥルムはコレクションに入った後に、そこでどのような場面が想定され、どう振る舞うべきかについてもこの本でさらに紹介している。

以上のように会話は社交における重要な機能を果たしていたが、それは同時に一部の人にのみ許された限定的な公共圏への参入の資格を獲得すための自己提示の方法でもあった。そのために幼少期からフランス語を学習したり、あるいはラテン語や他の俗語を覚えたりする必要があったが、それは旅行を通じて首尾よく完成させられる教育プログラムの一環であった。言い換えると、旅行に据えられている目標は、言語や会話を通じて達成されるものであり、その他の見物に比べて主要な要素であった。

第三節　旅行案内

旅行を効率化する必要は、交通網や宿について知ることだけでなく、そもそも何を見るべきなのか、それを見た時に少なくともどこに気づくべきなのか、そしてそれを見るにはどこに行けばいいのかをあらかじめ知って、計画を立てることができる必要がある。旅行に必要な情報は、移動の効率化や計画を立てることを可能にする。官房学者のユーリウス・ベルンハルト・フォン・ローア〔Julius Bernhard von Rohr, 1688-1742〕は『生きる知恵への導き』*Einleitung zu der Klugheit zu leben* (1715)の第十二章を旅行の技法に宛て、そこで計画を立てることの必要を訴えている。

> In Summa aus deiner Selbst-Erkäntniß mache dir Regeln der Klugheit/ was du auff deiner Reise thun/ oder unterlassen solst. [...] Kauff dir die neuesten und specialesten Beschreibungen ein/ desselben Landes oder derjenigen Städte/ die du besehen willt. [...] Du darffst dir nicht selbst die Mühe geben/ auffzuschreiben/ was andere schon bereits gethan/ sondern supplirest nur was sie ausgelassen/ oder verbesserst/ was sie unrecht gesetzt. [...] Du weist/ welches das Sehenswürdigste ist/ und wornach du zu fragen hast/ da sonst mancher lange Zeit an einem Orte gelegen/ auch wieder wegziehet/ und doch wohl das Remarquableste nicht gesehen hat.[227]
>
> 君が自分の旅行を通じて何をすべきか、あるいは何をすべきでないのか、その知恵の規則を君の自己認識の総和の中で役立てなさい。［…］君が見て周ろうという国

[227] Rohr, Julius Bernhard (1715): *Einleitung zu der Klugheit zu lebe.* Leipzig 1715, S. 236-238.

や都市についての最新の特化した報告を買いなさい。［…］君は、他人があらかじめすでに書き残したことを記録するのに労力を費やしてはならない。そうではなく、他人が書き落としたものを付け加えたり、彼らが誤っているところを修正したりしなさい。君は何が最も一見に値するものであるのか、訪ねるべきものは何かを知ることになる。さもなければ、少なからぬ者たちが多くの時間をかけてある場所にいきながら再び立ち去っていくからである、見るべきものを見ることもなかったというのに。

無知ゆえに旅行先に存在する一見に値するものを素通りしてはならないこと、あるいは他人の報告より優れた報告を書くことができるように備えることをローアはここで旅行者に要求している。この要求は旅行者としての自己提示の規範の最も重要な要素であるように思われる。ローアのこの助言から 80 年、プラハで図書館司書を務めたフランツ・ポッセルト（Franz Posselt, 1753-1825）は、前半生に重ねた旅の経験を基に、旅の技法書『水先案内あるいは旅の技術』*Apodemik oder die Kunst zu reisen* (Bd.1-2: 1795)を書き上げた。彼によると、その書籍の対象は「教養階層一般の青年たち〔jungen Leuten aus den gebildeten Ständen überhaupt〕」や、「新進の学者や芸術家たち〔angehenden Gelehrten und Künstlern〕」一般であり、彼がこのような本を書いたのは、多くの人がどのように旅をすべきか、どのようにすれば旅を有用なものにできるかを知らないままに旅に出ていると彼が考えたからである[228]。

Das bloße Reisen in verschiedene Länder, und das bloße gedankenlose Anschauen von Merkwürdigkeiten lehrt an und für sich nichts. Wenn der Reisende nicht weiß, worauf er sehen, und wornach er fragen soll; wenn er die Kunst zu sehen und zu hören, und über das Gesehene und Gehörte nachzudenken nicht besitzt: so kann er alle Länder der Erde durchreisen, ohne im geringsten weiser und besser, verständiger, einsichtsvoller und brauchbarer für die Welt zu werden. Zwar glauben manche junge Reisende, zumal diejenigen, die bloß aus Mode reisen, d.h. die nur reisen, um zu reisen, schon alles gethan zu haben, wenn sie in fremden Ländern alles besehen, was sich besehen läßt. Ihr einziges Verdienst ist daher, sagen zu können: das haben wir auch gesehen. Allein wer von seinen Reisen weiter nichts sagen kann, als dieses, der hat durch dasselbe eben nicht viel gewonnen.[229]
諸国をただ旅すること、そしてただ思慮もなく新奇な事物を見ること、ただこうすることで何が学べるだろう。旅行者が、自分がどこを注視すべきか、何を問うべきかを知らないならば、あるいは芸術作品を見たり聞いたり、見たり聞いたりしたものについて熟考するだけの分別がないならば、そのような旅行者が地上の国々全て

[228] Posselt, Franz (1795): *Apodemik oder die Kunst zu reisen*, erster Teil. Leipzig 1795, S. III.
[229] Ebenda, S. IV-V.

を旅したところで、少しもより賢明でより優れ、より分別と洞察を備えるようになることも、世間にとって有用な人物になることもない。確かに少なからぬ若い旅行者、殊にただ流行だからというので旅に出る者、すなわちただ旅するために旅するものは、諸外国で視察できるもの全てを見たことで、もうやるべきことは全て成したと思い込むものである。彼らが得た唯一のことは、僕たちもそれを見たことがある、と言うことができるということくらいである。自らの旅について、こんなこと以外に話ができないような者は、その旅によって多くを得ることはない。

ここでポッセルトが述べていることは、はるか先立つローアの助言とほとんど重なる。決定的に違うのはせいぜい、ポッセルトが旅行に対して「流行〔Mode〕」という言葉を当てていることくらいである。ここで重要なのは、事前に何も知識を仕入れずに旅行に出ても、見るべきものを見ないで帰り、またそのことに気づくこともないため時間の無駄というわけである。洞察の伴わない単なる事実としての経験は役立たないし、誰もが知っていること、誰かが知らせたこと以上の独自の見解を付け加えるべきであり、それが特にローアやポッセルトにとっては旅行から得られる教育的効果ということになる。

ところでローアがここで旅行者に薦める報告もちろん彼がそれを知ることはないとはいえ、カイスラーの旅行記だっただろう。カイスラーの家庭教師旅行は、そのような網羅的な性格を有しており、訪れた場所で見たものについて客観的な記述が延々と続く。しかしそのために、グランドツアーに出るものにとって、計画を立てることが容易になる。そしてローアも指摘しているように、そのような客観的かつ詳細な案内が一度世に出て仕舞えば、あとは付け加えて記録しておくべきことは限られてくる。例えば詩人ゲーテの父親のヨハン・カスパー・ゲーテ（Johann Caspar Goethe, 1710-1782）が残した書簡体の『イタリア旅行』*Vaggion per l'Italia* (1762)ではしばしばカイスラーの名前が挙げられるが、このことが意味するのは、彼がカイスラーの旅行記をもとに計画を立てたという事実だけでない。書簡を読んだもの、この旅行記を読んだものがさらにカイスラーの旅行記を参照するように促しているのである。これも、カイスラーの旅行記の巻末に付された索引を用いれば容易である。そうしてヨハン・カスパー・ゲーテは自らが書く必要のない情報を省略したのである。

こうしてカイスラーの旅行記は、旅行者に求められる学識に属す情報を包括したことで、決定的な参照点となり、その後に続く旅行者の旅行記の叙述様式に少なからぬ影響を与えた。また、地理上の位置関係や場所の路線といった情報を知らないと、目的としていた「一見に値するもの」にたどり着くことができなかったり、本来訪れるべき名所を無知ゆえに訪れなかったりして、旅行の機会を十分に活用できないという問題を解決するために、より実用的な情報に特化した書籍が 18 世紀中葉には多く出版されるようになる。第三章でも再度検討するが、カイスラー以外にも、そのような実用的な情報に特化した旅行案内や、数ある旅行記を比較検討することで決定版といえる旅行案内が作

成されるようになることで、旅行記から必要以上の学識や、実用的な旅のチップスが徐々に姿を消していく傾向が形成されたと考えられる。

何より旅に必要な実用的な情報は当時の出版業のあり方からしても、読み物として、あるいは知識をその都度参照するための包括的な旅行記に織り交ぜることは推奨されなかっただろう。というのも、18 世紀終わりに至るまでに、第一章で指摘したように、ヨーロッパ内部での交通事情は徐々に改善される過程にあった。そうした地理や交通網の情報を広く知らせるための書籍は多数出版されるが、その内容は必ずしも正確ではなく、また実際の交通事情が変化することも珍しくなかったから、絶えず更新が必要であった。学識、個人的な旅行の経験や見識、それから実用的な情報は、それぞれ異なる時間の流れに属している。それら性質の異なる情報が分離された書籍の形は、種々のコストを低減させるし、新たに出版することで利益が見込めるような場合くらいしか改版できなかった当時の出版事情を考慮すれば、望ましいと考えられただろう。

比較的早く更新される類の情報、つまり旅行者に実用的な情報を掲載した旅行案内として、既に触れたガイルやヴィンツェンベルガーの冊子がごく初期に現れる。さらに決定版として版を重ね続けたのが、バロック期の博識家〔Polyhistor〕マルティン・ツァイラー（Martin Zeiller, 1589-1661）の『忠僕、あるいは信頼のある旅の仲間』Fidus Achates, oder Getreuer Reißgefert (1651)である。そこには地図や馬車の路線や街路、その道のりや料金などがリスト化されている。もちろん旅行には様々な不運がつきまとうので、旅中に熱心に祈るよう忠言を与えてもいる。この本は最初の出版から数年おきに版を重ねたが、その都度情報の改訂がなされた。1666 年に出版された第三版の「読者へ〔An den Leser.〕」には「こうしてこのドイツ語の旅行パンフレットは 3 度目の出版を迎えたが、著者はそれに改めて目を通し、多くの箇所を修正し、しかし［アウグスブルクからリューベックへ向かう人に向けた：大林］第 15 の旅程を増補した［…］〔Hiemit wirdt dieses Teutsche Raiß-büchlein das dritte mal herfür gegeben/ welches der Autor auff ein newes durchsehen/ an sehr vil Orten verbessert und mit 15. Raisen/ jedoch also/ vermehret hat/[...]〕」とある。

繰り返しになるが、旅行案内や旅行手引は、その都度の旅行に不可欠なインフラ情報を提供するものであり、最新の事実を反映している必要がある。ツァイラー、レーマン、クレーベルといった初期の旅行案内の出版経緯について調べた Uli Kutter によれば、こうした本は携帯しやすい十二折の「ポケット型〔Taschenformat〕」の形態をとっており、それでいながら決して安価でなかった[230]。というのも結局のところ版を重ねる間に加筆修正が求められるからである。通常多く売れるほど書籍の価格は下がるはずだ。勿論この時代には海賊版もありふれていたので、それが原因で書籍の価格が下がりにくい事情

[230] Kutter, Uli (1986): Zeiller – Lehmann – Krebel. Bemerkungen zur Entwicklungsgeschichte eines Reisehandbuches und zur Kulturgeschichte des Reisens im 18. Jahrhundert. In: Carl Winter et al. (Hg.) *Reisen im 18. Jahrhundert. Neue Untersuchungen*. Heidelberg 1986, S. 10-33, hier S. 13.

があった。とはいえそうした事情とは別に、旅行案内や手引書は古くなれば不要となってしまう。改訂版は著者への信頼があるかぎり一定の売れ行きを期待することができたはずで、ツァイラーたちの旅行案内は最新情報が常に掲載されているという触れ込みと読者からの期待によって、ある程度の間隔を保ちながらの改版であれば、改版を繰り返すことでこそ利益を確かにしたと考えられる。

レーマンの旅行手引書は、彼の死後に編集を引き継いだクレーベルによる版、そしてそのクレーベルの死後の版も含めれば 1801 年の第 16 版に至った。とはいえこの間に問題がなかったわけではない。クレーベルはすでに彼が最初に手がけた 1767 年に出版された第 12 版の序文で出版社が改訂の要求に渋い顔をしていると嘆いている[231]。出版社からしてみれば、情報更新のために改版作業を繰り返すことは、利益率の減少を意味する。もちろん仮に古びた情報を更新しなければ、この書籍自体が無用となり忘れられるだけであるので、出版社は改版の交渉を拒絶することはできない。このような書籍の情報が旅行者によって検証され悪評が立てば、結局その書籍が売れることはなくなる。

1783 年に出版されたフリードリヒ・ニコライ（Friedrich Nicolai, 1733-1811）の旅行記は旅行案内としての性質も有していた。彼は「実際旅行記というものには最良の地誌においてと同様に、容易に誤りが見つかるものである〔Es lassen sich in der That in einer Reisebeschreibung, eben so wie in der besten Erdbeschreibung, leicht Fehler finden.〕」と記し、その原因を、自分が住んでいるところについては誰もが詳細に知っていると思うがゆえに、多くのものを一望しようとし、却って少なからぬ事柄を見落とすからだと指摘する[232]。だからこそ彼はドイツおよびスイスの旅行記を著すにあたっては、詳細な記述を心がけ、真実を伝えることを目指すと断りを入れる。そうした記述は比較的短い 1 年間の旅行であるにもかかわらず、13 年の歳月をかけ 12 巻本となって出版された。それだけの月日を費やしながら、彼のこの旅行記は、郵便馬車や旅行ルートについての図表を掲載していた。これは例外的なことだろう。

旅行案内や旅行手引は、対象を旅行者に絞ることで、その有用性を強調し、旅行の流行に合わせて販売を促進できた。旅行者は、事前に確かめた旅行記に対して新たな旅行の方法を提案することもできるので、旅行の過程は次第に多様になるだろうが、それでも彼らが旅行者という社会的カテゴリーにまとめられうるのは、そのような旅行案内や旅行手引を頼りにすることで、経路や目的地を統制され、また旅行者としての所作や知識を身につけることで規範に順応していたからである。逆にいえば旅行案内や旅行手引、そして旅行記の出版の増加は旅行文化の成立に不可欠であったといえる。

---

[231] Ebenda, S. 14.

[232] Nicolai, Friedrich (1783-1796): *Beschreibung einer Reise durch Deutschland und die Schweiz, im Jahr 1781*. Bd. 1-2. Berlin und Stettin 1783, S. IV.

第四節　優雅な旅行という夢想

宮廷文化を特徴付ける概念としての典雅〔Galanterie〕は 18 世紀初頭の文芸においても重要なテーマであった。諧謔や諷刺を交えたアバンチュールや宮中の色恋沙汰であり、その読者も多くは宮中に出入りする者たちだったと考えられる。それに対し中葉には、市民的な読者公衆が増大し、文芸の主要なテーマも市民的徳としての優美〔Zärtlichkeit〕へと変遷する。だが Burkhard Meyer-Sickendiek が丹念な調査から主張したように、優美はドイツにおいて独自の意味を持つようになった貴族的な徳の典雅に由来して生じた[233]。この概念の変遷は従って貴族と市民を対立させて考える古臭い構図をもはや無効にするだろう。

旅行文化においても、貴族的な修養旅行に対して市民的旅行が対置させられることが通例である。確かに貴族的な旅行は 1740 年前後を境に消えていったと主張される場合、それには一定の妥当性がある。ただし貴族的な修養旅行が消えたことが、対立の構図を肯定するわけではない。むしろ修養旅行の規範は引き継がれる。

また Marten が主張するように、ハンブルクで 1724 年 1 月から 1726 年 12 月まで出版されていた『愛国者』*Der Patriot* という雑誌がその論拠となるかはわからない。最初にあからさまな旅行文化批判が現れるのは、その第 10 号である。そこではある従者が主人への手紙で、過去に自分が父から熱心な教育を受け、果てにオランダ、イングランド、フランス、イタリアへとおよそ二年の旅行に行かせてもらった経験を物語る。しかしそこで従者が語るのは、自分の旅行が財産を費やしてなされたにもかかわらず、持ち帰ったのは外国風の礼儀作法と着飾る方法、そして金時計であり、父親の蔵書を手放して得られた 10000 ライヒスターラーがどのような経緯で浪費されたか、そしてなぜ浪費されることになったのかについての考察を手紙で伝えるという体裁の物語になっている[234]。

このおそらく虚構であろう書簡が読者に、修養旅行の拒絶を示唆しているのは確かである。修養旅行は第二節でも述べたように、ドイツ諸邦で実際に禁令が出たほどである。実際に修養旅行が国家財政を傾かせる直接の要因になるかどうかはともかく、貿易収支を黒字にすることに躍起になってまで蓄財の要請をする重商主義的な見解を念頭におけば、国外で大金を使い果たしてくる旅行一般は受け入れられ難い。とはいえもう一つの可能性は、単純にこれまで述べてきたような修養旅行の規範が実際は守られておらず、堕落した旅行に時間と金を費やしている愚かさを風刺する意図である。というのも、『愛国者』という雑誌は決して旅行文化自体を否定しているわけではない。むしろ第一号では旅行をすることで人間を知る必要があると主張しているくらいだ。

Steffen Martus は「トマージウスの如く『愛国者』は綱領として全ての人間に向けら

---

[233] Meyer-Sickendiek, Burkhard (2016): *Zärtlichkeit. Höfische Galanterie als Ursprung der bürgerlichen Empfindsamkeit*. Göttingen; Wallstein 2016, S. 18.

[234] Annonym (1724): Zehntes Stück. (Donnerstags den 9ten Mertz 1724) In: *Der Patriot*, Ersten Jahr. Vierte Auflage Hamburg 1765, S. 91-102.

れており、特定の優位な階級の人々にではなかった。すなわちこの雑誌の記事は学殖者にとっても無学者にとっても手に取るべきもので、職人や農民であっても、とにかく誰にも理解できるものであるべきとされた〔[w]ie Thomasius wandte sich Patriot programmatisch an alle Menschen, nicht an bestimmte ausgezeichnete Stände: Die Beiträge der Zeitschrift sollten sich für Gelehrte und Ungelehrte eignen und «jedermann verständlich» sein, selbst Handwerker und Bauern〕」[235]と主張した。この見解は、この道徳週刊誌が平等主義の政治的立場をとっていたことを示唆している。

それと同時に、『愛国者』は雑誌であるから、出版事業として読者層を拡大したいと考えていただろう。一種の平等主義を主張することは一種の経営上の戦略とも見做しうるかもしれない。とはいえ、Martus も指摘するように、ホッブス主義的な自然法や平等主義の原則がここには認められる。このような政治的見解を掲載することは、当時にあって本来危険なことであり、経営上の方便だとすればそのような思想が既にハンブルクを中心にある程度受容されていたことを前提にしなければならない。少なくとも、この記事は、「上っ面」の差異を無視することは、臣民としての平等を確かなものにすると主張している。

> Ich bin ein Mensch, der zwar in Ober-Sachsen gebohren, und in Hamburg erzogen worden; der aber die gantze Welt als sein Vaterland, ja als eine einzige Stadt, und sich selber als einen Verwandten oder Mit-Bürger aller andern Menschen ansieht. Es hindert mich weder Stand, noch Geschlecht, noch Alter, daß ich nicht jedermann für meines gleichen, und ohne den geringsten Unterschied, für meinen Freund, halte.[236]
> 私は、オーバーザクセンで生まれ、ハンブルクで育てられた一人の人間である。とはいえ全世界を自らの祖国と、いやそれどころかただ一つの町とみなし、自分自身を他のあらゆる人間に連なる市民ないし類縁者とみなしている。身分も性別も年齢も、私が誰をも私と同じ人間、それも全く違いのない人間と、誰をも私の友人と考えることを妨げることはない。

この雑誌の最初の記事で、著者はこのように世界市民を自認する。この記事によれば、人間とはどういう存在なのかという問いにこそこの著者は答えたいと思っており、他者の幸福に仕えるために人間を知ることから始め、9、10 ほどの言語を習得して、世界各地を旅してきたという経緯があったようだ。そしてこの人生の経歴こそが自らが世界市民たる根拠であるということであった。無論この経歴が虚構である可能性は実に高い。

---

[235] Martus, Steffen (2018): *Aufklärung: Das Deutsche 18. Jahrhundert: Ein Epochenbild*. Rowohlt 2018, S. 236.

[236] Annonym (1724): Etstes Stück. (Donnerstags den 9ten Mertz 1724) In: *Der Patriot*, Ersten Jahr. Vierte Auflage Hamburg 1765, S. 1.

> Ich habe nicht nur sieben Jahre lang unter den bekanntesten Völkern unsers Europäischen Welt-Theils gelebt, sondern mein Eifer führte mich so gar auch zu den fast unbekannten Lappländern, Grönländern, Tartarn, Molucken, Indianern, Sinesen, Japanen, Moren, ja selbst den Hottentotten und Cannibalen. Diese weitläufftigen Reisen haben mich etliche zwantzig Jahre gekostet, wovon allein bey den Americanischen Menschen-Fressern fast zwey Jahre lang mich habe aufhalten müssen.[237]
> 私はヨーロッパの諸地域の著名な諸民族のもと 7 年間生活しただけでなく、私の熱意は終いにほとんど知られていないラップランド諸国、グリーンランド、タタール、モロッコ、インド、中国、日本、北アフリカ、それどころかホッテントットや食人族の地域へ向かわせた。この広域に渡る旅に私は実に 20 年もの時間をかけ、そのうちアメリカの食人族の許でだけでもほとんど 2 年の間滞在することを余儀なくされた。

中南米旅行者がもたらした食人儀礼の逸話がいかに典型的で、繰り返し転用されてきたかは第二部でもすでに見た通りである。だからこの記述が信用ならないことは考慮に入れるべきである。とはいえこの記事の著者が、世界旅行を通じて「ディオゲネスのように」人間なるものを理解した、そして世界市民であるべきだ、と主張していることは実に示唆的である。それは紛れもなく優雅な旅をする貴族文化を否定しているからだ。

従って修養旅行を諷刺する記事が書かれた背景的な動機は二つ考えられる。『愛国者』は当該の第一号の記事でもラディカルな平等主義を主張し貴族文化に特に否定的であったこと、二つ目はハンブルクという土地に根を下ろしていたホッブス主義やそれに伴う宗教批判に与していたことの二つである。ここでいう宗教批判とは、偽りの偶像を信じて崇め、有用な方便としての宗教権威に付き従い、知性的に堕落した貴族、世間一般の有り様をスキャンダラスかつシニカルに嘲笑するそれである[238]。このような背景を考慮すれば、『愛国者』が修養旅行を否定するのは理解できる。しかしそれは旅行という行為自体を否定するわけではなく、旅行文化が貴族文化の一部に属している限りで否定されるのである。

これは Marten 自身が、3 年間の間に百以上の記事を出版した『愛国者』に随所に現れる旅行批判には宗教的な動機が見当たらないと述べることに関連している[239]。結局 Marten は『愛国者』の旅行批判を以下のように総括した。

---

[237] Ebenda, S. 3.

[238] Vgl. Mulsow, a. a. O., Kapitel IV.

[239] Martens, Wolfgang (1986): Zur Einschätzung des Reisens von Bürgersöhnen in der frühen Aufklärung (am Beispiel des Hamburger „ Patrioten“ 1724-26). In: W. Griep und H.W. Jäger (Hg,) *Reisen im 18. Jahrhundert*. Heidelberg; Carl Winter 1986, S. 34-49, hier S. 41.

Der „Patriot“ argumentiert nach der Weltweisheit [...] . Das Reisen kann den Kopf verwirren und die Phantasie mit eiteln Vorstellungen erfüllen, weshalb Vernunftgebrauch anzuraten ist, das Seelenheil aber erscheint in keiner Weise mehr tangiert. Ja, der „Patriot“ befürchtet auch nicht ein Einreißen von Gottlosigkeit angesichts von Reiseerfahrungen, die dahin gehen, daß Völker auf der Erde existieren, die gesittet und tugendhaft sind, obwohl sie von Christus nichts wissen. [...] Vernünftig angefangen und vernünftig vollführt ist das Reisen dem Bürger und seinem Weltbild von guten Nutzen – es ist „in seinem vernünfftigen Gebrauche ein heilsames Mittel, die Kräffte des Verstandes zu mehren“ (I, 86).[240]

『愛国者』は哲学に倣った主張を展開している［…］旅行は頭を混乱させ、想像力をくだらぬイメージでいっぱいにしてしまう。それゆえに理性の使用が推奨されるべきである。しかし魂の救済はもはやいかなる形でも関係しない。それどころか、『愛国者』は旅の経験による神の不在という弊害を恐れることすらない。旅の経験によれば、キリストについて何も知らないにもかかわらず道徳的で高い徳を持つ民族が地球上に存在するからである。［…］理性的に始められ、理性的に終えられるならば旅行は市民にとって、そしてその世界像に実に有用である。旅行は、「それを理性的に使用する限りで知性の諸力を弥増す治療の手段である」（I, 86）。

Marten の『愛国者』における旅行批判の包括的な調査は、先述した見解とほとんど一致するといっていい。結果的に『愛国者』の著者は、旅行は大抵人々を空想に溺れさせるだけに終わり、それゆえに有害ではあるとは論じるものの、それはホッブス主義的な宗教批判と繋がっており、宗教や旅行そのものを否定するのではなく、貴族文化において堕落した形態をとって現れる宗教や旅行を批判しているに過ぎないのである。従って『愛国者』にもやはり道徳週刊誌一般に通底する啓蒙的な動機が認められる。

もちろん旅行者の堕落を非難する声は、旅行者にあてた技法書にも多く書かれている。旅行者の堕落は、旅行文化自体を放棄するよう迫ることもなければ、規範の存在自体を否定することもない。ヨハン・ペーター・ヴィレブラント（Johann Peter Willebrand, 1719-1786）は『ドイツ、ネーデルラント、フランス、イングランド、デンマーク、ベーメン、ハンガリーへの旅行の史的報告と実用的注釈』*Historische Berichte und Practische Anmerkungen auf Reisen in Deutschland, in die Niederlande, in Frankreich, England, Dännemark, Böhmen und Ungarn* (1758)の序文〔Vorrede〕で「外国旅行は若者に必要なのか、なくて済むものなのか、有用なのか有害なのか〔Ob das Reisen in fremde Länder der Jugend nothwendig oder entbehrlich, nützlich oder schädlich sey〕」は「論争的な命題にすぎないもの〔ein Streit-Satz〕」として、決定されないままであると述べている[241]。

---

[240] Ebenda, hier S. 41-42.

[241] Willebrand, Johann Peter (1758): *Historische Berichte und Practische Anmerkungen auf Reisen in*

ただし規範からの逸脱が横行して堕落した旅行者が目につくならば、それは旅行自体を否定する政治プロパガンダにはうってつけの材料である。官房学者のマーペルガーは『外国旅行についての注記』*Anmerckungen Uber das Reisen In Frembde Länder* (1722)というプロパガンダのための冊子を著した。このわずか 48 頁の冊子は、基本的に 1700 年 7 月 8 日にプロイセンで発令された不適切な旅行の制限を命ずる法律を起点に軽薄な旅行者たちの奢侈を批判する内容である。彼は第一章で、様々な理由から一時的に居住地を離れ別の場所へ赴くことと旅行一般を定義し、その上で所用に照らした旅行の分類を行い[242]、確かに特に政治や法律に関わるもの、あるいは学問的な探求に関わるものにとって旅行は実に有益であると古代の逸話を並べて主張する[243]。しかし論調が変わるのは第二章である。ここで彼は「とにかくどんな種類の人間であれ、その旅行について、正しい利用と誤った利用とを可能な限りはっきり区別することに注意を払うべきである［…］〔Nur ist bey aller dieser Personen ihren Reisen dieses wohl in acht zu nehmen, daß der rechte Gebrauch von dem Mißbrauch so viel als möglich unterschieden [...].〕」[244]と述べ、続けて「我々ドイツ人の国の子供達が自らの旅行を、肉欲からの目的、そして単なる上っ面の興味で、つまり楽しいことをしたいという深く根を下ろした習性のために行い、そこからよくあるように、利益より損害がますます増大する事になる〔unserer Teutschen Lands-Kinder ihr Reisen, mehr auf fleischliche Absichten, und bloße äusserliche Curiosität, etwan auch der also eingerissenen Gewohnheit ein Genügen zu thun, gerichtet ist, daraus hernach dem gemeinen Wesen mehr Schaden als Nutzen ... zuwachsen muß […]〕」[245]と警告する。従って、彼は件の法令に基本的に共感しており、そのために続く箇所で以下のようなエコノミー的啓蒙に訴える主張を採用する。

すなわち、「ドイツの愛国者〔Teutscher Patrioten〕」の観点に立つと、「我々ドイツ人の国の子供たちが行う不適切な旅や、そしてそこから生じる祖国への損害について〔über unserer Teutschen Landes-Kinder unmäßiges Reisen, und dem daraus dem Vaterland entstehenden Schaden〕」嘆かわしく感じられるし、また「ドイツは政治家や、好奇心に満ちた官僚にとって、他の国々を合わせたところでその何十倍もの見るべきものを保有している〔Teutschland zehenmal mehr Besehenswürdiges vor einen Politicum und curiosen Staats-Mann in sich halte, als alle andere Länder zusamm genommen〕」[246]。つまり「ドイツの愛国者」は、外国旅行に行く必要はないと主張するのである。田舎へ招かれた外国人ように

Deutschland, in die Niederlande, in Frankreich, England, Dännemark, Böhmen und Ungarn. Hamburg 1758. S. 10.

[242] Marperger, Paul Jacob (1722): *Anmerckungen Uber das Reisen in Frembde Länder.* Dreßden und Leipzig 1722, S. 3-8.

[243] Ebenda, S. 10-11.

[244] Ebenda, S. 18.

[245] Ebenda, S. 18-19.

[246] Ebenda, S. 20.

「我々ドイツ人は諸外国へ旅をすることでこぞって新しい流行衣装に身を包んで帰ってきて〔beringen von ihren Reisen nach frembden Ländern gemeiniglich neue Moden-Kleider mit zurück〕」、流行というだけで実に頻繁にイタリアやフランスへ旅立つ若者たちは、「あらゆる虚栄〔allerhand Vanitaeten〕」に陥り、ドイツを「苦境〔Verderb〕」に追いやっていると苦言を呈している[247]。そういう若者は諸国の言語の母であるラテン語を学び、またドイツ語を使えばいいのに、砕けたイタリア語やフランス語、スペイン語にかぶれている。要は「フランス化する我々ドイツ人の欺瞞〔Betrübniß unserer Frantzösirenden Teutschen〕」に陥っているのである。彼らはもうドイツ語を話す気はないのだろう[248]。

以上のようなマーペルガーが重視する愛国者の視点は、確かに通俗的なフランス趣味を否定する限りで、他の啓蒙的な学殖者にも共感を呼ぶことができたかもしれない。クリスティアン・トマージウスも『フランス人の模倣について』*Von Nachahmung der Franzosen* (1701)で、「我々ドイツ人くらいしか、フランス語がこれほど一般的になってはおらず、多くの場面ですでに靴屋や仕立屋、子供達や従者たちがその言語で十分に会話しているくらいなのである。そのような深く根を下ろした慣習を根絶することなど、個人では決定できないし、また個人にはその権限も認められていない〔Allein bey uns Teutschen ist die Französische Sprache so gemein worden, daß an vielen Orten bereits Schuster und Schneider, Kinder und Gesinde dieselbige gut genug reden; Solche eingerissene Gewohnheit auszutilgen stehet bey keiner privat-Person, kommet auch derselben im geringsten nicht zu.〕」[249]と述べている。確かに啓蒙的で、世界市民的な思想を抱くものからしても、彼自身ドイツ語での学問を推進した人だからこそ、そのような主張をするのであろう。

しかしマーペルガーはフランス贔屓やイタリアかぶれを単に非難するだけでなく、さらに踏み込んで、そうした趣味に染まった貴族文化に感化された若者が堕落する危険を理由に、外国旅行は禁止しようと訴えかけている。ここで彼が「ドイツの愛国者〔Teutscher Patriot〕」と呼びかけているのは、この時代のエコノミー的啓蒙に見られる経済的愛国主義を意識してのことである。結果的にマーペルガーは限られた人数と予算の上で政治家や実学分野の学者が行う旅行、それから商人の交易を除いて、と例外を設けることを提案するが、諸外国を見て周るツーリズム型の旅行文化に関しては全面的に否定していると考えられる。彼がこのプロパガンダで意図していたのは、官房学者として、貨幣として国家が保有する金銀が外国に流出するのを抑えること、そしてカトリック圏に対抗した経済愛国主義的な心情を広めることであっただろう。とはいえ皮肉なのは、マーペルガーがこの本を書いた後在位した偉大なるフリードリヒ 2 世こそ、筋金入りのフランス贔屓だったということである。

---

[247] Ebenda, S. 20-24.

[248] Ebenda, S. 28.

[249] Thomasius, Christian (1701): *Von Nachahmung der Franzosen*. Stuttgart; Göschen 1894, S.19

第五節　小括

ポッセルトの『水先案内、あるいは旅の技術』は、1800 年ごろにあって、なお旅行の教育的意義を強く訴えることで、その規範を見直そうとした。その際ポッセルトは「人格形成〔Bildung〕」ないし「自己形成〔Selbstbildung〕」という言葉を使い、以下のように、意義深い自己形成の最良の機会は旅行そのものであると訴える。

> Zwar findet der Mensch, der das Bedürfniß der Bildung fühlt, in jeder Lage des Lebens Gelegenheit, seinen Verstand, sein Herz und zu Theil auch seinen Geschmack zu bilden, und sich in derjenigen Kunst oder Wissenschaft, die der Gegenstand seines natürlichen oder bürgerlichen Berufs ist, immer mehr Kenntnisse und Fertigkeiten zu verschaffen; allein das Reisen giebt hiezu weit mehr Anlaß, und verschafft ihm Gelegenheiten, die ihm keine andre Lage in einem solchem Maaße darbieten kann.[250]
>
> 確かに、人格形成の必要を感じている人間は、人生のあらゆる場面で、自身の分別や心、そして部分的には趣味を形成する機会を、そして自らの生まれつきの、あるいは市民的な職業の対象である技術や学問の分野でますます多くの知識と技能を手に入れる機会を見出す。ただ旅行のみがそのための更なるきっかけを与え、別の状況ではこれ程に与えることができないような機会を作り出してくれる。

しかし同じ時代に手引を書いたハインリヒ・アウグスト・オットカー・ライヒャルト（Heinrich August Ottokar Reichard, 1751-1828）は、『全階級の旅行者のためのハンドブック』*Handbuch für Reisende aus allen Ständen* (1784)で、旅行が「教育〔Erziehung〕」の掛け替えない手段であると認めつつも、以下のような旅行者像を提示している。

> Aber wenn er nie den Bezirk seines Geburtsortes verläßt, so wird der Kreis seiner Kenntnisse immer klein und eingeschränkt bleiben; denn die Gegenstände, die er vor Augen hat, und die stets die nehmlichen oder doch wenig verschieden sind, verengen selbst den Zirkel seiner Begriffe. Ohne Erfahrung, ohne Unterstützung, sich selbst und den Vorurtheilen des Landes seiner Geburt überlassen, strebt er vergebens emporzudringen; er sink; immer wieder zur Erde hinab, und kriecht in dem engen Kreis fort, der ihn fesselt. Verläßt er aber den väterlichen Heerd; durchwandert er fremde Länder, so scheint sein Genie einen kühnen Flug zu nehmen [...]. [251]
>
> しかし彼が生まれた土地の圏域を決して去ることがないなら、彼の知識の圏域はいつまでも小さく制約されたままである。というのも彼が自分の目の前にした諸対象、

---

[250] Posselt, a. a. O., Bd. 1, S. 7-8.

[251] Reichard, Heinrich August Ottokar (1784): *Handbuch für Reisende aus allen Ständen*. Leipzig 1784, S. 18.

じっと同じ状態にあるか、わずかな差異しかない諸対象は、彼の概念の領域をすら狭めてしまう。経験なしに、裏付けなしに自分の生まれた国の偏見に身を任せたままだと、向上しようと努めても徒労に終わる。彼は沈む。繰り返し大地へ転落する。そして彼を縛り付けている狭い領分を這いずり回る。だが彼が祖国の我が家を後にし、異国の地を経巡るならば、彼の天性が大胆に羽ばたくように思われるのだ。

ここでライヒャルトが描き出している「彼」、すなわち学問と芸術を志す旅行者の姿は、既に第四節で触れた『愛国者』が第一号で提示した旅行者の姿に限りなく近い。それは、自然本来的に人は平等であるという真理を、旅行を通じて知るべきだという啓蒙主義的なコスモポリタニズム、そして同時に天才崇拝が現れている。それゆえこの旅行者像が早熟の世界周航を達成した文人科学者ヨハン・ゲオルク・フォルスター（Johann Georg Forster, 1754-1794）や 19 世紀半ば以降にますます英雄的科学者として尊崇されたアレクサンダー・フォン・フンボルト（Alexander von Humboldt, 1769-1859）のイメージを連想させても不思議ではない。彼らは多言語話者の世界旅行者としてコスモポリタン的な理念を体現した。

このような 1800 年頃の世界旅行者たち、例えばフンボルトのような旅行者は、実際のところどのような旅行者として自己提示し、どのような規範に従っていたのかという点については第三章・第四章で考察する。そして少なくとも彼らが旅行を報告する際には、自己提示がその中心的なテーマとなっていることを第四章で明らかにしていく。

最後にこの長い引用の直後に続く文章を見て、第二章を閉じたい。ライヒャルトは、旅行は歴史を通じて旅行者たちが共に積み重ねてきた知識という蜜によって有益となると述べる。

Aber glücklich der, dessen Fleiß und Thätigkeit der emsigen Biene ähnelt, die selbst auf den ödesten Felsen Blüthen findet, deren Saft sie aussaugen und zu Honig verarbeiten kann. Ich sage, für den weisen und aufgeklärten; denn ich rede hier nicht von allen Reisenden ohne Unterschied; es giebt welche, deren Züge den Wanderungen der Stichvögel gleichen, die keine Spur ihres Daseyns hinter sich lassen. Ihre Reisen sind unnütz für sie und für die Welt.[252]

しかし、その努力と行為が勤勉なミツバチに似て、自ら荒れ果てた岩の上に花々を見出し、その蜜をそれらは吸い、蜂蜜に作り替えることができる者は幸運である。私は言う、懸命で啓蒙された者たちに向けて。だって私は差別なくあらゆる旅人についてここで話しているわけではない。その特徴が生活の痕跡を残すことのないシロツノミツスイの渡りに等しいものが存在する。そうした者たちの旅はそれ自身に

[252] Ebenda, S. 19.

とって無益であり、また世界にとっても無益である。

また遍歴される諸国方々は哲学者たる旅行者にとって知識を生み出す源泉である、「自然、理性、そして経験は彼の指導者であり、世界は彼の書物である…〔Natur, Vernunft und Erfahrung, sind seine Führer; die Welt ist sein Buch...〕」[253]。しかしこのような旅行者のイメージは、その一面を的確に捉えている。この意味でやはり、1700 年頃に形成されて以来 1800 年頃まで持続する規範と結びついた慣習的カテゴリーとして旅行者は規定され、旅行記というテクストの相互参照的なあり方に依拠した模倣や改善、新たな提案という営みを共同で行い、諸国遍歴を通じて知識や洞察を新たにもたらすことを可能にする人々のタイプが明確になっていったのである。

[253] Ebennda.

第三章　記憶と神話的風景

基本的に旅行記は客観的な叙述を心掛け、旅先の情報や知識を信頼ある形で伝えることが重要であった。少なくとも旅行文化が成立するまで、旅行は基本的に官吏や学殖者がパトロンの支援や職業の必要があってなされ、その記録は日報や日誌のようなものであったし、次々と変わる旅路や旅先の情報に関して正確かつ詳細に伝えることが、今後旅に出ようと計画している読者から求められても。確かにある時代まで旅行記は旅行案内や旅行手引と並んで実用的な書物であるべきだった。しかし単に旅行者の便益に適う情報を伝えるためだけの旅行案内や、「一見に値するもの」の正確な歴史的知識や外形の情報などを客観的に記述する旅行記は、より手軽な旅行案内や第四章で触れる幾らかの旅行記作家たちの旅行記を包括的に編集したスタンダードな旅行手引、ジャーナリスティックな最新情報を伝える短い旅行記、それからカイスラーの標準的な旅行記など多数の信頼に足る情報源が多数世に現れるに従って相対的に需要が低下する。旅行記を相互に検討して書かれた「優れているが無味乾燥な」[254]ヨハン・ヤーコプ・フォルクマンの旅行記もイタリア、スコットランド、イングランド、オランダなどヨーロッパの主要な旅行先については出版される。フォルクマンの旅行記は多くの先行する旅行記やヴィンケルマンの美術理論などから借用された記述や見解を編集したものであり[255]、このようなメタ旅行記はより洗練されより新しいた旅行のモードを追いかけ、旅行者としての規範を先鋭化させた。こうした信頼のおける旅行記が売れ、また交通や宿泊に関する小型の旅行手引も出揃うと、それに応じてイタリアやフランス、イギリスへの旅行も流行現象となった。

しかしその結果旅行の頻度は増大する一方で模倣に終始する旅行が増大し、新たな旅行の仕方が登場する頻度は低下したと予想される。それに対し、むしろ叙述様式がそれぞれの旅行記で独自なものとなっていく傾向は 18 世紀後半以降見られるようになる。仮にイタリアなどの旅行地へ赴いたところで、旅行記作家にとって新たに書き加えるべき客観的な情報は大幅に減少した分、より主観的な感情の表現や風景描写、追憶の語りを差し挟むのである。このような現象の背景にある原理を、ここで認識的節約の原理と呼ぶことにしよう。認識的節約の原理に従えば、お決まりの国々でお決まりの名所を訪

---

[254] ゲーテはイタリア滞在中の 1787 年 2 月 3 日にシュタイン夫人へ宛てた手紙の中で「私は今優れているが無味乾燥なフォルクマンの第二巻を読んでいます〔ich lese jetzt des guten, trocknen Volkmanns zweiten Theil〕」と述べている。引用は以下に倣った。Morrison, Jeff (2012): Autopsy, Translation, and Editing in the Production of Johann Jakob Volkmann's Historisch-Kritische Nachrichten von Italien (1770-71). In: A. E. Martin and S. Pickford (ed.) *Travel Narratives in Translation. Nationalism, Ideology, Gender*. New York; Routledge 2012, S. 42-55, hier S. 47.

[255] Morrison, a. a. O., S. 42-55.

ねた際には、単に「これがなんであるか」を記載するだけで旅行者の鑑識眼を示すにはもはや十分ではないため、そのような情報は省略される。そうして対象の客観的な知識や歴史的な理解を回避したり無視したり、批判したりすることで、独自の趣味や政治的・道徳的見解を示し、対象と自己の関係を新たに規定することが求められる。

その際自己自身の経験に入り込む関連する記憶を現前する対象や風景と重ね合わせることで、それら対象や風景はもはや客観的な歴史の文脈から遊離し、一種のトポスへ変質する。トポスとなった対象や風景は、神話から続く無数の人々の経験された集合的な記憶の根ざす場として旅行者がそこで経験したエピソードを、神話的なモチーフや自己の人生の追憶を用いて語ることを可能にする。少なくともドイツ語圏でそのような旅行記が現れるようになるのは 1770 年代以降と考えられる。第三章ではそのような 1770 年代以降の旅行記を幾つか検討する。そうして旅行記が第二章で論じたような規範に即していたからこそ、新たな叙述様式が現れた過程を明らかにし、規範が 1800 年頃まで持続していたことを論証する。

第一節　イタリアの印象

イタリア旅行のクライマックスは、イタリアへ押し寄せる人々の動機や旅行の委細がどれほど相違しても、常にローマという大都市で迎えられてきた。古くから巡礼者がローマを目指した。対抗宗教改革の時代にはその勢いが頂点に達し、1675 年の聖年〔Jubiläumsjahr〕には巡礼者に宿房として開いていたローマのサンタマリア・デッラニマ教会にドイツから一万人に登る巡礼者が訪れたという[256]。ローマは宗教都市として人が溢れかえっていたのである。巡礼者の集団は聖年でなくともイタリアを訪れており、カスパー・ゲーテはヴェネツィアでそうした集団に遭遇している。

とはいえ旅行者は巡礼者ではない。イタリア旅行でツーリズムを実践する旅行者が目的とするのは聖地ではない。第一にイタリアの政治的、時代的、自然的な多彩さがこの地を旅行地と定める理由になった。イギリスの著名な週刊誌『スペクテイター』The Spectator (1711-1712)の編集記者であったジョゼフ・アディソン（Joseph Addison, 1672-1719）はイタリア旅行について以下のように述べている。

> There is certainly no Place in the World where a Man may Travel with greater Pleasure and Advantage than in Italy. One finds something more particular in the Face of Country, and more astonishing in the Works of Nature, than can be met with in any other Part of Europe. It is the great School of Musick and Painting, and contains in it all the noblest Productions of Statuary and Architecture both Ancient and Modern. It abounds with Cabinets of

[256] Maurer, Michael (1991): Italienreisen. Kunst und Konfession. In: Hermann Bausinger, Klaus Beyrer, Gottfried Korff (Hg.) *Reisekultur: Von der Pilgerfahrt zum modernen Tourismus*. München; C. H. Beck 1991, S. 221-229, hier S. 221.

Curiosities, and vast Collections of all Kinds of Antiquities. No other Country of Governments, that are so different in their Constitutions, and so refined in their Politicks.[257]
一人の男が旅することで非常な喜びと利点を得られるだろう場所は、この世界にイタリアをおいてないことは確かである。あるものは国全体に何か特異なものを見出し、自然の造形には、ヨーロッパの他の地域で出会いうるものより、一層目を見張ることになる。イタリアは音楽や絵画の偉大な学校であり、古代現代双方の彫刻や建築の、最も高貴な作品は、なんでもそこに所有されているのである。イタリア中に驚異の部屋があり、あらゆる種類の古物の膨大な蒐集品がある。それぞれの統治形態においては実に相違するが、それぞれの政略において実に洗練されている政府が数々ある国は他にない。

この時代の旅行文化においてもアイコン的な存在であったアディソンはここでイタリアを旅行する利点を、自然の多彩さ、宝物の多さ、芸術における過去から現在まで、そして政治の諸形態を見て回ることで、全てを見ることが叶うと考えているわけである。つまり、ルネサンスやバロックの学者たちが夢見た百科全書的な、驚異と多様性の世界を反映した部屋が多数存在するイタリア半島は、彼らの夢そのものというわけである。

このような見解は 18 世紀半ばになってもそれほど変わることはなかった。ヨハン・ヴィルヘルム・フォン・アルヒェンホルツ（Johann Wilhelm von Archenholz, 1743-1812）は「ある旅行者の未公刊の日記からの抜粋」と題した記事で、イタリアの特徴を以下のように記している。これは一見するとアディソンの見解とそれほど相違がないように思える。

Kein Land unsers Erdbodens ausser Italien giebt uns einen solchen auffallenden Beweis, wie sehr die Verschidenheit der Regierungsformen den Karakter der Völker bestimmt. Kilma, Religion, Sprache ist hier einerley, und zwar in einem Lande von mäßiger Größe; allein wie groß ist nicht der Unterschied zwischen einem Venetianer und einem Römer; zwischen einem Genueser und Mailänder; zwischen einem Florentiner und Neapolitaner. Diese Verschiedenheit kann dem beobachtenden Reisenden nicht entgehen; allein nur durch einen langen Aufenthalt in diesem Lande kann er das Karakteristische der Bewohner eines jeden Staats kennen lernen, das aus der Art der Regierung und der Gesetze entspringt.[258]

---

[257] Addison, Joseph (1718): *Remarks on Several Parts of Italy, etc. In the Years 1701, 1702, 1703*. 2nd ed. London 1718, Preface.

[258] Archenholz, Johann Wilhelm (1782): Auszüge aus dem ungedruckten Tagebuche eines Reisenden. In: *Literatur und Völkerkunde* (1782 Julius), Erster Band. Dessau 1782, S.1. なおこの連載記事は 1786 年に旅行記叢書 *Sammlung der besten Reisebeschreibungen* の 16 巻として一部改訂されて一冊にまとめられ、さらにその後『イングランドとイタリア』*England und Italien* (1-5. Theil: 1787)の一部と

イタリアの外に我々の住む地上の国で、統治形態の多様性が、いかほど諸民族の性格を規定しているかについて、これほど興味深い例証を我々に与えてくれる国はない。気候、宗教、言語はここでは一つである。しかも程々の大きさの国なのだ。しかしヴェネツィア人とローマ人との間の違いはなんと大きいことか、そしてジェノヴァ人とミラノ人の間の差異、フィレンツェ人とナポリ人の間の違いも！　これらの多様性は、観察を心がける旅人に見落とされることなどない。とはいえ、ただこの国での長期的な滞在によってのみ、彼は一つ一つの国家の住人の特徴を知ることができる。それは統治や法のあり様に由来するのである。

アルヒェンホルツはここでイタリアには多様な政体があるのに対し、気候、言語と宗教の統一性によって一つの国でありうると述べる。しかし同時にここの地域の住人に見られる性格の違いはこの政体に左右されると述べる。アディソンは確かに、「ジェノヴァの人間は狡猾で勤勉を誇り、そしてイタリアの他の地域に優って過酷な状況に慣れている〔The Genoese are esteem'd extreamly Cunning, Industrious, and enur'd to Hardship above the rest of the Italiens〕」[259]と述べたりしているように、各都市の住人に見られる性格を指摘するがそれほど踏み込んだ主張はしていない。アディソンとアルヒェンホルツの見解の間の微妙な差は、しかし強調されねばならない。というのは、ここにヨハン・ヨアヒム・ヴィンケルマン（Johann Joachim Winckelmann, 1717-1768）の影響が認められるからである。第一にアルヒェンホルツが国民の特徴を左右する条件として挙げた、気候、言語、宗教、政体の四つの項目は、ヴィンケルマンが『ギリシャ芸術模倣論』*Gedanken über die Nachahmung der Griechischen Werke in der Malerey und Bildhauerkunst* (1756)芸術の特徴を左右する条件として挙げた項目である。またアルヒェンホルツは続く箇所で芸術に関する考察を並べるが、そこで用いられているエジプトやアジアにおける造形美術との比較からギリシャ芸術を捉える枠組も、同じくヴィンケルマンを踏襲している。このように 1770 年代にもなればイタリア旅行を踏まえた記述や、イタリアの旅行記を著すものに、ヴィンケルマンの影響を見てとることは容易である。

ヴィンケルマンは自らの古代芸術研究のためイタリアを旅するが、そこでヴィンケルマンはルネサンス美術や古代ローマの世界のみならず、南イタリア、とりわけシチリアにギリシャ的世界を見出すことになる。シチリアは実際紀元前 5、6 世紀にギリシャの植民地であったために、シラクサ、アグリジェント、セリヌンテ、セジェスタに多くの古代ギリシャ遺跡を残している。ヴィンケルマンはアグリジェントでの研究成果を『シチリアのアグリジェントの古代寺院の建築術についての註釈』*Anmerkungen über die Baukunst der alten Tempel zu Girgenti in Sicilien* (1759) にまとめた。

して再録されている。

[259] Addison, Joseph (1718): *Remarks on Several Parts of Italy, etc. In the Years 1701, 1702, 1703*. 2nd ed. London 1718, S. 6.

Albert Meier によれば、ヴィンケルマンの友人でもあり崇拝者でもあったヨハン・ヘルマン・フォン・リーデゼル（Johann Herrmann von Riedesel, 1740-1784）は、ヴィンケルマンが残した研究を手引に自らの旅行記『シチリアと大ギリシャの旅行』*Reise durch Sicilien und Großgriechenland* (1771)を著した。これによってイタリア旅行という慣習に及ぼしたヴィンケルマンの影響は決定的となり、シチリアへ足を伸ばす旅行者が増えたという[260]。だがこれは実質的にはリーデゼルの影響力でもある。そしてこの旅行記は、イタリア旅行のあり方を変えるだけでなく、旅行記のスタイルにも大きな影響力を持ったように思われる。リーデゼルの旅行記は親しい友人に宛てた書簡という体裁を取っている。冒頭には次のようにある。

> Da Sie mir erlauben, mein werthester Freund, Ihnen mein Anmerkungen über die vollbrachte Reise um Sicilien und das Königreich Neapel mitzutheilen, so machen Sie sich gefaßt, verschidenes, und nicht allein die Alterthümer, sondern auch andere Gegenstände betreffendes, zu hören. Sie wissen, daß ich gern mit meinen Freunden rede, daß ich verschiedene Grillen hege, und Sie haben solche oft anzuhören Gedult gehabt. Wollen Sie die gleiche Güte diesem Opfer meiner Freundschaft für Sie widmen, so will ich mit dem größten Vergnügen Ihnen meine sämtlichen Beobachtungen mittheilen. Ich habe Zutrauen zu Ihnen, zu Ihrer Freundschaft und Nachricht; weil ich weiß, daß Sie mich lieben, und daß Sie aus allen Dingen einigen Nutzen zu ziehen wissen.[261]
> 我がかけがえなのない友よ、あなたが私にシチリアとナポリ王国を巡った旅についての自分の覚書をあなたにお伝えすることを許してくださるのですから、あなたはさまざまな、ただ古代世界に関してのみならず、他の素晴らしい事柄についても聞けることを期待なさっていてください。あなたはご存知です、私が自分の友と話すのが好きで、様々な奇妙なことを頭の中で考えることを、そしてあなたはそれにしばしば耳を貸す忍耐をお持ちです。あなたが同じだけの親愛を、あなたに向けた私の献身的な友情に捧げるつもりなら、私は喜んであなたに私の考察の全てをお伝えしたいと思います。私はあなたを信頼しています、あなたの友情を、そしてあなたの報告を信じています。なぜなら私はあなたが私のことを愛してくれていることを知っているからです。そしてあなたがどんな事物からも自分のためになるものを引き出すことができると知っているからです。

それまでの旅行記が仮に書簡体をとっていた場合、カイスラーの旅行もそうだが、それ

---

[260] Vgl. Meier, Albert (1989): Von der enzyklopädischen Studienreise zur ästhetischen Bildungsreise. Italienreisen im 18. Jahrhundert. In: P. J. Brenner (Hg.) *Der Reisebericht. Die Entwicklung einer Gattung in der deutschen Literatur*. Frankfurt am Main; Suhrkamp 1989, S. 284-305.

[261] Riedesel, Johann Herrmann von: *Reise durch Sicilien und Großgriechenland*. Zürich 1771, S. 5.

は自分が仕える主人が相手であることを想定した公式の畏まった記述であることが普通であった。つまり Winfrid Siebers の主張する通り、「初期啓蒙の旅行日記には『職務報告』という概念が無難にも正確に当てはまるだろう。学殖者たちは本質的には自分たちの関心を引いた対象や出来事を簡潔に記すが、私的なメッセージはほとんど全て避けたのである〔Auf das Reisetagebuch der Frühaufklärung träfe der Begriff »Arbeitsjournal« sicherlich genauer zu. Die Gelehrten haben im wesentlichen die sie interessierenden Gegenstände und Ereignisse notiert und private Mitteilungen fast völlig vermieden〕」[262]。

だからリーデゼルの旅行記が決定的にそれ以後の旅行記に及ぼした影響の一つに、書簡体の旅行記における規範的文体を変化させたことを数え入れる必要があるだろう。それはともすればヴィンケルマンの書簡を模範にしているかもしれないし、いずれにせよ死別したヴィンケルマンと交わしていた書簡のなかで培われた文体が止めようもなく残響しているのは確かだろう。なぜなら書簡の相手で想定されているのは明らかにヴィンケルマンだからである。

また、彼がそのような距離の近い旅行記を著すにあたって、同時に伝統的な修辞学で挙げられるトポスを踏まえていることも見落としてはならない。この旅行記で彼は以下のような風景描写をする。

> Die Felder um Tavormina sind annehmlich und wolgebaut; sie bringen guten rothen Wein, Oel; (...) Man sieht einen beständigen Wald von Oel- und Maulbeerbäumen; und die Hügel sind mit von den anmuthigsten, welche ich in Sicilien gesehen habe. Das Wasser an den Ufern des Meers ist so klar, daß man so gar einen jeden Kiesel auf dem Grunde zählen kann; und da der Mond diese ganze Landschaft und die See mit senem Selberlichte beleuchtet, die Nachtigallen häufig sangen, und das Meer einem Spiegel in seiner ruhigen Oberfläche gleichete, so war dieses der rührendste Genuß für mich, der mir eine heimliche, aber süsse Melancholie einflößte. [263]
>
> タオルミナ周辺の畑は、心地よく綺麗に耕されていて、上質な赤ワインやオリーブ油をもたらす。［…］断続的に続くオリーブや桑の樹々の森が見えるわけだが、丘陵は、私がシチリアで眼にしてきたもののなかでも最も魅了する樹々の森で覆われている。海岸の水は実に明澄で、底にあるどんな砂礫もすっかり数えることができるほどだ。そして月がこの風景全体と海原を、銀色の輝きで照らし出し、ナイチンゲールが盛んに囀り、そして海原の穏やかな水面が鏡面の如くなった時、これらは私にとってこれ以上にない感動的な歓びとなるのだが、それは私に、ある種懐かし

---

[262] Siebers, Winfried (1992): Beobachtung und Räsonnenment. Typen, Beschreibungen und Öffentlichkeitsbezug der frühaufklärischen Gelehrtenreise. In: Hans-Wolf Jäger (Hg.) *Europäisches Reisen im Zeitalter der Aufklärung*. Heidelberg; Carl Winter 1992, S. 16-34.

[263] Riedesel, a. a. O., S. 158.

くも甘美なメランコリーを喚起するである。

彼のこの記述が修辞学のトポス「愛の場所（locus amoenus）」を踏まえていることは明らかである。ただし彼の愛の対象はヴィンケルマンであり、愛の対象が失われた悲しみを表現するためにこそ、このトポスが採用されている。だから彼は、ここで伝統的な美文体を引き合いに出すことで、失われた愛の対象と、古代の風景の痕跡として描き出されるシチリアの風景を通じて表象させる失われたアルカディアを重ね合わせ、独特のメランコリーの印象を読者に与えているのである。そしてその限りで、この旅行記が掘り起こそうとしているのは、芸術と自然の一致した理念である。それはかつてオレアリウスのような発見旅行の著者たちが聖書の世界と自然の驚異を一致させて考えようとしたように、古代ギリシャの神話的世界をそこに表象させようとしている。だがそのような叙述が、具体的根拠となる事物の詳細な描写をせずにシチリアという舞台を借りることで可能となるのは、すでにヴィンケルマンが詳細な研究を世に出し広く読まれていたからである。リーデゼルは今更細かい数字や碑文を列挙する必要はなく、ヴィンケルマンと深く結びついたシチリアの風景、そこに見出されるギリシャ的世界という読者との間の共通の理解を足場に、彼は独自の旅行記を書き上げた。

従って Meier が、リーデゼルの旅行記によってヴィンケルマンに依拠するシチリアを含むイタリア旅行の形が生まれたと述べる限りでは同意できるが、この旅行記をもって旅行文化が、百科全書的な教養旅行のためではなく、美的な楽しみのため、趣味のための旅行に転換したというテーゼは全面的に支持できない[264]。彼の見解は第一に、旅行のあり方ではなく、旅行記の記述様式に関しての主張として制限されねばならない。この点に Meier は気づいていない。その上で、記述様式の変化は単純な影響関係に基づくのではなく、他の著作との連関のなかでもはや伝えなくていいことを避け、自分だけが書くことのできる旅行の経験と、その経験に注釈をつけるように自分の見解を書き添えるのである。ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ（Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832）の『イタリア紀行』*Italienische Reise* (1816/17)も、多くの点でカイスラーやフォルクマン、父ヨハン・カスパー・ゲーテの旅行記に負っており、百科全書的な構想を背景にしている。しかし同時に風景描写も多くなされ、自然研究と芸術探究の途上としてその旅行を規定し、以下のように記述している。

> Ich hatte große Lust, alle die Produkte zu beleuchten, die hier auf einmal zusammengefunden werden, doch der Trieb, die Unruhe, die hinter mir ist, läßt mich nicht rasten, und ich eile sogleich wieder fort. Dabei kann ich mich trösten, daß in unsern statistischen Zeiten dies alles wohl schon gedruckt ist und man sich gelegentlich davon aus Büchern unterrichten

[264] Meier, Albert, a. a. O., S. 284-305.

kann. Mir ist jetzt nur um die sinnlichen Eindrücke zu tun, die kein Buch, kein Bild gibt.[265]
ここに一挙に集められる生産物全てを調べてみたいという大きな欲求があるものの、しかし衝動が、私の背後にひかえる落ち着きのなさが私を休ませることがないので、私は直ちにまたもや急ぎ出発することにした。その際私の慰めになりうるのは、統計学が隆盛する我々の時代にあっては、こうしたことすべてが既に印刷されているであろうし、機会さえあればそうしたことについて書物から学ぶことができるということである。私にとっては、今やただただ、書物や絵画が与えてくれることのない感覚的な印象が重要なのだ。

ゲーテの『イタリア紀行』には実際、彼が統計の本で学び得るような知識を列挙する箇所など存在しない。憧れの地であったローマで幼少期からの願いであった画家の訓練を受け、詩人としてシチリアで神話的風景に身を浸し、自然研究者として植物や火山の観察に精を出したが、これらの経験は全てゲーテ自身の人生に深く埋め込まれたエピソードとして描き出され、彼がイタリアで経験した事柄には常に彼のその時点での過去の時間が重ねられている。

だからカイスラーの旅行記と、リーデゼルやゲーテの旅行記の間の決定的な違いは、カイスラーが眼前にする対象に即し、自らの人生とは切り離された歴史的事実の引用を積み重ねながら旅行記が叙述されるのに対し、後者二人の旅行記には客観的で自らと切り離された過去の事実を列挙することはない。その代わりに対象や風景を眺めている旅行者としての時間にトポスに即して記憶を織り交ぜ、旅行を通じて現れている経験世界を神話的な次元で構成していく。時間の層を折り重ねることで、旅行者としての卓越性を、従来旅行者に求められてきた知識を前提とした自伝的な語りのなかで提示する叙述様式が完成されていく。

この時引用されるのは客観的な歴史学的知識ではなく、むしろトポスや旅行者自身の記憶なのである。そして眼前の光景を介して記憶を手繰り寄せる語りは、先行する旅行者の旅行と自らの旅行の差異を絶対的なものにする。旅行の目的地の選択を人生のなかに根拠づけることで、その旅行が単なる模倣ではないことを読者に提示し、旅行の自己目的性を強調することができる。このことは端的に、ゲーテがローマに到着した日の有名な一節から理解されるだろう。

Alle Träume meiner Jugend seh' ich nun lebendig; die ersten Kupferbilder, deren ich mich erinnere [...], seh' ich nun in Wahrheit, und alles, was ich in Gemälden und Zeichnungen, Kupfern und Holzschnitten, in Gips und Kork schon lange gekannt, steht nun beisammen vor mir; wohin ich gehe, finde ich eine Bekanntschaft in einer neuen Welt; es ist alles, wie

[265] Goethe, Johann Wolfgang von (1816/17): *Italienische Reise.* Johann Wolfgang von Goethe Werke Hamburger Ausgabe, Bd. 11. München 1988, S. 25.

ich mir's dachte, und alles neu. Ebenso kann ich von meinen Beobachtungen, von meinen Ideen sagen. Ich habe keinen ganz neuen Gedanken gehabt, nichts ganz fremd gefunden, aber die alten sind so bestimmt, so lebendig, so zusammenhängend geworden, daß sie für neu gelten können. [266]

我が青年時代の夢を全て今やこの身で感じながら見ている。私の記憶している初めての銅版画を［…］私は今、現実に目の当たりにしている。そして私が絵画やスケッチ、銅版画や木版画で、石膏やコルクでずっと前から知っていたものが全て今や一挙に私の前に並んでいる。私はどこへ行こうとも、新たな世界のなかですでに知っているものを見出す。全てが私の考えてきたものの様であり、そして全てが新しい。同様のことが私は自分の観察、私の理念についても当てはまる。私は全く新しい思想なんてものを持っていなかった。全く異質なものなど見出すことがなかった。しかし古い思想は、それが新しいとみなしうる程にはっきりと規定され、生き生きとまとまりあるものになった。

ゲーテが現実の光景に夢を重ねるのは、確かに一時のことに過ぎない。だからそれを幻とか錯覚ということは容易い。だがそのような truism はゲーテがここで使用している旅行記の叙述様式を無視している。彼がこの旅行記を書いたのは旅行後 25 年も経ってであり、詳細な事実を記す意義はますます失われていた。彼は人生の一幕を多重的に描き出し、自伝の一部として完成させた。今引用した文章はローマに到着した日の日記に収められているが、この日の日記の冒頭には、彼がローマに到着するまでの二ヶ月以上の旅を、地名を列挙することで振り返った文が続いている。それはローマを夢見た日から実際に到着するまでの、すなわち幼少期から現在に至るまでの長い時間的、地理的な道のりを表現したものである。そうして数多くの断片的で静的なままだった記憶が、ローマを前に重なり合わされ、総体をなし息づいたイメージに変化する。

最後に、カイスラーにそのような時間的な層はないのかを検討する必要がある。確かにカイスラーのテクストも多次元的に構成されている。だがどこで何が見られるか、それはどのような容貌をしているのか、どのような歴史や逸話を持っているのかを記述するのみである。むしろ、カイスラーにあって記憶や他の対象、引用や歴史叙述は、比較や情報伝達という機能に制約されている。しかし直接的に感動が表現されることはほとんどないとはいえ、読者は客観的な記述の積み重ねのなかに彼の感情的な側面を読み取ることもできる。以下のナポリの記述に見られるように網羅的な、統計的な記述は、確かにローマの記述と同じ原理で、彼の賛嘆の念を示唆しているだろう。

Das Königreich Neapolis ist in Ansehung seiner Fruchtbarkeit ein rechtes Paradis der Erden.

---

[266] Ebenda, S. 126.

Allerley des Getreides, das schönste Obst, andere Garten-Früchte, Reis, Flachs, Oel und Wein kommen in grosser Menge und Vollkommenheit hervor. In Calabrien wird viel Manna gesammlet und sowol daselbst als in andern Gegenden des Reichs bauet man Safran, der dem Morgenländischen gleich geschätzen wird.
Alaun, Vitriol, Schwefel, Berg-Crystall, Marmor-Brüche und mancherley Mineralien sind hier und da anzutreffen. Die Wolle ist fein und gut, auch die Seide in solcher Menge, daß auswärtige Länder aus den hiesigen Fabriquen versehen werden können. Die Weine streiten mit den vornehmsten und berühmtesten, welche die Natur andern gesegneten Ländern schenket, um den Vorzug. [267]
ナポリ王国は、その豊饒さを顧みれば正真正銘の地上の楽園である。様々な穀物、麗しい果実、他の栽培果実、稲、亜麻、オリーブ油とワインが、大量かつ完璧な品質で産み出される。カラブリアではマナ蜜が集められ、王国の同じ地域や他の地域では、東洋産のものと同品質と評価されるサフランが畑作されている。
明礬、硫酸、硫黄、水晶、大理石坑、それから多種多様な鉱物に、此処彼処で出くわす。羊毛は繊細で良質、絹糸も諸外国へ当地の工房から購入されることもあるほどの量である。ワインはといえば、自然が他の恵まれた国々に授けた最も上品で名高いワインと優位を争う。

カイスラーはここでナポリが自然豊かで美しい土地であることを強調するために、その名産品を列挙する。この列挙は、ローマの偉大さを示すための、見るべきものの名称や外形の記述や歴史叙述や古典、碑文からの引用の列挙と同じ原理で記述されていると考えられる。つまりこのような統計的な記述であっても、それはカイスラーがナポリに寄せる感嘆を消し去ってしまうわけではない。彼が語ることの内容に関していえば、ローマやナポリの町に感じた感嘆の念が表明されることはないとはいえ、関連する事物や出来事、歴史、統計的事実の記述を膨大に積み重ね一望する身振りを提示する行為に、読者はカイスラーの感情的な表明を読み取ることができる。そしてこのような一望は、カイスラーや読者に比較する視点を提供する。ローマにあって、その素晴らしさをロンドンやパリの街と比較するときもまた、彼は住民人口や生活環境に関するデータに基づいて比較している 。それは彼の経験された街並みの記憶に由来するものではない。彼は自分の人生と切り離された事実の次元に留まっており、時間的かつ生動的なイメージを重ねることはない。だが、それだからこそカイスラーの旅行記は信用され。広く活用され、18 世紀中葉にあって成功を収めたのである。

[267] Keyßler, a. a. O., Bd. II., S, 744.

第二節　アメリカの印象

学者の旅行はこれまでの研究で基本的にツーリズムと切り離されて理解されてきた。1700 年ごろであれば、ライプツィヒやアルトホーフといった大学を点々としながら研究を続ける若かりし頃のライプニッツのような人が行った旅行や、既に学殖者として名の知れていたチルンハウスのような人が行った旅行、そして 1800 年ごろであればアレクサンダー・フォン・フンボルトに代表される調査探検旅行が思い出される。とはいえ、これら三つは旅行の過程に即して分類可能であるだろうし、実際 Winfried Siebers は 17、18 世紀の文化的な断裂を 1740 年ごろに求めつつ、以下のように主張した。

> Die wechselseitige Unterrichtung der Gelehrten in der persönlichen Begegnung auf Reisen darf innerhalb des knapp skizzierten Kommunikationssystems der »res publica literaria« als eines der wichtigsten Informationsmittel angesehen werden. Schon im Bildungsgang und in der Berufsqualifikation des Gelehrten ist das Reisen üblich. Es sei jedoch an dieser Stelle nachdrücklich auf die offenkundigen Unterschiede zwischen der »peregrinatio academica« als in- oder ausländischer Studienwanderung während der Ausbildungszeit und der Gelehrtenreise als wissenschaftlicher Forschungs- und Studienreise des bereits ausgebildeten, womöglich beruflich gebundenen Gelehrten hingewiesen. [268]
>
> 旅の途で学殖者同士が個人的に会合しお互いに情報提供することは、「文芸共和国」という［上記の部分で：大林］簡単に略述したコミュニケーションシステムの内部では、最も重要な情報手段の一つとみなされていた。すでに学殖者の修養過程、あるいはその職業資格のため、旅行を行うのは一般的だった。しかしながらここで強調して指摘されるべきは、修養期間中に国内外を研究遍歴する「学問の旅」と、職業身分に拘束されながらも既に修養を遂げた学殖者たちが行う学術的な研究調査旅行の間にある明白な相違である。

彼はさらに後者の学殖者の旅を五つに分類する。1. 聖職につくものが行う教会・教団の旅〔die kirchliche oder Ordensreise〕、2. 法的機関や専門機関に所属する官僚が行う国家的任務旅行〔die staatliche Auftragsreise〕、3. アカデミー会員、特に医師や自然研究者が行うアカデミー旅行〔die Akademiereise〕 、4. 学術界に所属するものや専業作家が行う私用の学殖者旅行〔die Privatgelehrtenreise〕、5. あらゆる種類の学殖者が行う可能性のある家庭教師旅行〔die Hofmeisterreise〕。Siebers によればこのいずれの旅行を行う者も、多くは旅行先としてネーデルラントかイングランドを選択する。というのは、ライデン大学やオックスブリッジ、それから王立協会があるからである。これは初期啓蒙の時代

---

[268] Siebers, Winfried: Beobachtung und Räsonnenment. Typen, Beschreibungsformen und Öffentlichkeitsbezug der frühaufklärischen Gelehrtenreise. In: Hans-Wolf Jäger (Hg.) *Europäisches Reisen im Zeitalter der Aufklärung*. Heidelberg 1992, S. 16-34, hier S. 19.

において特徴的な学殖者の旅行の傾向であると彼は指摘する。

とはいえ第二章で述べたように、18 世紀前半にあって学殖者の旅行は貴族的な修養旅行の規範を引き継いでいると考えられる。そこで求められる旅行者の規範が、貴族や富裕な市民と学殖者が同じ社会に所属することで共有されていたからだ。確かに青年の旅と既に身分ある学殖者の旅では、目的や構成する要素が異なるに違いない。しかし彼らもまた、旅行者として同じ規範に従っている。第一章、第二章で見たように、社交の場面で従うべき規範を身につけること自体も旅行で試されるし、旅行者としての自己提示に欠かせない知識に欠けていれば、旅行者は各地の上流社会に参入できず、私設されたコレクションを訪ねて周ることも失敗に終わり、その他一見に値するものを見ることなく国へ帰ることになる。

しかしこれは 1700 年頃に確立したヨーロッパツアーを基本とする旅行文化に限定された話ではない。1800 年頃、中南米大陸にアクセスすることは非常に困難だった。大西洋を越えるという地理上の困難に限らず、政治的な権限が求めるための交渉が不可欠だった。当時中南米の多くの土地はスペインの植民地であり、ブラジルはポルトガルの植民地であった。アメリカ大陸での探検旅行を望むならば、両王国の宮廷にそれぞれ認可される必要があった。そのために外交的・社交的な努力が必要だったのである。多少図式的に理解すれば、植民地へ探検旅行に赴くという行為は、キャビネットや庭園へ入場する行為に準えられるだろう。彼らは新大陸の自然へ入場を認められた、特権的な人間ということになる。

アレクサンダー・フォン・フンボルトは南米に到達する前から多くの旅行を繰り返してきた。南米旅行の始まりとなる 1799 年の出帆までの間に、少なくとも 1789 年にラインラント地方へ、1790 年にゲオルク・フォルスターとともにラインを降りオランダ、そしてイングランド、帰路でパリを訪れる。1791 年にはウィーン、ポーランドへ旅行し、この間もゲッティンゲンやハンブルク、イェナなど国内のアカデミーや大学を行き来する。そして 1795 年にはヨハン・カール・フライエスレーベン（Johann Carl Freiesleben, 1774-1846）とチロル及び北部イタリア、スイス各地を旅し、その後はナポレオン戦争の影響などで旅行計画がいくつか頓挫する。しかし旅行記の始まりにエメ・ボンプラン（Aimé Bonpland, 1773-1858）との中南米旅行の計画が立てられることになるパリやマドリッドへの訪問がこの間にあり、そうして 1799 年の出航に漕ぎ着ける。彼がこうした旅行の間にどのような旅行案内を読んでいたかは分からないが、いずれにせよ貴族の家に生まれた彼が旅行文化に馴染み、旅行者として従うべき規範をある程度理解していたと考えるのは自然なことだ。

実際彼が 1799 年から 1804 年にかけて敢行した南米旅行から帰還し、その 12 年後に著した旅行記『新大陸赤道地域旅行』*Reise in die Aequinoctial-Gegenden des neuen Continents in den Jahren 1799, 1800, 1801, 1803 und 1804* (1815-1829)の第一部の序文に以下のように記されているように、彼がパリやマドリッドの宮廷で社交や交渉に励んでい

たことが想像できる。

> Zu Madrid angelangt, fand ich bald Ursache mir Glück dazu zu wünschen, daß wir uns entschlossen, die Halbinsel zu besuchen. Der Baron Forell, sächsischer Gesandter am spanischen Hof, kam mir auf eine Weise entgegen, die meinen Zwecken sehr förderlich wurde. Er verband mit ausgebreiteten mineralogischen Kenntnissen das regste Interesse für Unternehmungen zur Förderung der Wissenschaft. Er bedeutete mir, daß ich unter der Verwaltung eines aufgeklärten Ministers, des Ritters Don Mariano Luis de Urquijo, Aussicht habe, auf meine Kosten im Innern des spanischen Amerika reisen zu dürfen. Nach all den Widerwärtigkeiten, die ich erfahren, besann ich mich keinen Augenblick, diesen Gedanken zu ergreifen. [269](S. 10)
> マドリッドに到達し、私たちはすぐに半島を訪れることを決心したことでツキが回ってきたことに気づいた。ザクセンからスペイン宮廷に派遣されてきたフォレル男爵は、私の目的に大いに役立つだろうある方法で私を歓迎してくれた。彼は幅広い鉱物学に関する知識と、学問振興のための企画への高まる関心を結びつけていた。彼が私に言うことには、啓蒙的な首長である騎士のドン・マリアーノ・ルイス・デ・ウルキホの統治のもとで、スペインアメリカの内陸部へ自費で旅行することを認めてもらう見込みがあるとのことだった。色々不快な出来事を経験した後だったので、こうした計画に取り掛かろうなどとは、つゆも私は思っていなかった。

スペイン領であった中南米の各地を訪れて探検するには、当然宮廷と植民地政府の許可が必要であった。彼はこの経緯の後さらに国王に謁見し、自分がなぜアメリカ大陸の旅行を必要としているのかの理由を申し開く必要があった。その結果ウルキホはフンボルトに対し親密な関係を持つことはなかったが、フンボルトによれば「企図を持続的に支援してくれた情熱は他ならぬ彼の学問への愛こそを動機としていた〔Der Eifer, mit dem fortwährend meine Absichten unterstützte, hatte keinen Beweggrund als seine Liebe zu Wissenschaften〕」[270]。それゆえフンボルトは「我々の旅の目的は単に純粋に学問的なものである〔der Zweck unserer Reise ein reine wissenschaftlicher war〕」と説得した。他方では「野生の自然との格闘している最中に我々は決して人間の不正を嘆いたりはできなかった〔im Kampfe mit einer wilden Natur haben wir uns nie über menschliche Ungerechtigkeit zu beklagen gehabt〕」と言うように植民地支配の現実のありようを非難しないように誓

---

[269] Humboldt, Alexander von (1815-1829): *Reise in die Aequinoctial-Gegenden.* Erster Band. Stuttgart 1859, S. 10.
[270] Ebenda, S. 11

った[271]。こうした経緯の果てに 1799 年にスペインの宮廷から許可をもらい[272]、あっという間に準備をして出港することになる。

> Von Jugend auf mit dem Studium der Natur beschäftigt, voll Empfänglichkeit für die Reize eines wildschönen, mit Gebirgen und alten Wäldern bedeckten Landes, fand ich auf dieser Reise Genüsse genug, mich für die Entbehrungen, die von einem arbeitsamen, oft unruhigen Leben unzertrennlich sind, zu entschädigen. Jene Genüsse, die ich mit den Lesern meiner Betrachtungen über die Steppen, und meines Versuches über die Physiognomie der Pflanzen zu theilen versucht habe, waren indessen nicht die einzigen Früchte einer Unternehmung, deren Zweck auf die Erweiterung der Wissenschaften gerichtet war. Seit langer Zeit hatte ich mich auf die Beobachtungen vorbereitet, um deren willen diese Reise hauptsächlich unternommen ward; ich war mit Instrumenten, die sich leicht und geschwind manipulieren ließen, von den vorzüglichsten Meistern versehen; ich genoß des besondern Schutzes einer Regierung, die, weit entfernt meinen Forschungen Hindernisse entgegen zu setzen, mir beständige Beweise von Antheil und Vertrauen gab; ich ward endlich durch einen Freund voll Muth und Kenntnisse unterstützt, der – seltenes Glück, wens es den Erfolg eines gemeinschaftlichen Unternehmens gilt! – der mitten unter Beschwerden und Gefahren, denen wir uns zuweilen ausgesetzt sahen, immer denselben Eifer und denselben Gleichmuth behielt. [273]
>
> 若い時分から自然研究に勤しみ、原生の美しい、山脈や太古の森林に覆われた土地の刺激に感じ入る心地で、私はこの旅の途上、多忙でしばしば落ち着きのない生活とは切り離すことができない欠乏感を埋め合わせるに足る楽しみを見出した。私が、ステップについての私の考察の読者とともに、そして植物観相学の試論の読者とともに分かち合おうと考えたこの楽しみは、その間に、その目標が諸学問の拡大に向けられていたある調査の唯一の収穫というわけではなくなった。ずいぶん前から私は諸考察の下準備を進めてきた。そもそもその諸考察のためにこの旅は企画されたのだ。私は実に優れた名工に、手早く簡単に操作できる道具を用意してもらった。私は政府の特別な保護に与った。その政府は遥か離れたところから、私の研究のために様々な障害に対処し、私にいつでも協力と信頼の証を与えてくれた。私はしまいに勇気と知識に満ちた一人の友人に助けてもらった。彼は、――一つの共同の調査を成功させる要因であった滅多にない幸運だが――我々がその都度晒された困難と危険の中にあっていつも変わらぬ熱心さと平静さを保っていた。

---

[271] Ebenda, S. 12

[272] Ebenda, S. 8.

[273] Ebenda, S. 1-2.

この箇所でフンボルトは自らを両義的な旅行者として自己提示している。彼は地理学や冶金学、鉱山学など多岐にわたる新たな知識やグアノのような有用な物質についての知識を持ち帰ってきた学者として、彼が規範的な旅行者であったことはこの旅行記が出版される時には既に知られたことであった。他方、彼が旅の途上の障害を克服するために援助したり手助けしたりしてくれた職人や政府、旅の伴侶に感謝を示す時、それは技術や政府の権威、友情に対する敬意を払っているだけではない。障害を自らの力で克服していく英雄的で男性的な徳を強調してきた 1700 年頃の旅行記は、殊更に家庭教師や伴侶に感謝を示すこともないし、パトロンに対する敬意の表明は定型的な表現が序文の前に掲げられる限りである。彼はこのように自らの欠点を補う存在として職人や政府、伴侶に言及することで、自らの成し遂げた調査旅行を古典的かつ叙事的な旅の物語になぞらえようとしている。

彼が人生の前半で繰り返した旅行の途上、各地の社交の場で彼の人格について賛否あったのは事実である。彼がイェナに滞在した時に、フリードリヒ・シラーがヴァイマルの大臣ケルナーに 1797 年 8 月 6 日に宛てた手紙の中でフンボルトには才能が欠けていると非難していたことは今では知られている[274]。とはいえゲーテとは自然学の話で散々に打ち解けたように、彼がどんな旅行手引よりもはるかによく読んでいただろう自然史や自然科学関連の数々の書籍から得られた知識と情熱こそが、ウルキホのような統治官の心を掴んだのである。

彼がアメリカ大陸に踏み込んでから、そこを旅するのに必要な技術、そこで目的を達成するのに必要だった知識や技術の基礎は、幼少期の家庭教師ゴットロープ・ヨハン・クリスティアン・クント（Gottlob Johann Christian Kunth, 1757-1829）の教育や、大学教育の中で獲得されたものであったかもしれない。しかしこれを完成させたのは、鉱山監督官という官僚として働いた経験であった[275]。この様な学問的かつ職業的な完成の過程は、通常貴族の子供たちが家庭教師に叩き込まれた規範的な言葉遣いや言語、作法を、各地の社交界で闊達な会話によって完成させるという過程と好対照をなし、18 世紀後半のプロイセンの政治経済的状況を如実に反映している。ゲッティンゲンという典型的な官吏養成大学で「有用な知識」を修めたフンボルトは、測量から鉱山学の実践、化学実験や簡易的な酸素ボンベや新型のランタンの発明、あるいは地下に生息する地衣類の研究、それから地質学や気象学に取り組むことになる[276]。つまり、彼が実際に困難の多い中南米旅行を切り抜ける上で必要だった知識や創意工夫への才能は、監督官の期間に培われたか、あるいは既に発揮されていたものである。

---

[274] Vgl. Schwarz, Ingo (2003): „Ein beschränkter Verstandesmensch ohne Einbildungskraft“. Anmerkungen zu Friedrich Schillers Urteil über Alexander von Humboldt. In: *HiN* (2003) IV: 6, S. 35-40.

[275] Vgl. Klein, Ursula (2015): *Humboldts Preußen: Wissenschaft und Technik im Aufbruch*. Darmstadt; WBG 2015.

[276] Ebenda.

他方マクシミリアン・ヴィート＝ノイヴィート王子（Maximillian Prinz zu Wied-Neuwied, 1782-1867）は 1815 年から 1817 年にかけてブラジルを旅行し、その記録を 1820 年に『1815 年から 1817 年までのブラジル旅行』*Reise nach Brasilien in den Jahren 1815 bis 1817* (1820-21)というタイトルのもと出版した。二巻からなるこの本で彼は自然科学者としての名を確かなものとした。その序文で彼は次のように、ブラジル旅行を国の許可のもとで遂行できた経緯について述べる。

> Durch den Beschützer der Wissenschaften, Minister CONDE DA BARCA[277], dem König empfohlen, gab man ihnen[fremden Reisenden; 大林] nicht nur die Erlaubniß, die verschiedenen Capitanien der Monarchie ungehindert zu durchreisen, sondern man unterstützte sie auch auf die großmüthigste Weise durch eine gewisse ihnen jährlich ausgesetzte Summe, so wie durch günstige Pässe und nachdrückliche Empfehlungsschreiben an die General Capitane der verschiedenen Provinzen. Wie weit tritt gegen diese aufgeklärten und liberalen Maßregeln der jetzigen Regierung das ehemalige System zurück, wo der Reisende bei seiner Ankunft in Brasilien von Soldaten ängstlich umgeben und bewacht ward! Im Namen meiner Landsleute und aller europäischen Reisenden sey dies Bekenntniß hier öffentlich niedergelegt, um die Empfindungen des Dankes auszudrücken, von welchen ich mich gegen den Monarchen durchdrungen fühle, der solche liberale Verfügungen traf.[278]
> 科学の擁護者である首長コンデ・ダ・バルカによって、王に推挙された結果、異国からの旅行者たちに、異なる領主制を敷くカピタニアを、妨げられることなく旅をする認可が与えられたが、それだけでなく彼らは寛大な処置によってある一定の金額が彼らに年毎充てられることで支援され、同様に優遇的な通行証と、各地方の総監領に宛てられた効果的な推挙状で助けられた。現在の政府によるこの啓蒙的でリベラルな処置に対して、どれだけかつてのシステムが遅れを取っていたか！そのシステムにおいては、旅人はブラジルに着くなり兵士たちに取り囲まれ監視され不安を感じていた。私の同郷人やヨーロッパの旅行者全員に誓って、この告白をここに公然と書き留めておこう、そのようなリベラルな措置をする領主に対して私が感じている感謝の念を表現するためにも。

こうして彼もまた保護者に感謝を示す。アメリカ大陸旅行のケースでは、第一にその土地に踏み入るための認可を取得する交渉が事前に存在したし、旅行記においてもその経緯に関して配慮のある記述が求められた。また例えば次の引用に見られるように、彼は

---

[277] ポルトガル王国の称号の一つで、ここではアントニオ・デ・アラウホ・アゼベド（António de Araújo e Azevedo, 1754-1817）のことを指す。

[278] Wied-Neuwird, Maximilian Pronz zu (1820): *Reise nach Brasilien in den Jahren 1815 bis 1817*, Bd. 1. Frankfurt a. M. 1820, S. 2-3.

旅行記の随所で目にした動植物のラテン語の種名を挙げ、学問的に正確な観察を実践する旅行者として自己提示する。特にこの箇所で挙げられる大型のトカゲは南米のシンボリックな動物としてテグーとかテユーと呼ばれヨーロッパの自然史学者の間では知られていた。

> Ich ritt der *Tropa* voran, beobachtete die schönen Gewächse und beschäftigte mich in Gedanken mit den *Tapuyas*, die diese Gegenden zuweilen beunruhigen, als ich plötzlich zu meiner nicht geringen Befremdung zwey nackte, bräunliche Männer vor mir stehen sah. Im ersten Augenblicke hielt ich sie für Wilde und schon war ich im Begriffe, nach meiner Doppelflinte zu greifen, um mich gegen einen etwanigen Angriff zu sichern, als ich gewahr wurde, daß es Eidechsenjäger waren. Die in diesen Einöden einzeln wohnenden Pflanzer lieben das Fleisch der großen Art von Eidechsen, die in der Lingoa geral der Küsten-Indier *Teiú* (*Lacerta Teguixin*, Linn.) genannt wird, seh; sie gehen daher mit ein Paar auf diese Thiere abgerichteten Hunden oft in die sandigen Gebüsche und Wälder, um sie aufzusuchen. Nahen sich die Hunde einer Eidechse, so flieht diese pfeilschnell in die ihr zur Wohnung dienende Erdhöhle, wo sie alsdann von dem Jäger ausgegraben und todtgeschlagen wird. Da die Hitze groß war, so giengen diese Männer, deren Haut am ganzen Körper von der Sonne so braun gebrannt war, daß man sie wohl für Tapuyas halten konnte, ganz unbekleidet; sie trugen Aexte und ein Paar erlegte Eidechsen von beynahe 4 Fuß Länge (den langen Schwanz mitgerechnet).[279]
>
> 私は馬車団の前方を馬で進み、美しい繁った植物を観察しながら、この地方で折々騒乱を起こしてきたタプヤス族のことに考えを巡らせていたのだが、その時少なからず驚いたことには、突然二人の全裸で黒茶けた男たちが目の前に現れたのだった。最初私は彼らが原住民であると思い、トカゲ猟師であると気づいた時には既に、何らかの攻撃から身を守るために二連式ライフル銃へ手を伸ばそうというところだった。ここらの荒地に散らばって入植した者たちは、沿岸部のインド人［ネイティブアメリカン：大林］のリンガ・ジェラール［トゥピ語族の諸言語に基づき宣教師が作り上げた共通言語：大林］ではテユー（リンネの分類では *Lacerta Teguixin*）と呼ばれる大型種のトカゲの肉が大好物なのである。彼らはそれゆえ、この動物を捕らえてくるよう調教された犬を数引き連れて、これを探し出すためしばしば砂地の藪に入って行く。犬たちが一匹のトカゲに接近していくと、このトカゲは矢の如く素早く自らが住居として利用している地面の穴に逃げて行くが、そこでトカゲは猟師によって掘り出され打ち殺される。暑さが甚だしいので、確かにタプヤス族だと思われかねないほど全身の肌が太陽によって黒茶に焼かれたこの男たちは全く衣

[279] Ebenda, S. 159.

服を纏っていなかった。彼らは斧を携え、仕留められた（長い尻尾も勘定に入れて）四フィート近いトカゲを数匹運んでいた。

この引用からヴィート＝ノイヴィートが南米旅行の印象を強く読者に示す一つの方法が読み取れる。学者として種名を示すと同時に、旅行者としてその現地名を記載する。確かに既に知られた動物種であるが、シンボリックなトカゲが現地の生活の中で人々とどのような関係に置かれているかを証言する。そして旅行記作者として、危険と隣り合わせの緊張感を伝えることで、調査旅行に献身する英雄的な旅行者ないし学者として自己提示する。言い換えると、南米大陸での経験から得られたローカルな知識、そして情景の生き生きとした印象、それから科学的な知識を共に提供する限りで、彼は科学的な調査旅行を遂行する旅行者としての「鑑識眼」を示し、また危険に満ちた場所に分入る冒険者としての男性的な徳を示してもいる。このことはフンボルトにも同様に当てはまる。

科学者としての視点から旅行の経験を語り、人がこれまで知らないような風景や事物についての事実的知識を積み上げることで、読者は彼らの科学者としての卓越性を理解する。この時、かつてカイスラーの旅行記で頂点を迎えるような、客観的な事実の記述を網羅することに価値があった旅行記の叙述様式は、未踏の地という新奇な対象を選択することで、彼らの旅行記においても採用可能な叙述様式ではある。しかし彼らはより叙事的な要素を取り入れて旅行記を作成する。というのも、彼らは旅行記とは別に論文や自然史的著作を残しているからである。確かに科学者として調査旅行に赴くものとしての自己提示に必要な知識の顕示は必要であるとしても、客観的記述を積み重ねる旅行記の叙述様式は既に過去のものであった。だから彼らは調査旅行の成果を単に科学ジャーナルや自然史記述でのみ公開することもできただろうが、それに加えて旅行者として旅行記を著し、その時には旅行文化の規範に沿う様な自己提示を遂行し、1800 年頃の旅行記の叙述様式に従ったのである。そのことで特にフンボルトは後年大衆的な英雄的科学者として科学文化のアイコンへ祭り上げられることになった[280]。またヴィート＝ノイヴィートのこの旅行記もヨーロッパ諸言語に翻訳され、彼はその後ブラジルの自然史的著作を 10 年以上かけていくつも出版し、さらに 1832 年から 1834 年にかけて今度は北アメリカの調査旅行を実現し、その成果を記した旅行記『1832 年から 1834 年の北アメリカ内陸部の旅行』*Reise in das innere Nord-America in den Jahren 1832 bis 1834* (1839-1841)も同様に多言語に翻訳され、彼の学者としての名声を高めた。

ただし、二人の旅行記がこの様な形で成立した背景として、アメリカ大陸の自然史的な知識が当時の読者公衆にどのように受容されていたかについてもさらに確認しておく必要がある。ここで重要なのが、ヴィルヘルム・ルートヴィヒ・フォン・エシュヴェ

[280] Vgl. Rupke, Nicolaaas A. (2008): *Alexander von Humboldt. A Metabiography*. Chicago; The University of Chicago Press 2008.

ーゲ（Wilhelm Ludwig von Eschwege, 1777-1855）のような自然科学者の活動である。フンボルトのエクスペディションから 5 年、ナポレオン軍がポルトガルへ侵攻し、それに伴いヘッセンの鉱山開発監督官としてポルトガルに赴任していたこの貴族の男はブラジルへ亡命した。エシュヴェーゲはそうして 1809 年から 1821 年までリオデジャネイロに滞在し、著名な自然物キャビネットを設営した。その地で自然研究に努め、また他の旅行者たちを迎え入れ支援していた。彼はまた、ヴァイマルの出版活動を牽引していた編集者フリードリヒ・ユスティン・ベアトゥフ（Friedrich Justin Bertuch, 1747-1822）の許で二巻本の『ブラジル日誌、あるいはブラジルからの雑多な報告』*Journal von Brasilien, oder vermischte Nachrichten aus Brasilien*（1818）を出版する。そこでエシュヴェーゲが述懐するように、ブラジルは長らくポルトガル政府によって外国人に対して封鎖されていた[281]。そのために自然科学者たちに長らく詳細が知られることのなかった「未知の大陸〔terra incognita〕」であったと述べる。「未知の大陸」という表現には含みがある様に思われる。つまり上述のような厳しい政治的な悪条件のもとであまり多くの人が実際に足を踏み入れることのできなかった中南米については、検証されることもないまま根拠ない情報がドイツの読者公衆の間で流通していたのである。ベアトゥフは『ブラジル日誌』の編者前書きで、エシュヴェーゲが書簡で述べたとされる言葉を引き合いに出し、嘆き、ブラジルが「博物学、地理学、民俗学〔Natur- Länder- und Völkerkunde〕」の観点から非常に興味深い土地であることは知られてきたものの、そのためにブラジルには半可通な学者や記事のネタを探し回っている人々がやってきて、「不正確で半可通で、結果的に全く使い物にならない〔unrichtig, nur halb verstanden, und folglich gar nicht brauchbar〕」情報をヨーロッパに持ち帰り、挙句「嘘や冒険に満ちた御伽噺とか虚実混淆とした物語〔Lügen, abenteuerliche Mährchen und Halbwahrheiten〕」をでっちあげていると批判した。

エシュヴェーゲのジャーナルや自然史的著作に続いてゲオルク・ヴィルヘルム・フライライス（Georg Wilhelm Freyreiß, 1789-1825）の『ブラジル帝国の詳細な情報に関する論考』*Beiträge zur näheren Kenntniß des Kaiserthums Brasilien* (1824)などをはじめとして立て続けにブラジルの自然史や民族誌を扱った書籍が出版されるようになるのは[282]、上述のような制度上の変化がきっかけで旅行者が増大したためだと考えられる。しかし単なる自然史の論考が体系的かつ詳細で正確な記述を後から目指す一方で、依然十分に知られていないアメリカ大陸の自然史の知識は、先に出版された旅行記を書く人物が前提とすることのできないものであった。

つまりアメリカ大陸旅行の旅行記においては、まだ認識的節約は十分に作用しようが

---

[281] Eschwege, Wilhelm Ludwig von (1818): *Journal von Brasilien, oder vermischte Nachrichten aus Brasilien*. Weimar 1818, S. 1-2.

[282] Rescher, Hubertus J. (1979): *Die deutschsprachige Literatur zu Brasilien von 1789-1850. Widerspiegelung brasilianischer Sozial- und Wirtschaftsstrukturen von 1789-1850 in der deutschsprachigen Literatur desselben Zeitraums*. Frankfurt am Main; Peter Lang 1979, S. 36f.

ない。18 世紀半ばにスタンダードな旅行記が立て続けに出版されて以後、ヨーロッパ旅行の旅行記は叙述様式を変化させ、イタリア旅行の旅行者ならば省略することのできた詳細で客観的な記述を、1800 年頃には十分に知られていなかった地域を調査した結果をまとめたフンボルトやヴィート＝ノイヴィートの旅行記は取り入れる必要があった。しかも彼らは科学者として自己提示する必要があるのだから、そのような客観的記述を積み重ねることは、彼らの自己提示にとって不可欠でもあった。従って彼らは、第一に動物学や植物学、気象学、地質学、地理学などの学問を事前に修め、新大陸に渡ってもなおその分類名をすぐに駆使できるようにしなければならない。その意味で彼らもまた、イタリアに赴く際にラテン古代の詩人や法学や歴史学の補助学問を修めておくことが旅を成功させ優れた旅行記を叙述するための秘訣であった、ツーリズム型の旅行者と同じである。

フンボルトやヴィート＝ノイヴィートは学者として分類や現象記述に不可欠な数量的な計測データを取ったり、分類するための標本を作成したり、推定される種名を次々と記述したりしていくが、そのような数量的データや分類記載名とその細かな特徴などは個々の現象に限定された学問的なルポルタージュに基本まとめられる必要がある。他方で「これはなんであるか」の知識を山と積み上げることに終始することは、学問的ルポルタージュとしての性質も併せ持つとはいえ、旅行記として著述する限りで避けるべきことでもある。既に述べたように、彼らの旅行記は、旅行記として科学論文とは別に著述したものだからである。従って、困難な旅路を乗り越える英雄的な旅行者としても自己提示し、18 世紀後半に変化した旅行記の叙述様式を取り入れ、叙事的な語りと風景の絵画的描写による美的な効果や神話的風景を読者に提示する。

ヴィート＝ノイヴィートの旅行記は既に引用した箇所から明らかなように、地名や人名、民族の名前など地理学的、民族史的な知識と並んで、動植物の種名などの様々なデータを、旅行の過程を淀みなく叙述していく合間に注釈的に挿入し、学問旅行を行う者として求められる規範的な知識を積み上げていく。他方で彼は英雄的学者として自己提示する。加えて、彼はトポスを踏まえることで、叙事的な要素を取り入れ、ブラジルの印象を神話的風景に重ねる。例えば彼は次のように叙述する。ここにはヴァニタスのトポスが明確に表れている。

> Nahe bey der *Freguesia* steigt am Seestrande ein Hügel empor, worauf sich die Kirche, der Kirchhof und ein Telegraph befinden. Wir erstiegen diese Höhe gerade, als die Sonne unterging. Welche große herrliche Aussicht! Vor uns öffnete sich das unabsehbare Meer, das dumpf und weißschäumend gegen den Berg, auf welchem wir standen, heranrollte, und sich an demselben brach; zur Rechten erhoben sich in der Ferne die Gebürge von *Rio*; uns näher sahen wir die mannigfaltig buchtige Küste, und noch näher die *Ponta Negra*: hinter uns hatten wir hohe Waldgebürge, eine vor denselben liegende, jedoch auch mit Wald bedeckte

Niederung, und die großen glänzenden Spiegel der Seen; […] Diese viel umfassende große Gemählde, von den letzten Strahlen der untergehenden Sonne beleuchtet und endlich im Nebel der Dämmerung verschwindend, erweckte in uns das Andenken an das entfernte Vaterland. An die Seite eines Beinhauses gelehnt und neben den unter einem Kreuze an der bemoosten Mauer aufgethürmten Schädeln, hiengen wir schweigend unsern Empfindungen nach. In dieser ersten Pause fühlten wir es recht lebhaft, wie viel der Reisende entbehren lernen muß, wenn er, hinausgetrieben von der unwiderstehlichen Sehnsucht nach Erweiterung seiner Kenntnisse, sich in einer fremden Welt einsam stehen sieht. Unser Auge strebte vergeblich, die wunderbar verschleyerte Zukunft zu durchblicken, und vor ihm lagen beunruhigend alle die Beschwerden, die noch überwunden werden mußten, ehe wir hoffen konnten, über den weiten Spiegel des unermeßlichen Oceans zu den heimischen Gestaden zurück zu kehren. – Die Nacht machte unsern Betrachtungen ein Ende.[283]

フレギジーアのすぐ脇には、海岸沿いに丘が迫り上がっていて、その上には教会、教会墓地、テレグラフがある。我々は日が沈もうという時にその頂へまっすぐ登っていった。なんと遠大で素晴らしい眺めだろう！ 我々の前には計り知れない海が開けており、我々が立つ山裾に向かって飛沫をあげ白く泡立ちながら打ち寄せ、その際で砕ける。右手には遠方に峰々がリオの町から突き出ている。とはいえより手前に我々には多様な入江に富んだ岸が見えて、さらにより近くにはポンタ・ネーグラが見える。背後には森に覆われた峰々が控え、その手前に広がる、しかしこれもまた森に覆われた盆地、そしてきらりと輝く巨大な鏡のような湖面がある。[…] これらたくさんの包み込むような巨大な絵画が、沈みゆく太陽の最後の斜光に照らし出され、ついに夕闇の霧に消え去り、我々のうちには彼方の祖国への思いが目覚める。納骨堂の壁にもたれ、十字架の下に苔むした壁にそって積み上げられた頭蓋骨の脇で、我々は沈黙して自分達が感じていることに身を委ねた。この最初の休止符において、我々は正当にも真に実感させられた、旅人は、知識の拡大への抗い難い憧れに駆り立てられ、異郷の世界で孤独となったことに気づいた時に、なんと多くのものを我慢しなければならないかを思い知らされることか、と。我々の眼差しは驚くべきヴェールに覆われた未来を見通そうと苦心努力するが、それは無駄である。そしてその眼差しの前には、我々が、この測り難い大海原の広大な鏡のような水面を超えて故郷の浜辺へと引き返していくことを望むより前に、これから克服されねばならないあらゆる困難が不安を掻き立てるように待ち受けている。――夜が、我々の観想を打ち切った。

彼のこの叙述から窺い知れるのは、彼はフンボルトと異なりジャングルに分入り、山間

[283] Wied-Neuwird, a. a. O., S. 65-66.

を駆けずり回ることよりも、むしろポルトガル国王が避難した際にゆっくりとヨーロッパ風の街並みが整えられて行っていたブラジルの各都市において、社交や研究に落ち着いて取り組んでいた様子である。彼にとって好奇心の対象であった新天地は、学者としての喜びが待ち受ける場所であったにもかかわらず、孤独と望郷の念を痛感し、ヴァニタスのトポスを引くことで人生の儚さに思い巡らせる。ヴィート＝ノイヴィートの学問旅行は旧来の旅行文化を継承しながらも、適切な作法で社交に興じ、知識を経験によって確かなものとするという旅行者としての規範に虚しさを感じている。沈みゆく太陽の光、360 度展開される眺望、鏡のような夜の海面、そうした光の表現が視覚の表現へ転じ、眺望に対応する旅行という未来と海原に対応する故郷という過去への想念や意欲が、日没と共に消失していく。そしてもはや眼球の失われた頭蓋骨、もはや未来も過去も存在しない遺骸と共に彼は残されるのである。アルカディアへ赴いたかに思われてもなおそこに死のアレゴリーが現れるルネサンス絵画の伝統を転用していると考えられる。ここでヴァニタスが現れることで、英雄的学者としての自己提示を反転させ、虚栄と表裏一体の知識欲に取り憑かれた旅行者の姿を浮かび上がらせ、不意にアイロニカルな感情が表出する。そうしてロマン主義的な趣のある神話的風景が構成される。

他方フンボルトは、ヴィート＝ノイヴィートとは全く異なる。自らの自然観察の経験則を、人生の諸々の記憶の代わりに手繰り寄せることで知識を積み重ねる記述ではなく、記憶を重ね合わせ、溶け合わせていく叙述を可能としている。例えば彼は『新大陸赤道地域旅行』のある箇所で、クマナで繰り返し体験する地震について、イタリアのヴェスヴィオ火山やエトナ山の地震に関する知見を引き合いに出し、さらにリスボン地震を引き合いに出し、火山性の地震についての考察を展開していく[284]。こうした記憶の中での重ね合わせをフンボルトが実践するとき、そこから生じてくるのは彼のコスモスの構想である。この地震の比較のように、彼は旅行記の中で以下のような比較を繰り返し、その意味を説明する。

> Wenn Naturforscher, welche die Schweizer Alpen oder die Küsten von Lappland besuchen, unsere Kenntniß von den Gletschern und dem Nordlicht erweitern, so läßt sich von Einem, der das spanische Amerika bereist hat, erwarten, daß er sein Hauptaugenmerk auf Vulkane und Erdbeben gerichtet haben werde. Jeder Strich des Erdballs liefert der Forschung eigenthümliche Stoffe, und wenn wir nicht hoffen dürfen, die Ursachen der Naturerscheinungen zu ergünden, so müssen wir wenigstens versuchen die Gesetze derselben kennen zu lernen und durch Vergleichung zahlreicher Thatsachen das Gemeinsame und immer Wiederkehrende vom Veränderlichen und Zufälligen zu unterscheiden.[285]

スイスのアルプスやラップランドの海岸を訪れたことのある自然研究者は、氷河と

[284] Humboldt (1815-1829), a. a. O., S. 241-243.

[285] Ebenda, S. 233-234.

オーロラに関する我々の知識を拡張すれば、スペインアメリカを旅したことのあるものに期待することができる、つまり彼が火山や地震に大きく注目してきただろうと。地球上のあらゆる地域は研究に独自の材料を提供してくれる。そして我々が自然現象の原因を究明することが期待できない場合には、我々は少なくとも、その限界をよく知り、そして多数の事実の比較を通じて共通するものと常に繰り返し生ずるものを、変動するものと偶然的なものから区別するよう試みなければならない。

このようにフンボルトはある意味では通常の科学的な営みとしての比較、パターン抽出のようなこと、仮に原因を確実に推定できなくとも知識を前に進める方法について適切な見解を述べている。あるいはデータを一枚に図示化する方法としてのよく知られた「自然絵画〔Naturgemälde〕」とは別に、そのように積み重ねられた自然絵画を、言語表現による全体性のもとで描き出すことを試みたのが『自然の諸相』*Ansichten der Natur* (1808)である。

Der Eindruck, welchen der Anblick der Natur in uns zurückläßt, wird minder durch die Eigentümlichkeit der Gegend als durch die Beleuchtung bestimmt, unter der Berg und Flur bald bei ästhetischer Himmelbläue, bald im Schatten tiefschwebenden Gewölkes erscheinen. Auf gleiche Weise wirken Naturschilderungen stärker oder schwächer auf uns ein, je nachdem sie mit den Bedürfnissen unserer Empfindung mehr oder minder in Einklang stehen. Denn in dem innersten, empfänglichen Sinn spiegelt lebendig und wahr sich die physische Welt. Was den Charakter einer Landschaft bezeichnet, Umriß der Gebirge, die in duftiger Ferne den Horizont begrenzen, das Dunkel der Tannenwälder, der Waldstrom, welcher tobend zwischen überhängende Klippen hinstürzt, alles steht in altem, geheimnisvollem Verkehr mit dem innern Leben des Menschen.[286]

自然の眺望が我々に与える印象は、その地方の固有性によってというより、光の当たり具合によって決まる。山や野原は光に照らされて、ある時には美感的な大空の青とともに、ある時には深く垂れこめる群雲の陰のうちに現れる。同様にして、自然描写は、それが我々の感受性の欲求と調和する、その度合いに応じて、ある時には強く、ある時には弱く我々に働きかけるのである。というのも、最も奥深い感受感覚に、生き生きと真に自然世界が映り込むのである。風景の特徴を決めるもの、靄がかった彼方に水平線を境界付ける峰々の輪郭、樅木の森の暗がり、せり上がった断崖の間を勢いよく流れ落ちる森の渓流、こうしたものすべてが人間の内的な生との太古の、秘密に満ちた交流をする。

[286] Humboldt, Alexander von (1808): *Ansichten der Natur*, Erster Band. Tübingen 1808, S.285-286.

フンボルトはこうして自らの宇宙論を旅行記の中で経験する。彼は確かに生きた自然の世界へ足を踏み入れ、その中から理論を取り出しているように見えるかもしれないが、実際は『新大陸赤道地域旅行』でも述べているように、フンボルトの宇宙論が長い旅の果てに積み重ねられた経験からのみ直接導出されたわけではない。フンボルトが現に観察する自然景観に重ね合わせられるのは、自ら他の地域で観察してきた自然現象の記憶や、他なる人物によって計測されたデータや自然史的記述と、そして彼が信じ続けた宇宙全体で連関する諸力の象徴的なイメージである。この様にして科学的な記述的知識や正確に計測された量的データに基づきながら神話的風景を見る彼の手法は、科学調査に赴く旅行者として自己提示するための旅行記において模範的な叙述を可能にするだろう。そしてこうした叙述様式は、彼の科学的想像力に満ちた思考様式と一致してもいた。

後年『コスモス』*Kosmos* の序盤でフンボルトが論じたのは、科学は自然現象から崇高や美を感じ取る能力を失わせるという偏見に対し、自然物の精確な計測や記述に基づいた理解によって、魔術的な想像力に由来する崇高とは別の、高次の楽しみである自然享受〔Naturgenuß〕を感受することができると論じた。科学的研究はまさに、調和的連関に置かれた諸力で満ちた、果てしなく続く宇宙の広がりを想像させ、また新たに発見される多様な自然現象のうちに統一的な法則がやはり存在していることを理解させることで、自然享受を可能にするのである[287]。換言すると、旅行者として眼前の自然景観や自然物のうちに、科学者たちが形成してきた知識を踏まえてこそ、自然現象の条件や諸力の連関を見出すことで、高次の自然認識と自然享受に至るのである。このような自然享受は、彼の旅行記を特徴付ける感情であり、また旅行者として獲得された感情でもある。

第三節　小括

この章では旅行記の叙述様式の背景に、知識の規範化と規範的知識の背景化ないし省略によって新奇な叙述様式が現れる過程を辿り、その背景に認識的節約の原理があることを論証した。つまり、カイスラーのように検証可能な客観的記述を積み上げることでパフォーマティブに自己提示をした旅行記から、著者が自らの旅行経験を語り直すなかで構成された経験的内容そのものに注目を惹きつけ、そのような経験を可能とした条件としての自己の経歴全体が提示される旅行記が現れるようになる。グランドツアーにおけるそのような自己提示は、そもそも各地の上流階級社会での会話を通じてなされるものであっただろう。しかし 18 世紀後半には、そのような旅行者の規範はむしろ旅行記という場所で遂行されるようになる。

そうした旅行記における自己提示は、実際の旅行者の経験を後から再構成することで可能となるが、その時に連綿と続く自己の記憶は埋草を要するだろう。ゲーテの以下の

---

[287] Humboldt, Alexander von (1845): *Kosmos. Entwurf einer physikalischen Weltbeschreibung*, Erster Band. Stuttgart und Tübingen 1845, S. 20-22.

記述は、イタリアを旅行している間に抱いた考えではなく、彼が後から編集しているときに考え、書き加えたのではないかと思われる。

> Und doch tritt gar oft das Lückenhafte der Bemerkungen hervor, und wenn die Reise dem, der sie vollbracht hat, in einem Flusse vorüberzuziehen scheint und in der Einbildungskraft als eine stetige Folge hervortritt, so fühlt man doch, daß eine eigentliche Mitteilung unmöglich sei. Der Erzählende muß alles einzeln hinstellen: wie soll daraus in der Seele des Dritten ein Ganzes gebildet werden? [288]
> そうであっても、記述の空白が頻繁に現れてくる、そして旅を成し遂げたものにとってその旅がひとつの流れのなかを流れすぎていくように思われ、ひとつの途切れることない連続としての想像力のうちに現れでてくるような場合には、その時にはやはり、根本的な伝達は不可能であると感じるのである。語り手は、一つずつ別々に説明しなければならないのだ。さもなければ、どのようにして、そうしたものから第三者の魂の内部に全体が形成され得るというのだろうか。

ここでゲーテが述べている通り、旅行は旅行者の記憶の中で途切れようがない。しかし記述には不要な、あるいは記述しようのない瑣末な時間や事柄は、自然と抜け落ちてしまう。個別の経験として切り目を入れながら叙述することしかできない。それでも記憶を重ね合わせ、旅行中の時系列とは別の時系列、つまりより人生を俯瞰した視点における時系列に沿った連続性を、旅行記の個別の経験の叙述に与えることができる。まさに、ゲーテがクロード・ロランの神話風景や、『オデュッセイア』の世界をナポリやシチリアに重ねたように。

> Ich hatte mir, überzeugt, daß es für mich keinen bessern Kommentar zur „Odyssee“ geben könne als eben gerade diese lebendige Umgebenung, ein Exemplar verschafft und las es nach meiner Art mit unglaublichem Anteil. [289]
> 私は、自分にとってはまさにこの生き生きとした周辺の世界以上に優れた『オデュッセイア』の注釈はないと確信していたのだった。一冊調達すると、自分の流儀にしたがって信じられないほどの共感をもって読んだものだ。

従って、神話的風景を眺める行為自体は、彼らが旅行記の読者として旅行者の規範的な行為や知識を習得すること、そして旅行者として現実に同じ目的地を訪れ、同じものを観察しり、新たな目的地で新たな対象を見出すことで、旅行記において自己提示する旅行者が経験すべきことを経験していく。一言で言えば、記述されるべき事柄が遡行的に

---

[288] Goethe, Johann Wolfgang von (1816/17), a. a. O., S. 348.

[289] Ebenda, S. 299.

彼らの経験を規定するようになったのである。その際共通に理解されている古典作品、あるいは名画、そして修辞学的なトポスが引き合いに出されることで、叙事的な語りが可能となる。そこでは既に客観的記述によって知識を顕示する必要もなければ、後続する旅行者へのチップスも必要ない。むしろ後続する旅行者に、従来とは異なった視点を与える可能性に期待してさえいるかもしれない。何にせよ、この様な旅行記の叙述様式において、現実の旅行を支配する物理的な時間軸から、経験された主観的な過去現在未来という時制は浮遊していく。

このことは実の所、第一章で発見旅行の旅行記に現れていた。繰り返しになるが、発見旅行では聖典や自然哲学的体系を前提とした証拠や証言の事実的な記述がなされ、その上で宮廷や大学、アカデミーなどの一部の社会だけが構成する公共圏における雑駁なイメージの形成過程が生ずる。それは確かに事実に依拠しており、事実と切り離すこともできない虚構である。他方神話的な風景が旅行記内部に形成される時、18 世紀後半の作家たちにとって、それは個人的な記憶に依拠する。先行する旅行記が読者公衆や後続する旅行者たちとの間に形成していた、相互参照的なテクスト構造が形成した旅行地の客観的知識やイメージ、つまり慣習的イメージは、既に少なからぬ読者が自ら旅行者としてその旅行地を訪れることができるようになった 18 世紀後半の旅行記作家たちにとって、省略可能な前提となった。

特定の人物や作品を模した旅行が流行する時、それは旅行文化の変化を可能にする。知識消費が成熟し、流行現象が起こること認識的節約を可能にする一つの社会条件である。その時背景化した規範的知識は、新奇な知識や叙述を占有形式で受容可能なものにするシグナルとして機能する。この様な旅行文化の通時的変化を端的に象徴する表現があるとすればミュージアムからモニュメントへの移行だろう。ツーリズムにおいて数多くの旅行者の記憶が共同的に機能するのは、もはや驚異に満ちた自然界と古代の自然哲学を反映したミュージアムではなく、旅行地や名所、一見に値するものといったモニュメントにおいてであり、時に流行によって浮動する、慣習的に形成される規範的記憶は、実の所マテリアルというよりテクストに根差し、個々の旅行者が占有する記憶に還元されることになる。

だが一方で学問旅行は、こうした傾向のさなかにおかれ、旅行者として感じ取られた印象を神話的風景に構築しながらも、他方で科学調査の途上にある旅行者として多くの知識やデータを折り込むことで、規範的な自己提示を実現する必要がある。第二節で見たように、旅行者の在り方に関する規範性の根源でありながら、相互参照的なテクスト構造内部の新奇性を求める原理によって神話的風景を構成する叙述様式が生じてきた 1800 年頃の旅行記のあり方は、フンボルトの旅行記にも、続くヴィート＝ノイヴィートの旅行記にも異なった趣をもって見出された。フンボルトの旅行記では、客観的知識に対置された個人的記憶の叙述を、再度学問的に蓄積されてきたデータの解釈に置き換えながらも、個別の客体に即した *historia* を離れ、全体性のなかで宇宙的な自然現象を

捉えようとする時、そこに自然享受の感情と共に調和的構造をもったコスモスという神話的風景が現れてくる。他方ヴィート＝ノイヴィートは、規範的な学問旅行者が表明する、虚栄と裏腹の好奇心に対するアイロニカルな感情を、彼がトポスを踏まえることで、この時代の旅行記の叙述様式に則りながら表出した。カイスラー的な旅行記がすでに役割を終え、さらに旅行記が叙事的な語りや神話的風景を取り入れることで文芸としての価値を高めた後、1800 年を過ぎて科学者たちの旅行記もまた、新たな土地を舞台に先行する旅行記のあり方を部分的に模倣しながら、新たな叙述様式を生み出したのであった。

第四章　旅行者の自己提示

ゲーテは『書簡と論考におけるヴィンケルマンと彼の世紀』*Winckelmann und sein Jahrhundert in Briefen und Aufsätzen* (1805)のなかでヴィンケルマンの書簡について以下のように語っている。

> Briefe gehören zu den wichtigsten Denkmähler, die der einzelne Mensch hinterlassen kann. Lebhafte Personen stellen sich schon bey ihren Selbstgesprächen manchmal einen abwesenden Freund als gegenwältig vor, dem sie ihre innersten Gesinnungen mittheilen; und so ist auch der Brief eine Art von Selbstgespräch. [290]
> 書簡は、個々の人間が残し得る最も重要な記念碑である。精彩ある人物たちは、既に自己との対話に際し、時に、不在の友を現在するように思い浮かべるものである。不在の友に、彼らは自らの最も奥に秘めた思いなしを伝える。そして書簡もまた、自己との対話の一種なのである。

ゲーテがここで述べることが正しいとすれば、通例書簡体で書かれる旅行記もまた、最も重要な記念碑であるに違いない。そしてゲーテのいうような意味での書簡が書かれるようになったのは、紛れもなく 18 世紀後半に至ってからだろう。ヴィンケルマンの書簡がそうであったのかは、Ernst Osterkamp の議論を見ても微妙である。Osterkamp によればヴィンケルマンはパトロンのことを随分気にかけていたようだからである[291]。しかしいずれにせよ、前章で見たように書簡体の旅行記の文体はリーデゼル以降変化した様に思われる。これはリーデゼルの個人的な手法というより、当時の書簡の規範的文体の変化に沿ったものと考えられる。ヴィンケルマンの書簡が、心の底を打ち明けるような言葉をパトロンにも伝えていたとは言えないにしても、親友であったリーデゼルへ宛てた書簡ではその様な言葉が記されていただろう。それゆえゲーテのこの見解を一旦信じることにしよう。

いずれにせよ、旅行者が旅行記をどの様に叙述するかは、旅行者がいかに自己提示するかという問題と密接に連関している。この時、旅行者の叙述は、叙実的な知識として読者に受け取られる必要がある。その文体によって証言とか告白とか、さまざまに呼びうる経験の語りは、事実起こったことを語っていると信用されることが前提とされなけ

---

[290] Goethe, Johann Wolfgang von (1805): *Winckelmann und sein Jahrhundert in Briefen und Aufsätzen*, Tübingen 1805. S. XI.

[291] Osterkamp, Ernst (1988): Winckelmann in Rom, Aspekte adressantenbezogener Selbsdarstellung. In: Conrad Wiedemann (Hg.) *Rom – Paris – London. Erfahrung und Selbsterfahrung deutscher Schriftsteller und Künstler in den fremden Motropolen*. Stuttgart; Metzler 1988, S. 203-230.

ればならない。その前提がなければ、旅行記で語られたことが事実と一致していない場合でも、著者は偽ったのではなく誤ったに過ぎないことになる。ただし、旅行記の叙述を理解する上で困難なのは、偽りでも誤りでもありうるような叙述も存在するということだろう。後続する旅行者は先行する旅行者の叙述を検証することができるが、その時事実との不一致があったところで、それは旅行者が卓越した旅行者として自己提示するために吐いた嘘なのか、単なる偽り、つまり不完全な旅行者でしかなかったのかを判断することは難しい。

また、親密なものの間で交わされている書簡を模した旅行記では、共同的カテゴリーに規定された知識や情報のやり取りが、それ以外の読者にとって十分に理解できるとも限らない。そのような状況で重視されるのは記述された対象やその内容自体よりも、その書き方やテイストであり、そこで語られていることの保証は親密な関係に依拠する相互的な共同的カテゴリーによる規定によって揺らぐことはまずない。

大抵の場合旅行記が読者に伝える知識は、読者によって信用されるための文章上の工夫を前提としている。その工夫のうちに、旅行者が自身を卓越した旅行者である様に自己提示することも含まれる。そして旅行記作者として、旅行者は読者に信用され、また自己提示を成功させるために、叙述様式を変化させてきた。この叙述様式の変化は、後続する旅行者にメタ的な意味を伝えてもいた。つまり模範的な叙述は、その叙述された様な旅行を実現し、またそれに類する経験をするように、後続する旅行者を規定する。旅行の方法は、それゆえ第二章で見たような貴族文化としての規範と、第三章見たような叙述様式を変化させてきた規範の二つによって変動した。

そしてこのような規範に応じた旅行者という社会的カテゴリーの成立によって、旅行記はその内容に関して吟味されるだけでなく、いかに規範的であるかという問題に沿って、つまり旅行者の自己提示の方法に沿って読解されるべきものとなる。従って、旅行記とその読者の間で生じる知識の移動は占有形式をとる。人がいかなる形でも臆断を免れないにもかかわらず、それが証言である限りで、そして証言者の信用がある限りで、免れ得ない臆断が一定の保証のもとで普及されることが肯定される。そうでもなければ、神話的風景の叙述は無意味な叙述として片付けられるだろう。

しかし臆断は徐々に排除されていくはずであるという経験則が存在する。予め結論を述べておけば、そのような経験則は誤りであり、臆断は排除されることなく、むしろ省略されることになる。これは占有形式の知識移動によって実現されるコミュニケーションの一形態である。第一部第三章でも議論した通り、個別的な経験を記述した *historia* を包括する視点は、所詮個別的事例の認識と類的認識の間を橋渡しする様な経験的な補完物は存在しないからである。その結果、神話的風景は必要な叙述上の技巧ということになる。加えて、その様な技巧が文芸としての地位を旅行記に与えることによって、その内実となる事実ベースの検証が省略されることは問題とならなくなる。この点について第一節で論じる。さらに第二節・第三節では 18 世紀を通じてコレクション文化が成

立した知識消費社会は、占有形式の移動を基本とする旅行記の知識形態を受容しやすい土壌を有していたことを示唆する。こうしてこの時代において、旅行文化と同じくコレクション文化においても、貴族社会と市民社会との間に連続的な規範が存在していたことを指摘する。

第一節　証言と神話

フォルクマンは『イタリア歴史批評報告書』*Historisch-Kritische Nachrtichten von Italien* […] (1770/71)の序文で以下のように自負を述べる。

> Es wäre zu viel verlanget, wenn das gegenwärtige Werk von Fehlern frey seyn sollte. Sie sind bey der Beschreibung eines Landes, das so viel Merkwürdiges enthält, gar zu leicht, inzwischen schmeicheln wir uns doch, Nachrichten zu liefern, welche unter den bisherigen die richtigsten sind. [292]
>
> この著作が誤りからすっかり免れているべきであると言うのは過大な要求であろう。実に多くの一目に値するものを持っている一つの国の記述に際して、誤謬を犯すことはあまりに簡単なことである。そうであっても、従来の報告のなかでも最も正確である報告を我々は提供することができたと自負している。

彼は一層正確で、それゆえに有用でありうる旅行案内が書かれるべきだと判断し、そのために数多くの既刊の旅行記を収集し、比較検討した。彼は自分が何よりも正確な旅行案内を書くことができる理由を示すため、フランス語や英語で書かれた著名な旅行記や、その翻訳を含め、先例となる旅行記の寸評を重ね、それらの寸評を概観すれば、それぞれの旅行記には地域や時代の限定性があり、また記述が非党派的〔unparteylich〕で客観的でないものが少なくないことを明らかにした。他方、記述が機知に富み〔wizig〕、快い〔angenehm〕こと、つまり趣味に優れていることや、情報に過不足ないことで読者を惹きつけるかどうかという基準でも、彼はそれらの旅行記を評価していった[293]。

つまり、こうしてフォルクマンは標準的旅行案内を編纂する過程で、旅行記が伝える知識のアセスメント形成の基準を設定し、それら知識の整合性と一致、あるいは相違、それから叙述のテイストを吟味することで標準的な「物の見方」と「物の提示の仕方」を提供したのである。その結果、フォルクマンが比較検討から形成したアセスメントに照らして保証ある知識とみなした知識が、名所や一目に値するものの現実に照らして検証したところ誤りと判明することもあるかもしれない。逆に、その知識が正確で、真な

---

[292] Volkmann, Johann Jacob (1770-71), *Historisch-Kritische Nachrtichten von Italien*, Bd. 1. Leipzig 1770, S. XXIII.

[293] Ebenda, S. XIII-XIV.

るものであると判明する時、その知識がフォルクマンに帰属されることは必ずしも正当と思われない。結局フォルクマンは一種の編集者であるのだから、彼の旅行案内の知識が正確であっても、その知識についてフォルクマンは実行的に権原を持つに過ぎず、占有形式をとった知識移動に終始する。そしてそれは認識的運に左右されてしまう。

実際に証拠と証言内容の関係を経験的に検証していないので、フォルクマンが精査しているのは、先行する旅行記を読み、あらかじめ参照関係に置かれていた一群の旅行者たちの記録であり、占有形式の知識移動を全面的に受容した上で、インフォーマントの吟味、つまり「物の提示の仕方」から窺える旅行者としての自己提示に依拠し、信頼あるインフォーマントの提供する知識を重要視し、自ずとそれに沿って整合性を検討することになるだろう。

その結果、フォルクマン自身は優れた旅行案内読者として自己提示し、その上でスタンダードな「物の見方」を提供し、また優れた知識消費者としてのフォルクマンの信頼と、多くの旅行記を読むことを省略できる効率性から、彼の旅行案内は多くの読者を集めることに成功したと考えられる。その結果、フォルクマンが提供したのは、旅行者の間に見出し得うると考えたであろう一目に値するものについてのアセスメントではなく、実際のところ彼自身が後に旅行に出ようという読者との間で形成しうると期待したであろうアセスメントである。

このような一種の認識的アセスメントに照らして収集された引用や知識、あるいは趣味的な見解は、各旅行記作者に対して叙実性の前提を認めつつも、その判断は自らの経験や趣味、関心に根拠づけられるに過ぎない。同様のことが、アルヒェンホルツの『七年戦争史』*Geschichte des siebenjährigen Krieges in Deutschland von 1756 bis 1763* (1788/1791) に認められる。このテクストは本来歴史叙述の分野に属すが、基本的に匿名のナラティブを収集した上で編集する様にして著された。彼は歴史証言をもとに歴史を叙述することの意義について以下のように語っている。

> Hier ist davon ein Versuch. Es war hohe Zeit, dergleichen Nachrichten von Augenzeugen zu sammeln, da die Generation der Menschen, in deren Lebenstagen so außerordentliche Dinge anf deutschem Boden geschahen, anfängt nach und nach abzustrerben. Wenn daher je eine Geschichte als Volksbuch unter allen Ständen der deutschen Nation verbreitet zu seyn verdient, so ist es wohl diese vaterländische, die Deutschland in so vieler Rücksicht Ehre macht, und den Geist des Volks zu erhöhen vermögend ist.[294]
>
> ここにあるのは一つの試みである。今こそ諸々の目撃証言の報告を集めるべき時であった。というのも、その人生の最中にドイツの地で尋常ならざる出来事が起きた人々の世代が、次第に死につつあるからである。それゆえある物語〔Geschichte〕が

[294] Archenholz, Johann Wilhelm von (1788/1791): *Geschichte des siebenjährigen Krieges in Deutschland von 1756 bis 1763*, Mannheim 1788. S. 7.

民衆本としてドイツ国民のあらゆる階級の間で広まるに値するならば、実に多くの点でドイツにとって名誉となり、そして民族の精神を高めることができるこの祖国の歴史〔Geschichte〕こそがそれにあたる。

彼が民衆本として歴史証言を編纂するという企図を持つのは理解できる話である。端的に言って、これはナショナリズムの表現である。アルヒェンホルツがしていることは、対象こそ違えど基本的にフォルクマンとしたことと同じことである。彼らはともに、ある出来事に関して証言可能な人々の間に事実確定についてのアセスメントが存在することを期待し、史実や旅行地の知識を統一的に形成しようと試みている。しかし、それは現実の反映として理解されるべきではない。むしろ規範的な語り方、物の見方を提供するものであると理解されるべきであり、そのような語り方、物の見方ができることを読者に提示することで、それら証言から引き出すことのできる事実的言明を、著者が読者との間に形成可能と期待するアセスメントに照らして、選択的な規範化が実行される。端的にいえば、個々のパースペクティブを調整しているのである。こうして選択的に規範化されたイメージが一度現れれば、後続する語り手や旅行記作者は「これはなんであるか」に答える客観的記述を積み重ねることで、規範的な歴史理解者、あるいは旅行者として自己提示することができる。あるいはやがてそれが省略可能になれば、そうした規範を背景化した新たな叙述様式が現れてくる。

だが認識的アセスメントによる知識の保証は、ヨハン・ゲオルク・フォルスターやアーデルベルト・フォン・シャミッソー（Adelbert von Chamisso, 1781-1838）のような人にとって全く不十分に映るだろう。それは臆断を排除するどころか増強するか、不可視化することさえある。誰もが当然と理解する擬制的な事実に関する知識は規範となり、以後新たに提示される知識が占有形式で移動することを容易にする、同類選好のバイアスを形成するだろう。しかしゲオルク・フォルスターもシャミッソーも自然科学者であると同時に社会的カテゴリーの交差のなかで文芸活動を続けた人物たちであることを考慮すると、証拠や証拠と証言者の関係に目を光らせることで臆断を拒絶したいと考えていたとしても自然なことに思える。ゲオルク・フォルスターは『世界周航記』*Reise um die Welt während den Jahren 1772 bis 1775*(1778)の序文で次のように主張している。

Zuweilen folgte ich dem Herzen und ließ meine Empfindungen reden; denn da ich von menschlichen Schwachheiten nicht frey bin, so mußten meine Leser doch wissen, wie das Glas gefärbt ist, durch welches ich gesehen habe. Wenigstens bin ich mir bewußt, daß es nicht finster und trübe vor meinen Augen gewesen ist. [295]

その時々に私は心に従ったり自らの感覚に語らせたりした。というのも、私は人間

[295] Forster, Georg (1778/80): *Reise um die Welt während den Jahren 1772 bis 1775*, Bd. 1. Berlin 1778, S. XI-XII.

が持たざるを得ない弱点から免れているわけではないので、この本の読者は、私がそれを通して観ているレンズがどんな色をしているのかを知る必要があるわけだ。すくなくとも私が自覚しているのは、そのレンズのせいで自らの眼が暗んでいたり濁っていたりしていなかったことくらいである。

彼は対象と自己との関係に注意を払うように呼びかけている。彼の記述があくまで彼の視点に立って成立していることは明らかであり、確かにそれは正しい。しかし同時に彼は自分が実際に世界を明瞭に経験したとは感じており、それゆえ証言者として特権的立場にいることも理解している。裏返せば、ジェームズ・クック（James Cook, 1728-1779）との契約や自分達の置かれた経済状況を考慮して、時間に追われながら読者公衆に広く受け入れられる優れた旅行記を書き上げることを半ば義務付けられていたゲオルク・フォルスターは、自らの経験の特異性を理解した上で、クックたちの旅行記と差異化するために、独自の叙述様式を採用する必要もあっただろう。つまりここでも認識的節約の原理に依拠して、他者によって書かれうるだろう事柄を省略し、その代わりに独自の見解や叙述を取り入れることが試みられたのである。それは例えばタヒチに到着した時の神話的イメージに現れることになる。

Ein Morgen war's! schöner hat ihn schwerlich, je ein Dichter beschrieben, an welchem wir die Insel O-Tahiti, 2 Meilen vor uns sahen. Der Ostwind, unser bisheriger Begleiter hatte sich gelegt; ein vom Land wehendes Lüftchen führte uns die erfrischendsten und herrlichsten Wohlgerüche entgegen und kräuselte die Fläche der See. Waldgekrönte Berge erhoben ihre stolzen Gipfel in mancherley majestätischen Gestalten und glühten bereits im ersten Morgenstrahl der Sonne. Unterhalb derselben erblickte das Auge Reihen von niedrigern, sanft abhängenden Hügeln, die den Bergen gleich, mit Waldung bedeckt, und mit verschiednem anmuthigen Grün und herbstlichen Braun schattirt waren. Vor diesen her lag die Ebene, von tragbaren Brodfrucht-Bäumen und unzählbaren Palmen beschattet, deren königliche Wipfel weit über jene empor ragten. Noch erschien alles im tieffsten Schlaf; kaum tagte der Morgen und stille Schatten schwebten noch auf der Landschaft dahin.[296]
ある朝のことだった！かつてのどんな詩人も、それより美しい描写をなすのは困難なことだった。その朝、我々はオー・タヒチ島が、二マイル先に見えるところへ至った。それまで私たちに連れ添った東風が止んだ。陸から吹き付ける緩やかな風が我々に、実に爽快で素晴らしい香気を運び、海面に小波を立てた。森に頂を蔽われた山々が、様々に荘厳な形をとる誇り高い峰々を掲げ、既に太陽が朝一番に射す輝きのうちに燃えていた。その下へと視線を向ければ、低く、なだらかに傾く丘陵が

[296] Ebenda, S. 266-267.

ならび、それらは山々と同じくこんもりとした森に蔽われ、種々の温和な緑と秋めく褐色が彩なしていた。丘陵の前から平野が広がり、丈夫なパンの実をつける樹々や、その威風堂々たる梢が広々とパンの樹を超えて聳える無数の棕櫚の樹々で鬱蒼としている。なおもすべてが深い眠りにあるようだった。明け染めはじめた朝、なおも静かな夜陰が風景のうえを漂いさっていく。

フォルスターはここで直前にウェルギリウスの『アエネーイス』第六歌から「彼らが辿り着いたのは、喜ばしき場所、心地よい緑が満ちた／浄福の森、幸福な住まいであった／ここでは、上空がより広く、緋紫の光で野を／包んでいた〔Devenere locos laetos et oemana[sic] vireta,/ Fortunatorum nemorum, sedesque beatas./ Largior hic campos aether, et lumine verstit/ Purpreo.〕」[297]の一節を引いている。つまりカイスラーのような修養旅行の旅行者が実践する規範に彼も従うのである。しかし同時に、彼はこの引用を通じてタヒチの景観を西洋のカノンでフレーミングするというよりも、父ラインホルトとともに世界を放浪する自身を、同じく父親アンキーセースと放浪するアエネイアースの姿に重ね合わせ、自己提示しているのである。ゲオルク・フォルスターはこの引用によって、ローマ古典の規範的知識を顕示し、船でナポリを出港するイタリア旅行の実践者によってアルカディア的風景のトポスに結びつけて語られてきたシチリアのイメージを惹起し、そして彼自身の姿を神話の英雄に重ねて自己提示し、このようなイメージをタヒチの描写に重ね合わせることで神話的風景を構成したのである。

文芸的な旅行記テクストは、単に「これはなんであるか」に答える客観的記述を積み重ねることでどのような効果が読者にもたらされるかを理解していたとしても、そのような記述を実際に書き連ねることを拒絶する。この拒絶は一方で、文芸が一種の自律性を持っていることを意図しているかもしれないが、他方では「これはなんであるか」の知識が十分周知されてしまっている時には、その客観的記述はもはや経験的対象について何も語らない。認識的節約の原理に従い、「これはなんであるか」の積み重ねは、ともすれば言語批判の契機を伴いながら、可能な限り省略されることになる。むしろ経験それ自体が生動的に、かつ率直に語られることを求め、叙述は対象と自己との切り離し難い関係を改めて規定し直すことが試みられるのである。ただし、対象についての規範的知識は読者にとっても背景化されており、再規定の試みはそのような規範的知識を異化して浮き彫りにするのではなく、むしろ再規定を通じた自己提示の受容可能性を高めるために隠されたままとなる。

ゲーテの『イタリア紀行』は、旅行が実施された 1786-1788 年の間に起きた出来事を、1813 年以降、25 年経ってから当時の書簡や日記、記憶を頼りにまとめたものである。『イタリア紀行』が『詩と真実』の実質的な続編であることは知られた定説である。旅

---

[297] ラテン語の引用はフォルスター自身の引用であり、訳は以下のものを参照したが一部改めた。ウェルギリウス『アエネーイス』岡道男／高橋宏幸訳、京都大学学術出版会、2001 年。

行記はもはや彼にとって自伝の一環である。当然ながら彼が叙述した時点で、旅行の記憶は既に古くなっている。つまり『イタリア紀行』は、古びた情報を現代において歴史的価値から提示し直すことを意図しているはずもなく、明らかに自己提示を目的としている。その自己提示は、過去の追体験を促すと同時に、現在に至る自己の人生の一貫した歩みを明らかにする。つまり、ゲーテは『イタリア紀行』で旅行者としての自己提示を実行すると同時に、一人の詩人としての自己提示を実行した。このことは第三章で既に議論したように、彼の叙述が従う時間軸のスケールが人生を包括するものであったことを思い返せば理解されよう。

あるいは晩年のゾフィー・フォン・ラ・ロッシュ（Sophie von La Roche, 1730-1807）も、最初のスイス旅行を記録した旅行記ではアルブレヒト・フォン・ハラー（Albrecht von Haller）が詩「アルプス」*Die Alpen* で描き出した神話的風景に独自の見解を加え、あるいは愛息を失った後の 3 度目のスイス旅行を『我 3 度目のスイス旅行の思い出』*Erinnerungen aus meiner dritten Schweizerreise* (1793)を著した時には、かつてのスイス旅行で出会った人々やその時の息子の様子を偲びながら旅する様子が描き出されている。彼女の文芸的な旅行記は、スイスの各地域の客観的ないし統計的知識や自然史的知識の列挙を含むはずもない。というのもそうした著作は、すでにヨハン・ヤーコプ・ショイヒツァー（Johann Jacob Scheuchzer, 1672-1733）やカイスラーの著作、あるいはその他の著作によって達成されているからである。彼女は自ら繰り返したスイス旅行で経験した記憶を、最後のスイス旅行の旅路で辿り直すことによって、独自の景観叙述を実現した。

文芸的な旅行記では、そこで語られる事柄は語り手自身の追体験を元に、追体験をしている自己の経験が再度重ね合わされ、自分が過去の旅行で経験したことを再度の旅行時や執筆時に、すなわち語り手が語る時点に結びつけて再構成する。文芸的な旅行記はこの意味で高階の反省的な叙述に依拠し、旅行が行われた期間を超えた時間スケールに旅行の経験は包摂される。結果的に、旅行記における過去の自己を提示は現在の自己の提示に反射し、現在の自己の提示の企図が旅行記における過去の自己の提示方法に浸透する。改めてゲーテの書簡論を彷彿とさせられるだろう。

シャミッソーはその世界旅行の旅行記を晩年に記述する際に、このことを十分意識していたように思われる。オットー・フォン・コッツェブー（Otto von Kotzebue, 1787-1846）のシベリア・アジア探検に自然科学者として同船し、世界旅行を果たしたシャミッソーが、晩年に改めて世界旅行をした際の記憶を手繰り寄せて『1815-1818 年の世界周航旅行』*Reise um die Welt in den Jahren 1815-1818* (1836)を著すことになった理由をひっそりと述べている箇所である。

> [...] Ich bilde mir nicht ein, vor Fremden, sondern nur vor Freunden zu stehen, da ich von mir unumwunden zu reden und ein Hauptstück meiner Lebensgeschichte vorzutragen mich

anschicke. [298]

私は余所者を前にしているのではなく、ただ友を前にしているところを思い浮かべている。なぜって、私は今まさに、自分について率直に語り、我が人生の中心部分について伝えようとしているところだからだ。

こうして文芸的な旅行記は、旅行地や名所といった外在化されたモニュメントを個人の記憶に還元する。結果的には、そのテクスト自体がその個人のモニュメントとしての意味合いを持つようになる。この時文芸的な旅行記は、もはや事実そのものを映すことを目的とも手段ともしない。そこで叙述される内容は、確かに現実に著者が経験したことを切り離しがたく、虚構と一致するわけでもない。しかし旅行記作家自身が記憶という心的状態の叙実性を語りにおける規範としながら、追想のなかで記憶を解釈し、瞬間的な印象を過去現在未来という主観的な時制から遊離させて再構成することで、もはや叙実性の規範すら記憶が何らかの方法で有意味であるための規範へと緩められる。

こうして文芸的な旅行記は、もはや *historia* ではなくなる。それが事実と一致するという意味での真実を伝えるかどうかは、もはや認識的運に委ねられることになるだろう。もしくは旅行記の叙述を、後続の旅行者が徒に模倣した叙述を重ねることで虚構の構成条件に還元される運命を辿ることになるだろう。言い換えると、文芸的な旅行記によって叙述された内容や神話的風景の叙述の模倣は、原理的に著者の意図のレベルまで到達せず、合言葉の積み重ねによって自らの旅行を虚構化することになる。

とはいえ、そのような月並みな模倣の失敗ですら、模倣者となった旅行者には、自身の読書を通じて獲得された知識を引用した神話的風景の構成と自己提示の実践であり得るのかもしれず、そこに一種の人格形成〔Bildung〕の効果を認めることもできるだろう。つまり、既存の規範的知識を背景化することで可能となった叙述からなる優れた旅行記を、再度編集して背景化するメタコレクションとしての叙述からなる旅行記を、エピゴーネンは教養の顕示として実践することができる。このようなエピゴーネンの旅行者に見られる人格形成は、虚構の旅行記を親に送りつけ、見果てぬ演劇への憧れゆえに旅行から帰ることもせず、演劇も旅行も真似事に終わり、最後には人生の詳細な経歴を明かされ医師になるよう諦念するヴィルヘルム・マイスターの人生が、古臭くなった教養小説という名称でまだ呼ばれ得るならば、その限りでエピゴーネンとしての旅行者は教養を高めることに成功しているのである。

第二節　コレクション文化のなかの旅行記

カイスラーの旅行記のように実用性を念頭においた百科事典的な網羅性は、読み物として楽しむというよりも、実際に旅行に行くものにとって必要な情報を網羅している点

[298] Chamisso, Adelbert von (1836): *Reise um die Welt*. Adelbert von Chamisso's Werke, Erster Bd. Leipzig 1836, S. 4.

で優れていた。この本は部分的には、各地に点在するコレクションを紹介するカタログを含んでおり、コレクションのコレクションとも見做し得る。ヴァチカン図書館を見学した際の記述から一部引用しよう。

> In dem sogenannten Palazzo Vecchio des Vaticans … ist durch Fürsorge Sixtus des fünften die berühmte vaticanische Bibliothek gebracht worden. Ehe man in dieselbe kömmte, findet man in der Vorkammer, wo die Aufseher und Copiisten ihre Arbeit verrichten, etliche gut gemalte Landschaften vom Paulo Bril, und die Portraite vieler Kardinäle, die hier Bibliothekarii gewesen sind. […] Die erste große Galarie, in welche man tritt, ist bey dreyhundert Fuß lang, und ohngefähr sechzig breit. [299]
> いわゆるヴァチカンのヴェッキオ宮殿には［…］、シクストゥス 5 世の計らいによって高名なヴァチカン図書館がもたらされた。ここに入る場合その前に控室に入ることなる。監視役と複製書記が自分の仕事に取り組むそこには、パウロ・ブリルの素晴らしい風景画が何枚かあって、そしてここで司書を務めた多数の枢機卿の肖像画がある。［…］踏み入る最初の大きなギャラリーは 300 フィートの長さ、およそ 60 フィートの幅がある。

この後彼はさらに両側の壁面に陳列された書物とその上方のヘンドリク・ファン・クレーヴの絵画、書架の作りを簡単に説明し、続けてどのような本が閲覧できるか、タイトルを列挙している。そしてヘブライ文庫、使者文庫などの分類とそこに何が収められているかをやはり列挙し、そうして彼は外国人に必ず見せることになっているらしい貴重品として 4、5 世紀に成立したと考えられているアンシャル書体の大きな文字で作成されたとウェルギリウスの写本を紹介している。

カイスラーの博識は圧倒的であり、彼の旅行記は、書名、引用、現地で見ることのできた碑文の連続であり、一種の優れたコモンプレイスブックないしコレクションであり、あるいはメタコレクションを部分的に含んでいる。卓越した旅行者であるカイスラーのこの旅行記は、評判を呼び英語などの諸言語に翻訳されている。彼がまとめ上げた、旅行先各地で見るべき物の一覧と、学識に基づいたその詳細な説明からなる旅行記は、旅行記それだけを読むことで十分に詳細な知識を得ることはできないかもしれないが、歴史学の補助学問に役立つテクストとして一定の水準を達成している。

実質的に蔵書目録とも機能する旅行記を書いた人物としてツァハリアス・コンラート・フォン・ウッフェンバッハ（Zacharias Konrad von Uffenbach, 1683-1734）の死後出版された旅行記『ニーダーザクセン、オランダ、イングランドの一目に値する旅行』*Merkwürdige Reisen durch Niedersachsen Holland und England* (1-3. Theil: 1753-54)も当時多

[299] Keyßler, a. a. O., S. 394.

くの読者を集めた。蔵書家としても知られた学殖者ウッフェンバッハは、各地の学殖者や図書館を訪ねて周り、どこにどのような本がどれくらい存在するかを明らかにしている。あるいは各地で自然物や芸術作品、新たな機械技術などのコレクションを見学してもいる。その中に、カッセルの庭園で見たトラやライオン、オウム、噴水の仕組みについて、解剖室で見た双頭の嬰児やその他の奇形の動物、あるいはその他の剥製やミイラについて、それからキャビネットで見た心臓の蝋製標本（ムラージュ）、インドに生息する昆虫の標本、空気ポンプや幻燈などの機械装置や化石についての詳しい記述がある[300]。彼のこの旅行記もまた一種のメタコレクションとしての性質を有している。

さらに必要な情報を集約しようと、先行する旅行記を参照しながら、旅行の技法と旅行記を併せて包括的な書籍を作り上げたヨハン・ペーター・ヴィレブラントの『ドイツ、ネーデルラント、フランス、イングランド、デンマーク、ベーメン、ハンガリーへの旅行の史的報告と実用的注釈』は、彼を法律家としてというより旅行作家として有名にした。彼の旅行記の叙述はもちろん自身の旅行に基づいているとはいえ、叙述に際してテクストを構成する手法それ自体は、その後フォルクマンに模倣され、高水準に達成されることになる。

すでに繰り返し述べてきたように、旅行記はいずれにしても更新が必要な *historia* であり、また著者の思い違いや意図的な捏造もありうるだろう。また、より優れた叙述、優れていない叙述があるだろう。

従って、そこに書かれた知識は検証されねばならないが、この時旅行記に記載されている叙述は、相互参照的に形成されていることを念頭におけば、フォルクマンが数ある諸言語の旅行記を相互に参照しながら一貫性と批評性を持って新たに『イタリア歴史批評報告書』を書き上げたこと自体は、正当な行為であると理解できる。彼の旅行記はこのようにして旅行記を圧縮し編集したものであり、幅広い公衆にヨーロッパの主流派の文化理解にアクセスできるようにした[301]。そしてメタコレクションとしての完備性を高めたと言える。

18 世紀後半、市民的な読者公衆が教養を求める時に手に取る書物として、旅行記は自宅にいながら世界を知ることができる点で、極めて有用であると考えられていた。彼らは最初から旅行に行くことを前提としていないので、著者もそのことを理解して書く必要がある。旅行記は単に続く旅行者のためのみ書かれていたわけではない。むしろそのような旅行者にはより実用的な旅行案内も存在した。他方旅行記は、旅行に出る者にも出ない者にも効果的な教養を高めるためのメディアであった。特に旅行に行かない者にとっては、経路や郵便馬車、宿などに関する細かな情報よりも、旅行記を読むことで想像のなかで模倣できるような、つまり旅行を鮮やかに追体験させる叙述に長けた旅行

---

[300] Uffenbach, Zacharias Conrad (1753): *Merkwürdige Reisen durch Niedersachsen Holland und England,* 1. Theil. Ulm und Memmingen 1753, S. 28-43.

[301] Morrison, a. a. O., S. 55.

記が好ましかっただろう。不要な実用的情報を削ぎ落とし、また実際に見に行く当てのない人々を読者にする限りで、規範的知識を客観的記述によって列挙することもやめ、読み物として共感できる叙述が中心となる。実用書としての旅行案内や旅行手引が溢れるのに応じて、旅行記は独自に文芸的性格を高める。こうして旅行記は、美的な楽しみにくるみ上げて歴史学的・自然学的知識や政治経済的な最新情報を知識消費社会の公衆に提供するメディアとなる。

この時代にはまとまった量の旅行記や、旅行記の翻訳を毎月発刊する雑誌が幾つもあった。その代表的なものは『最良旅行記集成』*Sammlung der besten Reisebeschreibungen* (1784-1789)や、マティアス・クリスティアン・シュプレンゲル（Matthias Christian Sprengel, 1746-1803）とヨハン・ラインホルト・フォルスター（Johann Reinhold Forster, 1729-1798）の著名な学者二人が編集を努めた『民族誌並びに地誌論文集』*Beiträge zur Völker- und Länderkunde* (1781-1790)である。あるいは大衆的かつ泡沫的な地理学叢書の企画も多くあり、学校教師だったヨハン・エルンスト・ファブリ（Johann Ernst Fabri, 1755-1825）の『地理学・統計学・歴史学雑誌』*Magazin für die Geographie, Staatenkunde und Geschichte* (1797)などが挙げられる。

こうした旅行記叢書は網羅を目指す性格を有しており、特に後者は依然ドイツ語で紹介されずあまり知られていない地域の旅行記に重点を置いている。読者はそうして諸国の知識を満遍なく身につけ、その結果、キリスト教世界を相対化すると期待されていただろう。すでに第二章で論じたが、ハンブルクで 1724-26 年に発行された『愛国者』*Der Patriot* (1724-26)という雑誌では非キリスト教社会を知ることは啓蒙の一つであると風刺を交えて主張され、世界一周旅行をクックの船に自然科学者として同船したラインホルト・フォルスターは学問的に信頼のおける旅行記を選りすぐり、この叢書を通じて知識を身につけることは「世界市民〔Welt-Bürger〕」への一歩であると『民族誌並びに地誌論文集』第一号の序文で唱えた[302]。

こうして一部の旅行記は、世界中の様々な地域についての知識を伝える専門分野へ入門するための本として位置付けられることになる。つまり地誌とか地理学、歴史学、あるいは民族誌や人間学、それらの下位の諸々の分野の知識を提供していた。しかし、このような形の旅行記は、いずれこうした分野の教科書や報告にその役割を大方譲ることになる。それに対して、小さな旅行記が『ベルリン月報』*Berliner Monatsschrift* (1783-1796)や『ドイツ年鑑』*Deutsches Museum* (1776-1788)のような政治・思想の論争の場となった雑誌や商業的かつ啓蒙的なモード雑誌のような定期刊行物に連載され、その中にはスイスからの手紙とかフランスからの手紙のような宗教的、政治的、経済的な事件の詳細と、それに対する見解を伝える短い報告も存在した。『ヨーロッパ劇場』はまさにそうした

---

[302] Forster, Johann Reinhold/ Sprengel, Matthias Christian (Hg.) *Beiträge zur Völker- und Länderkunde*, Erster Theil. Leipzig 1781, S. IV.

ジャーナルと旅行記の中間的な書物の先駆けである[303]。またニコライが「私は自然の多様な光景以外にも、人間やその慣習、産業を知ることができるような旅行をしたいと願っている〔Ich wünsche also eine Reise zu thun, auf welcher ich, nebst den veränderten Scenen der Natur, Menschen und ihre Sitten und Industrie kennen lernen könnte〕」と考えるのも[304]、自然景観の叙述などに多くを割く文芸的な旅行記に対抗し、むしろジャーナリズム的な意図を込めて彼が旅行記を著したことを示唆している。

旅行記は「教養ある公衆〔gelehrtes Publikum〕」の間で人気のジャンルであり、彼らはコレクションをルネサンスの有徳文化人のように形成する。しかしこれは商業活動の一環であり、ルネサンスの時代にあったようなパトロンとの駆け引きや贈与と返礼の儀礼はもはやない。どちらかといえばモード現象であり、学問的な探究心や信仰心を重ね合わせる必要はない。

ライプツィヒのレオポルト・フォス（Leopold Voß, 1793-1868）が企画出版した『月刊華麗なる世界』*Zeitung für die elegante Welt* (1801-1859)や、ヴァイマルのフリードリヒ・ユスティン・ベアトゥフが企画出版した『月刊モード』*Journal der Moden* (1786)、その後継『月刊贅沢とモード』*Journal des Luxus und der Moden* (1787-1812)のように 1800 年頃にいくつも現れるモード雑誌は、ドイツ国内の都市や外国のファッションやゴシップ、劇場レビューについて各地の記者たちが書いた報告を掲載していた。また後者の定期増刊号の『インテリゲンツ誌』*Intelligenz-Blatt des Journal des Luxus und Moden* (1787-1812)には出版物の情報の広告が掲載され、毎巻のように、庭園の造営方法を論じたものなど、他の実用書と並んで旅行記や地理学・統計書の広告も、目次や内容の紹介とともによく並んでいた。

またハレのプロイセン諮問委員であったゴットリープ・ハインリヒ・シュトゥック（Gottlieb Heinrich Stuck, 1716-1787）が残した目録を元に、ファブリが編集し序文を寄せて出版した『新旧諸国旅行記目録』*Verzeichnis von aeltern und neuern Land- und Reisebeschreibungen* (1784)はこれまでに出版された旅行記、地理学書、統計書の書誌情報をおよそ 2000 冊分掲載し、ジャンル毎の主要な著者の人名索引を併せて 504 頁に及ぶ。しかも旅行記の出版物には匿名や偽名、あるいは翻訳の場合には原典を示していない本がよくあったが、そうした本の真の作者や原典を突き止めて網羅していると序文にはある[305]。

このようにカタログから叢書に至るまで、隣接する出版物の形態は、書籍及び知識の流通に大きく貢献することになる。だがそれだけでなくコレクションすること自体に楽

---

[303] Vgl. Durchhardt, a. a. O.,

[304] Nicolai, Friedrich (1783-17969: *Beschreibung einer Reise durch Deutschland und die Schweiz, im Jahr 1781*. Bd. 1-2. Berlin und Stettin 1783, S. 3.

[305] Fabri, Johann Ernst (1784): *Gottlieb Heinrich Stuck'sVerzeichnis von aeltern und neuern Land- und Reisebeschreibungen*. Halle 1784, S. VI-VIII.

しみを覚えるものも多数いる。詩人ゲーテの父ヨハン・カスパー・ゲーテは出版業が世界的に盛んだったヴェネツィアを訪れた際に、書籍を多数蒐集したために家を潰した人々についてのエピソードを紹介している[306]。過剰なコレクションへの欲求は確かに危険であり、またコレクション自体に満足を覚えることもそれ自体有用ではないが、しかし学識や教養を示すことには貢献しただろう。このような意味での教養に移行すると、そこではすでにありふれたものとなったその手の知識を、それがいくら正しい知識だとしても、活用することに意義はないだろう。有用性への期待は消失し、代わって消費や所有の満足が勝るようになった。

第三節　メタコレクションとコレクションネットワーク

旅行記は、旅行記の作者にとっての人格形成のための空間でもあり、自己の経験をコレクションする場でもあった。それに対し、新たな情報をもとに地理学書を更新したり雑誌を編集したりする学者たち、それから新たな知識に飢えていた教養ある公衆にとっては、どのような性質の旅行記であれそれをコレクションすることが一つの学殖であり、人格形成のための空間を形成することだった。換言すると、旅行記の読書及び蔵書は、旅行者が自己に即して蒐集した経験を蒐集するメタコレクションでもあり、地理学書や統計書はメタコレクションとしての書物であり、文芸的な旅行記は詩人の感性をコレクションする。そうして蔵書する公衆は、確かに実際の貴重な鉱物や実際の旅行経験を仮に手に入れられなくとも、メタコレクションを通じて人格形成することができる。このあり方は基本的にルネサンスの蒐集家とそれほど変わりはないかもしれない。とはいえそれは商業活動の一環であり、また他の宗教や思想の潮流、交通やメディア状況が変化し、事実の認定に対する水準は様変わりしつつあった。彼らのコレクションはより正当な科学知識や文芸や美術へのディレッタントな楽しみへと変わっていく。

他方、蔵書だけでなく王立、私設、商人の趣味それぞれ所有者を問わないで、コレクションカタログや蔵書目録、財産目録が多くこの時代に出版されたり作成されたりした。そうしたカタログを作成する者は、コレクションの設営や管理を任されている学殖者や、ミュージアムの設計に関わる指物師、設計士であったりした。ミュージアム論は理想的なミュージアムの構想を提示するものでもあるが、他方各地のコレクションの情報を詳細に、図版をふんだんに用いて掲載していた。こうしたカタログはどこで何を見ることができるかという情報を伝える機能だけでなく、コレクションに関心のある人々に規範を示したり、その効用を説いたりする機能もあった。従ってこのカタログは、流行服や贅沢品の商品カタログと類似して、人々の消費活動に大きな影響を及ぼしたと考えられる。

ほんの一例を紹介すれば、著名な指物師、建築家だったレオンハルト・クリストフ・

---

[306] Goethe, Johann Caspar (1762): *Reisen durch Italien im Jahre 1740. Vaggion per l'Italia*. Übersetzt von Albert Meier. München; Deutscher Taschenbuch 1986, S. 46-49.

シュトゥルムは、理想的なミュージアムの設計や書物を管理する新たな機械式の棚の設計を提案し、ルネサンス・バロック的な情報管理術を継承していた[307]。一方彼は自分が各地を旅して閲覧したコレクションの記録をもとに、1704 年に『開かれた宝物庫』を匿名で出版し、その表紙にある通り「新奇なものを愛するもの〔Liebhaber Curieuser Sachen〕」に向けた入門書として、第二章で見たようなコレクションへのアクセスの方法だけでなく、どこにどのような収蔵庫やキャビネットがあるのか、特に何を見るべきか、どのように見るべきかを多数の図版に書き添えて説明した。

またシュトゥルムは 17 世紀の著名な建築家、数学者のニコラウス・ゴルトマン（Nicolaus Goldmann, 1611-1665）が設計した建築物を 1716−1717 年にかけてドイツ諸邦、ネーデルラント、パリに至るまで見学して回った。「我が旅の資料の棚の中〔in den Schrancken meiner Reise-Materien〕」[308]をいっぱいにして帰ったシュトゥルムはその記録を書簡体の旅行記『建築物を巡る旅行覚書』*Architectonische Reise-Anmerckungen* (1719) にまとめ、設計図、ファサードや装飾彫刻などの多くの図版とともに出版した。さらにゴルトマンの建築術について書き残した手稿を、その作品のスケッチを巻末に添えて出版した[309]。

興味深いのは、このシュトゥルムの建築物カタログ、建築術カタログの本からゴルトマンの理論に触れた指物師ヨハン・ヤーコプ・シューブラー（Johann Jakob Schübler, 1689-1741）は次々と作品を作り、『ヨハン・ヤーコプ・シューブラー作品集第一号』*Johann Jacob Schüblers Erste Ausgabe/ seines vorhabenden Wercks* (1730)で、建築物の外観や内装、贅沢な家具、あるいはミュージアムに収蔵されるような発明品や物品を図版に簡潔な説明を添え、入手可能な商品としてカタログを作成し、定期的に新たなものを刊行した。

あるいは『宝物庫論』*Museographia oder Anleitung zum rechten Begriff und nützlicher Anlegung der Museorum oder Raritüten-Kammer* (Leipzig und Breßlau 1727)で様々な収蔵庫を批評的に論じ、分類や記述様式を提案した商人のカスパー・フリードリヒ・ナイケル（Caspar Friedrich Neickel/ Kaspar Friedrich Jencquel, 1679-1729）は、その序文で、ドイツ語での人工物や自然物を管理するためのカタログ〔Catalogus von Kunst- und Naturalien-Kammern〕を作成した。そこでそのような著作が――すでに多数出版されているとはいえそれでも――未だ十分でないことを嘆いた。彼は貴族というより、コレクションに関心のある市民に向けてこの本を書き、コレクションされた物品に関する諸学問を解説し

---

[307] Vgl. Dolezel, Eva (2018): Das „vollständige Raritätenhaus“ des Leonhard Christoph Sturm. Ein Modell für die Museologie des 18. Jahrhunderts. In: E. Dolezel, R. Godel, A. Pečar und H. Zaunstöck (Hg.) *Ordnen – Vernetzen – Vermitteln. Kunst- und Naturalienkammern der Frühen Neuzeit als Lehr- und Lernorte*. Halle (Saale) 2018, S. 21-47.

[308] Sturm, Leonhard Christoph (1719): *Architectonische Reise-Anmerckungen*. Augspurg 1719, S. 141.

[309] Vgl. Goudeau, Jeroen (2015): The Matrix Regained: Reflections on the Use of the Grid in the Architectural Theories of Nicolaus Goldmann and Jean-Nicolas-Louis Durand. In: *Architectural Histories* (2015) 3(1): 9, S. 1-17. DOI: org/10.5334/ah.cl

た本と併せることで、教育効果が見込めることを説いた[310]。実際ハレ敬虔主義の中心人物ヘルマン・フランケ（Hermann Francke, 1663-1727）の孤児院では、彼がプロテスタントのネットワークを用いて蒐集したコレクションをもとにキャビネットが設営され、教育に用いられていた[311]。

またナイケルは特にコレクションやコレクションのカタログを作成した功績でヨハン・ヤーコプ・ショイヒツァーに賛辞を送るが、これは単にショイヒツァーが当時最も影響力のあった自然学者であったためだけではなく、ナイケルもまたショイヒツァーと同様に自然神学の信奉者であったからだ[312]。自然神学はこの時代の自然物や発明品のコレクションを支える基礎的な思想潮流であったと言っても過言ではないだろうが、自然神学を信じる学者たちが自然全体、そして実験や観察の結果を神の創造の産物とみなし、直観的な明証性に知識の根拠を求めたように[313]、キャビネット自体がそのような論証装置になっていたのであり、そのためにコレクションの寄贈という貴族的な慣習を通じて、キャビネットの展示方法や展示物に影響を及ぼすこともあった[314]。

こうして、現物を実際に経験することを効果的に用いることで、知識の伝達や論証、教育への貢献がコレクションには期待されたのである。これは確かに 1700 年ごろまで貴族や一部の学殖者に担われた文化ではあったが、コレクション文化に応じて形成された規範は、教育的な効果や学問上の道具としての有用性を特に強調した。また現物を手に入れなくとも、商業的な書籍の循環のなかでコレクションをコレクションすることができるようになったことで、次第に市民文化に溶け込んでいった。この過程と並行する歴史的変化として、科学はより詳細な検証を繰り返し、細かい分野に分かれ、コレクション文化はルネサンス文化や自然神学の背景を失っていく。それでもなおこれは一種の社交や教養に関する規範、つまり旅行者も従い続けていた規範と結びつき、かつて貴族や学殖者が私的に形成していた共同的な活動を、愛好会組織の設立を通じて制度的なコレクションネットワークに再度形成しようという動きすら現れるようになった。

---

[310] Fey, Carola (2018): Manuskripte und Drucke im Kontext der Stuttgarter Kunstkammer der Herzöge von Wüttenberg. In: E. Dolezel, R. Godel, A. Pečar und H. Zaunstöck (Hg.) a. a. O., S. 325-354, hier S. 327/ 350.

[311] Vgl. Laube, Stefan (2018): Privilegierte Dinge für Unterprivilegierte? Die Kunstkammer im Waisenhaus. In: E. Dolezel, R. Godel, A. Pečar und H. Zaunstöck (Hg.) a. a. O., S. 49-72.

[312] Vgl. Tepp, Anne-Charlott (2020): Matters of Belief and Belief That Matters. German Phsico-theology, Protestantism, and the Materialized Word of God in Nature. In: A. Blair and K. von Greyerz (ed.) *Physico-theology. Religion and Science in Europe, 1650-1750.* USA; Johns Hopkins University Press 2020, S. 127-140.

[313] Vgl. Steinmann, Holger (2008): *Absehen – Wissen – Glauben. Physikotheologie und Rhetorik 1665-1747*. Berlin; Kadmos 2008.

[314] Stelter, Marcus (2018): Möglichkeiten und Grenzen des Erwerbs und der Vermittling von Wissen durch Schenkungen. In: E. Dolezel, R. Godel, A. Pečar und H. Zaunstöck (Hg.) a. a. O., S. 179-204, besonders S. 184-194.

最後にコレクション文化のこの動向を象徴する講演原稿から一節を引いて終わりたい。階級を問わず、また国際的な自然研究ネットワークの形成と自然研究を振興するために解説された「ベルリン自然研究友の会〔Gesellschaft Naturforschender Freunde zu Berlin〕」の主宰者であり著名な医師フリードリヒ・ハインリヒ・ヴィルヘルム・マルティーニ（Friedrich Heinrich Wilhelm Martini, 1729-1778）は、その機関誌の初号に序文として掲載された講演原稿で設立経緯を語った。そこで彼は、「自然の希少物の分別ある蒐集家は、同時に良き趣味を持った男たち、つまり快適な暮らしを送る男たち、また社交的な博愛主義者である〔vernünftige Sammler natürlicher Seltenheiten zugleich Männer von gutem Geschmack, folglich auch von angenehmer Lebensart, und gesellige Menschenfreunde sind〕」と賛辞を述べ、しかしそれゆえに、蒐集家は家を潰すほどコレクションに金を注ぎ込むわけにはいかないと指摘する[315]。つまり、自然研究には自然物や多量の蔵書といったコレクションが欠かせないにもかかわらず、市民の経済レベルでは個人的に十分なコレクションを形成できないのである。そこで彼は以下のように提案する。

> [...] in einer großen Stadt befänden sich Liebhaber zu allen einzelnen Fächern der Naturgeschichte, die zwar an den übrigen Theilen derselben ebenfalls, an ihrem Lieblingsfach aber, besondern guten Geschmack finden, und folglich in diesem Fache das stärkste Kabinet, zugleich aber die ansehnlichste Bibliothek sammleten; so würde daraus folgen, daß in einer Stadt, wie unser glückliches Berlin ist, unter allen Liebhabern zusammen genommen, ein prächtiges allgemeines Naturalienkabinet und eine ansehnliche physikalische Bibliothek zu finden seyn müßte. Nun wäre freylich dieses Kabinet, und diese Bibliothek unter mancherley Besitzer vertheilet, und was könnte dem Einen das helfen, was der Andere für sich angeschaft hätte? [...] Ich will es versuchen, ob sich nicht ein Mittel finden lasse, diese schöne Kabinette, diese kostbare Büchersammlungen so zu vereinigen, daß aus denselben, ohne Nachtheil der Eigenthümer, ein gemeinschaftliches Ganzes entstehen könnte. [316]
>
> 大都市には自然史の個々の分野全てへの愛好家が存在するだろう。彼ら愛好家は確かにその他の自然史分野にも、また自らの愛好する分野にも同様に愛着を持っているはずだ。そのため当該の分野において愛好家たちは規模の大きいキャビネットや、同時に非常に立派な蔵書を集成してきただろう。もしそうならそこから帰結するのは、我々の恵まれたベルリンという一つの都市において、愛好家すべてを結集させれば、壮麗かつ公共的な自然物キャビネットと立派な自然学図書館が存在することになるに違いないだろう。今はただしこのキャビネット、この蔵書というように、

---

[315] Martini (1775): Entstehungsgeschichte dieser Gesellschaft von D. Martini. In: *Beschäftigungen der Berlinischen Gesellschaft Naturforschender Freunde*, Erster Band. Berlin 1775, S. I-XL, hier S. V-VI

[316] Ebenda, S. VII-VIII.

数多くの所有者に分散されているが、しかしある人物に、他の人物が自らのために調達したものが役立ちうるとしたらどうか。[…] 私が尋ねたいのは、この素晴らしいキャビネット、この貴重な蔵書を、所有者に何ら損もなく、それらから一つの共有された全体が成立しうるように統合する手段が見つからないだろうかということである。

こうして教養ある、ないし趣味ある自然研究の愛好家たちは、科学のディレッタントとしてそれぞれ造成してきた自然物キャビネットや蔵書といったコレクションを相互に融通することで活用する術を模索し、かつて書簡と旅行という手段で結び付けられていた文芸共和国のような知識移動のネットワークを、より集中的に、一つの大都市という場所で実現しようと試みた。その限りでコレクションネットワークの構築を目標に掲げる行為も、目的は科学の振興と普及であるとはいえ、そのネットワークに参入する資格の付与に際しては、貴族文化の規範が市民的文化の規範へと名前だけ書き換えられて継承されることになるのである。

第四節　小括

証言はどれほど集まったところで、証拠との関係を問うことができるとは限らない。証言としての旅行記を相互に検討すること、あるいはそのようにして書かれた地理書などを相互に比較検討することは、初歩的な誤りを可能な限り防ぐには十分であるだろうが、結局のところそこでどのようなスタンダードな保証が存在しているかを示すに過ぎない。問題はそうして保障された知識が現実と一致してもしてなくても、その保証自体が効力を失うことないかもしれないという点である。

しかしこのように消え難い臆断は同時に、旅行者として経験を語る特権に自覚的であれば、旅行者としての自己提示において重要な問題になる。つまり従来なされていたような対象の歴史的な知識を提示するための引用は、目前の対象を通じて旅行者を規定するための引用となる。第三章でもすでに見られた旅行記におけるトポスの参照を通じて、旅行者は証言者として対象に向かうのではなく、自己の経験を物語るものとして自己に、そして書簡の相手をするかのような読者としての自己に二重に向き合う。文芸的な旅行記の内省的な有り様は、しかし、彼らが目前としているはずの事柄についての正確な知識を、読者が求めることはないことを前提としなければならない。

一方、こうした旅行記の叙述様式の変遷と並行し、読者公衆は知識消費者としてコレクション熱を高めていた。特に読者公衆はコレクションされるべきマテリアルを直接占有することは普通ないので、図版入りカタログや廉価な叢書といったテクストの占有を通じてメタコレクションを形成していた。そうしたテクストの集積を通じて知識消費者は、占有形式をとった知識移動によって教養を顕示することが可能となる。彼らは証拠に直接アクセスできないのだから、この書物にこう書かれているという、テクストに関

する証言によって知識は知識消費社会を循環していくことになる。

このような知識消費社会におけるメタコレクションが出現する傾向は、旅行記の叙述様式が文芸的な性格を強めていく傾向と同じ条件のもとに置かれている。文芸的な旅行記は、旅行地や名所に関する客観的記述が出版物や旅行者の増大に伴って、ありふれたものになっていく過程で認識的節約の原理に従い現れる。こうして旅行記で新たに出現した叙述様式は神話的風景や高階の反省意識に基づく記憶の再構成であるのに対し、メタコレクション文化では経験における非直接性ゆえに、教育的効果を期待するに終わり、コレクションネットワークの構築構想ではマテリアルの融通を通じた学問振興を目的としたが、その参入資格には貴族文化から継承された規範に応じた自然研究愛好者としての社会的カテゴリーのもとで、自己提示する必要があった。

旅行者としての自己、科学調査中の自己、あるいは社交的な世界で生きる自己、コレクションを所有する自然研究愛好者としての自己を提示すること、これら種々の文脈で要請された社会的カテゴリーに応じた自己提示の方法、あるいは規範は、すでに述べてきたように 1700 年頃の貴族文化に属した修養旅行やコレクション文化のなかで慣習的に形成され、また模倣を重ねるうちに規範化され、18 世紀後半には市民的な知識消費社会はこの規範を背景化し、継承したのであった。

第二部結論

第二部を通じて検討されたのは、1700 年前後に旅行者という社会的カテゴリーが確立する際に、先行する旅行形態との間に形成された模倣と変奏の関係、そしてその旅行文化において先行する旅行記と後続する旅行記の間に見られる模倣と変奏の関係、それからコレクション文化が貴族文化から市民文化へ階層を移動する際の模倣と変奏の関係である。これは第一部で検討された文化的学習を通じた規範の形成というメカニズムの一つの現れであると考えられる。そうして、文化の歴史的変遷の過程が、どのように先行する文化的産物を参照し、また参照しながらも差異化する原理が一貫して明示的に作用していたかが明らかになった。

第一章では巡礼と発見旅行、そしてツーリズムの差異と連続性について論じてきた。そのなかで鍵となったのは、証言としての旅行記とコレクションという二つであった。つまり巡礼もまた神の奇跡の痕跡に向かい証人となるわけだが、発見旅行もまた自然という創造の証人となることを目指した。他方ツーリズムは、語られる事柄は、18 世紀半ばまでの実用性を意識した旅行記では客観的な事物の記述に多くの紙幅を割いていたのに対し、1800 年ごろには世界の対象そのものよりも、その経験的現象を記すようになる。

ルネサンスの時代にはコレクションは驚異で満ち溢れた世界をすっかり納め、古典的な権威に基づく世界の体系を、新たに判明した事実によって補完することを目指していた。しかし同時に、信仰のためであれ、教育のためであれ、社交のためであれ、宮廷とアカデミーを中心とした上流社会に欠かせない機能をもち、そのためここでもコレクションを造営させるパトロンとしての自己や博物学者として、またコレクションを訪れる者としての自己提示が問題となる。

18 世紀には、旅行者たちの自己提示は彼らが旅行の途上で出会った事物に対する趣味的なコメントや鑑識眼、洞察を、現在の自分に矛盾しないよう、記憶に基づいて再構成されることでなされる。さらに、先行する旅行記テクストや旅先で見つけた種々の碑文や記号、目録の抜粋などで埋め尽くされる。この時彼らはこのような多様な参照先から過去の自己を再構成することで現在の自己を提示しようとする。

ツーリズムにおいて名所や目的地、旅行のスタイルは趣味のレベルで偏重され、なんらかの共同的カテゴリーを付与される。そうした事物について語る時に共同的カテゴリーは問題となる。その際共有され、先鋭化していく意図や価値が、信仰なのか驚嘆や美的感動、芸術家や古代人への崇拝、記憶や神話的風景の特権性なのかは歴史的に変化する。旅行文化成立後、そうした名所についての知識は旅行者によって選択的に受容され、先行する旅行者と後続する旅行者の間には共通の便益があるため選択的に報告され、再度受容されるようになり、慣習的カテゴリーが形成される。

これと並行するのはコレクション文化である。コレクションはこの時代、すでに産業経済の一部に取り込まれていた。産業は同時に贅沢品の交易よりも、大衆化される比較的安価な製品を作り出すことに熱を上げていた。その中でより多くの人々が贅沢に憧れ、模倣できるものは模倣した。インドコットンの登場によるファッションの大衆化は、貴族たちが形成していた美的感覚を市民の間に浸透させた[317]。あるいはカタログ的な図書や叢書を揃えることでメタコレクションを形成した。蒐集すること自体は彼らの教養を高めるとは限らないが、少なくとも示すことはできた。驚異は図版となって流通し、発明はメソッドとなって売り買いされ、旅行者の眺めた写しい風景は書物から庭園[318]、食器の装飾に至るまで循環した。

情報伝達の効率化は、そこでやりとりされる情報が実際有効活用されるかは問わない。楽しみを感じることすらなくてもいい。目的は、何を有している、何を経験したかで、自らの教養ないし趣味を示すことである[319]。旅行記は、実際に金も時間もかかる遠出の必要をなくし、メタコレクションの楽しみを伴って教養の現場を書斎に引き戻した。旅行に行くことが容易ではなかった時代、またコレクションが誰にでも公開されているわけではなかった時代、読者公衆にとって旅行記やカタログは、旅行者がしたような自己提示をメタコレクションによって代理させたと考えられる。

結局、旅行記はエージェントがプリンシパルに対して送る日報や報告書の延長に置かれるべきなのか。それとも遠出することになった貴族の子息が父親に金銭の管理やどこで何をしたかという報告する教育的配慮による書簡の延長なのか。あるいは親しい友人や学者同士の間で交わされた、「自然な」文体で綴られた書簡の変奏なのか。いずれの形でも旅行報告に共通するのは、著者の経験した事柄へ注目させるだけでなく、加えて著者は自己がそのような経験をしたこと自体へ注目を向けさせるということである。著者はこの旅行がいかに有益であるか、そして旅行者としての資格がいかに正当であるかを示す必要がある。それは旅行者が、少なからず特権的な状況に置かれているためである。だが、とりわけ学殖者や宮廷文化に属すものたちには、画一的な日報の形式を超えた旅行記が求められるし、宮廷文化の作法に従う必要がある。異国人として各地を訪れ、時に社交に興じ、時に公開された建物や芸術作品以外にも一部にのみ開かれたコレクションを見るためにも戦略を練る。そのなかで旅行者としての自己を提示する。他方で旅行者は旅行記作家として自己提示したのである。

---

317 Riello, Giorgio (2013): *Cotton. The Fabric that Made the Modern Would.* Cambridge; Cambridge University Press 2018, S. 132-133.

318 Vgl. Stobbe, Urte (2012): Konkurrierende Wahrnehmungsmodelle gebildeter Reisender. Zur Diversifizierung der Gartenbetrachtung in der Reise- und Gartenliteratur. In: T. Noll, U. Stobbe und C. Scholl (Hg.) *Landschaft um 1800. Aspekte der Wahrnehmung in Kunst, Literatur, Musik und Naturwisseschaft*. Göttingen; Wallstein 2012, S. 172-206.

319 Cook, Harold J. (2007): *Matters of Exchange. Commerce, Medicine, and Science in the Dutch Golden Age*. London; Yale University Press 2007, Chapter 2.

凡例

●引用に関しては以下の方針に沿っている。

○18 世紀の出版物から直接引用する際は、現代の表記法と異なるものはそのまま引用し、特に断りも入れない。

○批判校訂版など、現代の出版物から引用する際に、オリジナルと表記法が変わっているものがある場合は、現代の出版物の表記に従う。改版の過程で修正された可能性があったか、校訂の必要に応じたと考えるのが合理的だからである。

○明白な誤記・誤植がある場合は、[sic]を直後に挿入する。

○中断、前略、後略がある場合は[...]を該当箇所に挿入する。

○指示代名詞の内容や省略した箇所を、特別に明らかにしなければならない場合は、原文または訳文に[-- : 大林]を当該の省略箇所の直後に挿入する。

○外国語の文献から直接引用する際には、原語の下に日本語訳を付す。また、重訳の場合は、原語の該当箇所を註で示し、参照した文献の言語で直接引用し、その下に日本語訳を付す。

○日本語訳のみを参照した文献に関しては、日本語でのみ引用する。原語で確認してもなお既訳を使用する場合は、原語の該当箇所は註で示す。

文献表

原典

Annonym (1724): Etstes Stück. (Donnerstags den 9ten Mertz 1724) In: *Der Patriot*, Ersten Jahr. Vierte Auflage Hamburg 1765.

nnonym (1724): Zehntes Stück. (Donnerstags den 9ten Mertz 1724) In: *Der Patriot*, Ersten Jahr. Vierte Auflage Hamburg 1765.

Addison, Joseph (1718): *Remarks on Several Parts of Italy, etc. In the Years 1701, 1702, 1703*. 2nd ed. London 1718.

Archenholz, Johann Wilhelm (1782): Auszüge aus dem ungedruckten Tagebuche eines Reisenden. In: *Literatur und Völkerkunde* (1782 Julius), Erster Band. Dessau 1782.

Archenholz, Johann Wilhelm von (1788/1791): *Geschichte des siebenjährigen Krieges in Deutschland von 1756 bis 1763*, Mannheim 1788.

Bacon, Francis (-): On Travel. In: *The Works of Lord Bacon. Philosophical Works*. Vol. I. London 1854.

Banian (1685): *Eines Christen Reise nach der seligen Ewigkeit.* Zürich 1765.

Bohse, August (1706): *Der getreue Hoffmeister adelicher und bürgerlicher Jugend*. Leipzig 1706.

Caprara, Albrecht (1691): *Raisender Chiron, oder: Unterricht vor einen Hofmeister/ der einen jungen Herrn auf Raisen begleiten soll. Auß dem Italiänischen in das Teutschen übersetzet*. Augspurg 1691.

Chamisso, Adelbert von (1836): *Reise um die Welt. Adelbert von Chamisso's Werke*, Erster Bd. Leipzig 1836.

Defoe, Daniel (1679): *Essays upon Several Projects: or, Effectual Ways for Advancing the Interest of the Nation*. London 1702.

Eschwege, Wilhelm Ludwig von (1818): *Journal von Brasilien, oder vermischte Nachrichten aus Brasilien*. Weimar 1818.

Fabri, Johann Ernst (1784): *Gottlieb Heinrich Stuck'sVerzeichnis von aeltern und neuern Land- und Reisebeschreibungen*. Halle 1784.

Forster, Johann Reinhold/ Sprengel, Matthias Christian (Hg.) *Beiträge zur Völker- und Länderkunde*, Erster Theil. Leipzig 1781.

Forster, Georg (1778/80): *Reise um die Welt während den Jahren 1772 bis 1775*, Bd. 1-2. Berlin 1778.

Gatterer, Johann Christoph (1775): *Abriß der Geographie*. Göttingen 1775.

Gercken, Philipp Wilhelm (1783): *Reisen durch Schwaben, Baiern, angränzende Schweiz, Franken, und die Rheinische Provinzen a. in den Jahren 1779-1782* (...). Theil.1-3. Stendal 1783.

Goethe, Johann Caspar (1762): *Reisen durch Italien im Jahre 1740. Vaggion per l'Italia*. Übersetzt von Albert Meier. München; Deutscher Taschenbuch 1986.

Goethe, Johann Wolfgang von (1805): *Winckelmann und sein Jahrhundert in Briefen und Aufsätzen*, Tübingen 1805.

Goethe, Johann Wolfgang von (1816/17): *Italienische Reise.* Johann Wolfgang von Goethe Werke Hamburger Ausgabe, Bd. 11. München 1988.

Hager, Johann Georg (1746-1747): *Ausführliche Geographie*. Chemnitz 1746.

Helmholtz, Hermann (1867): *Handbuch der Physiologischen Optik.* Leipzig 1867.

Herder, Johann Gottfried: *Herders Reise nach Italien.* Heinrich Dünßer (Hg.). Gießen 1859.

Humboldt, Alexander von (1808): *Ansichten der Natur*, Erster Band. Tübingen 1808.

Humboldt, Alexander von (1815-1829): *Reise in die Aequinoctial-Gegenden.* Erster Band. Stuttgart 1859.

Humboldt, Alexander von (1845): *Kosmos. Entwurf einer physikalischen Weltbeschreibung*, Erster Band. Stuttgart und Tübingen 1845, S. 20-22

Kant, Immanuel (1781/1787): *Kritik der reinen Vernunft.* Frankfurt am Main; Suhrkamp 1974.

Keyßler, Johann Georg (1740-41): *Neueste Reisen durch Deutschland, Böhmen, Ungern, die Schweiz, Italien und Lothringen, worinnen der Zustand und das Merkwürdigste dieser Länder beschrieben* […], Bd. 1-3. Hannover 1751.

Lehmann, Peter Ambrosius (1703): *Die vornehmsten europäischen Reisen*. Hamburg 1736

Marperger, Paul Jacob (1710): *Beschreibung der Messen.* Leipzig 1710.

Marperger, Paul Jacob (1715): *Getreuer und Geschickter Handels-Dienste*. Nürnberg u.a. 1715.

Marperger, Paul Jacob (1722): *Anmerckungen Uber das Reisen In Frembde Länder.* Dreßden und Leipzig 1722.

Martini (1775): Entstehungsgeschichte dieser Gesellschaft von D. Martini. In: *Beschäftigungen der Berlinischen Gesellschaft Naturforschender Freunde*, Erster Band. Berlin 1775, S. I-XL.

Meier, Georg Friedrich (1748-49): *Anfangsgründe aller schönen Wissenschaften*. Bd. 1-2. Halle im Magdeburgischen 1748-49.

Meier, Georg Friedrich (1755): *Betrachtungen über die Schrancken der menschlichen Erkenntnis*. Halle im Magdeburigischen 1755.

Menantes [Christian Friedrich Hunold] (1730): *Die Manier Höflich und wohl zu Reden und Leben*. Hamburg 1730.

Meusel, Johann Georg (1775): *Der Geschichtforscher*, Erster Theil. Halle 1775.

Nicolai, Friedrich (1783-1796): *Beschreibung einer Reise durch Deutschland und die Schweiz, im Jahr 1781*. Bd. 1-12. Berlin und Stettin 1783.

Olearius, Adam (1647): *Offt begehrte Beschreibung Der Newen Orientalischen Rejse*. Schleswig 1647.

Posselt, Franz (1795): *Apodemik oder die Kunst zu reisen*, Bd. 1-2. Leipzig 1795.

Posselt, Ernst Ludwig (1785): *Wissenschaftliches Magazin für Aufklärung*, Erster Bandes erstes Heft. Kehl 1785.

Postlethwayt, Malachy (1757): Projector. In: *The Universal Dictionary of Trade and Commerce*, Vol. 2. London 1757.

Reichard, Heinrich August Ottokar (1784): *Handbuch für Reisende aus allen Ständen*. Leipzig 1784.

Riedesel, Johann Herrmann von: *Reise durch Sicilien und Großgriechenland*. Zürich 1771.

Rohr, Julius Bernhard (1715): *Einleitung zu der Klugheit zu lebe.* Leipzig 1715.

Savary (1741-1743): *Allgemeine Schatz-Kammer der Kauffmannschafft: oder vollständiges Lexicon aller Handlungen und Gewerbe.* Leipzig 1741-1743.

Scriver, Christian (1663-69): *Gottholds Zufällige Andachten*. Leipzig 1686.

Sturm, Leonhard Christoph (1719): *Architectonische Reise-Anmerckungen*. Augspurg 1719.

Tschirnhaus, Ehrenfried Walther (1727): *Getreuer Hofmeister auf Academien und Reisen*. Hannover 1727.

Thomasius, Christian (1701): *Von Nachahmung der Franzosen*. Stuttgart; Göschen 1894.

Uffenbach, Zacharias Conrad (1753-1754): *Merkwürdige Reisen durch Niedersachsen Holland und England,* 1-3. Theil. Ulm und Memmingen 1753.

Volkmann, Johann Jacob (1770-71), *Historisch-Kritische Nachrtichten von Italie*, Bd. 1-3. Leipzig 1770.

Wied-Neuwird, Maximilian Pronz zu (1820): *Reise nach Brasilien in den Jahren 1815 bis 1817*, Bd. 1. Frankfurt a. M. 1820.

Zedler, Johann Heinrich (1731-54): *Universal-Lexikon*. Bd. 1-64. Halle und Leipzig 1731-1754.
アリストテレス『アリストテレス全集：政治学』岩波書店、2018 年。
ウェルギリウス『アエネーイス』岡道男／高橋宏幸訳、京都大学学術出版会、2001 年。

研究文献

Anton, Annette C. (1995): *Authentizität als Fiktion. Briefkultur im 18. und 19. Jahrhundert*. Stuttgart und Weimar; Metzler 1995.

Assmann, Aleida/ Assmann, Jan (1997): Zur Einführung. In: dieselb. (Hg.) *Geheimnis und Öffentlichkeit.* München; Wilhelm Fink 1997, S. 7-16.

Cassirer, Ernst (1944): *A Essay on Man*. New Haven; Yale University Press 1944（邦訳：『人間』宮城音弥訳、岩波文庫、1953 年）.

Bade, Klaus J. (2002): Wanderungstraditionen und Wanderungssysteme am Ende der Frühen Neuzeit. In: *Historical Social Research* (Supplement) 30, S. 235-265.

Bade, Klaus J. (2002): Historische Migrationsforschung. In: derselbe (Hg.) *Migration in der europäischen Geschichte seit dem späten Mittelalter*. Osnabrück 2002, S. 21-44.

Berry, Christopher J. (1994): *The Idea of Luxury. A Conceptual and Historical Investigation.* Cambridge; Cambridge University Press 1994.

Bicchieri, Christina (2006): *The Grammar of Society. The Nature and Dynamics of Social Norm*. New York; Cambridge University Press 2006.

Bird, Alexander/ Pettigrew, Richard (2021): Internalism, Externalism, and the KK Principle. In: *Erkenntnis* (2021) 86, S. 1713-1732. DOI: 10.1007/s10670-019-00178-3

Boyd, Robert/ Richerson, Peter J./ Henrich, Joseph (2011): The Cultural Niche: Why Social Learning Is Essential for Human Adaptation. In: *PNAS* (2011) 108: 2, S. 10918-10925.

Blumenberg, Hans (2006): *Beschreibung des Menschen*. Frankfurt am Main; Suhrkamp 2014.

Botley, Paul (2021): Letters. In: A. Blair et al. (ed.) *Information. A Historical Companion*. Princeton and Oxford; Princeton University Press 2021, S. 563-566.

Boyd, Robert/ Richerson, Peter J. (1985): *Culture and the Evolutionary Process.* Chicago; University of Chicago University Press 1985.

Brenner, Peter (1990): *Der Reisebericht in der deutschen Literatur. Ein Forschungsüberblick als Vorstudie zu einer Gattungsgeschichte*. Tübingen; Max Niemeyer 1990.

Brune, Thomas (1991): Von Nützlichkeit und Pünktlichkeit der Ordinari-Post. In: Hermann Bausinger, Klaus Beyrer, Gottfried Korff (Hg.) *Reisekultur: Von der Pilgerfahrt zum modernen Tourismus*. München; C. H. Beck 1991, S.123-130.

Bürger, Thomas (1997): *Aufklärung in Zürich. Die Verlagsbuchhandlung Orell, Gessner, Füssli & Com. in der zweiten Hälfte des 18. Jahrhunderts*. Frankfurt am Main; Buchhändler-Vereinigung

1997.

Carter, J. Adam (2016): *Metaepistemology and Relatiovism*. UK; Palgrave Macmillan 2016.

Conrads, Norbert (1982): Politische und staatsrechtliche Probleme der Kavalierstour. In: Antoni Mązak und Hans Jürgen Teuteberg (Hg.) *Reiseberichte als Quellen europäischer Kulturgeschichte. Aufgaben und Möglichkeiten der historischen Reiseforschung*. Wolfenbüttel 1982.

Cook, Harold J. (2007): *Matters of Exchange. Commerce, Medicine, and Science in the Dutch Golden Age*. London; Yale University Press 2007.

Daston, Lorraine/ Galison, Peter (2007): *Objectivity*. New York; Zone Books 2015.

Daston, Lorraine (2017): The History of Science and the History of Knowledge. In: *KNOW. A Journal on the Formation of Knowledge* (2017) 1: 1, S. 131-154.

Dharampal-Frick, Gita (1994): *Indien im Spiegel. Deutscher Quellen der frühen Neuzeit (1500-1750)*. Tübingen; Max Niemeyer 1994.

Dolezel, Eva (2018): Das „vollständige Raritätenhaus" des Leonhard Christoph Sturm. Ein Modell für die Museologie des 18. Jahrhunderts. In: E. Dolezel, R. Godel, A. Pečar und H. Zaunstöck (Hg.) *Ordnen – Vernetzen – Vermitteln. Kunst- und Naturalienkammern der Frühen Neuzeit als Lehr- und Lernorte*. Halle (Saale) 2018, S. 21-47.

Driscoll, Catherine (2018): Cultural Evolution and the Social Science: A Case of Unification? In: *Biology and Philosophy* (2018) 33: 7. DOI: 10.1007/s10539-018-9618-2.

Dunbar, R. I. M. (2009): The Social Brain Hypothesis and Its Implication for Social Evolution. In: *Annals of Human Biology* (2009) 36: 5, S. 562-572. DOI: 10.1080/03014460902960289

Dunbar, R. I. M. and Shultz, Susanne (2007): Evolution in the Social Brain. In: *Science* (2007) 317: 1344. DOI: 10.1126/science.1145463.

Durchhardt, Heinz (2015): 1648. *Das Jahr der Schagzeilen. Europa zwischen Krise und Aufbruch*. Wien Köln Weimar; Böhlau 2015.

Feldman, Marcus W./ Odling-Smee, John/ Laland, Kevin N. (2017): Why Gupta *et al.*'s Critique of Niche Construction Theory Is off Target. In: *Journal of Genetics* (2017) 96: 3, S. 505-508.

Fey, Carola (2018): Manuskripte und Drucke im Kontext der Stuttgarter Kunstkammer der Herzöge von Wüttenberg. In: E. Dolezel, R. Godel, A. Pečar und H. Zaunstöck (Hg.) *Ordnen – Vernetzen – Vermitteln. Kunst- und Naturalienkammern der Frühen Neuzeit als Lehr- und Lernorte*. Halle (Saale) 2018, S. 325-354.

Galison, Peter (2003): Materielle Kultur, Theoretische Kultur und Delokalisierung. In: H. Schramm, L. Schwarte, J. Lazardzig (Hg.) *Kunstkammer -Laboratoium – Bühne*. Berlin/ New York 2003, S. 501-520.

Gaukroger, Stephen (2001): *Francis Bacon and the Transformation of Early-Modern Philosophy.* Cambridge; Cambridge University Press 2001.

Gerken, Mikkel (2015): The Roles of Knowledge Ascriptions in Epistemic Assessment. In: *European*

Journal of Philosophy (2013) 23: 1, S. 141-161. DOI: 10.1111/ejop.12026.

Godel, Rainer (2007): *Vorurteil – Anthropologie – Literatur. Der Vorurteilsdiskurs als Modus der Selbstaufklärung im 18. Jahrhundert*. Tübingen; Max Niemeyer 2007.

Goudeau, Jeroen (2015): The Matrix Regained: Reflections on the Use of the Grid in the Architectural Theories of Nicolaus Goldmann and Jean-Nicolas-Louis Durand. In: *Architectural Histories* (2015) 3(1): 9, S. 1-17. DOI: org/10.5334/ah.cl.

Gordon, Peter E. (2014): Contextualism and the Criticism in the History of Ideas. In: D. M. McMahon and S. Moyn (ed.) *Rethinking. Modern European Intellectual History*. Oxford; Oxford University Press 2014, S. 32-55.

Greco, John (2010): *Achieving Knowledge. A Virtue-Theoretic Account of Epistemic Normativity*. Cambridge; Cambridge University Press 2010.

Greif, Avner/ Kingston, Christopher (2011): Institutions: Rules or Equilibria? In: Norman Schofield and Gonzalo Caballero (ed.) *Political Economy of Institutions, Democracy and Voting*. Heidelberg; Springer 2011, S. 13-43. DOI:10.1007/978-3-642-19519-8_2

Griep, Wolfgang (1991): Lügen haben lange Beine. In: Hermann Bausinger, Klaus Beyrer, Gottfried Korff (Hg.) *Reisekultur: Von der Pilgerfahrt zum modernen Tourismus*. München; C. H. Beck 1991, S.131-137.

Griffiths, Paul E. (2005): Review of 'Niche Construction'. In: *Biology and Philosophy* (2005) 20: S. 11-20. DOI: 10.1007/s10539-004-1605-0

Gupta, Manan et al. (2017): Niche Construction in Evolutionary Theory: The Construction of an Academic Niche? In: *Journal of Genetics* (2017) 96, S. 491-504.

Häfner, Ralph (1995): *Johann Gottfried Herders Kulturentstehungslehre. Studien zu den Quellen und zur Methode seines Geschichtsdenkens*. Hamburg; Felix Meiner 1995.

Hannon, Michael (2015): The Universal Core of Knowledge. In: *Synthese* (2015) 192, S. 769-786.

Hannon, Michael (2013). The Practical Origins of Epistemic Contextualism. In: *Erkenntnis* (2013) 78; 4, 899-919.

Harbsmeier, Michael (1982): Reisebeschreibungen als mentalitätsgeschichtliche Quellen: Überlegungen zu einer hisrtorisch-anthropologischen Untersuchung frühneuzeitlicher deutscher Reisebeschreibungen. In: Antoni Mązak und Hans Jürgen Teuteberg (Hg.) *Reiseberichte als Quellen europäischer Kulturgeschichte. Aufgaben und Möglichkeiten der historischen Reiseforschung*. Wolfenbüttel 1982, S. 1-32.

Hazlett, Allan (2012): Factive Presupposition and the Truth Condition on Knowledge. In: *Acta Analytica* (2012) 27, S. 461-478. DOI: 10.1007/s12136-012-0163-3

Hazlett, Allan (2010): The Myth of Factive Vervs. In: *Philosophy and Phenomenological Research* (2010) 80: 3, S. 497-522.

Henrich, Joseph (2016): *The Secret of Our Success*. Princeton and Oxford; Princeton University Press

2016.

Jamal, Tajim / Robinson, Mike (ed.) *The SAGE Handbook of Tourism Studie*s. London 2009.

Jardine, Nicholas/ Spary, Emma (1996): The Natures of Cultural History. In: N. Jardine, J. A. Secord and E. C. Spary (ed.) *Cultures of Natural History*. Cambridge; Cambridge University Press 1996.

Keller, Vera (2015): *Knowledge and the Public Interest, 1557-1725*. Cambridge; Cambridge University Press 2017.

Kemp, Wolfgang (2018): Die öffentlichen Erfahrungsräume des Reisenden: die Welt (Montaigne), die Dingwelt und die Welt der Höfe (Keyßler). In: Achatz von Müller et al. (Hg.) *Keyßlers Welt. Europa auf Grand Tour*. Göttingen; Wallstein 2018, S. 59-82.

King, Russell (2012): Geography and Migration Studies: Retrospect and Prospect. In: *Population, Space and Place* (2012) 18, S. 134-153. DOI: 10.1002/psp.685

Klein, Ursula (2015): *Humboldts Preußen: Wissenschaft und Technik im Aufbruch*. Darmstadt; WBG 2015.

Kutter, Uli: Der Reisende ist dem Philosophen, was der Arzt dem Apotheker Über Apodemiken und Reisehandbücher. In: Hermann Bausinger, Klaus Beyrer, Gottfried Korff (Hg.) *Reisekultur: Von der Pilgerfahrt zum modernen Tourismus*. München; C. H. Beck 1991, S. 38-47.

Kutter, Uli (1986): Zeiller – Lehmann – Krebel. Bemerkungen zur Entwicklungsgeschichte eines Reisehandbuches und zur Kulturgeschichte des Reisens im 18. Jahrhundert. In: Carl Winter et al. (Hg.) *Reisen im 18. Jahrhundert. Neue Untersuchungen*. Heidelberg 1986, S. 10-33.

Kvanvig, Jonathan L. (2006): *The Knowability Paradox*. Oxford; Oxford University Press 2006.

Laland, Kevin N./ Sterelny, Kim (2006): Seven Reasons (Not) to Neglect Niche Construction. In: *Evolution* (2006) 60: 9, S. 1751-1762.

Laland, Kevin N./ O'Brien, Michael J. (2011): Cultural Niche Construction: An Introduction. In: *Biological Theory* (2011) 6, S. 191-202

Laube, Stefan (2018): Privilegierte Dinge für Unterprivilegierte? Die Kunstkammer im Waisenhaus. In: E. Dolezel, R. Godel, A. Pečar und H. Zaunstöck (Hg.) *Ordnen – Vernetzen – Vermitteln. Kunst- und Naturalienkammern der Frühen Neuzeit als Lehr- und Lernorte*. Halle (Saale) 2018, S. 49-72.

Lässig, Simone (2016): The History of Knowledge and the Expansion of the Historical Research Agenda. In: *Bulletin of the GHI Washington* (Fall 2016) 59, S. 29-58.

Lefévre, Wolfgang (2018): »Das Ende der Naturgeschichte« neu verhandelt. Das Spektrm historischer Naturkonzeption in der Goethezeit. In: F. Bomski und J. Stolzenberg (Hg.) *Genealogien der Natur und des Geistes. Diskurse, Kontexte und Transformationen um 1800*. Göttingen; Wallstein 2018, S. 25-41.

Lepenis, Wolf: *Das Ende der Naturgeschichte. Wandel kultureller Selbstverständlichkeiten in den Wissenschaften des 18. und 19. Jahrhunderts*. München Wien; Hanser 1976.

Lewens, Tim (2019): The Extended Evolutionary Synthesis: What Is the Debate About, and What

Might Success for the Extender Look Like? In: *Biological Journal of the Linnean Society* (2019) 127, S. 707-721.

MacCannell, Dean (1999): *The Tourist*. University of California Press 1999.

Marchand, Suzanne (2019): How Much Knowledge is Worth Knowing: An American Intellectual Historian's Thoughts on the 'Geschichte des Wissens'. In: *Berichte zur Wissenschaftsgeschichte* (2019) 42: 2-3, S. 126-149. DOI:10.1002/bewi.201900005.

Martens, Wolfgang (1986): Zur Einschätzung des Reisens von Bürgersöhnen in der frühen Aufklärung (am Beispiel des Hamburger „ Patrioten" 1724-26). In: W. Griep und H.W. Jäger (Hg,) *Reisen im 18. Jahrhundert*. Heidelberg; Carl Winter 1986, S. 34-49.

Martus, Steffen (2018): *Aufklärung: Das Deutsche 18. Jahrhundert: Ein Epochenbild*. Rowohlt 2018.

Maurer, Michael (1991): Italienreisen. Kunst und Konfession. In: Hermann Bausinger, Klaus Beyrer, Gottfried Korff (Hg.) *Reisekultur: Von der Pilgerfahrt zum modernen Tourismus*. München; C. H. Beck 1991, S. 221-229.

Meier, Albert (1989): Von der enzyklopädischen Studienreise zur ästhetischen Bildungsreise. Italienreisen im 18. Jahrhundert. In: P. J. Brenner (Hg.) *Der Reisebericht. Die Entwicklung einer Gattung in der deutschen Literatur*. Frankfurt am Main; Suhrkamp 1989, S. 284-305.

Meyer-Sickendiek, Burkhard (2016): *Zärtlichkeit. Höfische Galanterie als Ursprung der bürgerlichen Empfindsamkeit*. Göttingen; Wallstein 2016.

Mokyr, Joel (2016): *The Culture of Growth*. Princeton University Press 2016.

Morrison, Jeff (2012): Autopsy, Translation, and Editing in the Production of Johann Jakob Volkmann's Historisch-Kritische Nachrichten von Italien (1770-71). In: A. E. Martin and S. Pickford (ed.) *Travel Narratives in Translation. Nationalism, Ideology, Gender*. New York; Routledge 2012, S. 42-55.

Müller, Jan-Werner (2014): On Conceptual History. In: D. M. McMahon and S. Moyn (ed.) *Rethinking. Modern European Intellectual History*. Oxford; Oxford University Press 2014.

Müller, Oliver (2017): Phänomenologische Anthropologie. Hans Blumenbergs Lebensprojekt. In: G. Hartung und M. Herrgen (Hg.) *Interdisziplinäre Anthropologie*. 2017. DOI: 10.1007/978-3-658-14264-3_25.

Mulsow, Martin (2019): History of Knowledge. In: Marek Tamm and Peter Burke (ed.) *Debating New Approaches to History*. London; Bloomsbury Academic 2019, S. 159-172/ 179-181.

Mulsow, Martin (2018): *Radikale Frühaufklärung in Deutschland 1680-1720,* Bd. 1-2. Göttingen; Wallstein 2018.

Nebgen, Christoph (2014): *Konfessionelle Differenzerfahrungen. Reiseberichte vom Rhein (1648-1815)*. München; Oldensbourg Wissenschaaftsverlag 2014.

Niemitz Carsten (2010): The Evolution of the Upright Posture and Gait – A Review and a New Synthesis. In: *Naturwissenschaften* (2010) 97: 3, S. 241-263.

Odling-Smee, John F./ Laland, Kavin N./ Feldman, Marcus W. (2003): *Niche Construction. The Neglected Process in Evolution*. Princeton; Princeton University Press 2003.

Ohnesorg, Stefanie (1996): *Mit Kompaß, Kutsche und Kamel*. Köln; Röhring Universitätsverlag 1996.

Osterkamp, Ernst (1988): Winckelmann in Rom, Aspekte aderessantenbezogener Selbsdarstellung. In: Conrad Wiedemann (Hg.) *Rom – Paris – London. Erfahrung und Selbsterfahrung deutscher Schriftsteller und Künstler in den fremden Motropolen*. Stuttgart; Metzler 1988, S. 203-230.

Östling (2020): Circulation, Arenas, and the Quest for Public Knowledge: Historiographical Currents and Analytical Framework. In: *History and Theory* (2020) 59: 4, S. 111-126.

Östling, Johan/ Heidenblad, David Larsson/ Sandmo, Ehrling/ Hammar, Anna Nilsson/ Nordberg, Kari H.: The History of Knowledge and the Circulation of Knowledge. An Introduction. In: Johan Östling et al. (Hg.) *Circulation of Knowledge. Explorations in the History of Knowledge.* Sweden 2018*,* S. 9-36.

Peel, Victoria/ Sørensen, Anders (2016): *Exploring the Use and Impact of Travel Guidebooks*. Bristol Buffalo Toronto; Channel View 2016.

Plötz, Robert (1991): Wallfahrten. In: Hermann Bausinger, Klaus Beyrer, Gottfried Korff (Hg.) *Reisekultur: Von der Pilgerfahrt zum modernen Tourismus*. München; C. H. Beck 1991, S. 31-38.

Raj, Kapil (2006): *Relocating Modern Science. Circulation and the Construction of Knowledge in South Asia and Europe, 1650-1900*. Ranikhet; Palgrave 2007（邦訳：水谷智／水井万里子／大澤広晃訳『近代科学のリロケーション』名古屋大学出版会、2016 年）.

Reader, Simon M. / Laland, Kevin N. (2002) Social Intelligence, Innovation, and Enhanced Brain Size in Primates. In: *PNAS* (2002) 99: 7, S. 4436-4441. DOI: 10.1073/pnas.062041299

Reiss, Julian (2015): *Causation, Evidence, and Inference*. New York and London; Routledge 2015.

Renn, Jürgen (2020): *The Evolution of Knowledge. Rethinking Science for the Anthropocene.* Princeton & Oxford; Princeton University Press.

Renn, Jürgen/ Hyman, Malcolm D. (2012): The Globalization of Knowledge in History: An Introduction. In: Jürgen Renn (ed.) *The Globalization of Knowledge*. Berlin 2012, S. 15-44.

Rescher, Hubertus J. (1979): *Die deutschsprachige Literatur zu Brasilien von 1789-1850. Widerspiegelung brasilianischer Sozial- und Wirtschaftsstrukturen von 1789-1850 in der deutschsprachigen Literatur desselben Zeitraums*. Frankfurt am Main; Peter Lang 1979.

Rheinberger, Hans-Jörg (2007): *Historische Epistemologie. Zur Einführung*. Hamburg; Junius 2007.

Richter, Dieter (1991): Die Angst des Reisenden, die Gefahren der Reise. In: Hermann Bausinger, Klaus Beyrer, Gottfried Korff (Hg.) *Reisekultur: Von der Pilgerfahrt zum modernen Tourismus*. München; C. H. Beck 1991, S.100-108.

Richter, Albert (1891): Einleitung. In: derselbe. (Hg.) *J. G. Schummel, Fritzens Reise nach Dessau und F. E. von Rochow, Authentische Nachricht*. Leipzig 1891, S. 3-14.

Riello, Giorgio (2013): *Cotton. The Fabric that Made the Modern Would.* Cambridge; Cambridge

University Press 2018.

Rupke, Nicolaaas A. (2008): *Alexander von Humboldt. A Metabiography*. Chicago; The University of Chicago Press 2008.

Sarasin, Phillip (2011): Was ist Wissensgeschichte? In: I*nternational Archiv für Sozialgeschichte der deutschen Literatur* (2011) 36: 1, S.159-172. DOI: https://doi.org/10.1515/iasl.2011.010.

Schilling, Heinz (2002): Die frühneuzeitliche Konfessionsmigration. In: Klaus J. Bade (Hg.) *Migration in der europäischen Geschichte seit dem späten Mittelalter*. Osnabrück 2002, S. 67-89.

Schmidt, Benjamin (2015): *Inventing Exoticism. Geography, Globalism, and Europe's Early Modern World*. Philadelphia; University of Pennsylvania Press 2015.

Schmidt, Benjamin (2015): Knowledge Products and Their Transmediations: Dutch Geography and the Transformation of the World. In: S. Friedrich, A. Brendecke and S. Ehrenpreis (ed.) *Transformations of Knowledge in Dutch Expansion*. Berlin/Boston 2015.

Schneider, Ulrich Johannes (1990): *Die Vergangenheit des Geistes. Eine Archäologie der Philosophiegeschichte*. Frankfurt am Main; Suhrkamp 1990.

Schulte, Aloys (1900): *Geschichte des mittelalterlichen Handels und Verkehrs zwischen Westdeutschland und Italien mit Ausschluß von Venedig*. Leipzig 1900.

Schramn, Helmar (2003): Kunstkammer – Laboratrium – Bühne im „Theatrum Europaem". Zum Wandel des performativen Raums im 17. Jahrhundert. In: H. Schramm, L. Schwarte, J. Lazardzig (Hg.) *Kunstkammer -Laboratoium – Bühne*. Berlin/ New York 2003.

Schwarz, Ingo (2003): „Ein beschränkter Verstandesmensch ohne Einbildungskraft" Anmerkungen zu Friedrich Schillers Urteil über Alexander von Humboldt. In: *HiN* (2003) IV: 6, S. 35-40.

Seifert, Arno (1983): „VERZEITLICHUNG". Zur Kritik einer neueren Frühneuzeitkategorie. In: *Zeitschrift für Historische Forschung* (1983) 10: 4, S. 447-477.

Siebers, Winfried (2009): *Johann Georg Keyßler und die Reisebeschreibung der Frühaufklärung*. Würzburg; Königshausen & Neumann 2009.

Siebers, Winfried (1992): Beobachtung und Räsonnenment. Typen, Beschreibungen und Öffentlichkeitsbezug der frühaufklärischen Gelehrtenreise. In: Hans-Wolf Jäger (Hg.) *Europäisches Reisen im Zeitalter der Aufklärung*. Heidelberg; Carl Winter 1992, S. 16-34.

Siebers, Winfried (1991): Ungleiche Lehrfahrten – Kavaliere und Gelehrte. In: Hermann Bausinger, Klaus Beyrer, Gottfried Korff (Hg.) *Reisekultur: Von der Pilgerfahrt zum modernen Tourismus*. München; C. H. Beck 1991, S. 47-57.

Skyrms, Brian (2010): *Signals. Evolution, Learning, & Information*. Oxford New York; Oxford University Press 2010.

Sober, Elliot (2008): *Evidence and Evolution. The Logic behind the science*. Cambridge; Cambridge University Press 2008.

Steinecke, Albrecht (2011): *Tourismus*. Braunschweig; westermann 2011.

Steinmann, Holger (2008): *Absehen – Wissen – Glauben. Physikotheologie und Rhetorik 1665-1747*. Berlin; Kadmos 2008.

Stelter, Marcus (2018): Möglichkeiten und Grenzen des Erwerbs und der Vermittling von Wissen durch Schenkungen. In: E. Dolezel, R. Godel, A. Pečar und H. Zaunstöck (Hg.) *Ordnen – Vernetzen – Vermitteln. Kunst- und Naturalienkammern der Frühen Neuzeit als Lehr- und Lernorte*. Halle (Saale) 2018, S. 179-204.

Stobbe, Urte (2012): Konkurrierende Wahrnehmungsmodelle gebildeter Reisender. Zur Diversifizierung der Gartenbetrachtung in der Reise- und Gartenliteratur. In: T. Noll, U. Stobbe und C. Scholl (Hg.) *Landschaft um 1800. Aspekte der Wahrnehmung in Kunst, Literatur, Musik und Naturwisseschaft*. Göttingen; Wallstein 2012, S. 172-206.

Studer, Roman (2015): *The Great Divergence Reconsidered. Europe, India, and the Rise to Global Economic Power*. Cambridge; Cambridge University Press 2017.

Sweet, Rosemary (2012): *Cities and the Grand Tour. The British in Italy, c. 1690-1820*. Cambridge; Cambridge University Press 2015.

Tennie, Claudio/ Call, Josep/ Tomasello, Michael (2009): Ratching Up the Ratchet: On the Evolution of Cumulative Culture. In: *Philosophical Transactions of The Royal Society B* (2009) 364, S. 2405-2415. DOI: 10.1098/rstb.2009.0052

Tepp, Anne-Charlott (2020): Matters of Belief and Belief That Matters. German Phsico-theology, Protestantism, and the Materialized Word of God in Nature. In: A. Blair and K. von Greyerz (ed.) *Physico-theology. Religion and Science in Europe, 1650-1750.* USA; Johns Hopkins University Press 2020, S. 127-140.

Tomasello, Michael (2014): *A Natural History of Human Thinking*. USA; Harvard University Press 2014（邦訳：橋彌和秀訳『思考の自然史』勁草書房、2021 年）.

Tomasello, Michael/ Kruger, Ann Cale/ Ratner, Hilary Horn (1993): Cultural Learning In: *Behavioral and Brain Science* (1993) 16: 3, S.495-511. DOI: 10.1017/S0140525X0003123X

Vanderschraaf, Peter (1995): Convention as Correlated Equilibrium. In: *Erkenntnis* (1995) 42, S. 65-87.

Veblen, Thornstein B. (1899): *The Theory of the Leisure Class*. Oxford; Oxford University Press 2009.

Whitehead, Hal/ Laland, Kvin N./ Rendell, Luke/ Thorogood, Rose/ Whiten, Andrew (2019): The Reach of Gene–Culture Coevolution in Animals. In: *Nature Communications* (2019) 10: 2405. DOI: 10.1038/s41467-019-10293-y

Williamson, Timothy (2000): *Knowledge and Its Limits*. Oxford; Oxford University Press 2009.

Wilson, Edward O. (1975): *Sociobiology: The New Synthesis. The Twenty-Fifth Anniversary Edition*. Cambridge, Massachusetts, and London, England/ Harvard University Press 2000.

新居洋子『イエズス会士と普遍の帝国：在華宣教師による文明の翻訳』名古屋大学出版会、2017 年。

石川由希「シロアリの社会性とそれを支える生理／神経機構」『比較生理生化学』（2016）33巻4号、191-202頁。
印東道子編『人類の移動誌』臨川書店、2013年。
荻原直道「ヒトはなぜ直立二足歩行を獲得したのか」井原泰雄/梅崎昌裕/米田穣編『人間の本質にせまる科学：自然人類学の挑戦』東京大学出版会、2021年、142-162頁。
大塚淳「哲学者のためのベイジアンネットワーク入門（特集 因果的説明とベイジアンネットワーク）」『哲学論叢』（2008）35、106-117頁。
オコナー、ケイリン『不平等の進化的起源：性差と差別の進化ゲーム』中西大輔監訳、大月書店、2021年（原書：*The Origins of Unfairness. Social Categories and Cultural Evolution*. Oxford; Oxford University Press 2019）。
小谷英生「政治に対する道徳の優位――いわゆる『嘘論文』におけるカントのコンスタン批判について――」『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編』第67巻、2018年、77-86頁。
グライフ、アブナー『比較歴史制度分析』上・下、岡崎哲二／神取道宏監訳、ちくま学芸文庫、2021年（原書：*Institutions and the Path to the Modern Economy: Lesson from Medieval Trade*. Cambridge University Press 2006）。
グラフトン、アンソニー『テクストの擁護者たち：近代ヨーロッパにおける人文学の誕生』ヒロ・ヒライ監訳・解題、福西亮輔訳、勁草書房、2015年（原書：*Defender of the Text: The Tradition of Scholarship in Age of Science, 1450-1800*. Harvard University Press 1991）。
コルバン、アラン『レジャーの誕生』渡辺響子訳、藤原書店、2000年（原書：L'Avèment des Loisirs (1850-1960). Paris – Rome 1995）。
サースク、ジョオン『消費社会の誕生：近世イギリスの新規プロジェクト』ちくま学芸文庫、2021年（原書：*Economic Policy and Projects. The Development of a Consumer Society in Early Modern England*. Oxford University Press, 1978）。
スコット、ジェームズ・C『反穀物の人類史：国家誕生のディープヒストリー』立木勝訳、みすず書房、2019年。
トラバント、ユルゲン『人文主義の言語思想』村井則夫/齋藤元紀/伊藤敦広監訳、梅田孝太/辻麻衣子訳、岩波書店、2020年（原書：*Traditionen Humboldts*. Suhrkamp; Berlin 1990）。
ドランジュ、フィリップ『ハンザ』高橋理監訳、奥村優子他訳、みすず書房、2016年（原書：*La Hanse*. Aubier 1964）。
フィンドレン、ポーラ『自然の占有：ミュージアム、蒐集、そして初期近代イタリアの科学文化』伊藤博明／石井朗訳、ありな書房、2005年（原書：*Possessing Nature: Museums, Collecting, and Scientific Culture in Early Modern Italy*. Berkely – Los Angeles – London: University of California Press 1994）。
フランコパン、ピーター『シルクロード全史』上・下巻、須川綾子訳、河出書房新社、2020年（原書：*The Silk Roads. A New History of the World*. Oxford University Press, 2015）。

ホイジンガ、ヨハン『ホモ・ルーデンス』里見元一郎訳、中公文庫、2018 年。
ボードリヤール、ジャン『消費社会の神話と構造』今村仁司/塚原史訳、紀伊國屋書店、2015 年（原書：*La société de consummation ses mythes, ses structures*. Gallimard, 1974）。
ノース、ダグラス『ダグラス・ノース制度言論』瀧澤弘和／中林真幸訳、東洋経済新報社、2016 年（原書：*Understanding the Process of Economic Change*. Princeton; Princeton University Press 2005）。
マッカネル、ディーン「演出されたオーセンティシティー観光状況における社会空間の変性」遠藤英樹訳、奈良県立商科大学『研究季報』第 11 巻第 3 号、2001 年。
メトカーフ、J・スタンレー『進化的経済学と創造的破壊』八木紀一郎／古山友則訳、日本経済評論社、2011 年（原書：*Evolutionary Economics and Creative Destruction*. The Graz Schumpeter Society 1988）。
ラトゥール、ブリュノ『科学が作られているとき――人類学的考察』川崎勝／高田紀代志訳、産業図書、1999 年（原書：*Science in Action: How to Follow Scientists and Engineers Through Society*. USA; Havard University Press 1987）。
ルイス、デイヴィド『コンヴェンション：哲学的研究』瀧澤弘和訳、慶應義塾大学出版会、2021 年。